enterbrain MOOK

超衝撃 大津波!! ミルコ、2月UFCに電撃参戦!

MMA & PRO-WRESTLING MAGAZINE

Kamipro Special

2007 WINTER 760yen

PRIDE男祭り2006
Dynamite!!/UFC66
12.31大晦日三大決戦
緊急速報号



"問答無用"がヤツの存在証明!!
大晦日MVPはこの男! 07年はライト級が主役だ!!
五味隆典

"リオの太陽"がPRIDEの守護神に昇り上がる!!
A・ホドリゴ・ノゲイラ

全権代理人がUFC参戦の真相を激白!
ミルコ・クロコップ

地球規模のMMAウォーズ、ついに開戦!
希望と不安の2007年、刺激的このうえなし!

何が起ころうが PRIDE やめられねぇ!!

"プロレスマスコミの哲人"井上義啓氏、逝去――
追悼 I編集長!!(ドンッ)

激動の"格闘厄年"を徹底検証!!
事件・語録で振り返るマット界2006

ヒーローの悲劇、再び……!!

『Dynamite!!』に"オイルショック騒動"ボッ発!
桜庭和志は何に負けたのか?

Kamipro Special 2007 WINTER
乗りきった大晦日格闘大戦!!

☎0570-060-555(代表)
印刷・製本/大日本印刷株式会社

enterbrain

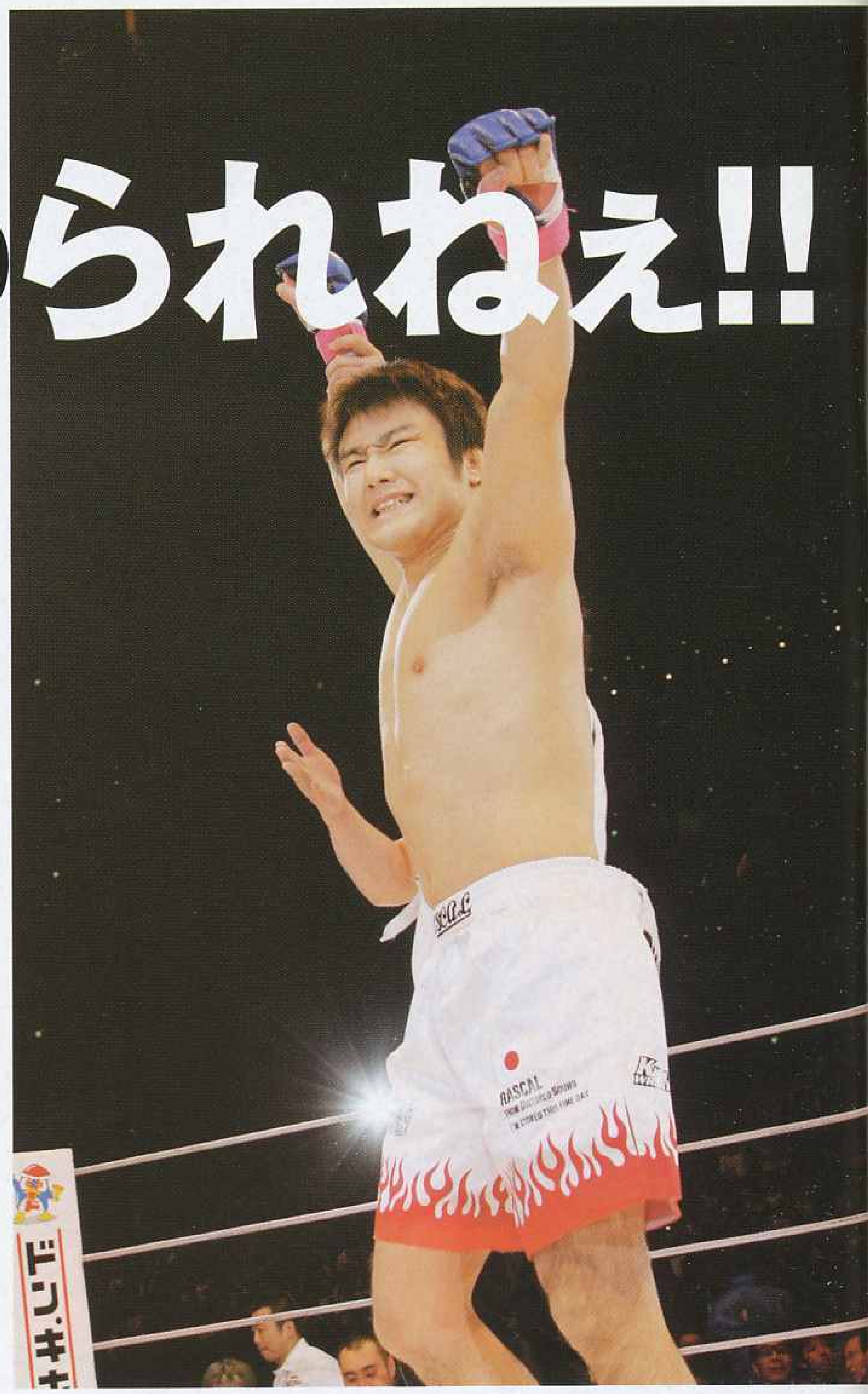


スピード配送実施中!! 当社は受注後5日前後の到着を目指します。 広告以外の商品はホームページで!ケイタイからでもOK! http://www.fightingroad.co.jp
魔裟斗
肉体改造!1日15分のトレーニング。
K-1 WORLD MAX 2003 世界王者
シルバーウルフ所属
魔裟斗 ベロアキャップ
フリーサイズ 6,930円(税込)
BARBELL SET & DUMBELL SET ブラックタイプ
DVDプレゼント付
Wプレゼント
バーベルセット ブラックタイプ
重量/通常価格→特価(税込)
30kg ¥12,000→ ¥6,980
50kg ¥17,000→ ¥9,980
70kg ¥22,000→ ¥13,980
100kg ¥29,500→ ¥17,980
140kg ¥39,000→ ¥23,980
ダンベルセット ブラックタイプ
重量/通常価格→特価(税込)
20kg ¥7,000→ ¥4,980
30kg ¥9,500→ ¥6,980
40kg ¥12,000→ ¥7,980
50kg ¥14,000→ ¥8,980
60kg ¥16,500→ ¥10,980
プレート・単品(1枚) ブラックタイプ
重量 価格(税込)
1.25kg ¥300
2.5kg ¥600
5.0kg ¥1,200
7.5kg ¥1,800
10.0kg ¥2,400
15.0kg ¥3,600
20.0kg ¥4,800
バーベルセット、ダンベルセットは全てシャフト付
BARBELL SET & DUMBELL SET ラバータイプ
DVDプレゼント付
Wプレゼント
バーベルセット ラバータイプ
重量/通常価格→特価(税込)
30kg ¥16,000→ ¥9,980
50kg ¥24,000→ ¥13,980
70kg ¥32,000→ ¥19,980
100kg ¥44,000→ ¥26,980
140kg ¥60,000→ ¥34,980
ダンベルセット ラバータイプ
重量/通常価格→特価(税込)
20kg ¥9,500→ ¥6,980
30kg ¥13,500→ ¥8,980
40kg ¥17,500→ ¥10,980
50kg ¥21,500→ ¥12,980
60kg ¥26,000→ ¥14,980
プレート・単品(1枚) ラバータイプ
重量 価格(税込)
1.25kg ¥400
2.5kg ¥800
5.0kg ¥1,600
7.5kg ¥2,400
10.0kg ¥3,200
15.0kg ¥4,800
20.0kg ¥6,400
バーベルセット、ダンベルセットは全てシャフト付
正しく学ぼう!プレゼント
プレゼントマーク入り商品お買い上げの方には、トレーニング解説DVD「ファイティングII」をプレゼント!
〈内容〉第1部/魔裟斗選手の本格練習を収録。魔裟斗選手の本格練習を見て正しい打撃・蹴りを学ぼう!テクニック集付!!
第2部/あの東京大学ウエイトリフティングチームによる「より良い筋肉の作り方」を収録。正しいトレーニング方法が学べます。
Wプレゼント
バーベル、ダンベルお買上げの方に「ウエイトグローブ」をプレゼント!発汗によるスベリをなくし、安全にトレーニングできます。さらにトレーニング解説DVD「ファイティングII」もプレゼント!
SAND-BAG HARDTYPE
高級レザー使用!
① 直径40cm×長さ150cm 18,000円→7,980円(税込)
② 直径40cm×長さ130cm 14,800円→6,980円(税込)
③ 直径40cm×長さ100cm 12,800円→5,980円(税込)
トレーニンググローブプレゼント付
サンドバッグ ハードタイプ
取付けクサリ付き・中身入り
今、サンドバッグお買上げの方にトレーニンググローブをプレゼント!
SAND-BAG STAND
自宅でできる本格ボクササイズ
ワンランク上のサンドバッグスタンド。パンチはもちろん、激しいケリ込みもOK!
DVDプレゼント付
サンドバッグスタンドお買上げの方に、トレーニング解説DVD「ファイティングII」をプレゼント!
29,800円→9,980円(税込)
サンドバッグスタンド
サイズ:W100cm×D138cm×H200cm
サンドバッグ別売
パンチングボール別売 3,980円
KINGS SET
あこがれの広い肩幅
ラット運動による肩部の集中強化で男らしい肩幅を作る。
背もたれ角度4段階に調節可能
40,000円→19,980円(税込)
キングスセット
サイズ:W130cm×D137cm×H205cm プレートセット別売
キングスセット、キング of ベンチでできるトレーニングメニュー
KING OF BENCH
めざせ逆三角形
背もたれ角度4段階に調節可能
35,000円→12,980円(税込)
キング of ベンチ プレートセット別売
サイズ:W130cm×D137cm×H100～130cm
最高級本革製
19,800円→4,980円(税込)
プロフェッショナル ボクシンググローブ(1組)
8・10・12・14oz カラー:白・黒・赤
最高級本革製
9,800円→3,980円(税込)
プロフェッショナル パンチングミット(両手)
サイズ:フリー
最高級本革製
9,800円→3,980円(税込)
プロフェッショナル キックミット(1個)
サイズ:40cm×18cm×10cm 打面:黒・赤
BENCH MAT
床を保護し、スベリを防ぎます。
ベンチマット
サイズ:W110cm×D200cm×厚5mm
10,000円→5,980円(税込)
DVDプレゼント付
Wプレゼント
ファイティングバッグお買上げの方にトレーニング解説DVD「ファイティングII」をプレゼント。さらに、トレーニンググローブもプレゼントします!
パンチにキック!激しい衝撃をガッチリ受け止める。
FIGHTING BAG
ヒット商品!
蹴って!殴って!ストレス解消にも!!
高級レザー製
高級レザーを使ったプロ仕様。打撃本体には多重構造ウレタンを採用。
ファイティングバッグ
サイズ:φ40cm×H180cm×土台60cm
30,000円→14,980円(税込)
割れる腹筋
コンパクト収納
手軽に腹筋・背筋のトレーニングができる。
SITUP BENCH
シットアップベンチ
サイズ:W56cm×D127cm×H123cm
5段階の角度調節が可能
10,000円→4,980円(税込)
HARD BENCH
コンパクトなマルチギア
ワンタッチでシットアップベンチに。折り畳んでコンパクトに収納できます。
ハードベンチ
サイズ:W62cm×D126cm×H85～105cm
コンパクト収納
20,000円→9,980円(税込)
プレートセット別売
TRAINING BENCH
省スペースで夢の筋肉
安定感抜群のベンチプレス台
トレーニングベンチ
サイズ:W52cm×D126cm×H100cm プレートセット別売
12,000円→5,980円(税込)
MULTI GYM
目的に合わせたトレーニング
高さ調節可能
コンパクト収納
マルチジム
サイズ:W100cm×D115cm×H140～220cm
24,800円→9,980円(税込)
全身の脂肪が燃える有酸素運動
サドル高さ調節可能
抵抗値設定
速度の計測
運動時間累計
走行距離累計
消費カロリー累計
FITNESS BIKE fr
フィットネスバイクfr
サイズ:W51cm×D80cm×H110cm
39,800円→7,980円(税込)
この高性能でこの価格!
※表示価格は全て税込です。
FIGHTING ROAD
株式会社ファイティングロード
〒547-0027 大阪市平野区喜連2-5-49
籠本平野ビル7F
http://www.fightingroad.co.jp
J-DMA 社団法人日本通信販売協会会員
PC、ケイタイからもご注文OK!
お申し込み方法
ご注文はTEL・FAX・ハガキにて 通販OK
TEL/06-6706-4411
FAX/06-6706-4412
Eメールでのお申込み shop@fightingroad.co.jp
受付時間 AM9:00～PM9:00(年中無休)
ご使用OK!
VISA JCB MasterCard AMERICAN EXPRESS NICOS
■ハガキでの申し込み方法
切手
〒547-0027 大阪市平野区喜連2丁目5-49 籠本平野ビル7F ファイティングロード カミプロ係
商品名
住所
氏名
電話番号
●代金は商品到着時、配達員にお支払い下さい。●表示価格には送料は含まれておりません。●返品・交換は未開封に限り、到着後7日以内可(送料はお客様負担になります)●全商品に生産物賠償保険付●お客様の個人情報は、商品およびカタログの発送以外には使用致しません。 ●広告有効期限:掲載から1ヶ月

CONTENTS

“アブラ”が乗りきった格闘技三国大戦!!

大晦日やめられねぇ!!



MMA & PRO-WRESTLING MAGAZINE
kamipro Special
2007 WINTER

表紙撮影/山口比佐夫

「PRIDE、やめられねえ!!」

ズバ抜けた強さを見せつけた五味隆典の言葉に誰もがうなずく大会内容となった、『PRIDE男祭り2006 FUMETSU』。

しかし、熱狂の渦に巻き込まれていた会場のさいたまスーパーアリーナから一歩外へ踏み出すと――PRIDEファンには信じがたいショッキングな事件が続けざまに起こっていた。

日本から遠く離れたベガスでは、PRIDE無差別級王者、ミルコ・クロコップのUFC参戦が電撃発表！　そして大阪では、〝PRIDEの象徴〟だった桜庭和志が、油が……じゃなくて！　脂が乗りに乗っている絶好調の秋山成勲に惨敗！

熱気が溢れるリング内と、背筋がゾッとするリング外の恐るべきギャップ。思えば、2006年の『PRIDE』は、リング内の充実ぶりと、リング外の不安の落差が大きくキワだった一年といえる。

突然すぎた桜庭和志の『HERO'S』転出、そしてフジテレビ・ショック。海外に目を見やれば、UFCの怪物化、忍び寄る『ボードッグ』の魔の手!!『ボードッグ』移籍がまことしやかに噂されているヒョードルの微笑は、モナリザのそれ以上にミステリアスだ……。

『PRIDE』を取り巻く過酷な状況。団体存続への大きな不安が日に日に増していき、『PRIDE』が持つブランド力の低下が危惧されている。その一方で、〝大晦日の向こう側〟には、五味隆典や青木真也らが扉を開いたライ



ムチャクチャ攻めるPRIDEを見せてくれ!!

ト級黄金時代と、〝格闘新大陸アメリカ〟への大航海という二つの希望がほの見えてきた。

『男祭り』のリング上で「07年はメチャクチャ攻める!!」と力強く言い放った髙田統括本部長は、ライト級GPの開催と、年間4大会のアメリカ本土アタックをあきらかにした。この07年は、新しい『PRIDE』の構築するための挑戦となるというわけだ。

古くは、ヒクソン・グレイシーによって一度はドン底まで叩き落とされながら、闘い抜くことでよみがえった髙田延彦。最近では、ミルコ・クロコップの涙の戴冠劇。圧倒的な現実を真っ正面から受けきり、そして乗り越えた者にしか、観る者の胸を打つ物語は紡ぎ出せない。

『PRIDE』と、挑戦。振り返ってみると、『PRIDE』の歴史とは、幻想を剥がされるショックと、そこでくじけず新たな幻想を紡ぎ出していこうとする挑戦の連続だった。

その〝破壊と再生の物語〟を見守る側にしても、過酷で残酷な現実を直視し続けた末に、何事にも耐えがたい希望にようやくたどり着く。『PRIDE』にとって、絶望と希望は表裏一体なのだ。

07年のいま現在、地上波という国内の後ろ盾を失なったままであり、海外からは迫り来る大津波の脅威にさらされている。しかし、その過酷な現実と向き合ってこそ、新しい希望や幻想が手に入れられるはずだ。


『PRIDE』、やるしかねぇ! 何が起ころうと、目を見開いて観るしかねぇ!!

ついに地球規模のMMAウォーズ、開戦!!
希望と不安がないまぜの2007年――

PRIDE
やるしかねぇ!

文／ジャン斉藤　写真／平工幸雄




再 臨
Nogueira

守護神

Antonio Rodri

アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ

ミルコ去りしPRIDEは“柔術マジシャン”が守る!

「PRIDEは僕にとって家族みたいな存在だ」

2006年、さまざまな“嵐”に見舞われた『PRIDE』だが、最後の最後でまた巨大なる試練が待っていた。12.30『UFC66』であのミルコ・クロコップのUFC参戦が正式発表されたのだ。この衝撃的ニュースをミルコのライバル、ノゲイラはどのように聞いたのか?『男祭り』でジョシュ・バーネットを破った翌日、『PRIDE』を守る男の決意を聞いた。

聞き手／堀江ガンツ　撮影／平工幸雄

—ノゲイラ選手。まずは、あけましておめでとうございます!

ノゲイラ　アケマジデ、オメデトー（日本語?で）。

—今年もよろしくお願いします（笑）。昨夜はジョシュ・バーネット選手に借りを返すことができて、ホントにハッピーなニュー・イヤーが迎えられたんじゃないですか?

ノゲイラ　そうだね。2006年は最大の目標であった無差別級GPで優勝することができなくて、悔しい思いもあったんだけど、それを乗り越えて、大晦日をいいかたちで締めくくることができて、よかったと思うよ。ジョシュ戦を組んでくれた『PRIDE』に感謝したいね。

—でも、そのジョシュ戦はなかなか正式決定しなくて、やきもきしたんじゃないですか?

ノゲイラ　うん。ボクも弟のホジェリオもなかなか対戦カードが決まらなくて、ちょっとナーバスになっていたのはたしかだよ。でも、誰とでも闘えるように練習はしっかりやっていたから、ジョシュ戦でも自分の力を出すことができたよ。

—ノゲイラ兄弟のカードが決まらないから、昨年『kamipro』で披露してくれた〝ふんどし暴れ太鼓〟を髙田さんと一緒に披露するしかないんじゃないかと思ってたんですけど（笑）。

ノゲイラ　いやぁ、『PRIDE』はブラジルでも放送されるんだから、さすがにそれはできないよ（笑）。あの姿を披露するのは、『kamipro』だけだね。

—冗談はともかく、『男祭り』という舞台でジョシュとの再戦にこだわった一番の理由はなんだったんですか?

ノゲイラ　2006年中にジョシュと〝本当の決着〟をつけたかったんだよ。前回の試合は試合全体としては自分が支配していたけど、部分部分でジャッジの印象に残る動きや技をかけたのはジョシュだった。だからホントの意味で五分五分だったと思うんだ。でも、結果は自分の「判定負け」という記録が残ってしまったので、どうしてももう一回闘って決着をつけたかったんだ。

—あの試合のあと、ジョシュに「寝技でも自分のほうがノゲイラより上だ」と言われたことも、かなり屈辱だったんじゃないですか?

ノゲイラ　ジョシュのそういう発言は、それに限らずいつものことだからね（笑）。

—いつものこと（笑）。

ノゲイラ　ジョシュは、あまり謙虚な気持ちは持たないというか、相手に対して尊敬を持たなかったりすることもあるんだけど、ボクは逆にそう言われることによって、自分のいいモチベーションに変わる。だから今回、再戦することに関してもジョシュがマスコミ通じていろいろ言ってたみたいだけど、それは彼にとって逆効果だったんじゃないかな。ボクはそれに対して言い返すのではなく、試合に勝って答えを出そうと思ったからね。

—昨夜は前回の反省点を踏まえて、非常に考えられた闘い方をしていたように思うんですけど。

ノゲイラ　たしかにいろんなことを意識しながら挑んだね。前回はただ勝ちたいという気持ちだけで、頭を使った闘いができなかった。でも、今回はジョシュの闘い方をしっかりと研究したうえで、立ち技でも寝技でも自分が上回れるように闘ったんだ。まずグラウンドに関しては、ジョシュの防御は非常にしっかりしている。そして体重もボクより10〜15キロぐらい

ハント戦のヒョードルは本調子じゃなかった
ボクは100パーセントの彼を倒したい！

重いから、ガードポジションから彼を極めることは難しいだろうと思ったんだ。だから今回は、自分の得意なガードポジションをあえてとらずに、必ず上のポジションを取るようにして、優位な体勢からパウンドを落とし続けようとしたんだ。

——あえてマウントを奪いにいかずに、ハーフガードのままトップをキープしていましたよね。

ノゲイラ　そうだね。「ここぞ」というときに一本を奪いにいくほかは、ジョシュのミスを待ちながら、パウンドを叩き込んでいたよ。それからスタンドに関しては、前回のジョシュのムーブは非常に効果的だった。彼はムエタイのヒザ蹴りをかなり練習していたことがわかったからね。だから今回は、逆にボクもそれを取り入れて、ヒザ蹴りの練習を重点的にやってきた。ボクシング技術自体はボクのほうが上だから、パンチだけでなくヒザ蹴りのコンビネーションで攻めることができたのがポイントになったね。

——前回は1ラウンドにジョシュのパンチが一度クリーンヒットして、それが勝敗を分けたようなところがありましたけど、今回は逆にノゲイラ選手の打撃が勝負を決めるポイントになった、と。

ノゲイラ　3ラウンドにジョシュがフラフラになった場面があったから、ホントは判定ではなく、KOで決めたかったけどね。でも、総合的に昨日はいい試合ができたと思う。『男祭り』全試合の中でもベストバウトの一つだったんじゃないかな。

——ノゲイラvsジョシュは3カ月前にやったばかりですけど、この短期間でレベルアップしてるんですよね。ファンのあいだでも、この試合は何度でも観たいという意見が多いですよ。

ノゲイラ　ボク自身は、今回で決着をつけることができたんじゃないかと思うけど、ジョシュとはいい試合ができるし、ファンが望むならもう一度闘ってもいいよ。

——以前、ノゲイラ選手は「ジョシュは自分やヒョードル、ミルコらと比べると一枚落ちる」と言ってましたけど、いまはもう立派なライバルとして認めていますか？

ノゲイラ　そうだね。もう充分トップクラスの一角と言っていいんじゃないかな。でも、ボクはもともとジョシュのことは、タフで素晴らしいファイターだと認めていたんだよ。彼のほうが挑発的なことを言ってくるんで、ボクも感情的になって言い返したりしたけど（笑）。

——売り言葉に買い言葉でしたか（笑）。

ノゲイラ　じつはジョシュのことは彼が無名の頃から知っているんだ。90年代末にボクはアメリカで3年間生活していた時期があるんだけど、その頃、いろんな格闘技イベントでまだ半分アマチュアだった頃のジョシュとよく会っていたし。ジェフ・モンソンをはじめ、共通の友人も何人かいたから、その頃から才能のある選手だな、と思っていたんだよ。

——そんな昔から知っていたんですか。

ノゲイラ　99年の『アブダビ』だったと思うけど、その大会の期間中、ボクとホジェリオとジョシュで一緒に練習したこともあった。だから、その後いろんな大会でジョシュがチャンピオンになったと聞いたときも驚かなかったし、きっといつかは最高の舞台である『PRIDE』に来ると思っていたよ。『PRIDE』に来るまでのジョシュというのは、才能はあったけど、その実力を本当に証明する場に恵まれなかったけど、ようやくその実力を証明し始めたということなんじゃないかな。ジョシュとは、これからもよきライバルとして闘っていきたいと思っているよ。



とにかく"ジョシュ対策"がしっかりとできていたこの日のノゲイラ。前回はジョシュのフックでダウンを奪われたが、今回はパンチやヒザで優位に試合を進め、寝技でもジョシュに得意の上のポジションを取らせず、フルマークの判定勝ちを収めた。

——なるほど。舌戦を展開しながらも、じつは認め合っている仲だったんですね。では、ノゲイラ選手にとって最大のライバルであるヒョードル選手の試合はご覧になりましたか？

ノゲイラ　もちろん観たよ。あの試合は、マーク・ハントが素晴らしかったね。あんなに苦戦するヒョードルを初めて観たよ。

——ヒョードルの印象というより、ハントが素晴らしかった、と。

ノゲイラ　でも、それはヒョードルが100パーセントの仕上がりじゃなかったからこそ、ああいった展開になったとも言えるけどね。ボクが思うに、ヒョードルは去年、右拳の手術をしたり、足の指をケガしたりして、思うような練習ができなかったんじゃないかな。10月にラスベガスでやったマーク・コールマン戦を観たときも感じたけど、あれがヒョードルの本当の実力だとは思わない。

——たしかにノゲイラ選手やミルコ選手と闘ったときとは、動きが全然違いますよね（笑）。

ノゲイラ　ヒョードルは本当に強い選手。だから、自分を極限まで追い込まなくても、ほとんどの選手に勝ててしまうんじゃないかと思う。だから、ボクやミルコと闘うときこそ、本当に自分を追い込んで力を発揮するんだろう。そういう意味で、今回ハントに苦戦したからといって、あれが本当のヒョードルだとは思わない。ボクは100パーセントのヒョードルを必ず倒してみせるよ。

——そして、もう一人のライバルであるミルコ・クロコップのUFC参戦が正式に発表されました。このニュースはもちろんご存知ですよね？

ノゲイラ　うん。いろんな噂は聞いていた

けど、正式には昨日知ったよ。

——それを聞いて、どう思いましたか？

ノゲイラ プロフェッショナルなファイターであるミルコ自身が決めたことなんだから、ボクはその決断を尊重するよ。たしかに最近のアメリカ格闘技市場の成長ぶりは凄い。あっという間に世界最大のマーケットに成長してしまったからね。そしてミルコは、これまでずっとベルトに手が届かなかったけど、2006年に初めてベルトを腰に巻くことができた。そんな選手として一番いい時期に、素晴らしい評価をされたんだろうから、どこに移籍したとしても、仲間として彼の成功を祈りたいと思う。

——ライバルがいなくなることで、残念な気持ちはありませんか？

ノゲイラ もちろん残念な気持ちはあるさ。PRIDEファンもミルコの試合が観られなくなるのは、残念だろう。でも、彼はUFCでもベルトを獲るという目標を達成したら、また戻ってくる可能性も充分にあると思うよ。ボクたちにとって、『PRIDE』はすでに家族のようなものなんだ。それはミルコも同じ気持ちでいると思うからね。

——ノゲイラ選手はアメリカで闘うことに魅力は感じませんか？

ノゲイラ ボクは総合格闘家としてデビューしたのはアメリカだし、その頃は金網の中で闘っていたから、アメリカで闘うことになんの抵抗もないよ。でも、いまのボクにとっては日本で闘うことこそベストだね。アメリカでは、いまMMAが凄いブームになっているけど、それがいつまで続くのかは誰にもわからない。でも、日本での格闘技人気というのは、もうただのブームではなく、日本の文化の一つになっていると思うんだ。だから、一時的にUFCが人気で上回ることはあるかもしれないけど、『PRIDE』には確固たる歴史があるから、これからも最高峰の舞台として続いていくと確信しているよ。

——いま、アメリカ格闘技界は巨大資本を持った新しいイベントが次々と立ち上げられ、トップファイターには、いろんなところからオファーがあると思いますが、ノゲイラ選手が闘う場所を決めるのに、一番重要視していることはなんですか？

ノゲイラ ボクたちプロファイターにとって重要なのは、そのイベントがしっかりした長期的なビジョンを持って、イベント自体が長く続いていくのかどうかだね。たとえ高額なファイトマネーを提示されたとしても、大会が一年で終わってしまったら、それは意味のないことさ。あとは、いい観客がついてきてくれるかどうか。ボクたちはファンに観てもらうために闘っているわけだから、ボクたちの闘いを理解し、尊敬してくれるファンの前で闘えるほど幸せなことはないんだ。あと関係者みんなの態度、接し方も大事だね。イベントというのは、選手だけで作るものじゃない。いろんな人たちが力を合わせて一つのプロスポーツ・イベントというものはできあがるんだよ。



3-0で判定勝ちが告げられたノゲイラはご覧の表情。ノゲイラが判定勝ちでここまで笑顔を見せることは珍しい。それだけジョシュが厳しい相手だったということだろう。

Antonio Rodrigo Nogueira

——なるほど。たしかにそうですね。

ノゲイラ そして、いま話したようなことを、すべて満たしているリングが『PRIDE』なんだ。『PRIDE』のようなリングがあるからこそ、ボクたちは頑張ることができる。だから、ボクはこれからもこのリングで頑張り続けるつもりだよ。

——いまの発言を聞いて、多くの『PRIDE』ファンも安心すると思いますよ。

ノゲイラ 『PRIDE』はいま大変な時期にあるけど、昨日の『男祭り』を観てもらえれば、やはり世界ナンバーワンの格闘技イベントであることは誰でもわかると思う。ボクらはこれからもいい試合をファンに提供していくだけだよ。ミルコがいなくなって、『PRIDE』がつまらなくなったなんて言われたら、悔しいからね。

——ミルコは離れてしまいましたけど、逆に極真の大物フランシスコ・フィリォの『PRIDE』参戦が噂されていますよね。ノゲイラ選手は先日、フィリォ選手とお会いになったんですか？

ノゲイラ ああ、会ったよ。彼は12月に一週間ほどリオ・デ・ジャネイロに滞在して、ブラジリアン・トップチームのジムにも二回顔を出している。

——さっそくトレーニングのセッションなんかもしたんですか？

ノゲイラ 今回は一緒にトレーニングすることはなかったんだけど、じつはボクとフィリオは同じバイーア州の出身で、共通の友人もいたりして、いまでは家族ぐるみの付き合いをしているんだよ。

——もともと親しい仲だったんですか。

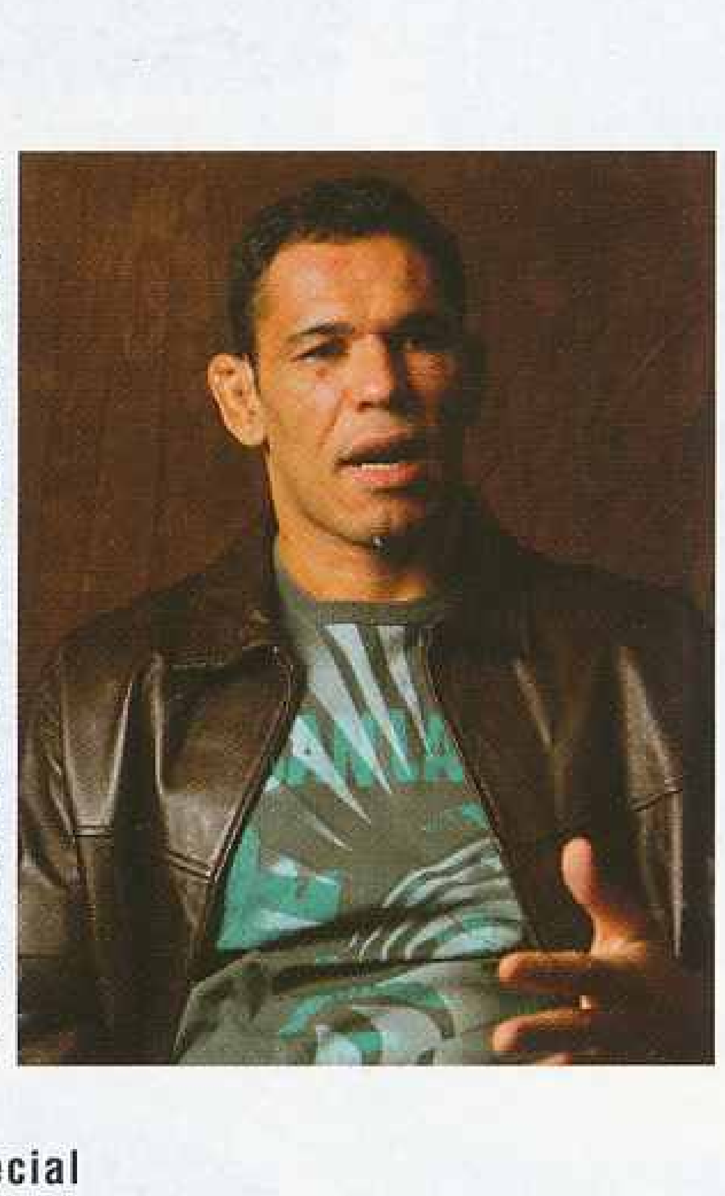
ノゲイラ うん。日本でも2000年や2001年に何度か会って、お互いの試合後にお祝いしたりして、いい友人関係なんだ。でも、これまでは闘う競技が違っていたから、プライベート以外での接点はなかったんだけど、彼がMMAをやりたいというなら、個人的にも、ブラジリアン・トップチームとしても歓迎する。まだ具体的な話はないけど、一緒に練習すれば、お互いにとっていい効果があるだろうからね。

——元PRIDE王者と元極真王者が合体したら、これは凄いことになりそうですよね。では最後に、今年の目標を聞かせてください。

ノゲイラ ボクの目標は今年だけでなく、去年も一昨年も変わらないよ。ずっと勝ち続けること。そしてヒョードルを倒すこと。彼を倒すことがイコール、自分が最強の男だと証明することになるからね。

——わかりました。今年も期待してます！

【07年1月1日／都内・PRIDE道場にて収録】



Antonio Rodrigo Nogueira■1976年6月2日、ブラジル・バイーア州出身。99年リングスに初来日。『KOK2000』優勝の実績を引っさげ、01年より『PRIDE』参戦。初代PRIDEヘビー級王者となるも、03年3月ヒョードルに敗れ王座陥落。今年は再び打倒ヒョードルに照準を絞る。191センチ、104キロ。




ライト級
ntweight WAR
開戦!!



黄金の
大戦争

PRIDE Lightw

2006年12月31日、PRIDEライト級大戦争、ついに開戦！ ヨアキムを完封した青木真也、川尻達也と壮絶なド突き合いを演じたギルバート・メレンデス、そして“ワル”全開で石田光洋との大ゲンカを過激に制した五味隆典。PRIDEトップファイターが勢揃いした『男祭り2006』でも、とくに飛び抜けたインパクトを残したのは、彼ら“黄金のライト級”だった。2007年の主役はこの男たちだ！



熱風児襲来

Gilbert Melendez

ギルバート・メレンデス



ラテンの殴者が“黄金のライト級”をさらに熱くする!

「俺にとって試合は、究極的には殺し合いだよ」

8.26『武士道 其の十二』で、暴風雨のような打撃とフルラウンド衰えぬスタミナで帯谷信弘を下し、鮮烈なPRIDEデビューを飾ったメレンデスが、12.31『男祭り』で今度は川尻達也を壮絶な打ち合いの末に撃破! 一気にPRIDEライト級トップ戦線に名乗りを上げた。今年予定されているライト級GPの台風の目は、間違いなくこの男だ!

聞き手／堀江ガンツ　撮影／平工幸雄

——昨夜は、激戦を制しての勝利おめでとうございます! 素晴らしい新年を迎えられたと思いますが。

メレンデス (ご機嫌な様子で) オー、イエーッ!! 一年を締めくくるのには最高のかたちだったよ。

——ボクは前回、帯谷戦のあともインタビューさせていただいたんですけど、そのときは深夜2時すぎに祝勝会真っ只中の、名古屋のクラブでやらせていただいたのは覚えてますか? (笑)。

メレンデス ああ、覚えてるよ! 楽しい夜だったね (笑)。

——昨夜ももちろんニュー・イヤー・パーティをやってたんですよね?

メレンデス そう。夕食をとってから、ロッポンギに繰り出したんだ。でも、さすがに身体がボロボロだったから、パーティではベストコンディションというわけにはいかなかったよ (笑)。

——でもフルラウンド動きまくって激しい試合をやったあとに、夜の街に繰り出すなんて、ホントにタフですよね。

メレンデス 俺の場合、試合後のパーティはネクスト・ラウンド。延長戦みたいなもんだと思ってるからね。試合後、朝まで騒げるぐらいのコンディションを作ってるつもりさ (笑)。

——試合後の六本木も含めて一試合だと (笑)。それにしても、あの試合中のタフネスぶりはいったいどこからくるんですか?

メレンデス それは毎日のハードなトレーニングの賜物だよ。誰にも負けないだけの練習をずっとやってきたからね。あとは先天的なものもある。俺はメキシカンの血が流れているんだけど、メキシコのボクサーたちはみんなタフだろ? 彼らと同じように、俺は生まれながらにしてのファイターなんだよ。

——ナチュラル・ボーン・ファイターだと。スタミナをつけるために何か特別な練習はしてますか?

メレンデス 水泳やランニングをやっているよ。試合時間の15分間を想定した、身体を動かし続けるトレーニングをして、スタミナをつけるようにもしているんだ。でも、いまではタフなことが知られてしまったから、対戦相手がみんなベスト・コンディションで挑んでくるようになって大変だよ (笑)。とくに昨日のカワジリ (川尻達也) は、とんでもないタフガイだった。俺自身「こんなに厳しい試合はいままでなかった」って試合中に思うぐらいハードだったからね。

——1ラウンドの試合開始から試合終了まで、お互い一歩も退かずに、アクセル踏みっぱなしって感じでしたもんね。

メレンデス ハードな闘いになることは想定していたけれど、本当にキツかったね。前回闘ったオビヤ (帯谷信弘) もそうだけど、カワジリもウォリアーだよ。精神も肉体も本当に強いヤツだった。だからこそ、お互いに心が折れることなく、最後まで前に出て闘おうとしていたんだよ。

——結果的には判定になりましたけど、やはり試合中は常にKOを狙っているんですか?

メレンデス もちろんさ。だってファイトというものは、そもそも男同士がリングで闘って傷つけ合うもので、究極的には殺し合いだと自分は考えているからね。どちらの技術のレベルが高いとか低いとかそういうものじゃないんだ。

——究極的には殺し合いですか!

メレンデス やっぱりファンも、選手がお互いを倒し合って潰し合う試合を観たいと思うし、お金をもらって闘っている以上、ファイターはそうあるべきだろう。

——実際、二人ともほぼすべてのパンチで、思いっきり踏み込んで殴り合っていましたよね (笑)。

メレンデス 本当に「殺るか殺られるか」の試合だったね。当初は、自分のほうがカワジリよりボクシングテクニックが上だから、試合の流れの中でゲームプランを組んでいけると思っていたんだけど、いざ試合になると、感情的になって、気持ちを全面的に押し出す闘いになったんだ。

——では試合の勝敗よりも、「ここは下がってられない!」というお互いのプライドを懸けた勝負になったと?

メレンデス そうなんだよ。試合中、殴り合いを避けて引いていたら、たとえ記録上は自分の勝ちになったとしても、男と

グラップリングでもアオキには負けないぜ
ゴミとは壮絶な打ち合いになるだろうな

男の勝負で負けるような気がしたんだ。それにお互いファイターとしてリスペクトをしていたから、余計に「コイツには負けられない」という気持ちになったしね。

――しかしあれだけ激しい闘いをしていたわりには、顔はキレイですよね。

メレンデス　ノー！（深くかぶっていた帽子を脱いで、傷だらけの額と瞼を見せながら）そんなことないさ。

――うわ～、額はボコボコですね。

メレンデス　お互いパンチを額で受けていたからね。だから拳も痛めてしまった。

――拳も凄く腫れ上がってますねぇ。

メレンデス　ホント、振り返ってみると昨日の試合は凄かったよ。でも、そんな激しい試合を制することができて最高の勝利だね。俺は自分自身が燃えるような、こういう試合をしていきたいんだ。『PRIDE』には、それに応えてくれるタフな男たちがたくさんいる。ホントに『PRIDE』に来てよかったと思うよ。

――今後の話となると、一度対戦が流れた青木真也とも近い将来闘うことになると思いますが、ヨアキム・ハンセン戦は観ていましたか？

メレンデス　その試合は自分の試合前だったので、リアルタイムでは観られなかったんだけど、リプレイの映像で見たよ。素晴らしい試合だったね。アオキはもともと戦闘能力が高いけど、それ以上にプロフェッショナルとしてリングに上がる姿勢が素晴らしいよ。自分の強みであるサブミッションを今回の試合だけでなく、毎回キッチリと出しているからね。

――青木選手はストライカーに打撃を打たせない技術を持っていますが、メレンデス選手なら、どう闘いますか？

メレンデス　たしかに彼はストライカーを封じ込める才能を持っている。でも、俺だって打撃を習う前から柔術をやっているからグラップリングでも負けないつもりさ。昨日の試合で言えることは、テイクダウンに成功したアオキが自分のフィールドにゲームを持ち込んで、ヨアキムにやりたいことをやらせなかったというだけだよ。でも、俺との試合ではそうはいかせないぜ。自分にとっても素晴らしい挑戦になるだろうから、ぜひアオキとはやりたいね。

まさに死闘！ お互い一歩も退かずに正面から殴り合ったメレンデスと川尻。判定は3-0だったが、内容的には僅差。敗れた川尻の評価も上がったことだろう。



Gilbert Melendez

いつでも闘う準備はできているよ。

――王者である五味隆典の試合はご覧になりましたか？

メレンデス　昨日の試合は素晴らしかったね。最近、ゴミは以前ほど強くないなんていう声もあったけど、あの試合で彼は真の王者であることをあらためて見せつけたと思う。しかもイシダ（石田光洋）のような優れた相手を、あれだけ圧倒するんだから驚きだよね。決定打になった左ストレートも、まさに彼の気持ちが入った素晴らしいパンチだったよ。「確実に仕留めてやろう」という思いが伝わってきたね。

――五味選手は「（弟分の）帯谷を倒したメレンデスとやりたい」と以前から口にしていますが、もし五味vsメレンデスが実現したら、もの凄い試合になるんじゃないかと思うんですけど。

メレンデス　それは今回同様、いや、それ以上にパンチが交錯する激しい試合になるだろうね。もし彼と闘うことになるのなら、タイトルマッチでやりたいよ。ファンの記憶に残るのはもちろん、のちのちまで語り継がれるような試合になるだろうね。

――それと今年は『ライト級GP』開催が予定されています。もうこの大会は視野に入っていますか？

メレンデス　もちろん。今年は自分にとってチャンスだと捉えている。このクラスではスタミナが勝負を決めることになるだろうから、15分間の試合を連続して闘える自分がトーナメントを制すると思う。ハッキリ言って優勝する自信はあるね。

――早くも優勝宣言！　そのGPの前年度覇者でもある五味選手がPRIDE王者として、ラスベガス大会やUFCなど海外の大会に挑戦したいと発言しましたが、UFCのライト級とウェルター級についてはどう見ていますか？

メレンデス　実力的にはUFCファイターよりもゴミのほうがはるかに上だろうね。かつて『PRIDE武士道』にも参戦したUFCライト級王者のショーン・シャークはパワーもあってタフだから、ゴミと闘えるぐらいのレベルにはいると思う。でも、それ以外ではゴミの相手になる選手はいないよ（キッパリ）。

――五味に勝てるどころか、まともに勝負できるのもショーン・シャークぐらいだと。

メレンデス　だからゴミがUFCに参戦したら、あっという間にチャンピオンになるんじゃないかな。ホントはUFCに出る必要もないくらいだと思うけど、さらなる成長を目指す上で、海外の試合に対して興味が出てくる気持ちはわからなくもないけどね。

――なるほど。それでは最後に今年の目標を聞かせてください。

メレンデス　もちろん、タカノリ・ゴミを倒して『PRIDE』のチャンピオンになること。そして『ライト級GP』を制することだね。期待してもらっていいよ！

【07年1月1日／都内某ホテルにて収録】



Gilbert Melendez■1982年4月12日、米国カリフォルニア州出身。修斗ライト級戦線で高谷裕之、佐藤ルミナらを撃破し"日本人キラー"と呼ばれる。昨年6月にはストライクフォース・ライト級王座も獲得した。175センチ、73キロ。

PRIDE 男祭り2006 -FUMETSU-



2004年、暴れ太鼓
2005年、タップダンス
そして迎えた2006年は
ピアノだった！

全試合レビュー座談会

元旦から新春大放談！『PRIDE男祭り2006-FUMETSU-』は、過去の『男祭り』と比べて最もハイレベルな内容が繰り広げられた大会だった。ヒョードルの焦り、不機嫌な五味の完勝、川尻とメレンデスの攻防、ミノワマンへの改名などなど、あらゆる要素が詰まっており、さいたまスーパーアリーナに集まった48709人（満員）の観客も大爆発!! ここではその全試合を一気にまとめてレビューします！

構成／坂井ノブ　撮影／平工幸雄　写真提供／DSE

座談会出席者

橋本宗洋（フリーライター）
大晦日は『Dynamite!!』取材で大阪ドームへ。『男祭り』の結果はさいたまSAから送られてくる携帯メールでしかチェックしていない。

堀江ガンツ（本誌編集部）
大晦日は『男祭り』取材でさいたまスーパーアリーナへ。元旦朝からメレンデス、ジョシュ、ノゲイラに連続してインタビューを敢行した。

司会進行／ジャン斉藤（本誌編集長）

橋本　……いま1月1日の夜9時11分なんだけど、大阪の『Dynamite!!』取材から昼間に帰ってきて、ずっと『kamipro』編集部で速報号の作業。なんなの？　この正月は……。

——そして、観てもいない『男祭り』の座談会に登場していただいて、ありがとうございます。

橋本　ありがたみがまったくこもってない（笑）。でも、たぶん俺は『男祭り』を観ていない人の中で『男祭り』を気にしてた度合いでは、日本の中でも5本の指に入るよ。

ガンツ　入りますか！（笑）。じゃあ、嫌々『Dynamite!!』に行ったと？

橋本　そうそう。記者としてのつらさっていうか……つらさじゃねえよ！

——まあ、時間もないので〝記者のつらさ〟ってことで先に進めますけど。

橋本　いやいや、昨日の『Dynamite!!』は非常に高いモチベーションで行きましたよ。見どころは多かったしね。『男祭り』の結果はガンツから携帯メールで続々と送られてきてたんだけど、そっちもおもしろかったんだろうなというのは感じたね。基本的に俺は『男祭り』のような濃い勝負論の世界が好きな男だから。

ガンツ　その〝濃い勝負論の世界〟から、俺が一番最初に送ったメールが「ミノワマンKO負け」なんだけどね（笑）。

橋本　一瞬で意味を理解する俺も俺だけどさ（笑）。でも「ジョシュ、デスバレーボム炸裂！」の意味はわからなかった。

——どちらかといえば、『インディー・サミット』の詳細メールですよね、それ。

橋本　しかもさ、それで勝ったか、負けたか書いてないんだよ、ガンツのメールには。まあ、でもホントに充実してたんだろうなっていうのは凄く伝わってきたね。


もはや年末の風物詩！　ふんどし一丁の高田本部長が『PRIDEのテーマ』で暴れ太鼓を披露！

——オープニングの高田本部長のピアノも凄かったんですよ！　『のだめカンタービレ』ならぬ『たかだカンタービレ』で（笑）。

ガンツ　で、グランドピアノとともに舞台へ沈んでいったと思ったら、『PRIDEのテーマ』が流れる中、再び舞台からせり上がってきて、お約束のふんどし一丁で暴れ太鼓（笑）。

橋本　それもガンツからは「高田！　ピアノ！　ふんどし！」ってメールが来たから、今年はふんどし一丁でピアノを弾いたのかと思ったよ（笑）。

ガンツ　ガハハハハ！　そこは想像力を発揮しすぎですね。

——そんな感じで、一試合ずつ吟味していきましょう！

第1試合



○田村潔司
(1R1:18 KO)
×ミノワマン

——最初は「ミノワマンKO負け」という謎のメールが届いた、田村vsミノワマンですね。

橋本　美濃輪が〝ミノワマン〟に改名するということは、どの段階で発表されたの？

ガンツ　煽りVです。

橋本　……バカだなぁ（笑）。

ガンツ　リングアナも「ミノワマン選手の入場です！」って（笑）。もう、つかみとしては完璧だよね。

橋本　でも、俺はその改名を聞いたときにグッときたね……。

——はあ。

橋本　なぜかといえば、キン肉マンの別冊本で、著名人による「僕が考えた超人」っていうコーナーをやってたのよ。そこに出たかつての美濃輪は、自分の写真を使って「美濃輪マン」という超人を考え出したんだ。もちろん本気で。

一同　ダハハハハハ！

橋本　ほかの人は普通に「なんとかマン」というイラストを書いてるんだけど、そんなアホなことしてるの美濃輪だけ。それでじつは『PRIDE』に出たての頃に「リングネームをミノワマンにしようと思うんですけど」って言って止められたこともあるしね。昔、なかなか投稿できなかったから「自分で採用してやれ！」って気持ちだったらしいけど。

ガンツ　本当に愛すべきバカですねえ（笑）。

橋本　そんな思いが詰まったミノワマンをこの大一番に出してきた。美濃輪の中の田村戦の重さを感じるね。

ガンツ　それが重さなんだ（笑）。

橋本　だから、ミノワマン改名に込められた決意を感じて、凄くグッときたよ。たぶん俺だけかもしれないけど。

ガンツ　それをまったく感じてないのが田村潔司なんだけどね（笑）。で、驚いたのが田村に対する歓声の少なさ！　田村の入場ではおなじみになっているテーマ曲に合わせて「チャッチャッチャチャチャチャ、チャチャチャチャ！」という手拍子してる人、ほとんどいなかったからね。

橋本　たぶん、いまの『PRIDE』ファンって、03年6月の『PRIDE・26 REBORN』以降のファンでしょ？　田村がUWFを背負ってヘンゾ（・グレイシー）を倒したリングスの試合や、『PRIDE・23』での髙田延彦引退試合の記憶がないんだろうね。





サングラスに着物のミノワマンに対し、「I♥U」Tシャツの田村。独自の“ヘブン”を追求する似てるようで対照的な両者。

ガンツ　というかね、昔からのファンもいいかげん、愛想をつかし始めてたんじゃないかと思う。桜庭戦は頑なに受けず、ロニー・セフォーやアリエフ・マックモドとやったり、ノゲイラに秒殺負けしてみたりしてるだけなんだから（笑）。

橋本　その田村が、久々に強さを見せたんでしょ？

ガンツ　そう。あらためて「田村、強い！」って思った。左ミドルを充分に効かせておいて、ミノワマンのパンチに合わせてテンカオ（ヒザ蹴り）をズバッと突き刺すという。総合であんな勝ち方、初めて観たよ！

——田村って要所要所で凄い試合して、ここまで生き残ってきましたけど、それが久々に巡ってきましたよね。

ガンツ　その凄い試合をするサイクルが、以前より長くなってるのが気になるところなんだけど（笑）。とにかく、ここにきて田村株は再上昇ですよ。しかも、勝って吉田秀彦戦をアピールしたその日に、その吉田がトンプソンに負けたり。同じ日に桜庭が秋山にあんな負け方をしたことで、吉田や桜庭と比べても相対的に田村株が上がってるという、この悪運の強さは恐ろしいよ（笑）。

——そして、あんなにアッサリ負けていながら、ミノワマンの株も落ちてないのも凄いですよね。改名したことによって、負けてもますます価値が下がらないキャラになったというか。

ガンツ　「どうする？　どうなる？　ミノワマン。次週へ続く！」という感じだからね（笑）。

橋本　俺はそういう〝別枠〟扱いじゃなくて、本筋で強いミノワマンが観たいんだけどな……。

——そういえば、田村って『kamipro』で「桜庭が秋山に負けたら坊主になる」って言ってましたね。

ガンツ　丸坊主の先輩である佐伯さんに断髪式やってもらおうか（笑）。

——近日公開！「どうする？　どうなる？　タムラーマン！　次号に続く！」と（笑）。

第2試合



○青木真也
(1R2:04 トライアングルチョーク)
×ヨアキム・ハンセン

橋本　これはガンツから「見たこともないような三角」というメールがあって、押切（伸一。放送作家＆ライター）さんから来たメールには「フットチョーク。すげえ強い」とか書いてあって。「これはなんのことなんだ？」と思った。

——しかし、この試合は「青木、強い！」としか言いようがないですね。

ガンツ　青木はなんか凄いことになってきてるよね。「黄色いエガちゃん」とか呼んでるあいだに（笑）。ただ、イロモノ的な部分だけじゃなくて、まっとうな光を当ててあげたくなるような感じはするね。

——もとはといえば、エガちゃんと対談させたりイロモノ路線で扱ってきた『kamipro』が悪いような気がしないでもないけど（笑）。

橋本　ホントに（笑）。それで今回の青木は、自分と違う個性を持った凄く強いヤツにも、自分の持ち味で勝てるっていうことを証明したんでしょ。それが凄いんだよね。

ガンツ　それに青木はいま、いい意味で〝勘違い〟し始めるよね。一昨年の五味も「俺が最強なんだ！」って思い込んで突っ走ってたけど、そういう〝無敵モード〟にいま青木は入ってるんだと思う。

橋本　うん。いまの『PRIDE』で一番ノってる感が出てるのは青木だろうね。

ガンツ　入場での本人のノリっぷりも「なんでそこまでノる必要があるんだろう？」っていう（笑）。そこが、たまらないよね。

第3試合



○郷野聡寛
(2R終了 判定2-1)
×近藤有己

ガンツ　この試合はべつに語らなくてもいいんじゃない？

——まあ、そうですね。

橋本　待て、待て！　待て!!（笑）。この試合はパンクラスでの二人の闘いを知ってる者にとっては、凄く思い入れのあるカードだよ？

ガンツ　たしかに、さすがかつてのパンクラスの黄金カードだけあって、会場が静まりかえって、〝シーン現象〟を起こしてましたね。別の意味でだけど（笑）。

——そういえば、橋本さんは『Kamip

PRIDE 男祭り2006 -FUMETSU- 全試合レビュー座談会

「ミノワマン」改名に込められた決意を感じて、凄くグッときたよ。たぶん俺だけかもしれないけど(橋本)

ro Hand』でこの一戦についての思いを長文原稿で書いてましたよね。

橋本　通常2000文字でいいところを4000文字で熱く近藤vs郷野の見どころを書いた挙げ句、「大晦日は大阪取材に行きます」とオチをつけてね。

ガンツ　橋本さんの熱い気持ちに冷水をぶっかけるようで申し訳ないけど、田村や青木で盛り上がった会場の熱を見事に冷やしてました。

――まあ、試合というよりも入場の段階ですでに冷やしてましたけど。

ガンツ　そう。本家DJ OZMAもNHKの紅白歌合戦で抗議が殺到したけど、DJ GOZMAのスベりっぷりもかなり凄かったから。秋山の身体ぐらいスベってたね(笑)。

橋本　スベる意味が違うだろ！(笑)。入場のことは何も聞いてないんだけど、どうだったの？

ガンツ　こういうお約束の入場って定着してくると、みんなで安心して「アゲ♂アゲ♂EVERY☆騎士」を聴きたいわけですよ。でも、GOZMAはちょっとヒネっちゃったんだね。いきなりイントロで知らない曲が流れてきちゃって。

橋本　あ〜、なるほど。定着した期間を経てからヒネるんだよな、普通は。

ガンツ　そう。日本ハムファイターズふうのコスチュームで出てきて、元ネタがなぜか新庄のゴレンジャーネタで。「4人しかいねえぞ？　どうした、あと一人？」ってなったら、背番号5番のリトル清原が長渕剛の「とんぼ」で出てきまして……これがドン引きでしたねぇ(笑)。5人揃ったあとにようやく「アゲアゲ」がかかったんだけど、時すでに遅しというか。あのへんから歯車が狂ってたんだよね、この試合は。

橋本　それが近藤の不動心を動かした？

ガンツ　たぶんそう(笑)。

橋本　俺は『Hand』のコラムで「どういう結果が出るにしても、二人の思いが報われるような試合になれば」と書いたんだけど。

ガンツ　まあ、みんな「二人にしかわからない思いがあるんだなぁ」と遠目から観ていたような感じでしたね。「二人だけの個人的な試合は横浜文体あたりでやってほしいなぁ」とか(笑)。

橋本　コラコラ！(笑)。

ガンツ　でも、ホントに場というのは大事だからね。文体や後楽園でやってたら緊張感も伝わってきて盛り上がったと思うし、パンクラスの興行でやってほしいカードだったな。

――そもそも『PRIDE』で生まれた因縁じゃないですからね。

橋本　そうなんだよね。

――それを二人とも持ち出しすぎたというか。田村とミノワマンも再戦だけど、あの二人にはそのストーリーが中心ではなかったじゃないですか。

ガンツ　ミノワマンの改名第一戦がテーマだから(笑)。とにかく、せっかく郷野の人気が上がっていただけに、ちょっともったいなかったね。

第4試合



○マウリシオ・ショーグン
(3R終了 判定3-0)
×中村和裕

橋本　これは結果だけ見れば「まあ、そうだろうね」っていう感じではあるけどね。想像力を膨らますとしたら、「へぇ〜、判定まで粘ったんだ、カズ」っていう印象かな。

――でも本来、カズだったら実力的にこのぐらいはやってあたりまえのはずなんですけどね。ミドル級の日本人でトップの実力を持ってる人だから。

ガンツ　俺もこの試合に凄く期待してたんだよ。試合というか、試合前の煽り映像で、カズとドンペン君の絡みがあるって、『kamipro Hand』のインタビューで佐藤大輔さんが予告してたんで、ついにカズとドンペン君がブレイクすると思ってたんだけど……。ドンペン君がほんのちょっとしか出てこなかったんだよねぇ。

橋本　どこに期待してるんだ(笑)。試合展開としてはどんな感じだったの？

ガンツ　カズがスタンドでガンガン攻めたんだけど、ショーグンのテイクダウンがうまかった。あの柔道家をどんどんテイクダウンして、必ずいいポジションを取るんだよね。

橋本　カズの打撃の強さとショーグンの寝技の強さが見えた試合か。

ガンツ　とくにカズの打撃は良かったから、ドンペン君とのコラボを含めて次に期待しましょう！

第5試合



○ギルバート・メレンデス
(2R終了 判定3-0)
×川尻達也

ガンツ　これはとんでもない試合だったね。

橋本　これはどっちが勝ってもおかしくないと思ったけど。

ガンツ　すれ違いに終わった郷野vs近藤とは間逆の展開でしたよ。お互いが常に剛速球とフルスイングでぶつかり合ってるような感じで。二人とも顔はキレイなんだけど、額がコブだらけなんだ。パンチをおでこで受け合ってるから。そのせいで拳が凄く腫れちゃってんの(笑)。

――それに15分間ノンストップで殴り合うことがどんなに過酷なことかって。

ガンツ　川尻は五味戦の頃より全然フィジカルが強かった。ミドル級の馬力とスタミナが異常にある選手同士のような試合が、ライト級で見られたという。とにかく「軽い」というイメージはまったくなかった。

橋本　世間一般でよく言われてる「中・軽量級は迫力に欠けるが、スピードとテクニックで」みたいなレベルではないんだね。中・軽量級にそこまでやられたら、「重量級とは何か？」っていうことにもなるよね。

――厳密に言うと、「ウェルター級とは何か？」ということでしょうけど(笑)。

第6試合



○藤田和之
(1R2:08 KO)
×エルダリ・クルタニーゼ

ガンツ　クルタニーゼってリングス・グルジアの選手でしょ？

橋本　こんな名前のヤツよく来てたけど、リングスは関係ないよ！(笑)。

ガンツ　あの、うっかり来ちゃった感じも凄くリングスっぽいんだけどなぁ(笑)。

橋本　試合はどうだったの？

ガンツ　グルジア人が左手を突き出して、いわゆる〝谷津ガード〟してたんだけど、藤田は右フックが打ちづらそうだったよ。

橋本　でも、パンチでKOだったんでしょ？

ガンツ　だからフックじゃなくて、アッパ

五味vs石田は"ワル五味"がついに出現した歴史的な試合だよ。もう完全にケンカ番長だよね（ガンツ）

ーで決めたの。そのままマット・ガファリみたいに痛みで後ろ向いちゃって、KOになったわけだけど。

橋本　名前がリングス・グルジアで、谷津ガードをするガファリって、どんなヤツだよ（笑）。

ガンツ　だから、ファンとしては、もっと違う相手と闘ってほしかったって意見もあるんだけど、とにかく藤田はここで一発勝っておく必要があったから、復帰戦ということでいいんじゃない？

――藤田は今年も"命懸けの闘い"してくれると思うので、期待しましょう。

ガンツ　それこそヘビー級で川尻vsメレンデスみたいな、とんでもない試合ができる男だからね、藤田は。野獣の本性が出てくるのはこれからですよ！

第7試合



○五味隆典
(1R1:14 KO)
×石田光洋

ガンツ　いやぁ〜、この試合は最高だね。"ワル五味"がついに出現した歴史的な試合だよ！



会見から試合までの挑発合戦を追った煽りV。映像を通じた挑発合戦が観客をもヒートさせた。石田の発言にカチンときた表情も最高だ。

橋本　"ワル五味"！（笑）。

ガンツ　もう番長だもん。俺には入場で着てたパーカーが学ランに見えたから（笑）。何が凄いって、試合前、試合、試合後をすべて"ワル五味"で通したということでしょう。まったく揺るぎなかった。五味の本性は『PRIDE』に遊びに来てください！」って笑顔を振りまくような人間じゃないんだよ！　ワルなんだよ！　いまの五味を主演に据えて『殴者』を撮り直したほうがいいね（キッパリ）。

橋本　そんなに悪かったんだ（笑）。

――悪さを通り越して、光り輝いてましたからね。普通だったら、優等生キャラの石田くんに声援が集中するはずなのに。

橋本　優等生の存在感が霞んでいくんだ。俺はガンツからのメールで「1R秒殺KO」という結果だけ見たときは、「いいときの五味が帰ってきましたか」という印象を受けたけど、それどころの騒ぎじゃないんだね。

ガンツ　いいときの五味どころじゃない。それ以上だね。ついに本性が出てきたかという感じかな。

橋本　かつて五味は「スーパースターになりたい」って言ってたけど……。

ガンツ　（さえぎって）もうね、完全にケンカ番長だよね。

橋本　リアル・ディック・スレーター（笑）。

ガンツ　チーマーとかギャングとか、そういうワルじゃないの。完全にボンタンを履いて、腹巻きして、首からお守りぶら下げてるような感じのワルだよ。『PRIDE』ってよく、『少年ジャンプ』の世界にたとえられるけど、五味は一人だけ『少年チャンピオン』世界だね（笑）。

橋本　どんなたとえだ（笑）。

ガンツ　五味本人は『サンデー』のつもりなんだけど、あれは完全に『チャンピオン』!!

橋本　（無視して）しかし、試合後にはサンピエールとやりたいとか、マット・ヒューズとやりたいとかUFC勢の名前ばっかり挙げてたそうじゃない？

――「UFCライト級のショーン・シャーク？　ああ〜、楽勝だけどねぇ」と番長的な発言してますね。

橋本　でも、今年はライト級GP開催するんでしょ。それなのにライト級GPのことはまったく気にしてないのは……？

――それは、もう番長ですから。一回シメた学校は興味ないんですよ。「なんでそんなヤツとまたやらなきゃなんねーの？　もうシメてるからさ〜」という。

ガンツ　だからもうアメリカの番長とやったほうがいいよ。

橋本　アメリカに番長っているのかよ！（笑）。

第8試合



○ジェームス・トンプソン
(1R7:50 TKO)
×吉田秀彦

橋本　こういうアップセットがあると、格闘技の興行ってウワ〜ッてなるよね。

ガンツ　でもね、俺は吉田がKO負けするんじゃないかと心配はしてた。あれだけリーチ差があるから、奥襟つかまれてパンチでボコボコにさせられちゃうんじゃないかって。吉田もそれを警戒して道衣を脱いだんだと思う。でも、トンプソンが想像以上だったんだろうね。

橋本　俺はKO負けするとまでは思わなかったけど、「ド直前に組まれるにはキツいカードだなぁ」とは感じてたのよ。それが出たなぁ。あのデカさとパワーだけで相当イヤだよ。

ガンツ　まあ、トンプソンの良さも出たし、試合的には良かったけど、イメージ的に吉田がここで負けたのは痛いかもしれない。

橋本　昔は一戦一戦、大事に舞台設定してたんだけどね。気がつけばトンプソンとの試合を大会直前に受けて、やって、負けているという。逆にそこで何かが見えてくるのかな？

ガンツ　へんな話、いつの間にか『PRIDE』在籍時の桜庭的な役目を果たしているんだよ。そこがヘビー級だっていうのが厳しいところなんだけど。

――その厳しさもあるから、もっと早く試合を止めるべきだったんですよ！　もうヘロヘロで動けもしない吉田の身体をムリヤリ引きずって、ドント・ムーブしてる場合じゃないだろ！　って。

橋本　ともかく、吉田も去年二敗を喫したことで今年は何か期するものもあるんじゃないかな？　五味と同じで、吉田も本来は"番長"なわけだからさ、その本性を出してほしいね。

第9試合



○A・ホドリゴ・ノゲイラ
(3R終了 判定3-0)
×ジョシュ・バーネット

橋本　この試合の最中に「デスバレーボム炸裂」ということだけメールが来たんだけど（笑）。勝ったか負けたかはわかんないよ！

ガンツ　でも、幻想だけは膨らんだでしょ？（笑）。

橋本　それにこの試合だけは結果を聞いても、どんな内容だったか見えてこなかったんだよ。

ガンツ　まあ、ノゲイラがしっかり対策を練ってきたということだろうね。スタンドではボクシングで上回って、しかもジョシュのダッキングの癖を見抜いて、必ずヒザを入れるという。そして寝技にな

今回は『PRIDE』は健在」を示したけど、真っ先にやるべきは夢とストーリーを提供すること（ガンツ）



ギロチン・アックス・ドライバー気味に担いでデスバレー・ボム。さすがプロレスラーだ！

ったら下にならず、必ず上に乗ると。そして極めにいくリスクを負わずに、上からのパウンドを多くするとかね。そういう基本的な動きで勝ちに徹していた。でも、まったく退屈しない。むしろ凄くおもしろい試合だったね。

橋本　ある意味、勝負論の旨味とコクが一番よく出てたというか。

――本当に判定で勝敗をつけるのが野暮に思えてしまう激闘で。この二人の判定決着なんて、"リングアウト負け"みたいなもんですよ。

橋本　本当に手が合う二人なんだね。

ガンツ　完全に名勝負数え歌だよ。3ラウンドがあっという間だからね。もしも、三度目の対決があったら60分一本勝負でやってほしい（笑）。

第10試合

PRIDEヘビー級タイトルマッチ



○エメリヤーエンコ・ヒョードル

（1R8:16 羽根折り固め）

×マーク・ハント

橋本　これは結果だけ見ると「まあ、そうか」と思うけど、意外に時間かかってるんだよね。内容を聞く前に会場の雰囲気として、いまのヒョードルのポジションじゃないけど、『ボードッグ』の移籍の噂とか、そういうのに対する何かが感じられるものはあったの？

ガンツ　まったくなかったね。ヒョードルvsハントは発表されてから試合当日まで、今年のGP二回戦でハントがジョシュに一ひねりされたイメージがやっぱり強くて、盛り上がりに欠ける部分があったんだけど。やってみたらタイトルマッチにふさわしい内容だったね。「こんなヒョードル初めて〜」って感じだもん。

――おもしろかったですよ。ハントが上に乗って見よう見まねのようなアームロックで極めかけるし。

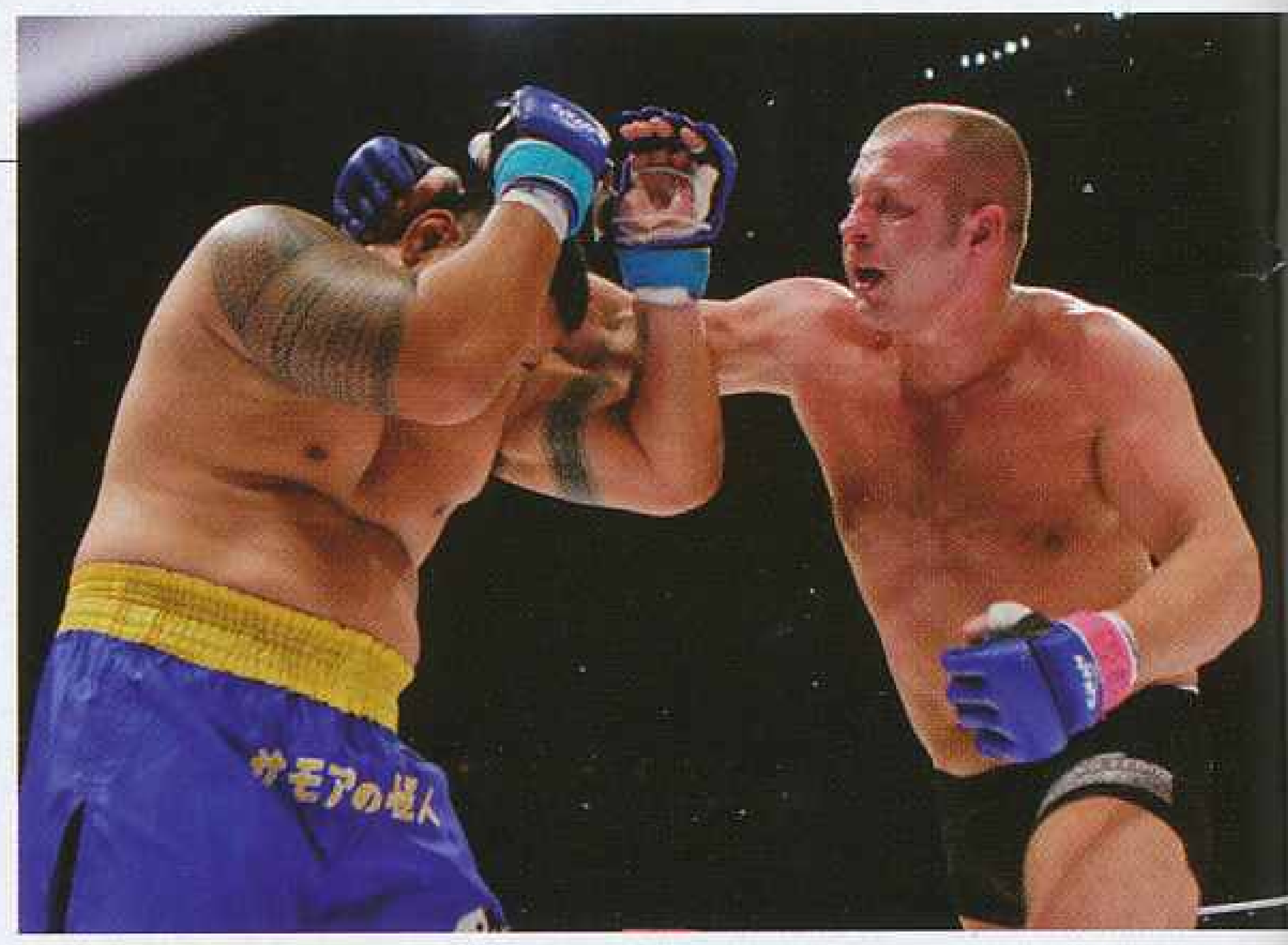
橋本　「これでよかったっけな？」みたいな（笑）。

ガンツ　十字極められそうになっても、「なんだこれ？　こっちいってみようかな！」で逃げちゃった感じがするし（笑）。ヒョードルもサンボ式なのか柔道式なのかわかんないけど、足かけて倒すのが凄いうまい。でも、ハントはいくら投げられても背中がマットにつかないんだよね。

――それでヒョードルが藤田和之戦以来となる殺人モードに切り替わって。

ガンツ　最後には怒りの表情でスピードがグンと上がったんだよ（笑）。ハントを転がして逆にアームロックで極めちゃう強さもさすがとしか言いようがない。まあ、でもヘビー級の闘いはこのあとどうなるか、わかんないよね。次はヒョードルvsノゲイラだという気運にはなってないしね。

橋本　普通に考えれば「ジョシュとノゲイラが再戦してノゲイラが勝ちました」「ヒョードルは苦戦しながらも勝ちました」となったら、それぞれが有機的に結びついてくるもんだけどね。いままでの『PRIDE』ってそれぞれの試合の点と点が線で結びついて、「じゃあ今度はこうなるんじゃないか」っていろいろ予想できる楽しみがあった。でも、今回はそれがあまりない。押切さんからメールが来たんだけど、「一つ一つの試合はおもしろいんだけど、興行がうねってなかった」って。たしかにそういう雰囲気だったんだね。



スイッチが入った瞬間、ヒョードルの顔色が変わり、動くスピードも急激にアップした！

ガンツ　来年、ヘビー級大戦争になるという感じではなかったね。

――それを感じさせてくれたのは、むしろライト級ですよ。でも、我らが番長の五味さんは、アメリカのガッコをシメないといけないし。

ガンツ　まあ、今回はとりあえず「『PRIDE』は健在」を示した感じだけど、真っ先にやらなきゃいけないのは次の夢とストーリーを提供することだよね。

――まあ、フジテレビ・ショックや忍び寄る魔の手をかいくぐって、こんなハイクオリティの大会を開催できたことだけでも凄いと思いますけど、ここからがプロモーションとしての腕の見せどころですよね。そんな大会でした。

橋本　とりあえず帰ってビデオ観ます（笑）。

【07年1月1日／編集部会議室にて収録】

PRIDE 男祭り2006 -FUMETSU- 全試合レビュー座談会



恒例の男神社が会場前に出現!! その横には屋台も出て「男汁」や「男棒（ジャンボフランク）」や「男まんじゅう」なども販売されていた。

kamipro Hand

『PRIDE男祭り2006-FUMETSU-』ベストバウト&MVPアンケート

［実施日時2007年1月1日0時～3日0時］

『PRIDE男祭り』のMVPは？

1位	五味隆典	252
2位	青木真也	87
3位	ジェームス・トンプソン	41
4位	エメリヤーエンコ・ヒョードル	29
5位	マーク・ハント	18
	田村潔司	18

五味、強し！　ぶっちぎりで『男祭り』の主役の座をゲットした。フットチョークで鮮やかな一本勝ちを奪った青木、メガパンク殺法で激勝したトンプソン、やっぱり強かったヒョードル、そのヒョードルを追い込んだハント、ミノワマンを返り討ちにした田村など強烈なインパクトで魅せた選手が上位に食い込んだ。

『PRIDE男祭り』のベストバウトは？

1位	五味隆典 vs 石田光洋	231
2位	青木真也 vs ヨアキム・ハンセン	140
3位	ギルバート・メレンデス vs 川尻達也	108
4位	田村潔司 vs ミノワマン	69
5位	ジェームス・トンプソン vs 吉田秀彦	52
6位	エメリヤーエンコ・ヒョードル vs マーク・ハント	34
7位	アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ vs ジョシュ・バーネット	25
8位	マウリシオ・ショーグン vs 中村和裕	12
9位	藤田和之 vs エルダリ・クルタニーゼ	5
10位	郷野聡寛 vs 近藤有己	3

煽り映像から内容まで圧倒的な完成度を誇る五味vs石田がトップ！　青木の極めの強さ、メレンデス＆川尻のハイレベルな攻防、田村のヒザ蹴り、トンプソンの大逆転など印象的な場面があった試合ほど上位に食い込んだ。逆に残念ながら相手とかみ合わなかった試合は下位に沈んでいく傾向が強かった。

獲得の衝撃発表!

が動いた!!



『UFC66 LIDDELL vs ORTIZ 2』
(現地時間12月30日)

決定的瞬間レポート

驚異的なPPV収益で日米逆転の構図を仕立て上げたUFCだが、あくまで海の向こうの出来事。PRIDEを凌駕するUFCのパワーにいまいちピンときてなかったファンは多かったことだろう。しかし、その現実がついに日本の格闘技ファンに突き刺さる衝撃事件がボッ発した。現地時間12月30日（日本では大晦日）のUFC66で、PRIDE無差別級王者ミルコ・クロコップのUFC参戦が発表されたのだ。まさに日本マット界を襲ったビッグ・インパクト。同大会のWOWOW中継解説者を務めた稲垣氏がその決定的瞬間に迫る!!

文／稲垣 收　写真／Josh Hedges / Zuffa, LLC.

UFC66『LIDDELL vs ORTIZ 2』
米国ネバダ州ラスベガス／MGMグランド・ガーデン

○クリスチャン・ウェリッシュ vs アンソニー・ペローシュ×
（3R 判定3-0）

○ジェイソン・マクドナルド vs クリス・レーベン×
（2R 4分3秒 ギロチンチョーク）

○岡見勇信 vs ローリー・シンガー×
（3R 4分3秒 TKO）

○ガブリエル・ナパオン・ゴンザーガ vs カーメロ・マレロ×
（1R 3分22秒 アームバー）

○チアゴ・アウヴェス vs トニー・デ・ソーザ×
（2R 1分10秒 KO）

○マイケル・ビスピン vs エリック・シェイファー×
（1R 4分24秒 TKO）

○アンドレイ・アルロフスキー vs マーシオ・“ペジバーノ”・クルーズ×
（1R 3分15秒 TKO）

○キース・ジャーディン vs フォレスト・グリフィン×
（1R 4分41秒 TKO）

［UFCライトヘビー級タイトルマッチ］
○チャック・リデル vs ティト・オーティズ×
（3R 3分59秒 TKO）

12月31日、衝撃のニュースが世界の格闘技界を駆けめぐった。『PRIDE無差別級グランプリ』で、吉田秀彦、ヴァンダレイ・シウバ、ジョシュ・バーネットらを連続KOして王者になったばかりのミルコ・クロコップのUFC移籍が決まったというのだ。

筆者がこのニュースを知ったのは、大晦日の朝、UFC66の解説収録のためWOWOW放送センターに到着した直後だった。ロビーで待っていた番組プロデューサーから、「ミルコのUFC参戦」を伝えられたのだ。UFCをプロモートするベガスのズッファ社から連絡があったのだという。

UFC66はベガスのMGMグランド・ガーデンで行なわれたが、ミルコ参戦が現地でアナウンスされたのは、第一試合終了直後。場内の巨大ビジョンに「UFC67でミルコ・クロコップとクイントン・〝ランペイジ〟・ジャクソンのUFCデビュー戦」という文字が現われ、場内は騒然となった。ジャクソンは会場にも来ていたが、来場していないミルコに関してはリングアナのジョー・ローガンが「クロアチアのストライカー、クロコップがUFCに出場するのは、このうえなく素晴らしいことです」と紹介し、現地で解説を務める元UFC二階級王者のランディ・クートゥアーも「UFCは世界最高の大会なので、ミルコが出たがったのもうなずけますね」と付け加えたが、ミルコがPRIDE王者であることは一切触れない。

さて、このUFC66のメインはチャック・リデル vs ティト・オーティズのライトヘビー級タイトル戦で、かつての親友同士の因縁の闘いだった。二人は2年8カ月前にも対戦しており、「お互いとは試合をしない」という約束を破って挑戦してきたチャックに、ティトはKO負けしてしまう。

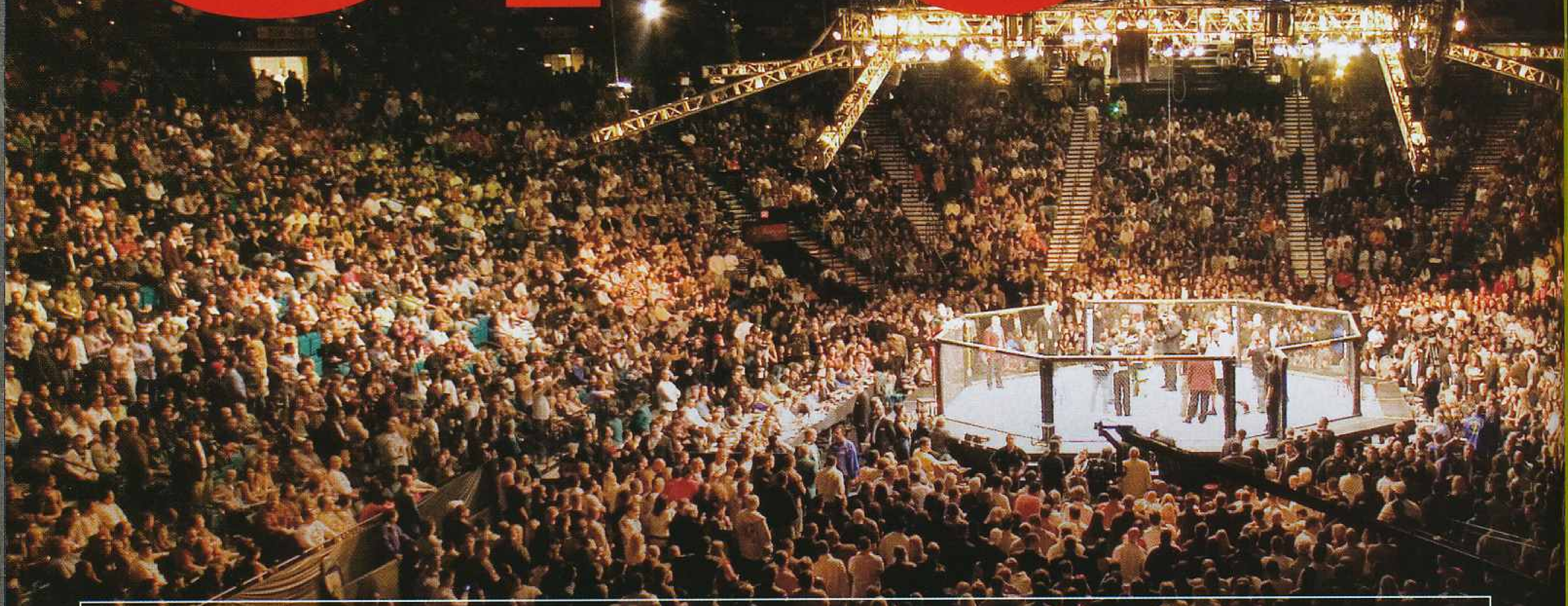
「背中を痛めていたし、試合中にチャックの指が目に入って見えなくなった瞬間にやられた」というティトは、今回は万全のコンディションをアピール。試合では両者ともに速いパンチを打ち合うが、リーチで勝るチャックのパンチが入る。ティトはタックルを狙うも倒せず、1ラウンド終盤にパンチを受けてグラつき、パウンドの雨を降らせられて大ピンチに陥るが、なんとか持ちこたえる。2ラウンドには1ラウンド終盤のラッシュで攻め疲れたチャックに、ティトがバックを取り、グラウンドに持ち込むが、逃げられてしまう。そして3ラウンド、パンチを食らって倒れたティトに強烈なパウンドを見舞ってチャックがTKOで勝利し、防衛をはたした。これでチャックは7連続KOだ。

試合後、リングアナに「あなたがこれまで負けた相手で唯一リベンジをはたしていないランペイジが次回UFCに参戦します。再戦したいですか?」と尋ねられ、「ぜひやりたいね。次の試合は彼とやりたい」と宣言した。チャックの総合の戦績はこれで20勝3敗となったが、かつて土をつけられたラン

UFC代表

ダナ・ホワイト高笑い!! ミルコ・クロコップ獲得の

ついに UFCが





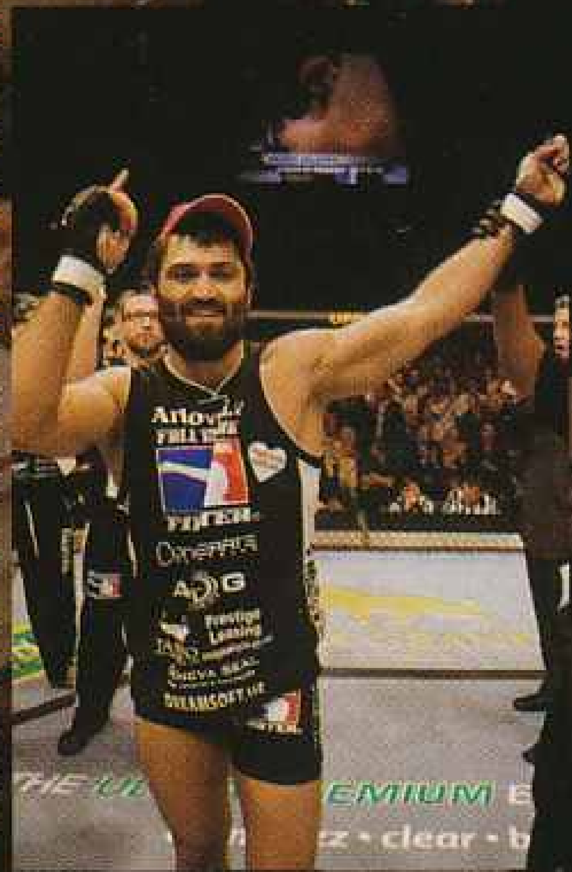
現在、アメリカで一番の知名度を誇るMMAファイターがチャック・リデルだ。つまり、彼を中心としたイベント構成が求められるが、以前からライトヘビー級（93キロ以下級）の手薄さは指摘されていた。しかし、今回のミルコやランペイジの獲得で、さらなるビジネス拡大を図れるチャンスをつかむことになったといえる。



宿敵ティト・オーティズを返り討ち!! チャック・リデルはライトヘビー級のベルトの防衛に成功した。UFCはこの一戦で、過去のPPV記録更新を目論んでいるそうだが、どうなるか。関係者からは100万件突破を予想する声も挙がっているが、いずれにせよ日本マット界にとってこのアメリカMMAバブルは戦慄の現象だ。



83キロ以下では“日本人最強説”も囁かれ、UFCミドル級戦線にレギュラー参戦中の岡見勇信がロリー・シンガーに一本勝ち!! これでUFCでの連勝記録を3に伸ばした。また正式に全米PPVデビューをはたしていない岡見だが、UFCミドル級王者アンデウソン・シウバへの挑戦権獲得を含めて、大きなアピールとなったといえる。



元UFCヘビー級王者のアンドレィ・アルロフスキーが復活の狼煙!! 立ってよし寝てよしの波状攻撃で、柔術世界王者のペジパーノを破った。アルロフスキーはオールグラウンドのスタイルや、“野蛮人”のようなビジュアルといい、非常に魅力的なファイター。ミルコのUFC参戦で、日本でもクローズアップされる機会は増えていくことだろう。

ディとジェレミー・ホーンには、どちらもKOでリベンジをはたしているのだ。

このときはミルコについての発言はなかったが、ミルコは以前から「UFCの選手ではチャックとやりたい」と語っていたし、ダナ・ホワイト社長によれば「チャックもミルコとやりたがっているし、体重はミルコに合わせる。本人もそれでなんの問題もないと言っている」とのことなので、この対戦もいずれ実現しそうだ。また、この日、柔術世界王者のマーシオ・ペジパーノと足関の攻防を見せたあと、パウンドでKOして復活の雄叫びを上げた元UFCヘビー級王者、アンドレィ・アルロフスキーとミルコの試合も見てみたい。


とりあえず、2月3日にベガスのマンダレイベイ・イベントセンターで開催（WOWOWでは日本時間2月5日に放映）されるUFC67では、ミルコはエディー・サンチェズと、ランペイジはK-1ラスベガス大会に出場したこともあるマービン・イーストマンとの対戦が発表されている。

サンチェズは総合戦績6戦全勝で全試合KOかサブミッションで勝っている選手で、9月のUFC63ではマリオ・ネトにパンチでKO勝ちしているが、トップレベルの選手ではない。UFCとしては、アメリカで試合をしたことのないミルコの強さを知らしめるための顔見せ的な試合だろう。また、イーストマンは00年の『キング・オブ・ザ・ケージ』でランペイジと対戦し、判定勝ちしており、両者はUFCが買収したWFAで05年12月9日に対戦するはずだった。

UFC66の大会後の記者会見でダナ社長はミルコのUFCとの契約は2年間で6試合だと明らかにし、「最高の選手はすべてUFCに出てほしい。これはまだ始まりにすぎない」と高らかに宣言。UFC帝国の世界制覇の動きは加速する——!!

全権代理人・今井賢一氏独占告白

ミルコ・クロコップ
UFC電撃参戦
全真相



「裏切り者と呼ばれるかもしれませんが、ミルコのために決断しました」

年末の格闘技界を席巻したミルコ・クロコップのUFC参戦の噂は、12.30 UFC66での正式発表で現実のものとなった。あれほどまでに、『PRIDE』での闘いに誇りを抱いていたはずのミルコが、今回の決断をするに至った理由はどこにあったのか。UFCとの契約をまとめた全権代理人・今井賢一氏が本誌だけにその全真相を語ってくれた。

聞き手／堀江ガンツ　撮影／乾晋也



――12月30日（米国・現地時間）のUFC66で電撃発表された「ミルコ・クロコップ2・3UFC67参戦決定」には、世界中のファン、選手、関係者が衝撃を受けましたが、まずは、今回のUFC参戦が決まるまでのいきさつをお話しいただけたらと思います。

今井　わかりました。ただし、分厚い守秘義務契約にサインしているので、しゃべれることとしゃべれないことをきちっと整理しながらお話ししたいと思います。まず、今回のミルコのUFC参戦というのは、プロ野球にたとえると、満面の笑顔でボストン・レッドソックス入団の記者会見をした松坂大輔というよりも、むしろ02年の暮れに松井秀喜がFA（フリーエージェント）の権利を取って、読売ジャイアンツそして日本野球界を去り、ニューヨーク・ヤンキースへ行くという決断をしたあとの、苦悩に満ちた表情での記者会見に限りなく近いでしょう。松井選手の第一声、言葉を非常に慎重に選びながら苦しい胸のうちを搾り出すように、「裏切り者と呼ばれるかもしれませんが……」という口上から始まった彼の気持ちというのが、いまは非常によくわかる気がしますね。

――それぐらい今回のUFC参戦というのは重く、相当な覚悟をもった決断だった、と。

今井　そうですね。この決断というのが、『PRIDE』にどれだけ大きな「迷惑」という言葉でしょうか、「落胆」でしょうか、さらに「怒り」や言葉では表わしきれない感情的な部分をすべてミックスしたような、そのぐらい大きな影響を与えてしまうかもしれないということが容易に想像がつきますし。やはり、2003年6月の〝REBORN〟からの4シーズン、格闘技界に携わる人間としての僕たちの夢や希望を、ある意味すべて『PRIDE』に託してきたわけですからね。

――ミルコにとっても、マネージャーの今井さんにとっても、『PRIDE』とはともに歩んできたという思いが強いわけですか？

今井　ボクとミルコは、ホントに『PRIDE』の代表であるバラさん（榊原代表）をはじめ、髙田（延彦）さん、加藤専務やスタッフの皆さんと、ともに一つの目標に向かって歩んできたという思いは強いですね。K―1から『PRIDE』へ闘いの場を移してから4シーズンのあいだ、あまりにもドラマチックな思い出ばかりで……。そして倒れても倒れても立ち上がるミルコの姿をフィーチャーしてもらえたのは、やはり『PRIDE』側の全面的なバックアップがなければありえないことでしたから……。その点については、いくら感謝してもしきれないという気持ちは、ボクもミルコも間違いなく持っているわけで。それが今回の決断に至るまでの眠れない日々、決断まで苦悩し続けた最大の理由でしたね。

――ましてや『PRIDE』がピンチといわれる状況での決断ですからね。

今井　だから『PRIDE』に対する申し訳ない気持ちばかりが胸をよぎって、こんな状態で新しい決断を下してもいいのかな……というのは、もちろんありました。ただ、ミルコも32歳。現在が円熟期でもあるんですが、これからの一日一日が格闘家として凄く貴重な時間になってくる年齢だと思うんですよ。格闘家としてミルコに〝残された時間〟というものを頭の隅で冷静に想定に入れながら、僕もマネージャーとして、ミルコと何十時間も国際電話で話し合い、何度もクロアチアに飛んで面と向かって話をして、それだけでもまだ足りずに不眠症になるまで考え続けて、そして最終的に「ミルコのために何が最善の選択か……」ということだけに軸足を置いて、今回の「決断」に至ったわけです。ミルコのためと『PRIDE』のためにという、同様に見えるようで、じつは相反していた、その両方を同時に実現するのはやはり無理だということを、悩み抜いた末に悟ったとでも言えるのでしょうか……。

――その「ミルコのために一番いい選択」がUFC参戦だと感じた一番の理由は、やはり金銭的な面ですか？

今井　（熟考して）……そういう胸元すれすれの直球のような質問だと、また

UFC参戦によってミルコがMSGのリングに立つという夢が現実的なものになるんです

それをうまくよけられないというか、答えられないかもしれないですが……。もちろんプロの世界ですから、金銭面というのは大きな要素であることは間違いありませんが、今回は決してそれがすべてではありませんでした。それは、ここ一カ月、日本中が注目した松坂大輔とボストン・レッドソックスとの交渉の過程で、途方もない金額が飛び交ったことが大きく報道されたので皆さんも金銭的な部分を連想しやすいだろうし、そう思われるのも仕方のないことなのかも知れませんが……。しかし、松坂選手自身にとっては金銭的な面だけで何がなんでもメジャーに行こうと思ったわけではなく、実際スコット・ボラス（代理人）の意に反して、最初から交渉はボストンの想定していたとおりに運び、契約上の年棒に関しても多少の譲歩はあったにせよ、ボストン側のボールパーク・フィギュア（アメリカのプロスポーツの年棒交渉でよく使われる想定相場という意味）の中で交渉は進められ、契約に至ったわけですからね。松坂選手にとっては、FAまで待って、メジャーに行けば金銭的な面では、本人にとってもっと好条件になったであろうことは容易に想像がつきますよね。でも自分の意志を通して、とにかく「今」、行きたいと決断した。

——そうなんでしょうね。

今井　ボクも松坂君の代理人を務めたスコット・ボラスのインタビューなどを食い入るように見ていたんですけど。金銭的なことはもちろんですが、世界最大のマーケットであるアメリカで、プロとして最大限の評価を受けて、その世界に大きな足跡を残すために行くうえで、いつの時点で行くかということが途方もなく重要になってくる。選手自身しかわからない肉体的なコンディション、精神面での準備、マーケットの成熟度、そういったさまざまな要素が複雑に絡み合う中で、最終的に決断したということですね。

——やはり、マーケットの規模で言うと、現時点ではアメリカ、UFCが一番でしょうからね。

今井　いまUFCの全米PPVの世帯数、それからスパイクTVでの視聴率というのは、確かに目を見張るものがあります。それに対し『PRIDE』は、残念ながら日本国内での地上波の放映が中止になってしまった。そんな中でミルコは死ぬ思いで無差別級GPのチャンピオンになったわけですが、その直後に、長年のボクの友人たちと久しぶりに会ったときに「ミルコどうしてる？」って言われたんですよ。彼らはミルコがあれだけ苦労して、この9月にやっと念願のチャンピオンベルトを巻いたことを知らなかったんですね。べつに物事を知らない人たちではなく、ある程度の社会的な地位もあり、さまざまなアンテナを張っていて、世の中の流れがわかっている人たちなのです。でも、そんな彼らの耳まで「ミルコ、PRIDE無差別級GP優勝」のニュースは届いていなかった……。それは、マネージャーであるボクにとっては、非常にショッキングな出来事だったんです。

——地上波の影響力の大きさを逆説的に物語るエピソードですね。

今井　それと時を同じくして、地上波があった時期に、あれだけいたミルコのTシャツスポンサーが、ホントに木から葉が落ちていくように、一社落ち、二社落ちというかたちで消えていってしまったという現実もありました。その厳しい現実を前に、僕はマネージャーとして無力でしたね。ミルコに対して何もしてあげられなかった。それが、今回の決断に至る前の伏線になってしまったのかもしれません。



まさに4年間、『PRIDE』とともに歩んできたミルコと今井氏（左から二人目）だけに、UFC参戦は大きな決断が必要だったであろう。

——選手が最高のパフォーマンスをしているその時期に、最高の舞台や条件を用意してあげられないというのは、ある意味、マネージャーの〝落ち度〟ということにもなりますもんね。

今井　最高の評価をしてくれるところと交渉・契約をして、選手に最高の活躍をしてもらうというのがもっとも基本的なアスリート・マネージメントのプロとしての仕事ですし、ましてや本当に旬の短い格闘家のマネージメントになると、さっきも言ったように、一日一日が無駄にできない時間になってくる。そういったことを考えると、どうしても「『PRIDE』に申し訳ない」という気持ちと正反対のところで、「UFC参戦」というものを秤にかけざるを得なくなってきた。時の経過、格闘技界を取り巻く周りの状況の急変、その真っただ中での、何度も言いますけど、苦しみ抜いた決断であったわけです。

——そもそもUFCとの最初の接触というのは、いつ頃の話なんですか？

今井　明確にどの時期にアプローチがあって、交渉をスタートさせたかということとか、交渉の経過に関しても、守秘義務があるので話せないんですけど、もともと僕とUFC社長であるダナ（・ホワイト）は知らない仲じゃないんですよ。石井（前）館長から許可を取って、2000年8月から僕がK―1アメリカの代表になり、ラスベガス大会の毎年お盆とゴールデンウイークのレギュラー化を進めたんですが、ちょうどその頃に、ダナ・ホワイト、ロレンゾとフランクのフェティータ兄弟がUFCを買収して、新生UFCがスタートし、それからダナは社長として苦労に苦労を重ねて、UFCを今日の隆盛に導いたんですよね。その頃、僕はK―1ラスベガス大会のプロモーターとして現在のストライクフォースの代表であるスコット・コーカーをスカウトしてきて、一緒にMMAの選手の調査にも動き始めたんです。結果として、その年の12月のK―1東京ドーム大会のスペシャルマッチのために元UFCのチャンピオンであったフランク・シャムロックと契約をしたんですが、そのときにラスベガスで、こちら側から僕、スコット、フランクの3人で、ダナたちに挨拶に行ったんですよ。

——当時からすでにUFCトップと会談を持っていたんですね。

今井　だからまったく知らない仲じゃないんですよ。あれから3年が経過して、ダナは大きなリスクを取りながら、石にかじりついてでもUFCを大きくしようと身体を張って奔走してきたわけで、今日のUFCの大成功を目の当たりにして、僕は以前の石井館長、この数年間のバラさんの功績と同様に、ダナ・ホワイトに対してもプロモーターとしてリスペクトしていますけどね。そして、そのダナがもっとも高く評価していたPRIDEファイターがヴァンダレイ・シウバだったんです。そのシウバが出場していた無差別級GPでミルコが優勝したことで、ミルコにも関心を見せ始めたということです。

——無差別級GP優勝で、UFC首脳のミルコに対する評価が一気に高まったわけですか。

今井　あとは、僕の想像ですけど、PRIDEラスベガス大会のメインイベントで、アメリカ人であるコールマンではなく、ロシア人のヒョードルに大歓声が集まったという事実。それを目の当たりにして、「アメリカ人ではなくても、本当のMMAトップファイターとしてリスペクトされれば、スターに

Mirko CroCop

なるんだ」ということが、ハッキリとわかったんじゃないかと思います。

——でも、そうなるとUFCはミルコより、ヒョードルをほしがるんじゃないですか？

今井 いや、ヒョードルももちろん魅力的なんでしょうけど、UFCがいまもっとも必要としているのは、アメリカのMMAという食物連鎖のチャートの頂点に君臨する男、UFCライトヘビー級王者チャック・リデルのライバルなんだと思いますよ。

——ああ、なるほど。だからこそ、ヴァンダレイをほしがったわけですね。

今井 もちろんです。ヒョードルはヘビー級選手として世界の頂点に君臨する絶対的王者であることは間違いないけれど、チャックのライバルとしては体重が重すぎるでしょう。ところがミルコはヘビー級といっても100キロそこそこで、通常体重はチャックと変わらないでしょう。ミルコはいつもヘビー級では最軽量で、ジョシュやハント、アレキサンダーなど常に15キロ以上のヘビー級体重差規定を超える相手と切磋琢磨してきました。そういう意味では、よっぽどチャックのほうが体格的には近いんですよね。

——では、チャック・リデルvsティト・オーティズが行なわれた12月30日のUFC66はチケットの売れ行き、そしてPPV契約数が過去最高となることが予想されていますけど、それを超えるスーパーカードになりうるものとして、将来的なチャックvsミルコまでUFCは考えているわけですか？

今井 その件については……現在は何も決まっていません。しかしプロモーターとしてそのカードは、狙わないわけはないでしょうね。でも、僕はチャック・リデル戦というスーパーカード以上に、ミルコが現役のあいだに実現させてやりたいなと思っている悲願があるんですよ。

——どんなことですか？

今井 僕もK—1ラスベガス大会を通じてよく知っている人物で、ネバダ州アスレチック・コミッションのエグゼクティブ・ディレクターだったマーク・ラトナーという人がいるんですが、彼が副社長待遇でズッファ（UFCの運営会社）に迎え入れられて以降、アメリカ国内でMMAを正式に認可しようという州が、増えてきているんです。マークはネバダでも非常にリスペクトされていた人物で、その彼がいまはプロモーター側としてニューヨーク州やシカゴがあるイリノイ州、その他MMAをまだ正式に認可していない大都市を有する州に認可に向けての働きかけをし始めているということは、アプローチされる州側からしてもとても説得力のある議論になりますよね。ということは、ネバダ、カリフォルニアに続いて、UFCはニューヨークでの開催も視野に入ってくるわけですよ。そうすると、ミルコをマジソン・スクエア・ガーデンの舞台に立たせてやることも可能になってくるかもしれない……。

——MSGでチャックvsミルコが実現する可能性もあるわけですか！

今井 対戦相手はともかく、MSGで開催されることが現実になったら、MMAの歴史に大きな一歩を残すことは間違いありません。とくにいま、なんとなく日本国内は我々格闘技界に対する視線も厳しいし、とても閉塞感がある。地上波を失なってしまった『PRIDE』。地上波にしがみついて、格闘技そのものの大原則である真剣勝負を大晦日ではとくに顕著に、おおいに希釈（きしゃく）してしまっているK—1。日本がそんな状況にある中で、アメリカに目を向けてみると、そんなビッグプランが現実的なビジョンとして垣間見えてしまったんですよ。だから、ミルコ・クロコップがUFCに参戦することで、アメリカのMMAがさらに発展を遂げて、大きな意味で格闘技界が活性化するのであれば……。

——いまはなんと言われようと、それがミルコからの恩返しになる、と。

今井 う〜ん、恩返しという言葉が当てはまるかどうかはわかりませんが、皆さんも知っているように、ミルコの歴史は、「挑戦」の歴史でした。そしてミルコはいつでも先駆者であって、その気質は絶対に変わらない。そうであれば、ミルコが「挑戦」し続けていくことを止める権利は僕にはない。さらに言えば、ミルコが「挑戦」してきてくれたおかげで、『PRIDE』で最強のライバルたちと死闘を繰り広げたこの4シーズンが現実のものとなったわけです。そしてこのミルコのヒョードル、ノゲイラ、ジョシュ、ヴァンダレイたちとの死闘が、『PRIDE』強いてはMMAのここまでの発展の最大の推進力だったという事実には、誰も異論がないのではないでしょうか？

——それは間違いないですね。だから『kamipro』もこの4シーズン、必死にミルコを追ってきましたから。

今井 そうであれば、やはり彼のやりたいこと、「挑戦」を続けていくことを現実のものとするために、僕のマネージメントが機能していかなければならない。そのタイミングがいましかないのであれば、それに蓋をしてしまう権利は自分にはないな、と思ったんですよ。そう考えたとき、『PRIDE』のスタッフがこの4シーズン、懸命にミルコを支えてくれた顔が本当に思い浮かびましたけど……、立ち止まるわけにはいきませんでしたね。

——ミルコ自身は、UFC移籍についてなんと言っているんですか？

今井 あの、これだけは僕がはっきりと皆さんに伝えておかなければなりませんが、「移籍」という言葉は絶対にあてはまらないですよね。プロの格闘家は野球選手とは本質的に違っていて、これは間違いなく「参戦」ですよ。

——はい。それではミルコ本人は、UFC参戦について、なんと言っているんですか？

今井 ミルコは、この4シーズンにわたる『PRIDE』での闘いを、格闘家として純粋に誇りに思っています。そして、その『PRIDE』での闘いも〝打倒ヒョードル〟という最大の目標を除けば、一通りトップファイターたちと闘い、結果も残したという自負があるんです。だから、PRIDE無差別級GPチャンピオンとして、胸を張ってオクタゴンに立ち、目の前に立ちはだかるすべての相手を倒すことで、『PRIDE』への感謝の気持ちを表わしたいということです。

——ミルコは、その〝打倒ヒョードル〟という大目標を達成していないのに、UFCへ戦場を移すことについては、抵抗は感じていないんですか？

今井 もちろんヒョードルという存在がミルコを『PRIDE』に留めておく最大の理由の一つであり、だからこそミルコ自身も悩んだわけですけど、その去就について悩んでいた真っただ中で「ヒョードル、3・3ボードッグ・ロシア大会に参戦」というニュースを聞いたんですよ。

——ああ。その情報は、いろんなところに出てますよね。まだ不確定ではありますけど。

今井 もちろん本当にヒョードルがボードッグに出場するかどうか現時点では不確定であり、『PRIDE』側も否定していますけど、これは『シャードッグ』（米国の有名MMAニュースサイト）のブレイキング・ニュースとして正式に発表されたものだった。ミルコの去就は「アンダーグラウンド・フォーラム」の中で、毎日のように未確認情報として書きたてられてきたことでしたが、『シャードッグ』の編集長のジョシュ・グロスが何度も僕にメールと電話で聞きに来ましたし、またそれを僕が否定しているあいだは、彼もメディアとして、正式には書かなかった。書いたとしても、それは憶測記事としての扱いだったわけです。ところが、ヒョードルの記事は、取材者としてジョシュが記名してましたからね。単なる〝噂〟では片づけられない。ミルコにとってヒョードル戦というのは、お金の問題を超えた大切なものだったんですけど、そのことを僕に聞いて、「なんだそういうことなのか」と、覚めた現実を見てしまったようですね。

——でも、『シャードッグ』にも間違いはあるでしょうし、そんな不確定な情

報を鵜呑みにしてしまうのは危険じゃないですか？

今井　それはもっともなことですけど、僕のところにもボードッグから凄い勢いで電話が来てましたから。

――UFCだけでなく、ボードッグからもオファーがありましたか！

今井　ここ数カ月、ミルコへのオファーというのは、もう極端に言えばすべてのプロモーションからありました。8月に噂になったWFAだけじゃなく、IFLからもあったし、2月から米国ケーブルテレビの大手『ショータイム』と組んでMMA興行を始める『プロエリート・インク』からもあったし。そしてボードッグからはハッキリと「ヒョードルはボードッグに参戦します。ミルコにもぜひ来てほしい」と言われましたから。

――じゃあへんな話、ミルコvsヒョードルがボードッグで実現なんていう可能性もあったわけですか。

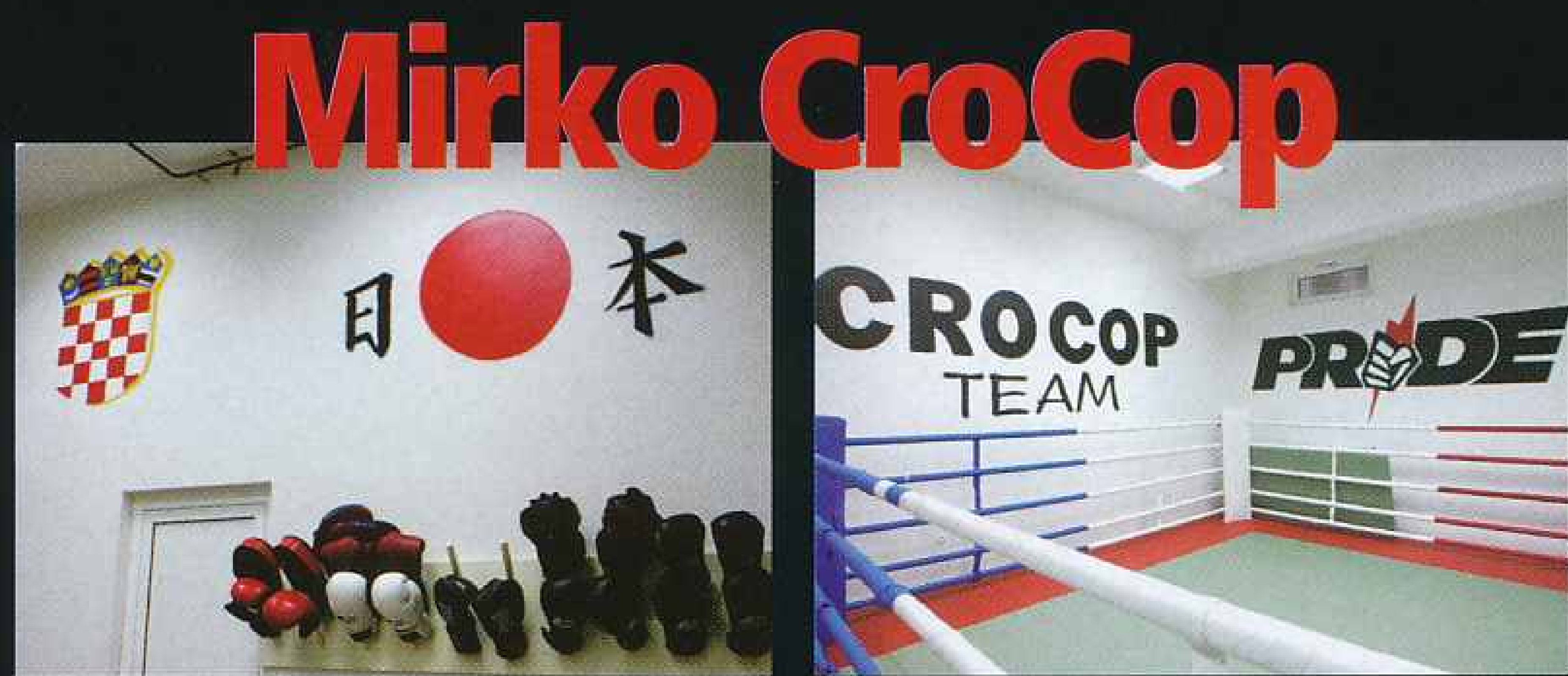
今井　でも、どれだけお金を積まれても、ボードッグに行くという選択肢はミルコにはありませんでしたね。いくらお金を積まれても『イノキ・ボンバイエ2003』には出なかったということと同じで、ボードッグに行くのであれば、『PRIDE』に対する思い入れが間違いなく勝ったと思うんです。ミルコはきちんとしたプロモーターが、きちんとしたプロモートをすることで闘う場ができて、それがきちんとメディアに乗ってファンのもとに自分の闘いが届けられる。その大きなパッケージを非常に大切にとらえていますから。だから、お金だけ積まれても、まるっきり歴史がなく、ビジョンもはっきりしないところに行くという選択肢はなかったんですよ。

――いやぁ、それにしても未遂に終わったとはいえ、ボードッグがホントにミルコ獲得にまで動いていたというのは恐ろしいですね。

今井　どこから聞いたのか、僕のケータイに直接連絡がありましたからね。その都度、バラさんには「こんな電話がかかってきました」ということは、かなり早い段階から伝えていたし。バラさんからは「ヒョードルがボードッグに行くことは絶対にない。大丈夫だから」と言われていたんですけど、周辺の状況を考えると、その発言だけをそのまま真に受けて、なんの対策も立てないというのも、マネージメントを預かる者として、生きた情報を正確に収集するという能力を問われることにもなりますからね。

――逆に『PRIDE』でヒョードルvsミルコが実現するかどうかということも、その時点ではあまりにも不確定要素が多かったということですね。

今井　そうなんです。それぐらい、いまの格闘技界というのは何が起こるかわからない。そんな中で、逆風の中、必死になっている『PRIDE』には本当に頑張ってほしいし、心からを成功することを願っています。もしかしたら、「裏切って出て行くおまえらには、そんなことを言われたくない」ぐらいの厳しい声もあるかもしれないし、あればそれはそれで耳をふさがずに正面から受け止めたい。そして、マネージメントをしている僕は、どう言われようとかまわないけれど、ミルコが本当に、心から『PRIDE』に対する思い入れから悩みに悩んで、苦しい眠れぬ夜を過ごしたことだけは、皆さんにもわかってほしいと思います。そこだけは本音として、日本の格闘技ファンには聞いてもらいたかった。それが僕が今回のインタビューを受けるかどうか悩みながらも受けることにした大きな理由ですから。そんなお金や条件というだけじゃなく、もの凄く多くのことが、ボクとミルコの頭の中を駆け抜けていったことを聞いてほしかったんですよ。



ミルコの自宅地下にあるジムには、ご覧のように『PRIDE』のゴロマークと日の丸が大きく描かれている。これを見てもミルコの思いがどれほどのものかわかるだろう。

――そういったことがありながら、正式にUFC参戦が決定したいま、ミルコ自身はもう気持ちの入れ替えというのはできているんですか？

今井　もういまは、きっちりとギアチェンジができています。ミルコはプロのファイターですから、試合が決まったら、もうそこから逆算して、いま自分が何をすべきかしか考えてませんね。戦闘モードに入っているし、完全にトレーニングに没頭しています。

――これまでと違うルールで、初めて金網の中で闘うわけですから、ほかのことは考えてる場合じゃないですよね。

今井　今回のUFC初参戦は、ルールが違うというだけでなく、ミルコにとっては初めてアスレチック・コミッションというプロモーターではない公的機関に試合に関する権限がゆだねられる中で闘うことになるんですよ。そうなると細かな点で、『PRIDE』で闘っていたときと違う状況というのがたくさん生まれてくる。たとえば、いまミルコが心配しているのは、「これまで俺がしてきたバンデージの巻き方が認められるのかどうか」なんですよ。UFCのグローブのほうが『PRIDE』グローブより薄いわけですから。これでバンデージがちゃんと巻けなかったら、拳が折れてしまう。

――ああ、そういった違いというのも、選手にとっては重大なことですよね。

今井　だから、そのためにもうバンデージをネバダに送ってあるし、ミルコの主治医であるドクター・ブーチャンにも「ミルコのパンチ力からすると、これぐらいのバンデージを巻かなければ骨折する危険が増しますよ」というレターを書いてもらったんです。

――となると、今回のUFC参戦というのは、ミルコにとってはリスクの大きいチャレンジなんですね。

今井　そうですよね。単純に闘いの場を移すというだけじゃ、片づけられないことが数多くあるんです。

――しかも、これだけキャリアと名声がある中で、新しいルール、新しい戦場にチャレンジするわけですから。

今井　でも、それがミルコ・クロコップなんですよね。思えば4年前も、人気絶頂だったボブ・サップをKOした直後という、K-1に残っていれば、もっとも大切にされて、わがままを言えるであろう立場を捨ててまで、あえてブーイングを受けるに違いない“敵地”だった『PRIDE』に乗り込んで、しかも一発目に当時のヘビー級ナンバー3だったヒース・ヒーリングと闘ったんですからね。やっぱりあえて、イバラの道を選んできてるんですよ。

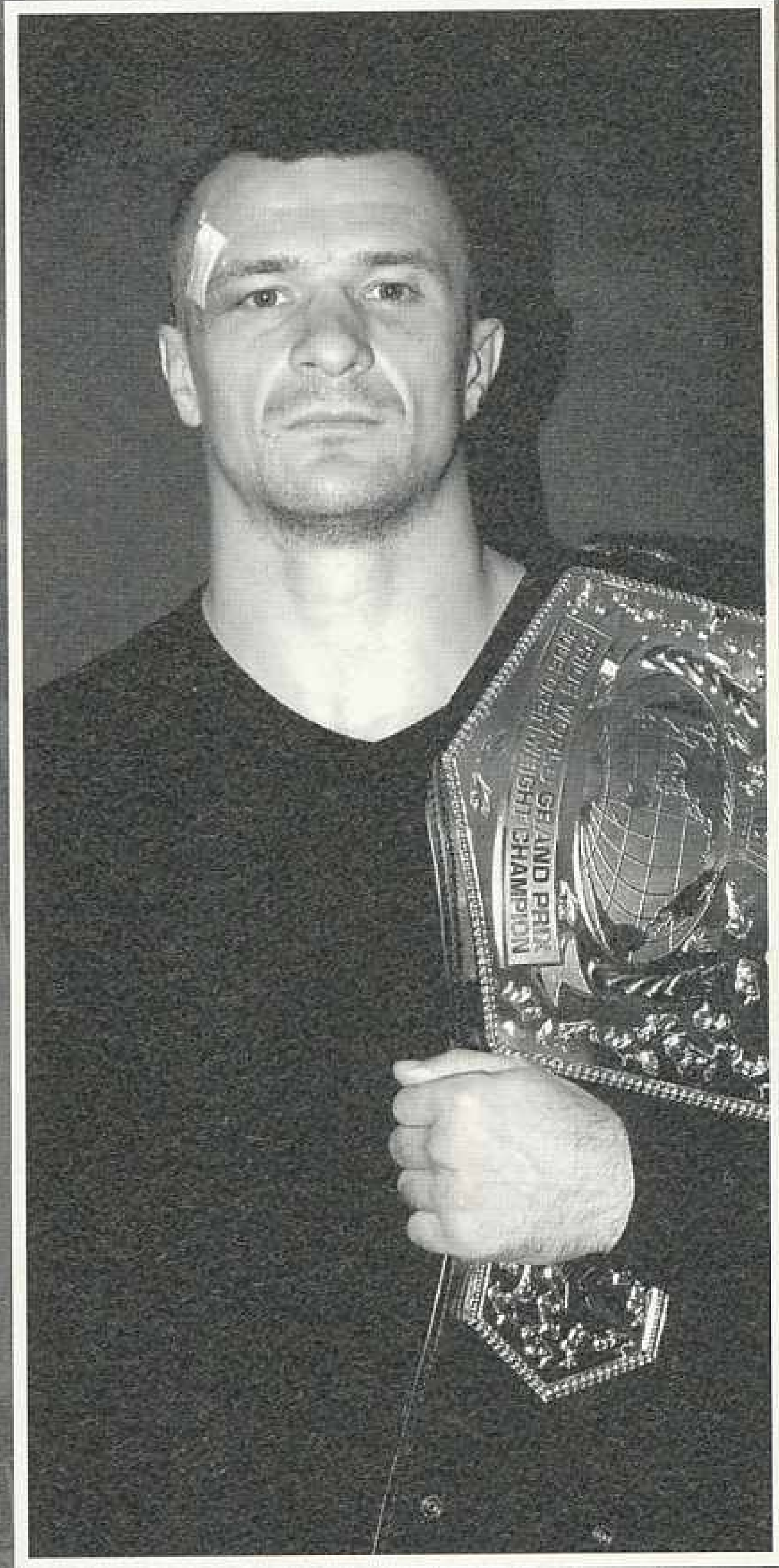
――だから今回のUFC参戦に関しては、いろんな意見があると思いますけど、ミルコが悩んで決めたことですし、榊原代表も言ってましたけど、決まったからには全力でミルコの新たな挑戦を応援したいと思いますよ。

今井　ありがとうございます。さっきも言いましたけど、今回、UFC参戦を最終的に決断したあと、ミルコにも話したんですよ。「UFCに行くことで、これまで応援してくれた日本のファンに『裏切り者』と呼ばれるかもしれないよ」って。そしたらミルコは「俺は何も言い訳するつもりはないし、言い訳する立場でもない。俺は闘うだけだ」って言ってましたね。だから、日本のファンに対して「これからも応援してください」とはあえて言いません。でも、ミルコの闘い、ミルコの生き様は観てやってほしいと思います。ミルコはいつでも言葉ではなく、闘いで答えを出してきた男ですから。

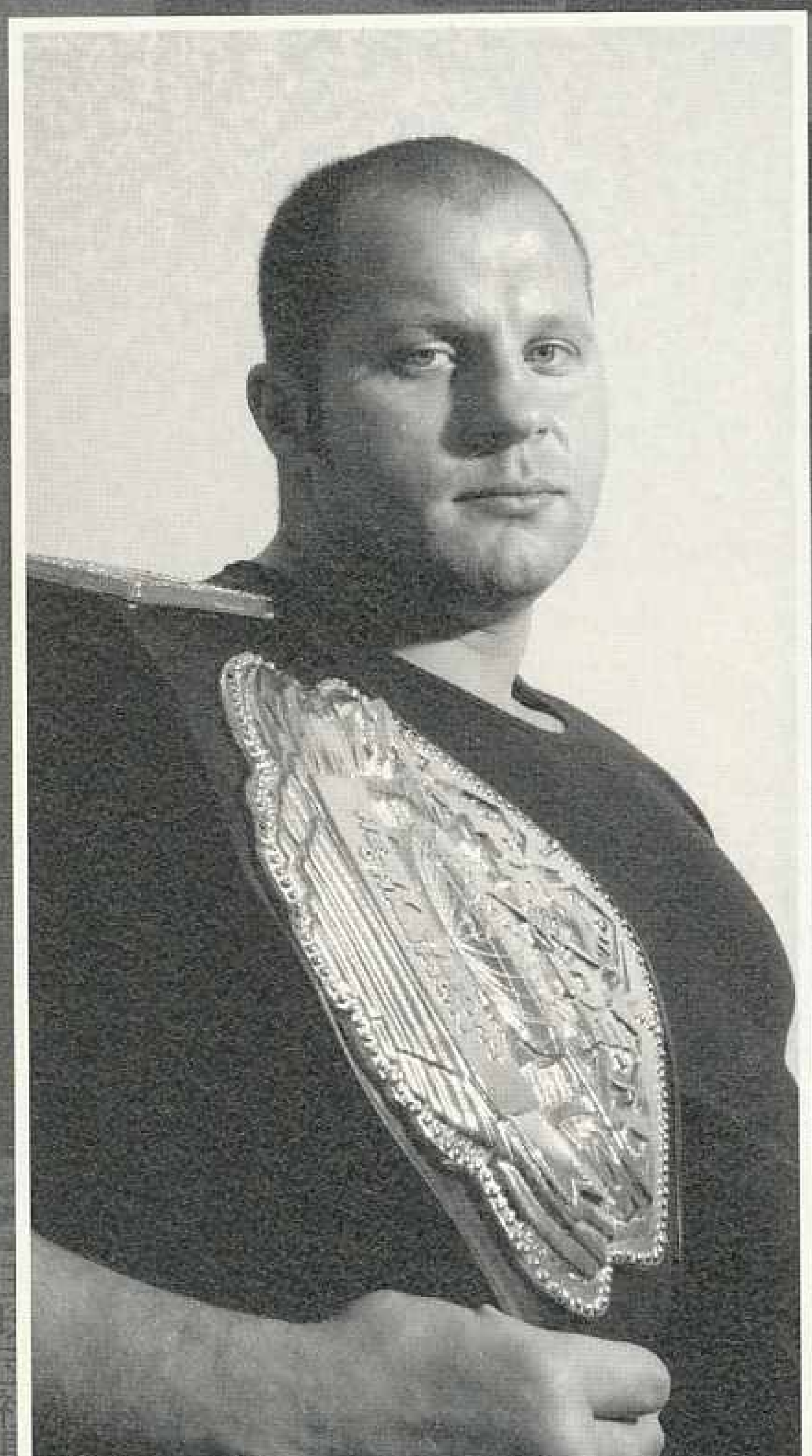
――わかりました。まずは2月3日、ミルコの生き様、UFCでの闘いぶりを観させていただきます！

【07年1月1日／都内・某所にて収録】

トップアスリート海外流出時代突入！
日本格闘技界が取るべき選択とは何か？



このままでは日本はアメリカに
〝二度目の敗戦〟を
喫してしまう！



憂国の“シーラカンス”哲人が斬る！

堀辺正史！

（日本武道傳骨法創始師範）



MMA市場の急激な巨大化によって、アメリカで選手のファイトマネーが高騰。それによるトップファイター流出危機に見舞われているPRIDEマット。はたして『PRIDE』はこの危機をどのようにして乗り越えたらよいのか？　おなじみ骨法の堀辺師範が斬る！　聞き手／堀江ガンツ

PRIDEにとって本当の敵はUFCではなく、アメリカという巨大国家なんです！

—先生！ 今日は〝PRIDEの危機〟について、その打開策はないものかと思ってお話をうかがいに来たんですよ。

堀辺 『kamipro』（No.106）の榊原社長インタビューを私も読ませてもらいましたけど、凄いことになってきてますねぇ。

—そうなんですよ。これは格闘技界だけじゃなくて、プロスポーツ界全体の問題だと思うんですけど、象徴的な出来事としてはプロ野球の松坂大輔や井川（慶）が大リーグに（複数年契約で）何十億というお金で移籍していってますよね。

堀辺 地方自治体の一年間の予算の話をしてるのかと思ったら、野球選手一人の年俸の話だったので私も驚きました（笑）。

—日本で育てられたプロスポーツの選手がどんどん海外に流出している状況なんですけど。UFCなどアメリカの格闘技市場が急激に熱を帯びてきて、それがいよいよ格闘技界にもおよんできたんですよ。

堀辺 ついに来たって感じですね。でも、もともとその予測はあったんですよ。なぜかというと、一番の問題点は有料放送、いわゆるPPVの世帯数が日本とアメリカでは根本的に違うということですよね。アメリカの人たちはそういうものにお金を払って観る習慣がずいぶん前から普及していて、スポーツを有料で観るということがもうあたりまえになってるんですよ。

—観たいものにはお金を払うという。

堀辺 ところが日本では地上波が圧倒的だから、視聴者はお金を払って観るという習慣がそもそもない。

—テレビはタダであたりまえという認識ですよね。

堀辺 しかも、単純に日本国民とアメリカ国民の数が違うのと、有料放送を観られる環境にある世帯の数が、もう桁違いなわけですよ。だから数年前からボクシングの世界戦なんかでは、マイク・タイソンが一試合で何十億円のファイトマネーを得ていましたけど、格闘技もいつかはそうなるんじゃないかと思ってましたよね。

—それがいよいよ来ちゃったわけですよね。こうして日本にいるより、アメリカで闘うほうが何倍も稼げるようになると、これからトップファイターの流出は避けられないと思うんです。そうなったいま、日本のスポーツ界や格闘技界は、どうやって生き残っていったらいいのか、というのが今日のテーマなんですけど。

堀辺 まず、そもそもの話をすると、日本という国では、スポーツでお金を稼ぐ、お金のためにスポーツをするということが、悪いとは言いませんけど、あまりよくは思われてなかったんですよね。だから、いままでも高額年俸で移籍したりすると、イメージがよくなかったりしますよね？

—「アイツは金で動いた」とか言われますよね（笑）。

堀辺 そうなんです。ある意味、軽蔑されたりするんですよ。でも、欧米では逆なんですよね。高額年俸で引き抜かれると、みんなが賞賛するんですよ。「おまえ、よくやったね」って。

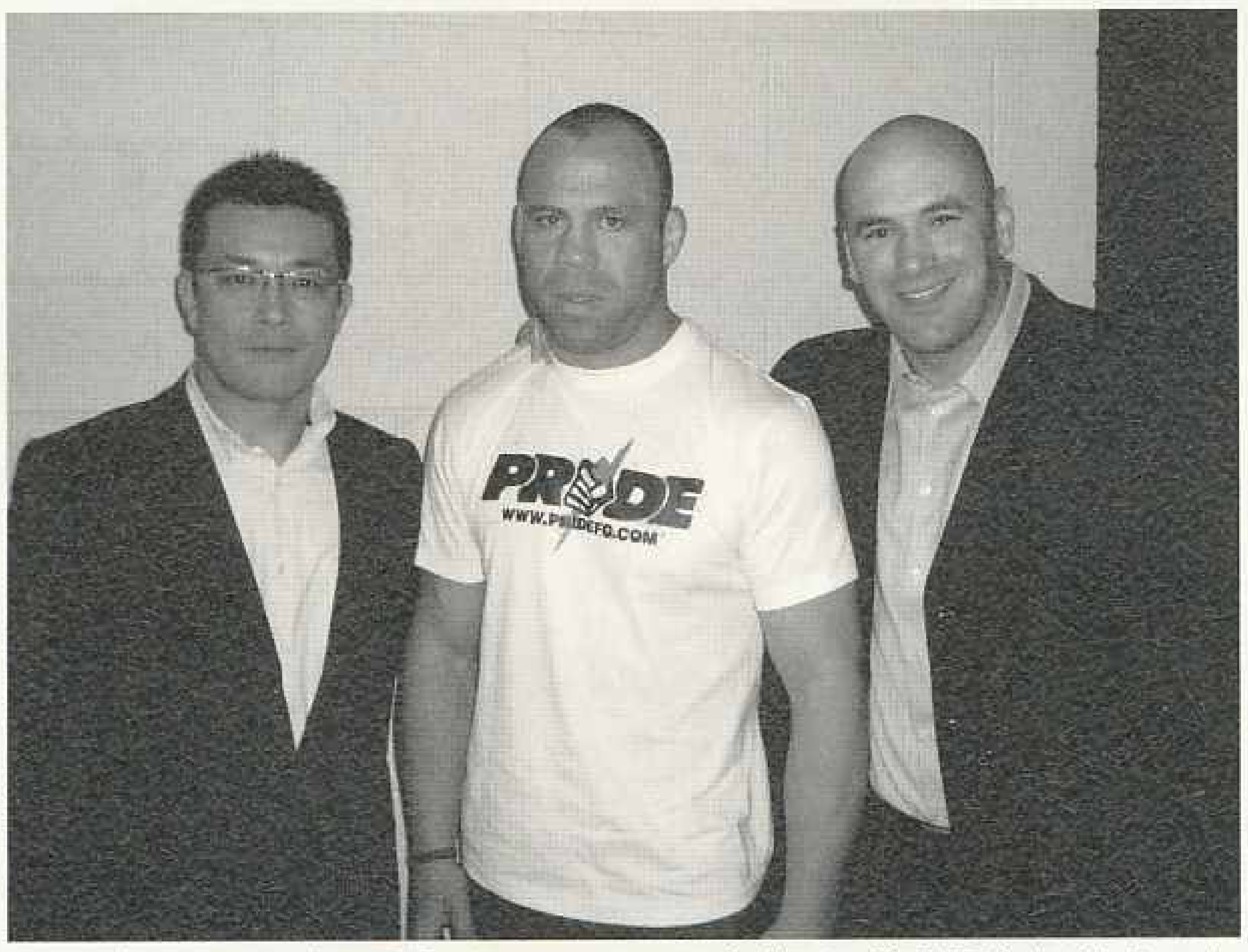
—まさに資本主義ですよね。

堀辺 だから日本なんかでは、戦前はプロ野球のことを「職業野球」って呼んでたんですけど、その職業野球より早慶戦のほうが人気があったんです。

—当時はプロ野球より大学野球のほうが人気があったんですか。

堀辺 なぜかというと、昔は職業野球に対して「スポーツを見せものにするのか？」「野球というスポーツを金儲けに使うのはいかがなものか」と言われていたんですね。だから「職業野球」という言葉の中には、じつは蔑視が含まれていて、かつてプロ野球を日本に根づかせた人たちというのは、そういう偏見と闘ってきた過去があるんです。

—なるほど。もともとはアマチュアスポーツこそが崇高なもので、それを汚すものがプロスポーツだった、と。



ヴァンダレイがオクタゴンに登場した、7.8UFC61のバッグステージで実現したスリーショット。
今後、『PRIDE』とUFCが協力して、本当の総合格闘技世界組織になることはあるのか？

堀辺 そういう考え方だったんですよ。でも、野球はプロスポーツの本場であるアメリカから日本に来たものですから、そういう偏見はわりと早く克服できたんです。ところが格闘技というのは、野球なんかと比べものにならないくらい、お金のためにやってはいけないという考えが強かった。やはり日本には、柔道や剣道といった武道を特別な愛情を持って育んできた歴史があるんですよね。しかもそれが武士道という価値観で結びついていた。だから、たとえば大山倍達総裁時代の極真空手の修行なんかを見ると、滝に打たれながら正拳突きをしたり、雪の上を裸足で駆けたりとか、まるで宗教の行（ぎょう）のようですよね。

—ホントに苦行ですよね（笑）。

堀辺 彼らはあの厳しい修行をすることによって、たくさんお金がもらえるファイターになろうとは思ってないんですよ（笑）。

—お金のために苦行しようとは思いませんもんね（笑）。

堀辺 まさにそれに象徴されるようなかたちで、日本の格闘技というのは、「金じゃないんだ。自分自身を高めるために修行するんだ」という伝統と強く結びついていたんです。極端に言うと、自分自身を変えて、社会になんらかのかたちで貢献すると。そういう江戸時代の価値観が、明治以降になってもまだ残っていたんですね。

—格闘技でも、ボクシングとかプロレスなんかは欧米から来たものですけど、総合格闘技には、とくに日本の武道的価値観が色濃く残ってるんでしょうね。

堀辺 そうなんですよ。武道を志す人は、昔から金に手をつけず、男の強さを磨くと。仮に道場間でいざこざがあっても、男と男の誇りを懸けて、「ウチの流派をけなすんだったら、どこかで一丁やるか？」という感



リング上では冷酷な格闘マシーンと化すミルコも、愛息イヴァン君の前では、こんな表情を見せる。ミルコもPRIDEファイターである以前に“パパ”なのだぁ!!

このままでは日本はアメリカに二度目の敗戦を喫してしまう!

じで、〝果たし合い〟みたいなかたちでやっていたわけですよね。「せっかく闘うなら、そこに観客を呼んで、ついでに金儲けしよう」ということはなかったんです。

──だからか、以前行なっていた骨法の総合乱取りトーナメントでは、優勝商品がスイカ一個とかでしたよね(笑)。

堀辺 そう。あれだって、私の弟子たちはスイカがほしくて、なんでもありで闘ってたわけじゃないんですよ。

──さすがにスイカのために命は懸けませんよね(笑)。

堀辺 だから賞状とかトロフィーとかスイカは単なる勝った証でしかないわけであって。それより困難を克服して勝ち抜いた満足感と、周囲から尊敬される誇らしさが大事だったんですよね。そして、じつはそういった武道の価値観というのは、ほかの国の選手たちも憧れていたんですよ。だから、外国人選手の中には、漢字で彫りものをしてる人がたくさんいますよね。彼らにとっては、日本で闘うこと自体が非常に名誉なことなんですよ。だからこそ、日本で総合格闘技が発展したとも言えるんです。

──とくにブラジリアン柔術家は、そういったことを言う人が多いですよね。

堀辺 だから、私がよく口にする〝マスリング〟、つまり『PRIDE』やK−1といった巨大格闘技イベントが日本に誕生して、世界中のトップファイターが集ったのは、ファイトマネーが良かったということだけじゃないと思うんですよ。日本の『PRIDE』で闘うこと自体が誇りだったんです。あとは日本が経済大国だったということも大きな要因ですよね。近代的なメディアが高度に発達して、テレビでその模様が世界中に放映された、と。とくに日本のテレビはエンターテインメント性の高い、凝ったものを作りますからね。そして放送が終わったあとでも、駅に行けばスポーツ紙でデカデカと報道されているし、さまざまな格闘技雑誌もあり、専門的な立場から詳しい報道もする。そういうこともすべて日本に経済力があるからできるんですよね。会場に行って、高いチケットでも買う。雑誌もどんどん購読する、と。先ほど言った伝統的な部分と、この経済力の二つがK−1や『PRIDE』というマスリングを支えてきたんですね。

──なるほど。一企業という枠を越えて成立していたんですね。

堀辺 そうなんです。だからハッキリ言って、K−1も『PRIDE』もこれまでは「ウチの会社がやってるんだ!」という意識がありすぎた。いま言ったような観点を忘れていたツケが回ってきたんだと思うんですよ。榊原社長の「K−1と対抗することよりも、もっと根本的な危機が来てる」という発言は、一企業で解決できる問題じゃないと気づいたから出てきたんです。『PRIDE』にとって本当の敵はUFCではなく、アメリカという世界一の巨大国家なんですよォォォォ!

──敵はUFCではなく、アメリカ国家!

堀辺 日本はアメリカと戦争をやって負けましたけど、あれはアメリカの経済力、生産力に負けたようなもんですよ。決して兵隊一人一人の力が弱かったわけじゃない。もちろん作戦の失敗や見通しの甘さはありましたけど、一番の敗因はトータル的な国力の差ですよ。それが日本はアメリカの10分の1ぐらいしかなかった。格闘技界でも、いままさにそれと同じことが起きてるんですよ。

──PPV収益のことを考えると、ホントにそれぐらいの差はあるでしょうね。

このままでは日本はアメリカに〝二度目の敗戦〟を喫してしまう!?

堀辺　だからこれはもう『PRIDE』とUFCの闘いだとか、榊原社長とダナ・ホワイト社長の闘いなんかじゃなく、国力の戦争なんです。一企業の経営能力うんぬんとか、そういうレベルを超えちゃってるんですよね。それが榊原社長が言う、根本的な危機であって、自分の会社で頑張ればなんとかなるという状況じゃないわけですよ。

――戦争にたとえると、〝榊原部隊〟がたとえ優秀だとしても、それだけじゃどうにもならないってことですよね。

堀辺　太平洋戦争のとき、硫黄島で指揮を執った栗林（忠道）中将じゃないですけど、穴の中に潜って徹底抗戦して、長引かせることぐらいはできるけど、いくら頑張っても向こうはどんどん援軍が来るわけですよ。軍艦は来るは、飛行機は来るは、撃っても撃っても追いつかない。単純に数が圧倒的に違うんです。

――しかも、『PRIDE』の場合、フジテレビに切られて〝食料調達〟すらできなくなったわけですから。まさに日本政府から見捨てられた硫黄島状態ですよね。

堀辺　だから事実としてハッキリ言えば、『PRIDE』もK―1も勝ち目はないんですよ（キッパリ）。

――う～～ん、やっぱりそうですか……。

堀辺　これまでは伝統的な格闘技が尊敬されたこともあって、トップファイター争奪戦という面で日本がリードしてきましたよね。でも、桁違いの国力を持つアメリカにそれが移ってしまった。これはハッキリ言って革命が起きたんですよ。

――そうなると、やはりプロ野球の松井（秀喜）やイチロー、松坂らがメジャーに行ってしまったように、PRIDEトップファイターがUFCに流出することは避けられませんかね。

堀辺　これは避けられないですね。たとえばヒョードルに莫大な金額が提示されたら、「いや、私は『PRIDE』でお世話になってきたから」という気持ちをたとえ抱えていたとしても、彼は選手である前に一家の親父なんですよ。

――エメリヤーエンコ家の家長ですよね。

堀辺　だから親父として妻、子どもにいい思いをさせたいという気持ちが働くはずなんです。そしたら決断は明らかですよ。家族に喜ばれるほうを選択しますよ。

――まあ、そうですよね。逆に言えば、格闘家としてのこだわりで大金の提示を蹴って残ったりしたら、それはそれで親父失格ということですよね（笑）。

堀辺　そう。親父のエゴになっちゃうんですよォォォ！　だから、ミルコにしてもヒョードルにしても、心の中では、自分を育ててくれた日本マットに愛着があるのはもちろん想像するまでもないことですよ。でも、現実に大金を積まれたときにはかわいい妻子の顔が浮かぶはずなんです。決断するまでいろんな悩みはあったとしても、実際には大金を取りますよ。ということは、他の選手もみんな同じになるんですよ。

――そのジャンルを象徴する人が一度やったら、もう道ができてしまうわけですよね。

堀辺　そうなんです。野球でもいまは、大金をもらって移籍することを国民が許してるんですよね。でも、何年か前までは「たしかにおまえの技術は素晴らしいけど、日本の球団で育ててもらったんだから最後まで尽くすべきじゃないのか？」という空気というか、圧力があったと思うんですよ。

――野茂（英雄）が最初に大リーグに行ったときは、バッシングもありましたよね。

堀辺　そう。まだ10年ぐらい前まではあったんですよ。でも、いったんその人が活躍してしまえば、「まあ、それも道だったんじゃないか」ということに変わりますよね。だから、いま松坂投手のことを「裏切り者」と言う人はいないでしょ？

――ほとんどいないですよね。

堀辺　そういうことなんですよ！　だから、ミルコやヒョードルがUFCに移籍したら、最初は「裏切り者」と言われるかもしれませんけど、彼らが向こうで活躍すれば、そういう声もなくなってくるんですよ。

――選手流出は避けられないからこそ、ファンも納得して純粋に応援するしかないんでしょうね。

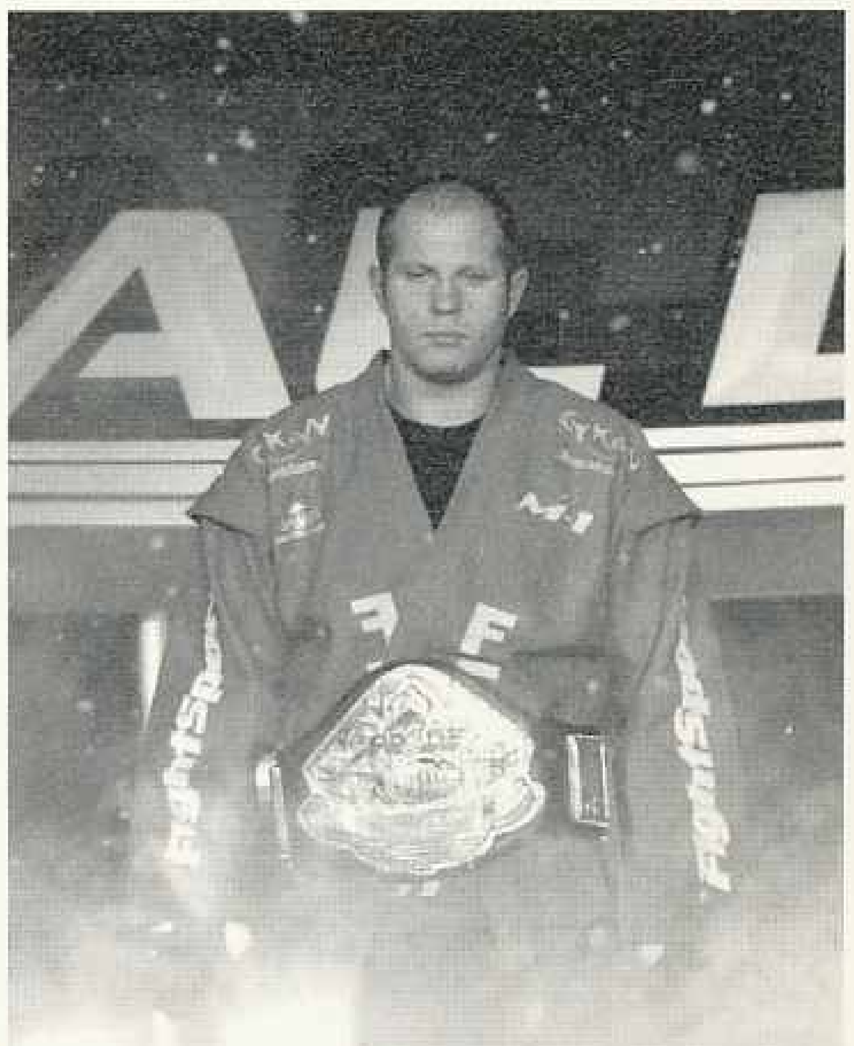
堀辺　そう、こればっかりは避けられないんです。私もかつて興行をやって、飯を食えない格闘家たちをいかにして食えるようにするか、真剣に考えたりもしました。でも、金銭によって移籍が自由に行なわれる世界では、私が大切にしている武道の価値観を築けない。その歯車の中に入ったら、すべて破壊されてしまう。そう思ったので、私は資本主義的、商業主義的な興行はやめようと決断したんですよ。お金ですべてが運営されていく、選手が一円でも高いところへ移るということは、格闘技の世界であってほしくないというのが私の考えですから。でも、私の考えは江戸時代のシーラカンスの考え方であって、現代格闘技界の活性を考えたときに、それは必ずしもいい方法とは言えない。じゃあ、別の道はないのか？　と考えたときに、ボクシングが一つのヒントを与えてくれると思うんです。

――ほう。ボクシングですか？

堀辺　ボクシングは世界中で行なわれていますよね。どこの国でも大なり小なりプロ興行があって、その上にWBAやWBCといった大きな組織があります。ホントの意味でインターナショナルですよね。だから総合の世界もボクシングのように、WBCと日本ボクシングのような関係が築ければ、その国力の差もちょっと違ってくるんじゃないかと思うんですよ。

――要はUFCの加盟団体のようなかたちになることも選択肢の一つじゃないか、と。

堀辺　そうです。最初は軍門に下った感じがして、嫌かもしれない。でも、UFCを真の世界統一機構のように作り替えることが可能であれば、あえてそういう中に入って、新しい世界を作ってもいいんじゃない



先の10.21PRIDEラスベガス大会でも、サンビストとしての誇りを胸にサンボ着を着用して“アメリカデビュー戦”のリングへ向かったヒョードル。これはヒョードルがサンボに特別な価値観と誇りを抱いている証拠だろう。

硫黄島での栗林中将と同様、榊原社長も徹底抗戦はできても戦争には勝てない！

かと思うんですよ。

—それは、総合格闘技というジャンルのことを考えると、発展につながるかもしれませんね。

堀辺　幕末の日本でも同じようなことがあったんですよ。かつて藩を潰した幕末の志士たちは、じつは下級の侍ばっかりで金がなかったんです。家老とかは1万石ぐらい持ってるけど、日本を変えた志士たちはせいぜい30石とかね。

—そんなもんだったんですか（笑）。

堀辺　そんなもんですよ。でも、このまま藩にいても発言力がない。じゃあ、どうするか？　となったときに、殿様より偉い価値観を持ち出してきたんです。つまり天皇を担ぎ出してきた。そうなると、殿様も頭を下げざるを得ないんですよ。

—なるほど。それまでの武家社会とは別の価値観を創り出したわけですね。

堀辺　そうなんです。金には金で対抗できなくても、価値観によって一気にひっくり返ることもあるんですよ。さっきの話に戻れば、『PRIDE』もPPVの規模の違いがあって、お金ではUFCに逆立ちしてもかなわない。でも、そういうかたちでイニシアチブを握ることも可能なんです。

—幕末の志士たちが、藩を潰して新政府で力を発揮したように、UFCと協調路線でやっていきつつ、日本独自の価値を築いていく、と。

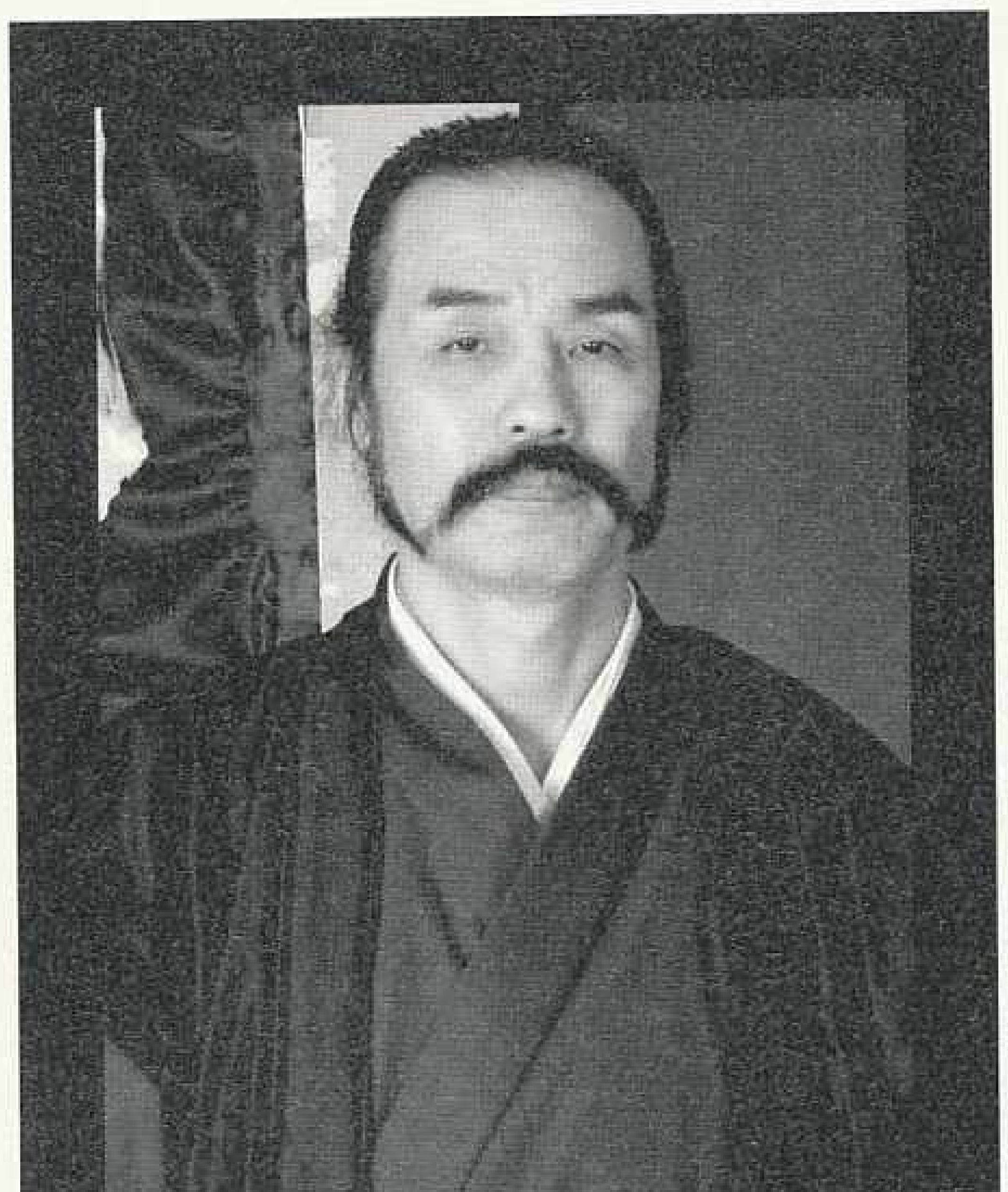
堀辺　そういう意味では、『PRIDE』も現代のオリンピックに近いようなかたちで、武道のいい側面を取り入れた興行が必要だと思うんですよ。私はそれを〝武道ピア〟と呼んでるんです。

—ブドーピアですか？

堀辺　ええ。西洋のオリンピアに対抗することのできる、日本発の武道のオリンピア。つまり、ファイトマネーはUFCよりもらえないけれど、ファンや世界の人々に「『PRIDE』で勝った選手こそ真の格闘家だ」と思わせるような価値観を構築することが必要なんですよ。私が以前興行をやったときも、そういう選択肢が頭にはあったんです。ボクシングやプロレスという西洋伝来のものとは違う、日本人の価値観。武士道をいかに体現してるかということを競い合って、現代のサムライというものを世界に発信する、と。でも現状の私ではできなかったので、旧来の武道のかたちをとったんですけど。この武道ピアの構想は『PRIDE』さんが本気になればできるはずなんですよ。これまで私はそれとなくヒントになる発言は『Kamipro』さんを含めてしてきたつもりなんですけど。

—あ、そうでしたか（笑）。

堀辺　それでも受け止められていないということは、さっきも言ったように「この会社は俺たちのものだ」という思いが強すぎたからだと思うんです。今回起こった危機は何を表わしているかというと、もっと日本人らしく公共の精神に基づいたものを打ち出すべきだということなんですよ。



ほりべ・せいし■1941年茨城県水戸市出身。50年に渡る命懸けの求道の末、全局面打撃制koppoを創始。格闘技・武道評論の第一人者として本誌や『わしズム』などでも活躍している。

PRIDEはお金で勝ち目がないのなら お金以上の価値観を構築するしかない！

—そういえばヒョードルは、総合格闘技の世界王者でありながら、「自分はそれ以前にサンビストなんだ」っていう意識が強くあって、そっちの誇りのほうが上なんですよね。だから総合は莫大なファイトマネーじゃないと出ないのに、コマンドサンボの大会にはノーギャラでも出るという（笑）。

堀辺　だから『PRIDE』も、そういう価値観を作れるかどうかですよね。お金で負けたときは何で勝負するかといったら、価値観で勝負するしかないんですよ。アメリカのUFCと違って、金銭で換算できないようなものをやる、と。そしたら、日本のファンが一番最初にこれを理解してくれる。なぜかと言ったら、日本は武士の国、武道の国だから。そういったものを打ち出したら、まず日本人が熱狂しますよ。「俺たちはUFCなんか観なくてもいいよ。武道ピアを体現する『PRIDE』を観に行こう」と。それが日本で爆発したら海外からも取材が来ますよ。

—その価値観は世界で通用しますか。

堀辺　だって、世界中の人は『ラストサムライ』を見て、感動しているわけですから。『PRIDE』はリング上で『ラストサムライ』の価値観を再現してほしい。日本はそれだけの歴史を有してる文化国家なんだから、いくらでもそれができるはずなんですよ。

—武士道の価値観をリングでよみがえらせることが必要だ、と。

堀辺　そうです。93年にUFCの第一回大会が行なわれたとき、私が〝なんでもあり〟という試合形式を「よし」としたのは、「これを否定したら武道を標榜することはできない」と思ったから肯定したんです。しかし、いまの総合格闘技は「武道の価値観を再生する、サムライをこの世の中にもう一度再生する」という究極の目的を忘れてしまった。それが巡り巡ると、アメリカ的な「金でひっぱたかれたら終わり」になるんです。そうなると、また日本は再び〝敗戦〟するわけですよ。戦争に続き文化の面で敗戦を喫すると。これはもうやめてほしいね！

—このままだと、日本はアメリカに二度目の敗戦を喫してしまう、と。

堀辺　私は敗戦を二回も見たくない！　今度は勝ってほしい！　だからプロ野球の選手がアメリカにどんどん流れているのも、これは私から言わせれば敗戦ですよ。お金というのはもの凄い力を持ってますけど、お金がすべてじゃない。それがすべてだったら芸術の世界は成り立たないですよ。お金に対抗できるのは、価値観、哲学なんです。これがなかったら、資本があるほうの勝ちですよ。だから私は『PRIDE』やK-1に言いたい。「いまこそ哲学を持て！　独自の価値観を構築しろ！」と。これが今回の結論ですね。

【06年12月22日／東中野・骨法武術館にて収録】

この大津波が
格闘技界を襲う！

日本の至宝が海外大流出!!



松坂130億!! 昨年末、米レッドソックスが西武の松坂大輔をポスティング・システムで落札し、その金額の大きさが世間を騒がせた。その落札金額は約60億円で、年俸は6年総額最大約70億円。落札金と年俸を合わせると、レッドソックスが松坂に投資した金額は、なんと約130億円（!）という巨額のものに。その後も阪神の井川慶がヤンキースと5年総額約23億6000万円で契約するなど、日本野球界ではメジャーリーグへの人材流出が止まらない。一方、格闘技界でも、アメリカでUFCが急成長を遂げ、そのブームを背景に新興団体が乱立。選手補給のため、日本で名を挙げたスターたちに触手が伸びている。"世界最高峰の舞台"日本は、選手流出を防げるのか？

構成／上杉秀人

放浪中の中田ヒデに移籍金60億円の松坂……ニッポンの才能が国外流出!!

選手名	ジャンル	日本での所属	海外移籍先	移籍前の年俸	移籍後の年俸
井川慶	野球	阪神タイガース	ニューヨーク・ヤンキース	2億2000万円	約4億7200万円
井口資仁	野球	福岡ダイエーホークス	シカゴ・ホワイトソックス	2億4000万	約2億7440万円
イチロー	野球	オリックスブルーウェーブ	シアトル・マリナーズ	5億3000万円	約4億8000万円
入来祐作	野球	北海道日本ハムファイターズ	ニューヨーク・メッツ	7000万円	約8600万円
岩村明憲	野球	ヤクルトスワローズ	タンパベイ・デビルレイズ	2億1600万円	約2億1600万円
大塚 晶則	野球	中日ドラゴンズ	サンディエゴ・パドレス	9500万円	約1億1100万円
岡島秀樹	野球	北海道日本ハムファイターズ	ボストン・レッドソックス	6400万円	約1億5000万円
桑田真澄	野球	読売ジャイアンツ	ピッツバーグ・パイレーツ	1億5000万円	約5750万円
城島健司	野球	福岡ソフトバンクホークス	シアトル・マリナーズ	5億円	約6億4900万円
田口壮	野球	オリックスブルーウェーブ	セントルイス・カージナルス	1億2000万円	約1億2000万円
松井稼頭央	野球	西武ライオンズ	ニューヨーク・メッツ	3億5000万円	約5億9000万円
松井秀喜	野球	読売ジャイアンツ	ニューヨーク・ヤンキース	6億1000万円	約7億2000万円
松坂大輔	野球	西武ライオンズ	ボストン・レッドソックス	3億3000万円	約7億800万円
森慎二	野球	西武ライオンズ	タンパベイ・デビルレイズ	1億2500万円	約8000万円
藪恵壹	野球	阪神タイガース	オークランド・アスレチックス	1億1000万円	約1億300万円
中田浩二	サッカー	鹿島アントラーズ	フランス・マルセイユ	4600万円	約6000万円
中田英寿	サッカー	ベルマーレ平塚	イタリア・ペルージャ	4000万円	約8100万円
中村俊輔	サッカー	横浜マリノス	イタリア・レッジーナ	5000万円	約6000万円
宮本恒靖	サッカー	ガンバ大阪	オーストリア・ザルツブルク	6200万円	約7000万円
田伏勇太	バスケットボール	トヨタ自動車アルバルク	フェニックス・サンズ	--	約4000万円

※金額はすべて推定。複数年契約の場合は、初年度の金額を算出。

稼ぎすぎ!? これが世界標準!!

海外スポーツ選手収入ランキング ベスト20

1	タイガー・ウッズ	ゴルフ	約94億7500万円
2	ミハエル・シューマッハ	F1	約94億4000万円
3	ペイトン・マニング	NBA	約49億5600万円
4	マイケル・ジョーダン	NBA	約41億3600万円
5	シャキール・オニール	NBA	約37億6400万円
6	ケビン・ガーネット	NBA	約35億400万円
7	アンドレ・アガシ	テニス	約33億2700万円
8	デビッド・ベッカム	サッカー	約33億400万円
9	アレックス・ロドリゲス	MLB	約30億900万円
10	コービー・ブライアント	MLB	約30億800万円
11	グラント・ヒル	NBA	約30億500万円
12	デレック・ジーター	MLB	約27億4000万円
13	バリー・ボンズ	MLB	約26億7000万円
14	マニー・ラミレス	MLB	約26億0000万円
15	オスカー・デラホーヤ	ボクシング	約25億9000万円
16	レブロン・ジェームズ	NBA	約24億8900万円
17	ビンス・カーター	NBA	約23億8300万円
18	デイル・アーンハートJr	NASCAR	約23億7100万円
19	アーノルド・パーマ	ゴルフ	約23億6000万円
20	フィル・ミケルソン	ゴルフ	約23億3600万円

※米『フォーブス』誌調べ。金額は2004年の収入を推定。年俸以外にも、賞金やスポンサー料などすべての収入を含む。なお、デラホーヤは興行プロモーターとして収入も多い。

やっぱり海外に出た者勝ち!!

日本人スポーツ選手収入ランキング ベスト10

1	中田英寿	サッカー	12億円
2	佐々木主浩	MLB	9億60000万円
3	野茂英雄	MLB	9億3000万円
4	松井秀喜	MLB	7億2000万円
5	イチロー	MLB	5億6000万円
6	中村紀洋	プロ野球	5億円
7	清原和博	プロ野球	4億5000万円
8	丸山茂雄	ゴルフ	4億5000万円
9	高橋尚子	マラソン	3億8000万円
10	石井一久	MLB	3億6600万円

※編集部調べ。金額は2003年の収入を推定。年俸以外にも、賞金やスポンサー料などすべての収入を含む。



ファイトマネーだけなら日本のほうが高い!?

UFCトップファイターギャランティ一覧

チャック・リデル	12万5000ドル
ティト・オーティズ	10万5000ドル
ケン・シャムロック	10万ドル
アンドレィ・アルロフスキー	9万ドル
マット・ヒューズ	7万5000ドル
ティム・シルビア	6万ドル
BJペン	5万ドル
ジョルジュ・サンピエール	2万9000ドル
アンデウソン・シウバ	2万5000ドル
リッチ・フランクリン	2万1000ドル

※ネバダ州およびカリフォルニア州アスレチックコミッション発表

左記のギャランティはベースの金額。選手は試合に勝つと、勝利者ボーナスを含めて、上記の金額の2倍のギャランティを得ている。なおトップファイターには、このファイトマネー以外に、PPVセールスの売り上げに応じてインセンティブが支払われており、その金額はファイトマネーよりもはるかに大きな収入となっている。

プロ野球の10倍!?

メジャーリーガーの平均年俸は3億円!!

メジャーリーグは金額もメジャー! 今年のメジャーリーガーの平均年俸は昨年より9パーセント上昇し、約3億1000万円だった。これは05年度の日本プロ野球平均年俸、約3700万円の約10倍。これはみんなアメリカ目指すって! ちなみにプロ野球の最高年俸は、ソフトバンクと7年契約を結んだ松中信彦。06年度の年俸は5億円で、出来高を含めれば7年で最高45億円を得る破格の契約だ。しかしメジャーはそんなもんじゃない。ヤンキースのアレックス・ロドリゲスは、10年契約で総額約300億円! また昨今メディアを賑わせた松坂のメジャー移籍も、最終的に提示された金額は6年で総額70億円だった。

日本格闘技界も空洞化の危機!?


一般層への認知が拡がっているとはいえ、アメリカ4大メジャースポーツ(野球、アメリカンフットボール、バスケットボール、アイスホッケー)と比較すれば、まだまだ収入は高くない総合格闘技。しかし、UFCライト級王者、チャック・リデルやティト・オーティズのように、ファイトマネー以外で一試合あたり約1億円の収入を得ていると言われる選手もいる。その金額は、日本で闘う選手にとって充分に魅力的なものだろう。

日本格闘技界が危ない!! ここ数年、日本野球界やサッカー界において、メジャーリーグや欧州リーグを目指して海外に流れ出た優秀な人材は少なくない。その理由として、海外の本場で実力を試したいという選手の考えも挙げられるが、自身の実力を金額面で最大に評価してくれるチームや舞台に移籍するのがプロフェッショナルというもの。そして、その現象は日本マット界をも覆おうとしている。『Kamipro』本誌でもその実態は再三にわたり報道しているが、UFCの怪物化により海外市場が一気に拡大。ファイターにとって世界で一番稼げる場所だった日本がアメリカに次ぐ二番手市場に転落した。これまで日本国内で起こっていた選手獲得競争は、今後、海外団体との〝仁義なき闘い〟へと変貌を遂げることになったのだ。

日本トップ団体のファイトマネーはUFCのギャランティと比較しても決して低いものではない。しかし、UFCは日本市場とは比較にならないPPVの莫大な売り上げの一部をインセンティブとして支払うことで、トップファイターの確保に務めている。

チャック・リデルを例に挙げると、上に示したファイトマネー以外にも、約100万ドル(約1億1800万円)のオプション収入があるとのこと。この金額は、05年の『PRIDE男祭り』で小川直也に支払われたと推測される一億円を上回る。また、この小川vs吉田秀彦戦は、ここ10年の日本マット界でもっとも経済効果を発揮したカードだったことを考慮すると、毎試合一億円以上をリデルに支払うことのできるUFCの財力には驚くしかない。実際、UFCはこの〝力技〟によって、関係が悪化していたホイス・グレイシーやBJペンを再びオクタゴンに上げることにも成功している。

こうしたトップファイターを狙い打ちする〝実弾〟は、当然、日本の常連最強ガイジンにも向けられることになる。海外の報道によれば、ミルコやヒョードルへのオファーは数億円に達するとのこと。歴史は繰り返すもの。ほかのスポーツ同様、日本格闘技界は海外MMA団体の草刈り場と化すのだろうか?



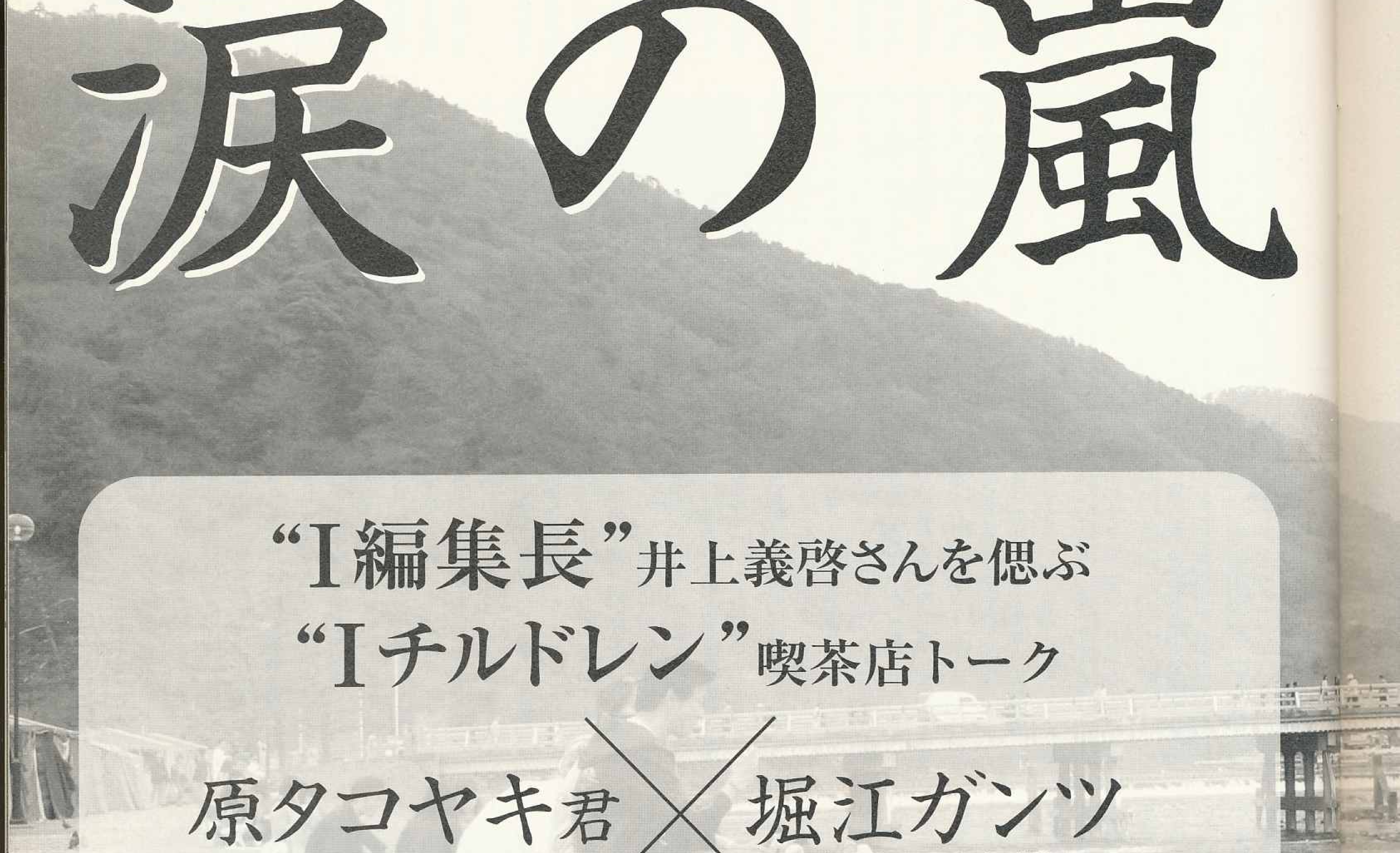
言うちゃ悪いけど、
寂しすぎますよ!（ドン）

山

全国のプロ格者、号泣!!　赤鬼、青鬼も最敬礼!!

活字プロレスの父、天国へ旅立つ――

涙の嵐



“I編集長”井上義啓さんを偲ぶ “Iチルドレン”喫茶店トーク

原タコヤキ君（初代・井上番）×堀江ガンツ（二代目・井上番）

司会／ジャン斉藤

言うちゃ悪いけど、寂しすぎますよ、アンタ!!（ドンッと机を叩く音）。偉大なる活字プロレスの父、元『週刊ファイト』編集長、“I編集長”こと井上義啓さんが、12月13日13時頃、胃ガンにより帰らぬ人となった。享年72。本誌でも好評連載『I編集長の喫茶店トーク』で、あまりに独創的で愛と情熱に溢れた“I提言”を毎月ぶちかましてくれた生前の井上さんを偲び、本誌の新旧“井上番”が、追悼の喫茶店トークを展開させていただきます。

――本日12月21日、マット界に大変悲しいお知らせが入ってまいりました。〝I編集長〟こと井上義啓さんが胃ガンのため、12月13日にお亡くなりになっていたことが判明いたしました。『ｋａｍｉｐｒｏ』編集部一同、I編集長のご冥福を心からお祈りいたします。

堀江ガンツ（本誌編集部員。以下、ガンツ） 井上さん、マット界のために本当にありがとうございましたっ‼

原タコヤキ君（元『紙のプロレス』編集者。以下、タコ） ホンマに、井上さんがおられなかったら、いまのマット界はなかったかもしれんよね。それは決して大げさじゃない。井上さん、本当にお疲れさまでした！　どうか安らかにお眠りください……。

――それで今日は……井上さんのご冥福を祈るという意味でも、緊急ながら追悼座談会を行ないます。

タコ うん。ここは『ｋａｍｉｐｒｏ』らしくパッと明るく楽しく、井上さんのステキなエピソードをいっぱいしゃべっていきましょう！

ガンツ ボクらにできることは、井上さんの素晴らしさを語り継いでいくことぐらいですしね。

――まず読者の方に説明すると、『ｋａｍｉｐｒｏ』の〝井上さん番〟といえば、前期がタコ兄さんで、それをガンツさんが受け継いで。つまり、『ｋａｍｉｐｒｏ』周辺での井上さんをよく知る二人ですが、この第一報を編集部に伝えてくれたのはタコ兄さんでしたよね。

タコ うん。今日の午前中に、元『週刊ファイト』編集長の井上譲二さんから井上さんが亡くなったとい

亡くなる二ヵ月前に井上さんから「俺の連載は切れ！」って言われたんですよ（ガンツ）

うお電話をいただいたんです（39ページ参照）。でね、驚くことに、井上さんは一週間ほど前の12月13日に亡くなられていたんですよ……。

ガンツ　それを誰にも知らせなかったのは、まさに井上さんの遺志だったということなんでしょう。

タコ　うん。自分がもう長く生きられないことを医者から聞かされた井上さんは、自分が亡くなったあとのことをお姉さんに伝えていたそうです。「すべてのことが整理されるまでは誰にも連絡するな。香典も受けつけるな！」と。

ガンツ　……ダンディズムに溢れてますよねえ。ぶっちゃけて言えば、ボクらは井上さんがおそらくガンであろうということは、05年の夏くらいからうすうす気づいてたんですよ。

タコ　その頃、井上さんは入院してはったけど、「これはお見舞いに行かな！」と思って連絡したら、井上さんに頑なに断られてね。

——井上さんから「お見舞い厳禁!!」って怒られたんですよね。

タコ　そうなんですよ。当時、俺はまだ東京に転勤する前で大阪におったんやけど、井上さんの入院先は俺の会社の裏にあったんですよ。でも、井上さんは「自分の弱ってる姿を見せたくない!!」って言うてはったね。本当にその姿勢のまんま亡くなられて……。

——……“プロレスラー”ですねえ。

ガンツ　それでそのときは一旦退院されて、再び誌面にも戻ってこられたんですけど、二ヵ月前にまた体調を崩されて。原稿を書くことが生きがいだった井上さんのほうから「もう連載は終わりにしよう」と……。

タコ　それで休載になったんやな。

ガンツ　そうなんです。10月の末ぐらいなんですけど、ボクがいつものように『喫茶店トーク・ラウド』のインタビューを収録しようと思って井上さんに電話したら、「PRIDEラスベガス大会は観てないので語れません」って言われてガチャンと切られちゃったんですよ。あれだけ楽しみにしてたラスベガス大会だったのに。

タコ　大好きな『PRIDE』を観る体力もなかったんや……。

ガンツ　で、その二日後くらいに井上さんから電話がかかってきて、「このあいだは悪かった。体調が悪くて電話ができる状態じゃなかったんだ。キミもおそらく知っとるだろうけど、俺はガンなんだよ」と。そのとき初めて井上さんの口から知らされたんですよ。で、「堀江くん、ガンというのは恐ろしいもんだよ。俺はもう数日前に話したことも覚えてないし、俺らしい鋭い意見も言えなくなった。そうなったら、たとえターザンだろうが井上義啓だろうが、連載は切らなきゃダメなんだよ！　それが君の仕事なんだ」って言うんですよ。

タコ　……凄いプロ魂やっ!!

ガンツ　ボクはそれでも連載終了にはできなくて、休載ということにしてたんですけどね……。そういえば、井上さんは『kamipro』No.103で収録した『週刊ファイト』休刊インタビューで、「我が人生に悔いなし！」っていう言葉を残してるんですよね。

タコ　……重い言葉やなあ。

——あと、桜庭（和志）がスミルノヴァスにボコボコされて安全面の整備が取りざたされたときには、「闘う男がリング上で死ねたら本望でしょうが！」って言ってたじゃないですか。余命がいくばくもない状態で、この発言って……。

タコ　……それも重いなあ。

ガンツ　まあ、「桜庭のフラフラ状態なんて、京愛子に比べたら序の口ですよ！」とも言ってましたけど（笑）。

タコ　それも壮絶な発言やなあ（笑）。ほかのジャンルを見渡しても、ここまで覚悟ができてる人っていないでしょ？　誰かいる？

——ちょっと見当たりませんよねえ。それにボクは井上さんに直接お会いしたことがないからかもしれませんが、何事にも劇的すぎるから、存在自体がフィクションなんじゃないかって思うときさえありますよ。

タコ　ちょくちょく会ってた俺でさえ、そう思うで（笑）。「ホンマに井上さんって存在したんかいな!?」って。

——ですよね（笑）。だから、井上さんがよく「プロ格者のAさんやBさんといつもトークしている」って言ってましたけど、それって“Iワールドの出来事”にすぎないんじゃないかって思うこともあって。

ガンツ　『週刊ファイト』の編集長時代は、たしかにプロレス者とトークしてる痕跡はあるんだけどね。

——最近は、独特で鋭い結論を導き出すために、もう一人の自分と壮絶な“プロレス問答”を繰り広げていたんじゃないかって思うんですよね。そう考えたほうが、あの突き抜けたエネルギーは理解できるんです。

タコ　まあ、プロ格者AさんもBさんも、また飛び抜けたセンスの持ち主じゃないですか。なぜか井上さんがツッコミそうなボケたことばっか言うし（笑）。

ガンツ　井上さんがプロ格者のAさんに、「キミは俺と付き合って何年になるんだ?」って聞くと、「30年です!」って答えるシーンもありましたね。付き合いが長すぎるだろ！って（笑）。

タコ　本当に謎やなあ。井上さんこそが“底が丸見えの底なし沼”やで。プライベートはホント、神秘のベールに包まれたままやんか。

——井上さんのあまり知られていないプライベートのエピソードは山のようにありますからね。かつてボウリング場経営に参加していたことなんかにしても（笑）。

ガンツ　ボウリング場は親族と一緒に経営してたんですよ。井上さんは経営会議の席で、「金色のピンを倒したら景品をつけろ！」とか「パチンコもみたいに裏で換金できるようにしろ！」とか、プロレス方面に負けずとも劣らない大胆な提言をしてたそうで（笑）。

タコ　しかし、井上さんとボウリングって、まったくイメージが合わないね（笑）。

ガンツ　そういえばタコ兄さん、去年の春に井上さんから突然、謎のFAXが届いたこと覚えてますか？





昨年4月、“聖地”嵐山でインタビューさせていただいたときのショット。プロ格者とトークするとき、I編集長はこんなにも楽しそうな表情をしたりするのだ。（写真・下）小さい版型の頃の『紙プロ』で“ダミー編集長”だったタコヤキ君と井上さん、そして舞妓さん二人との4ショットだ。

タコ　あった、あった！　突然ウチにＦＡＸがきて、そんでガンツと一緒に嵐山まで井上さんに会いに行ったんやなあ。あのＦＡＸ、なんて書かれてたんやったっけ？

ガンツ　これは『ｋａｍｉｐｒｏ』Ｎｏ．96に掲載したんですけど、「あいかわらずプロ格者とトークしていますが、貴君のご高説を拝聴いたしたく、いつか嵐山で会いましょう」って。

タコ　ああ、そんな内容やったな。しかし、「貴君のご高説」って！（笑）。

ガンツ　ボクはですね、いま思うと、あのとき井上さんは自分の命が長くないことを知ってたんじゃないかって思うんですよ。だからボクらと会ってトークしたかったんじゃないかって。

タコ　うんうん。

ガンツ　その証拠に、インタビューが終わったあと、別れ間際に「しばらく病院に行かなきゃいけないんだよ」って話をチラッとしてたじゃないですか。その二ヵ月後くらいに病気が悪化して入院されて、井上さんの連載が一時、休載扱いになってるんですよ。

タコ　……ああ、そうやったんや。井上さんからの連絡ってそうそうないから、あのＦＡＸには深い意味があったのかもしれんなあ。

ガンツ　で、そのインタビューでは、自分の一番好きな歌だという『湖畔の宿』について語ってるんです。それはどんな歌だったんだろうと思って、さっき調べてみたんですけど、これって戦時中の流行歌で、じつは凄く悲しい歌なんですよね。

タコ　……。

ガンツ　戦地に赴く人たちがみんなでこの歌を聴いて涙しながら旅立ったっていう歌なんです。でも、戦意高揚にならないからって、一時期、放送禁止歌にされていたこともあるらしいんですよね。で、その歌の途中に語りが入るんですけど、みんなここで泣くという……。

タコ　それ、どんな語りやねん。読んで、読んで！

ガンツ　では、読みます。「ああ、あの山も姿も湖水の水も、静かに静かに黄昏れていく。この静けさ、この寂しさを抱きしめて私は一人、旅を行く。誰も恨まず、皆昨日の夢と諦めて、幼な児の様な清らかな心を持ちたい。そして、そして、静かにこの美しい自然を眺めていると、ただほろほろと涙がこぼれてくる」……

湖畔の宿

佐藤惣之助　作詞
服部良一　作曲

［台詞部分］

ああ、あの山の姿も
湖水の水も
静かに静かに黄昏れていく。
この静けさ、
この寂しさを抱きしめて
私は一人　旅を行く。
誰も恨まず、
皆昨日の夢とあきらめて、
幼な児の様な
清らかな心を持ちたい。
そして、そして、
静かにこの美しい自然を
眺めていると、
ただほろほろと
涙がこぼれてくる。

以上です！

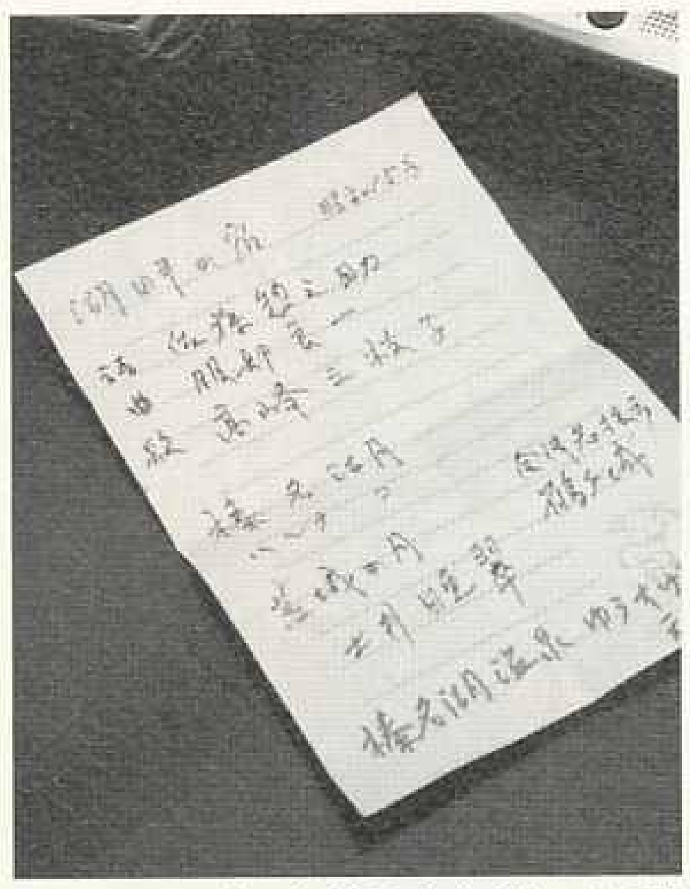
タコ　（一瞬絶句して）……これ、井上さんの生き様そのものやんかっ!!

ガンツ　要は、井上さんはボクらにこの歌に込められた意味を伝えたかったんじゃないか、と。そう思えて仕方がないんですよ。

タコ　全然、気がつきませんでしたよ、井上さん……!!

ガンツ　それにあの日は、井上さんは一人で5時間以上しゃべったのに、「まだしゃべり足りない」ってつぶやいてたじゃないですか。

タコ　言うてたね。こっちがギブアップして終わったけど、井上さんはもっともっとトークがしたかったんやなあ……（しみじみと）。いまとなっては、ギブアップしてしまったのを後悔するばかりやわ！　申し訳ないよ、本当に。



井上さんが、もっとも好きな曲だという『湖畔の宿』（昭和15年）について書いた"井上メモ"。そして右は、その歌詞だが台詞部分を読んでみてほしい。晩年の井上さんの心情そのままのようではないか。井上さんは、『週刊ファイト』の編集長を辞職したあと、この歌の舞台となった榛名湖温泉ゆうすげ元湯という旅館を訪れ、窓から見える桜を眺めて涙したそうである。なんて純文学な人なんだ！

ガンツ　井上さんは電話取材でも二時間ぐらいのトークはザラだから、「さすが井上さんだなあ」って感じでとくには気にしてなかったんですけどね……。

タコ　ホントにトークするのが好きな人やったから。

ガンツ　電話インタビューのときも延々と一時間半以上一人でしゃべったあと「さて、キミの次の質問は何かね？」とか言いますからね。「もう充分です」って（笑）。

――そもそもこの『ｋａｍｉｐｒｏ』のインタビュー連載は、どういう経緯で始まったんですか？

タコ　それはまず『ｋａｍｉｐｒｏ』と井上さんの出会いから説明しないとアカンやろね。もともとは、ちっちゃい『紙のプロレス』で『嵐山哀歌』（あらしやま・えれじー）という小説を連載してはったんですよ。

――最近の読者のために説明すると、プロレスの現況や未来を案じる「赤鬼・青鬼」や、井上さん自身がモデルと思われる「井沢」が登場する私小説ですよね。プロレス初心者からすると、かなり難解な内容というか。

タコ　初心者には非常にとっつきにくいわけですよ。でも、それはそれでいいし、やっぱり山口（日昇・前『ｋａｍｉｐｒｏ』編集長）さんに始まり、当時の『紙プロ』編集部のみんなもそのことはわかってるわけ。いっつもおもしろくないページで1位だったわけやしね。でも、「みんなが読み飛ばしてでも載せる意義がある」って、山口さんが続けてたっていう話なんやけど。

ガンツ　その編集センスも凄いですね（笑）。

タコ　そんで、俺が"ダミー編集長"に就任したときに、大阪まで井上さんにインタビューしに行ったんですよ。その取材中にたまたま近くを舞妓さんが通りはったんで、舞妓さんと井上さんのフォーショット写真を撮って編集部に持って帰った。そうしたら、その写真を見た山口さんと柳沢（忠之／現・ローデス社長、当時・『紙プロ』発行人）さんが、そのまま崩れ落ちてね（笑）。

ガンツ　あまりに異色すぎる組み合わせに（笑）。

タコ　「井上さんに何をやらせるんだ！」って。

ガンツ　それ以来、井上さんは『ｋａｍｉｐｒｏ』で、かなりのアベレージをキープし続けてるんですよね。

タコ　でもさ、本質的に井上さんはこっちのツッコミなんか通用しないですから。

ガンツ　たしかにまったく揺るがない人ですよね。

タコ　だから、ちっちゃい『紙プロ』のときに「なんで『紙プロ』って猪木さんと前田日明ばっかり特集するの？」ってよう言われてんけど、『ｋａｍｉｐｒｏ』のツッコミって厳しいから並のレスラーやったら潰れてしまうやんか。

ガンツ　それが猪木さんや前田日明だったら揺るぎもしないから、いくらやっても平気だったいうことですよね。

タコ　だから井上さんも一緒やねんな。俺らごときがどんだけ笑って、ある種、小バカにしてるように見えても、とてもかなうわけがないからね。

ガンツ　もう束でかかっても無理で

すよ！
タコ　あと、井上さんといえば、必殺のワンフレーズというべき〝I用語〟も凄かったよな。
ガンツ　それはもう数えきれないですよね。〝平成のデルフィン〟に〝バード〟に〝裏原宿プロレス〟……。
タコ　なんで井上さんが裏原宿を知ってるのかって話なんやけど（笑）。
——あと〝猪木信者〟って言葉も井上さんの造語だったんですよね。
ガンツ　そうそう。著書の『猪木を信じよ』からきてるんですよ、〝猪木信者〟って。
タコ　最近の読者のために説明すると、昔の『週刊ファイト』って、新日本プロレスというか猪木さんのことしか書いてなかったんですよ。要するに、井上さんこそが〝猪木信者〟だったわけですよね。もうね、世界で一番、〝アントニオ猪木〟という文字を書いたのは井上さんなんです。
ガンツ　間違いなく猪木さん本人より書いてますよね（笑）。
タコ　それに猪木さんや新日本プロレスが、世間の表面であるブームとは違った根っこの部分で熱を持てたのは、間違いなく井上さんのおかげやと思うし。どれだけ影響力があったかといえば、当時の新日本を仕切っていた新間（寿）さんが井上さんの原稿をコピーして、会議の資料にしてたっていう話もあるからね（笑）。
ガンツ　〝Iワールド〟原稿を！　それ、何かがおかしいですよ！（笑）。
タコ　昭和・新日本には夢があるからなあ（笑）。でも、プロレスを作る側って、観る側と同じくイマジネーション勝負だからね。
ガンツ　それに井上さんの場合、単なる思いつきで記事を書いたり、トークしたりするということがなかったんですよ。普段からプロレスというものを考えに考え抜いて、すでに答えを導き出している。だから誰かに何を聞かれても、答えがすぐにボンと出るんです。ターザンみたいにその場の思いつきじゃなくて、普段からじ〜〜っと、考えたうえでの定義があるんですよね。
——だから、〝I用語〟も次から次へと飛び出してくる。
タコ　もう、〝I用語〟に著作権があったら、井上さんなんかあっという間に御殿を建ててますよ！
——最近のヒット作でいうと、〝殺し〟ですかね。
タコ　〝殺し〟は定着したなあ（笑）。
——定着しましたけど、しばらく〝殺し〟の意味は誰もなんとなくしかわかってなかったんですよね。
ガンツ　きっと、こういう意味だろうなって感じで（笑）。
——それで今年の2月に相原コージの漫画『真・異種格闘大戦』の中で、「I編集長がよく言うところの〝殺し〟か！」というセリフが出たことをきっかけに、他のジャンルからも注目されてるんだから、井上さんにちゃんとした意味を聞こうということになって。
ガンツ　あの〝殺し〟を定義させたインタビューの反響は凄まじかったんですよ。ボクも「〝殺し〟ってそういう意味だったんだ！」って驚きましたし（笑）。あらためて説明すると、井上さんいわく「〝殺し〟を持ってるのは、力道山、前田日明、長州力！　この3人の共通点を言ってみろ！」ということで。
タコ　そ、そんなこと言われても困るわ（笑）。
ガンツ　ズバリ、「朝鮮人ですよ、アンタ！（ドンッ）」って井上さんは大声で答えてたんですけど（笑）。
——そんな意味だったのか⁉　っていう（笑）。
タコ　しかしさ、俺が言うのもおこがましいけど、『週刊ファイト』時代の井上さんの役割と、『kamipro』での井上さんの役割って全然違うでしょ。でも、どっちも芯は一緒のような感じはするよね。
ガンツ　井上さんは『週刊ファイト』時代の原稿に〝ドキュメンタリー劇場〟と銘打ってましたけど、あれって完全なる〝井上小説〟だったわけじゃないですか。『kamipro』のインタビューと本質は一緒なんですよね。
——なぜそのスタイルをこの情報化社会の中で貫き通せたかといえば、スポーツ新聞のわずかなニュースソースだけに耳を傾けて雑音をシャットアウトして、じっと考えてイメージを膨らませていたからなんでしょうけど。
タコ　できへんで、普通！　嵐山のほとりで何時間もプロレスのことを考えてるとも言ってはったしねえ。
ガンツ　ボクが井上さんに何度も言われたのは、「それが事実かどうかは問題じゃないんだ。自分が正しいと信じられるかどうかなんだ！」っていうことなんですよ。
タコ　それ、井上さん以外の人間だったら、確実に怒られるよ！（笑）。



ユーモアにも溢れ、キュートだった生前の井上さん。天龍寺の前で天龍源一郎ばりに逆水平チョップを構えを見せたり、ハッスルポーズまでやってくれたりした。そしてWWEが神戸に上陸すると、「銭の取れる連中だ！」と賞賛。ガンコでありながら、柔軟な頭を持ち合わせた人でもあったのだ。

ガンツ　たしかに井上さんの発言は、明らかに〝報道〟とは違いましたからね（笑）。
タコ　つまり、それは思い込みの度合いで勝負するっていうことやんか。プロレスを深く思考する作業。それこそ一流のプロレスであり、〝活字プロレス〟というプロレス文化の誕生なんですよ。
——井上さんがいなかったら、おそらく『kamipro』は存在してないですよね。そうするとターザン山本！も、山口日昇もいなかっただろうし、〝活字プロレス〟そのものが……。
タコ　（さえぎって）井上さんは始祖鳥やで！　ハッキリ言って。だって、何もないところから井上さんが〝活字プロレス〟の土台を作ったわけやから。
——それまでは〝プロレスを報道する〟スタイルだったのが、井上さんの登場で〝プロレスを考える〟方向に向かっていったわけですよね。
タコ　その元祖は井上さんですよ。俺はいま36歳で、たしかに俺らの年代はやっぱり村松（友視）さんを通して〝活字プロレス〟に入ってるんやけど、その村松さんにしても、ベースには確実に〝井上プロレス〟があった。だからプロレスの活字文化って、村松さんから産業革命が起こったような感じがしてるけど、そうではないんよね。プロレスマスコミの先達はたくさんおるけども、〝活字プロレス〟は井上さんがおらんかったら、生まれてこなかったやろな。
ガンツ　でも、そんな井上さんは、当初はプロレス自体がそんなに好きじゃなかったんですから、驚きですよね（笑）。
タコ　ホンマやで（笑）。上からの命令で大阪新聞社の社会部から運動部署に異動したことがきっかけがあってね。そこから『週刊ファイト』が

スタートした、と。

ガンツ　その『週刊ファイト』時代は、お正月と大晦日以外は一年353日原稿を書き続けていたというし。

タコ　ほんでほかの記者には自分の給料から取材費を渡してたんやろ。本当に「人生を懸けて！」っていうのはこういうことを言うんやろなあ。

ガンツ　しかも井上さんって、時代の主流になっているもの、時代を変える気配があるものに敏感だったじゃないですか。前に「今日はプロレス界の動きについておうかがいしたんですが……」って申し出たら、「そんなことを聞いてる場合じゃない!!（ドンッ）」って怒られたこともありましたから（笑）。

今月は『PRIDE』でしょうが！

タコ　UFCが始まったときもすぐ食いついたからなあ。あの歳で、あんなに総合格闘技に詳しい人、おらんで（笑）。

――70歳をすぎて、WOWOWでUFCとボクシング中継をきっちり観てる人なんていないですよ（笑）。

タコ　だから井上さんの凄いのはさ、年寄りにありがちな「昔はよかった」にならないところでしょ。いまの最先端のテクノロジーとか、いまのあり方をめっちゃ肯定するやんか。「これからはネットの時代だ！」とか言うたり。んで、本人はネットを使われへんねんで（笑）。

ガンツ　ガハハハハ！　あと「これからは〝親指プロレス〟の時代だ」って言ってたこともありましたよね。つまり、携帯電話を使って親指一本で情報を入手する時代だ、と。でも井上さん自身は、一度もiモードの画面を見たことなかったんですよ（笑）。

タコ　だから、よけいにそこらへんの嗅覚は凄いよね。ネットや携帯を使えない人が、100パーセントその新しい文化を肯定する。いまのプロレス界の長老たちからは考えられないスタンスでしょ。もっと言ううと現役のプロレス専門誌の記者は、新しいものをまずは否定するやんか。

ガンツ　だって、プロレスマスコミが芸能人の参戦は是か非か？　って騒いでるときに、井上さんは「『ハッスル』に八代亜紀を出せ！」って言ってたんですからね（笑）。是か非かなんか通り越して、『ハッスル』すら追い越してるという。

タコ　しかし、奇跡的な存在ですよ、井上さんは。なんで、こんな人がプロレスマスコミに出てきたんやろな。

――その理由の一つには、東京から遠く離れた大阪でやっていたということもあるんでしょうね。

タコ　ああ、井上さんのモチベーションに〝疎外感〟は確実にあったでしょ。よく原稿にも「他人にバカにされたもんだ」とか「大笑いされた」とかって書いてたもんなあ。

ガンツ　あと、井上さんって自分のことを〝大阪の馬鹿〟って評してましたからね。

タコ　もちろんそう書くことによって距離を置いて自分を見てんねんけど、モチベーションはマイノリティであるということやで。だからやっぱり井上さん自身がプロレスであり、ロックな人やねんなあ。

ガンツ　熱くて固い信念がありますしね。

タコ　井上さんってもの凄く鋭く尖っているけど、一方で他人の悪口とか言わなかったもんね。あと業界でありがちな金の話とかもないし。

ガンツ　ないですねえ。自分に関する美談も一切、口にしませんから。

タコ　ダンディやわ！　それに、いつもカッコよかったで。写真撮影があろうがなかろうが、いつもパリッとした格好でいらして。

ガンツ　ボクが「井上さんって本当に新日本を愛してるんだな」って思ったのは、5年前の新日本プロレスの30周年記念ドーム大会のときなんですよ。井上さんはスーツと靴をオーダーで新調されて上京されて。「これが俺の気持ちですよ！」って言うんですよ。

タコ　カッコいいなあ、そういうの！

――そのインタビューを収録していたときにタイガー・ジェット・シンが通りかかって、井上さんがえらく怯えていたという話が好きなんですけど（笑）。

ガンツ　そうそう（笑）。ホテルのロビーでジェット・シンの席を横切るときに、井上さんはカバンで顔を隠しながら歩いてたからね。

タコ　ショートコントやないか！　それ（笑）。

――本当に怖がっているのか、真剣にプロレスとして演じていたのか。

タコ　どっちとも言えるよなあ。あとはいい意味での自意識過剰、自己愛！　猪木さんが〝24時間アントニオ猪木〟だと言われたように、井上さんも〝24時間井上さん〟やからさあ。

――あたりまえですけど、その〝24時間井上さん〟芸は誰にもできないですから。たとえ同じことを書いたり、しゃべってたりしても。

タコ　だから『kamipro』がせんとアカンのは、井上さんのマネはでけへんけど、井上さんという偉人がおったことを伝えていかんとアカンねえ。

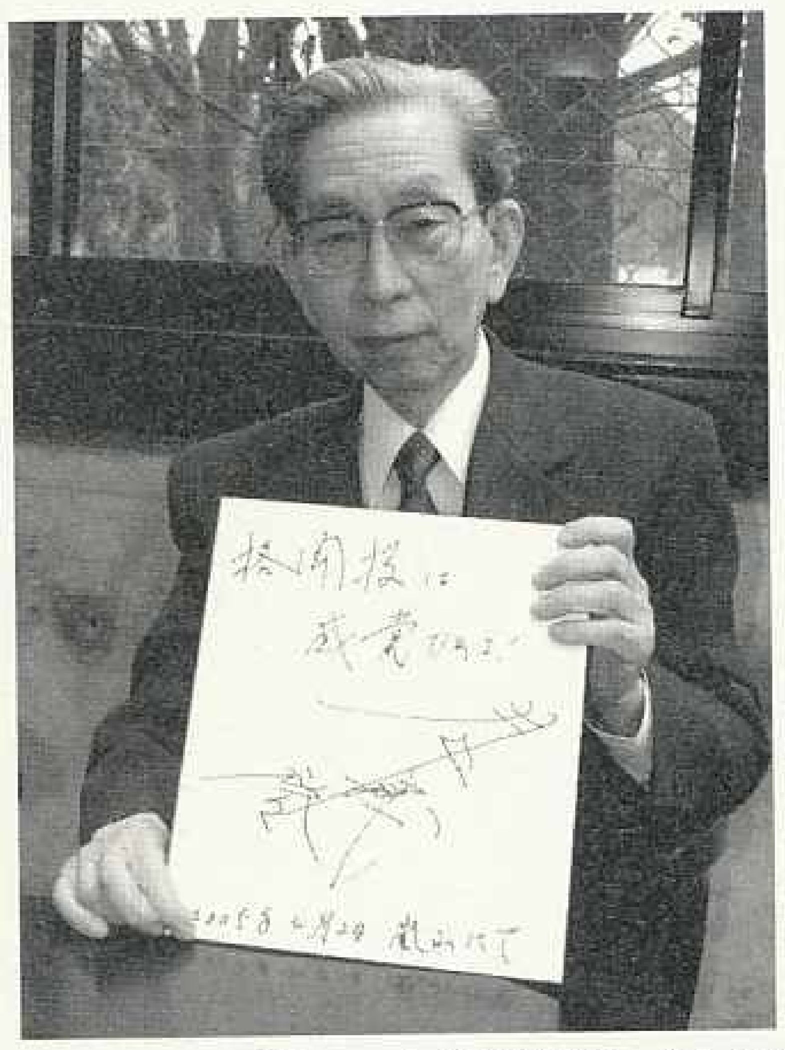
――次号でも特集しますし、近々に追悼本も出しますよ！

タコ　うん。単行本は絶対にやらなアカンでしょう！　俺は思うんやけど、やっぱプロレスって凄いよ！　井上さんのような凄い人を一生夢中にさせたわけやから。そのプロレスに関われたことを誇りに思いますよ、ボクは！

ガンツ　だからこそ、ボクらなりの〝闘魂伝承〟をしないといけませんよね。井上さん自身、『ファイト』が休刊になったときに言ってましたから、「たとえ俺が死んでも、俺が書いたもの、俺が作った〝井上プロレス〟は残るからね！」とね。

タコ　凄い言葉やなぁ。〝井上プロレス〟は永遠ですよ！

【06年12月20日／都内・喫茶店にて収録】



いのうえ・よしひろ■1934年岡山県出身。新大阪新聞社入社後、『週刊ファイト』の編集長を務めた活字プロレスと呼ばれるジャンルの創始者。全国のプロレス者でI編集長に影響を受けた人間は数しれない。本誌では、長期連載『I編集長の喫茶店トーク』で活躍。「殺し」「バード」「母艦プロレス」「裏原宿プロレス」など、破壊力抜群の"I用語"を駆使して、格闘技界を斬りまくった。なお、写真は昨年4月に井上さんにサインしてもらったときのもの。そこには「格闘技は感覚である！」と書かれていた。

『kamipro』は井上さんという偉人がいたことを伝えていかんとアカンね（タコ）

次号予告

1月22日（月）発売予定の『kamipro』NO.107でもI編集長追悼特集掲載！

そして2月上旬にI編集長追悼本発売予定!!

“井上学校の卒業生”金沢克彦が目撃した

『週刊ファイト』編集部のI編集長、その姿



profile

かなざわ・かつひこ■1961年12月13日、北海道出身。86年に『週刊ファイト』の記者となる。89年から『週刊ゴング』編集部へ。GK（ゴング金沢）の名称で呼ばれ、名物編集長として一時代を築いた。05年よりフリーライターとして絶賛活動中。新日本系レスラーからの信頼度は絶大である。

〝I編集長〟こと井上義啓（よしひろ）氏が亡くなった。12月13日の午後1時ごろ息を引きとられたという。訃報を聞いたのは12月21日のこと。連絡をくれたのは、『週刊ファイト』前編集長の井上譲二氏だった。12月13日といえば、奇しくも私の45歳の誕生日の日。生涯忘れることのできない命日となるだろう。

私の手元には20年以上も前にご本人からいただいた一枚の名刺がある。その表には〝井上力〟と書いてある。力と書いて「つとむ」と読むらしい。これは、当時の先輩記者に聞いて確認した話。その先輩は「名は体を表わすとはこのことだろ？」と言って笑った。もちろん、痩せぎすのI編集長を指してのジョークである。

名刺をもらったのには理由があった。当時、大阪の新大阪新聞社で修業中だった私は、ほかの二人の新人記者とともに新日本プロレスの立石・臨海スポーツセンター大会を取材することになった。取材とはいっても、これも研修の一環であり、我々はまだ名刺すら持てない新弟子にすぎなかった。当初は先輩記者が先導して連れて行ってくれる予定だったが、その先輩に急な仕事が入り新弟子3人ではどうしようもない状況となってしまったのだ。

そこで、私がI編集長に相談してみると、「じゃあ、3人で行ってきなさい。関係者に何か言われたらこの名刺を見せるといい」と言うと、名刺の裏に、「この金沢、○○、○○の3名は今春、『ファイト』が採用した新人記者なので、取材のほう（控室以外）をよろしくお願いします」というメッセージをサラサラと書いて印鑑を押し、私に手渡してくれた。井上義啓と井上力。どちらが本名なのか、私は知らない。ただ、非常に達筆な人だった。

これまで何度も書いてきたように、私が『週刊ファイト』の見習いとして大阪で暮らしていたのは、86年5月1日〜同年8月中旬の約3カ月半のこと。勤務先は、福島区のサンケイ総合印刷という印刷所内にあった。本社は当時、西区堀江にあった。大阪市内のビジネス街の一等地であり、立派なビルはオーナーである社長の私有物だった。ところが、編集部のほうは印刷所の中に間借りするかたちで置かれており、本紙（夕刊紙）はかなり広いスペースの中にあったが、『週刊ファイト』のほうはわずか六畳ほどの小部屋に入っていた。

会社の定期刊行物の中で唯一黒字を出していたのが『週刊ファイト』であり、新大阪新聞のほうは赤字もいいところで、地元では〝三流紙〟と陰口を叩かれていた。メイン記事がスキャンダルものだったから、それも仕方がないのだろう。私の立場は、新大阪新聞の校閲部に属しながら、『週刊ファイト』の仕事を手伝うという感じ。当時の本紙の第一面は、連日のように山口組と一和会の抗争ものだった。

実際、I編集長が編集室で原稿を書いている光景はあまり見たことがない。聞くところによると、印刷所の近くに四畳半一間の仕事部屋を個人で借りていて、そこで原稿を書いて寝泊りすることが多く、自宅にはほとんど帰っていなかったようだ。謎の仕事部屋をのぞいたことがあるのは、先輩カメラマンのM氏だけだった。ある日、仕事で帰りが遅くなったM氏に、I編集長が「俺は自宅に帰るから、俺の仕事部屋に泊まったらどうかね？」と鍵を渡してくれたという。I編集長はそういう優しさのある人だった。ところが、好意に甘えたM氏は部屋に入って愕然。万年床で原稿用紙が散乱した部屋は凄まじい状態。M氏は潔癖症だから、結局、部屋を掃除しているうちに夜が明けてしまったという。

だから、編集室にいるときのI編集長は、ほとんどレイアウトの仕事に没頭していたような気がする。専属のレイアウターもいたが、とにかく仕事の早いI編集長は自分でガンガンとレイアウトまでこなしてしまうのだ。

そして、ターザン山本！氏も指摘しているように、やはり社内でI編集長は浮いた存在だった。本紙は赤字新聞で、プロレス週刊紙が会社の経営を支えていたのだから、そこに歪み、妬みが生じるのは当然のこと。

じつは私の『週刊ファイト』東京支社勤務も突然の決定だったから、混乱を招いた。本紙側は、校閲の戦力が一人でも欠けるのは業務に支障をきたすと主張。I編集長は「彼は『ファイト』で採った人間や！」と言う。怒髪天の本紙編集局長が「井上は猪木のケツを追っかけてるオカマ野郎や！」と怒鳴り散らす始末。それでも冷静なI編集長は突然、本紙のスタッフを全員集めて演説を始めた。「みんなで協力し合ってやっていってほしい。彼は予定どおり東京に行かせます」。その一言で、私の東京赴任は決定したのだ。

社内では浮いていても、『週刊ファイト』におけるI編集長の存在感は絶対的だった。ハッキリ言って、一面記事を書いていたのは常に井上譲二副編集長であり、波々伯部（哲也）先輩だったし、I編集長は自分のコラムにすべてをぶつけていた。しかし、誰もがI編集長を立てていた。リスペクトとはまた違う感情だったかもしれない。

いま思うと、みんながI編集長の仕事ぶりと人間性を愛してやまなかったのだと思う。ガンコだが、純真そのもの。決して怒らない。ごくたまに怒ったときには黙り込んでしまう。とてもシャイな人でもあった。『週刊ゴング』時代、私は〝井上文学〟や〝井上プロレス〟を心の中で真っ向から否定していた。現実とはあまりにもかけ離れた世界観であったからだ。

ただし、一年前にフリーランスとなったいま、ようやく理解できる。自分独自のプロレス観、オリジナルの世界観を持ったとき、初めて一人前の記者といえるのだ。20年前、I編集長に言われたセリフ……「君も一人前の記者になりたいなら、24時間プロレスのことを考えていなさい」を反芻してみる。

I編集長、やっぱり僕はまだ一人前ではありません。もうひと頑張りしなきゃいけませんよね！

20年以上前にI編集長にもらった名刺、そこには〝井上力（つとむ）〟と書いてある。どちらが本名なのか？

“I編集長と『ファイト』を作った男”井上譲二が語った

井上義啓氏、最後の数ヵ月間



profile

いのうえ・じょうじ■1952年9月16日、兵庫県神戸市出身。アルバイトとして『週刊ファイト』編集部に出入り、77年に正式に『週刊ファイト』の記者に。I編集長を支える『週刊ファイト』副編集長として活躍し、I編集長退任後の94年に編集長へ。スクープや裏ネタ中心の独自のスタイルで知られる。

井上さんが亡くなられたのは、12月13日の午後1時くらいと聞いています。僕は週に一、二回は必ず井上さんに電話で連絡を取っていたんですが、じつは亡くなった同じ日か前日にも、電話で本人と会話をしてるんです。そのときに井上さんが入院されている病院名を聞いたんですが、声が小さくて病院名は聞き取れませんでした。

それから一週間経った12月21日、僕の携帯に井上さんから着信があったんですが、井上さんは病気を患ってから、自分から電話をかけてくることはなかった。嫌な予感がしました。電話口から聞こえてくるのは女性の声で、井上さんの近親者の方でした。僕は井上さんが亡くなられたことを聞かされました……。

近親者の方によれば、井上さんは亡くなる半年くらい前から「俺が死んでも、葬儀から何からすべて終わるまで誰にも知らせないでくれ。香典や献花も遠慮してくれ」と話があったようです。その話を聞いたときは、非常に井上さんらしいと思いました。

病名は胃ガンでした。発覚したのは、05年の7月。医者からは「半年、もつかどうか」という話があったようです。井上さんはその年の9月に（ターザン山本！さんやHGと大阪でトークショーに出演されたんですが、すでに凄くヤセ細っていました。

そのイベントの直後に、井上さんは4泊5日の日程でフランスのパリへ旅行しました。井上さんは海外旅行をしない人でしたが、「死ぬまでに一度、パリに行きたい」という思いがあったようです。それで昨年の冬頃には「もう一度、桜の花が見られるかなぁ」と弱気なことも話していましたが、今年に入ってからも精力的に『週刊ファイト』や『レジャーニュース』や『kamipro』の原稿を執筆。僕は「このまま数年間、だましだまし生きてくれないかな」と思ったものでした。

ところが、今年の11月の中旬に電話で話したときには、「原稿は書いてない」と。井上さんは文章を書くことが苦にならない人。文章を書くことが一番の喜びで、70歳をすぎても発注した原稿を一時間半で書き上げてくる人です。その井上さんが原稿を書けないというのは、よっぽど具合が悪かったんでしょう……。おそらく最後に筆を走らせたのは、『kamipro』の携帯サイトの連載原稿だと思います。

僕が井上さんと最後に会ったのは、今年の9月20日頃でしたね。その一週間くらいあとに、タダシ☆タナカが有料ウェブサイト『ファイト！ミルホンネット』の原稿依頼のため井上さんに会いに行ったんです。井上さんの容態があまり芳しくないことを知った彼は、ターザン山本！さんに「（井上さんが）死にかけていた！」という報告をしてしまった。井上さんはまだ原稿をバリバリ書いてた頃なので、その話を伝え聞いた僕は驚いてすぐ井上さんに電話をしたら、「いや、そんなにヒドくはないよ」と返事をもらって、安心したこともありました。

ただ、ここ数ヵ月間の井上さんは電話でも元気がなかったんです。調子が悪いときは電話も10秒程度ですぐ切られてしまって、「もう電話をかけてこないでくれ」と言われたこともありました。

ところが、12月上旬の電話では、珍しく「最近のプロレス界はどうなってる？」と聞かれたんです。井上さんに聞こえるように大きな声で、僕は大晦日の『Dynamite!!』や『PRIDE男祭り』の話をしました。でも、井上さんはしゃべることはできなかった。ただただ話を黙って聞いてくれていましたね……。

僕は高校生時代から『週刊ファイト』に出入りしていたので、井上さんとは40年近い関係なんです。でも、おたがいに酒が飲めず、人生論なんかを語り合ったりしたこともありません。いつも喫茶店でコーヒーを飲みながら、プロレスの話です（笑）。

井上さんは、皆さんのイメージどおりに〝変人〟で〝あまのじゃく〟な人ですが、その反面、人の悪口はまったく言わない。部下の悪口や批判は一切言わない人でした。もちろんプロレスの批判はしていましたけど。人を信じたら疑わない、本当に純粋な人格者でした。

『ファイト』時代で思い出すことは、70～80年代に新日本プロレスと全日本プロレスの冷戦時代のことです。井上さんは新日本や猪木さんを美化した原稿を書いて、全日本には手厳しい原稿を書いてました。すると全日本サイドや東京のマスコミ連中は、井上さんの悪口をボロクソに言うわけです。

井上さんはたしかに厳しいことを書いてましたが、僕は井上さんの愛すべき人間性を知っていたから、そういう過剰な反応には心が痛みました。だから、晩年に井上さんのことをいい意味でおもしろがって、魅力を伝えてくれた『kamipro』には感謝しているんです。

『ファイト』が全盛期の頃は、井上さんの〝活字プロレス〟と私の〝すっぱ抜きスキャンダル路線〟の抱き合わせで部数がグングン上がっていました。井上さんには、自由に仕事をやらせてもらえましたし、僕が何十年とプロレスでメシを食えているのは本当に井上さんのおかげです。

自分が『ファイト』の編集長になったときに「何が恩返しになるだろう」と考えて行き着いた答えは、井上さんに原稿を依頼することでした。井上さんにはロレックスの腕時計や、新地のクラブに招待するよりも原稿を依頼することがなにより喜んでもらえますから。だから僕は『ファイト』で原稿を依頼し続けました。

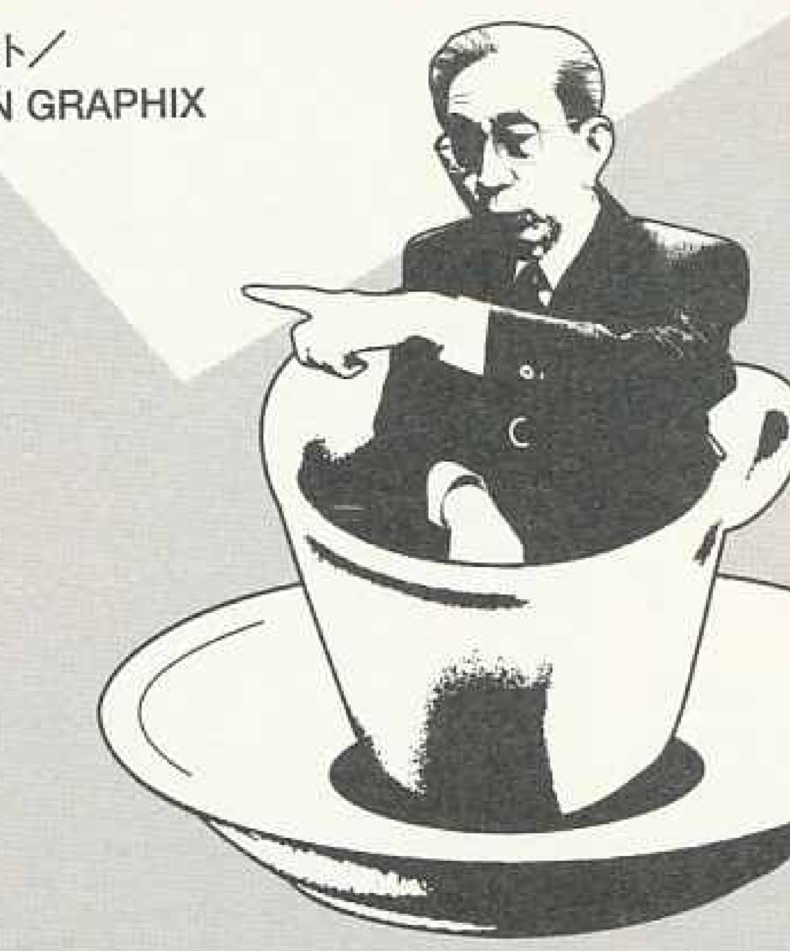
結果論ですが、その『ファイト』は井上さんが亡くなったあとに休刊にしたかったんです。じつは『ファイト』自体は、それほど大きな赤字が出ていたわけではなく、今後の売れ行きが上向く可能性がないから休刊になりました。まだ続けられる可能性もあった。井上さんが手塩にかけた『ファイト』の休刊はショックだったと思いますから、井上さんが亡くなってしまったいま、それが一番の心残りですよね。（談）

「死ぬまでに一度、パリに行きたい」余命宣告された井上さんは、パリへ旅行していたんです

言うちゃ悪いけど

“井上プロレス”は絶対に死なない!!

『kamipro Hand』ユーザーから追悼メッセージが続々と到着!



イラスト／BORN GRAPHIX

井上チルドレンからの手紙

「言うちゃ悪いけど、信じられませんよ!」と12月21日、日本中をかけめぐった井上義啓氏の訃報。そして、悲しみの中、全国のプロレス者から『kamipro Hand』に続々とメッセージを寄せられた……。ここではその一部をご紹介し、井上氏を追悼したいと思います。

○**“殺し”はあなたの文章にこそ宿っていた……。**心よりご冥福お祈りいたします。

○貴方の書く文章が、もっとも刺激的で、妄想に溢れていて、最高でした。プロレスとファンとの架け橋になってくれたのは貴方でした。本当にありがとうございました。ご冥福をお祈りします。

○**井上サンと本当に喫茶店でトークしたかった……。**今度は、天国で力道山や馬場サンと喫茶店トークしてください。心からご冥福をお祈りします。

○井上小説、おもしろかったです。35歳以上のプロレスファンは活字プロレスで育った世代です。だから**みんな井上チルドレンなんですネ。**ご冥福を祈ります。

○I編集長、あなたの命の灯は消えても、あなたの情熱は消えることなくわれわれの身体に刻み込まれています。ご安心を。私があの世に行くことになりましたら、ゆっくりプロレスの話を聞かせてください。

○**井上小説の中では一体、誰がヒョードルを負かすことになっていたのでしょうか?** 大晦日のボビー・オロゴンvsチェ・ホンマン、曙vsジャイアント・シルバ、I編集長的にはどうですか? おつかれさまでした。

○『嵐山哀歌』を初めて読んだときの衝撃。紙面から立ちのぼる「血とサロメチールの匂い」。恐怖と戦慄に脅えながらも、私の瞳孔は開き、恍惚としました。**I編集長は“殺し”という禁断の快楽の伝道師**でした。合掌。

○信じられない。井上さんの創造性溢れる記事をもう読めなくなるとは。いまごろ雲の上から大晦日の井上小説を書いてますか……? ありがとうございました。

○**巨星墜ちる……。**この先、プロレスがどうなるかは分からないけど、向こうでも『喫茶店トーク』をやってください。あなたは本当に“活字プロレスの哲人”でした。合掌。

○自分が仕事をしながら生きていくうえで、分野は違っても、井上編集長の姿勢に憧れ、お手本としました。いままで本当にありがとうございました。これまでのぶんも、ゆっくりお休みください。

○一度でいいから喫茶店トークに参加してみたかった! **天国のプロ格公園に、青鬼、赤鬼はいますか?** そちらに行くまで、井上小説の続きを楽しみにしています。本当にお疲れ様でした。

○『週刊ファイト』との出会いは中学生の頃だから、かれこれ30年が経つ。プロレスとのつき合い方を教えてもらった。貴殿がいなかったら、つまらない人生になっていたと言っても大袈裟じゃない。

○「もう、プロレスは見ません」そう、言いたくなります。**われら、昭和プロレスファンは偉大なる指導者を失い、難民になるのみです。**ぜひとも『井上編集長全集』を作ってください。それが貴誌の義務です。

○あなたの話にはついていけなかった。共感する部分もあまりなかった。でもプロレスへの愛情は文章を見なくても伝わりました。プロレス狂の大先輩がまた一人減っちゃった。さびしいなあ。

○ありがとうございました。本当にありがとうございました。**ただひたすら「ありがとう」です。**

○格闘技は妄想である!! **大好きなクリチコ兄弟やミルコを見守ってください!!**

○井上さんの妄言多謝を本当に楽しみにしてました。ご冥福を心よりお祈りします。

○悲しすぎます。**I編集長こそ60億分の1の男の中の男。**ご冥福をお祈りいたします。

○『I編集長の喫茶店トーク・ラウンド』&携帯サイトの月曜コラムをいつも楽しく読んでました。独自の視点で語るプロレス&格闘技最高でした。**言うちゃ悪いけど、さみしいです。**

○I編集長は、たとえ天国でも、生まれ変わっても、いつもの調子でI予言I提言をするんだろうな……と妄想してます。いまは、とてもさびしいけど、またどこかでI編集長の活字プロレスにふれたいものです。

○言うちゃ悪いけど、井上さん、あなたは大バカ者ですよ。本当にプロレスのことが大好きだったんですね。僕もそんな井上さんが大好きでした。**I編集長、あなたは立派なプロレスラーです。**

○人間はみな、虚と実の二面性を持っている。しかし多くの人は片面しか見せないし、片面だけで他人をはかりたがるものだ。しかし井上氏の仕事からは、両面知りたいというプロレスラブを強く感じます。

○**井上氏がいなければ、活字プロ格文化も大晦日格闘戦争もなかった**と思います。心からご冥福をお祈りします。

○『喫茶店トーク』、もう読めないんですね。いつも編集長の他者には考えつかない発想、楽しみにしてました。**“リアル孤高の天才”**さようなら。お元気で。

○自分にとって、I編集長が亡くなられたという事実は、『ファイト』の休刊とともに今年最大の衝撃です。その一語一語は、本当に強烈な言霊でした。その言霊は、いまも自分の身体に滲み込んでいます。おつかれさまでした。合掌。

○**“殺し”、“バード”はオレたちが受け継ぎます!!** I編集長ありがとうございました!!





あの名物企画がついに帰ってきた!!

語録で振り返る
マット界2006

「事件の数だけ名言あり！」がモットーの『kamipro』の名物企画『語録で振り返る～』が待望の復活！　激動の06年格闘技界＆プロレス界を彩ったあんな名言、こんな迷言の数々が一挙に大集結!!

文／ジャン斉藤、堀江ガンツ

パワーアップでオー!!（細木数子）

■1月1日『ハッスル』に新ポーズ誕生も……

〝キャプテン・ハッスル〟こと小川直也が細木数子のお正月特番に出演。細木数子から運気がアップするニュー・パフォーマンスを伝授された。お腹に手を当てて、最後に両手でバンザイしながら絶叫するという、とてもはやりそうにもないこの珍ポーズ。当時『ハッスル』GMだった鈴木浩子と、その夫の健想が記者会見で初披露した。『ハッスル・ハウスvol・11』後楽園ホール大会でもこのポーズでシメようとしたが、違和感を覚える観客から大ブーイングを浴びてアタフタする始末。しばらくしてから夫妻は『ハッスル』を離脱するなど、とても運気アップが図れたとは思えないし、あげくに、DSEとその細木数子は『週刊現代』から揃って大バッシングを浴びてしまった……。ズバリ、パワーダウンなポーズだよ！



スリーカウントを取られただけで負けじゃない（上井文彦）

■1月4日 上井さん、村上の敗北を断固として認めず

新日本プロレスの東京ドーム大会で実現した新日本プロレスvsビックマウス・ラウド（以下、BML）の対抗戦。BML側の上井氏は実況席ゲストとして参戦。自軍の村上和成が永田さんにフォール負けされると、究極の持論をブチ上げて、敗北を認めない！ なんだ、それ!? そのうえ、この対抗戦の裏側では、前田日明がBML勢にシュート指令を下したという噂も流れた。〝ダーク・アントン〟と化した前田といい、意地っぱりな上井さんといい、とにかくその言動は見逃せない！

永田選手はプロとしてちょっとどうかと思います（所英男）

■『kamipro』No・95 所英男、永田弟の闘いぶりを批判

2005年大晦日の『Dynamite!!』で、レミギウス・モリカビュチスと闘い、見事総合デビュー戦を白星で飾った永田さん弟こと永田克彦。しかし、ストライカー相手に寝技でひたすら押さえ込むだけの闘いぶりに、レミーガの盟友であり、プロとして動きのある試合が信条の所英男が、珍らしく本誌インタビューで苦言を呈した。しかし、永田弟が当時所属していたチーム・キングスの〝キング〟こと青木良氏がこれを読んで激怒。所に対して謝罪会見を要求したとかしないとか……。なお、永田弟はのちに青木氏のもとを離れました

こんな団体、あと2、3回でつぶれるだろう（ケンドー・カシン）

■1月15日 〝王道〟キングスロード旗揚げ

全日本プロレスを退社した青木謙治氏と高橋英樹氏が、「ジャイアント馬場さんの作った王道プロレスが、いまの全日本にはない。我々は王道プロレスを目指したい」と、武藤全日本へのあてつけにしか思えないうたい文句で旗揚げした団体、キングスロード。しかし、王道を目指すと言いながら、フタを開けてみると〝王道〟らしからぬドタバタの連続。とくにターザン後藤vsブルージャスティスでは、後藤とカシンが闘うのかと思いきや、実際に闘うのは後藤一派の〝あゆみちゃん〟と愚乱・浪花。しかもグダグダのノーコンテストで終わり、後藤が「次は『クレパスしんちゃん』を連れてきてやる」と絶叫するという、どインディーを絵に描いたようなバカバカしい展開で観客が激怒。結局、キングスロードは、カシンの「すぐつぶれるだろう」というコメントどおり、わずか5大会で崩壊したのであった。

3年後に日本武道館大会開催を目指す（宮本和志）

■1月15日 〝王道〟キングスロード旗揚げ

そんなギャグ団体のエースに任命された、元・全日本の宮本和志。旗揚げ戦の挨拶では「3年後に日本武道館復帰を目指す」と、これまた武道館撤退を決めた武藤全日本へのあてつけのようなコメントを残したが、「3年も待ってくれるファンはいない。自分は馬場さんの元にいたけど王道とは何かわからなかったのに、（馬場さん没後、全日入りした）宮本にわかるのか？」と大森隆男にごもっともな正論で一刀両断されてしまったのであった。

陽海山は絶対に使わせない（オサムジム会長）

■1月20日 西島洋介、改名騒動に巻き込まれる

日本ボクシング界・貴重なヘビー級ボクサーの逸材として活躍していた西島洋介山が『PRIDE』参戦。総合デビューするにあたり、リングネームを一般公募。その中から「陽海山」が選出されたが、これに待ったをかけたのは西島の元・師匠、オサムジム会長の渡辺治氏だ。現在、西島と絶縁状態の渡辺氏によれば、陽海山という名前はもともと西島がボクシングデビューする際に渡辺氏が候補に挙げたが、西島本人が断った経緯があるという。渡辺氏は「山の字を外せ！」「榊原代表は、ジムを訪問して育ての親に敬意を払え！」という要求を突きつけ、あの〝加勢大周騒動〟ばりの展開をみせ始めたが、結局、法的には問題はないものの、西島サイドが無用のトラブルを避けるため、本名の「西島洋介」をリングネームに。これを「西島洋介山改め西島洋介改め陽海山改め西島洋介改名騒動」と呼ぶ。さあ、早口言葉で！

暴れてない、誰も殴ってない（ボビー・オロゴン）

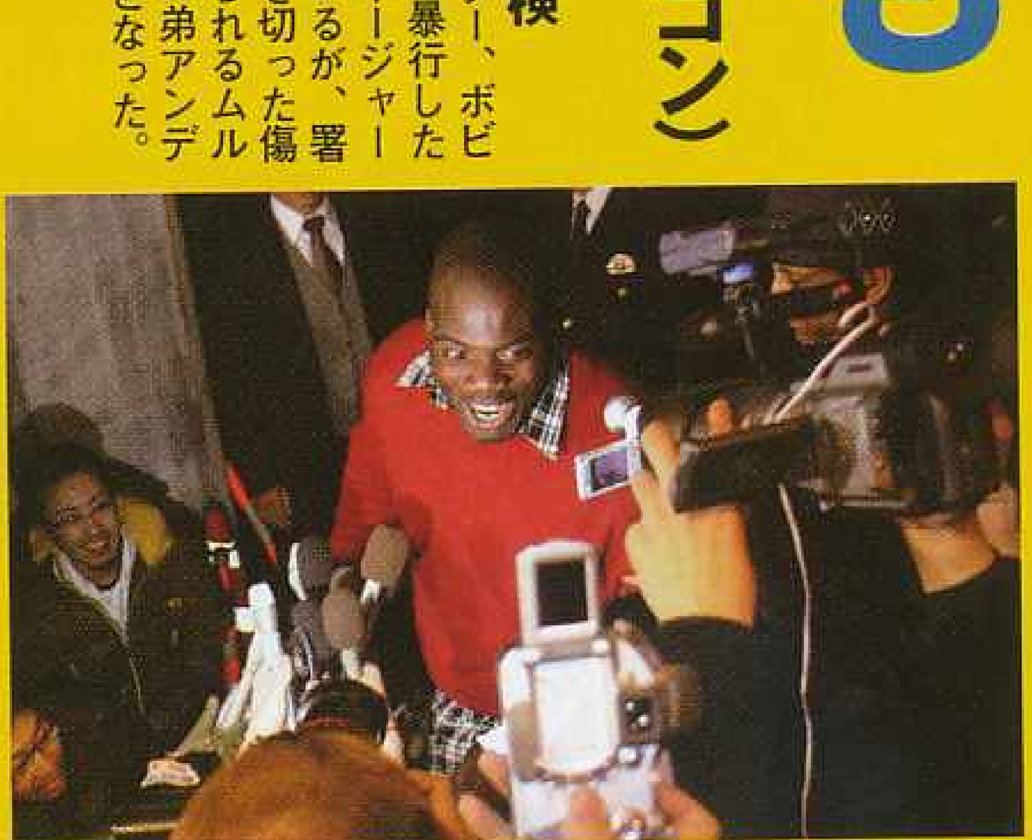
■1月25日 ボビー・オロゴン事務所に殴り込み書類送検

『Dynamite!!』2戦2勝（当時）を誇る、K-1のトップファイター、ボビーが、所属する芸能事務所アールアンドエープロモーションの事務所で暴行したとして、原宿署で事情聴取を受けた。一部報道では、ボビーの個人マネージャー〝通称ロッキー〟氏による〝裏営業〟が問題になったとも伝えられているが、署から出てきたボビーは満面の笑みにピースサインで登場。さらに口の中を切った傷を報道陣に見せ「殴られたの、俺！」と鈴木宗男の元・秘書として知られるムルアカ氏に逆に殴られたと主張した。なお、この事件の10日後、ボビーの弟アンディ・オロゴンのK-1デビュー戦が予定されていたが、ケガにより欠場となった。

アフリカではよくあること（ムルアカ）

■1月27日 ボビー・オロゴン謝罪会見

25日に暴行事件を起こしたボビーが、その二日後、ムルアカ氏同席のもと緊急謝罪会見を行なった。ボビーは「ボタンのかけ違いがあった。申し訳ございません」と、号泣しながら（でも涙は見せずに）謝罪。ムルアカ氏も「ボビーは私の弟分。人間誰しも間違いはある」と、謝罪を受け入れ、事務所も被害届を取り下げた。しかし、〝裏営業疑惑〟などの金銭問題や、暴行の有無については「アフリカではよくあること」とうやむやに。このときボビーは「よかったらムルアカさんと（格闘技で闘いたい）」と語ったが、もしかして『Dynamite!!』での対戦相手チェ・ホンマンは、長身のムルアカ氏との対戦を前にした〝仮想ムルアカ〟だったりするのか……？ いまから、07年の『Dynamite!!』に期待！



徳川幕府にたとえるとサイモン社長は慶喜になってほしくないですね（成瀬昌由）

■1月25日 成瀬昌由、新日本プロレス退団

史上最大級の大荒れとなった2006年の新日本プロレス契約更改。多数の離脱、自由契約選手を出したが、〝自由人〟こと成瀬昌由も退団し、晴れて〝リアル自由人〟となった。成瀬自身は「大円満退社」と言うが、「徳川幕府にたとえるとサイモン社長は慶喜になってほしくないですね」と幕末ファンらしい皮肉もポロリ。なお退団の理由は成瀬ブログによると「昔からの夢を実現するため」らしいが、その夢がなんなのか、まだ判明していない。

高齢者にひどい仕打ち（後藤達俊）

■1月27日 後藤達俊、新日本退団

大荒れの新日本プロレス契約更改。その厳冬査定は中堅レスラーを容赦なく直撃。これまで中堅悪党一筋に生きてきた名バイプレイヤー後藤も、〝肩たたき〟を思わせるような、屈辱的な提示をされた模様。この仕打ちに対して後藤は、日本刀を持ち出し「こらぁ、（サイモン）猪木出てこ〜い！」と暴れたり……はせず、「高齢者にひどい仕打ち。いまは嫁さんが怖い」とボヤキながら、フリーになることを決意。そして「オファーが来ないとしょうがないんで、皆さん紹介してください」と、さっそく報道陣相手に営業開始して、「オファーがあれば『PRIDE』でも、『ハッスル』でも出ますよ。来ないだろうけど（笑）」と、自虐的にアピールしたのであった。

俺も蝶野正洋のようなビジネスマンになる（天山広吉）

■1月上旬　天山広吉、契約更改前に息巻く

大荒れの新日本プロレス契約更改。その厳冬査定は、トップレスラーをも容赦なく直撃した！　「俺も蝶野正洋のようなビジネスマンになる」と、〝黒い交渉術〟発揮を示唆し、交渉に挑んだ天山だったが、会社側のあまりに低い提示に愕然。「離脱も辞さぬ」と、黒い揺さぶりをかけようともしたが、「低評価の原因はベルト流出にある」と、全日本の小島聡に〝脱水症状〟でIWGP王座を奪われたことを持ち出され沈黙。二度の保留後、「最後はうちのヤツ（理絵夫人）に報告して了解をもらわないといけないんで。たぶん最強やで……」と、年俸ダウンを奥さんにおそるおそる報告するのであった。

スーパーフリーになる！（柳澤龍志）

■1月下旬　柳澤龍志も新日本を離脱

大荒れの新日本プロレス契約更改。フリーとして新日本プロレスに定期参戦していた柳澤も契約を解除された。しかし、柳澤は前向きだった。「俺はもともとフリー。これから俺はスーパーフリーになる」と、突如として和田（真一郎）サンばりにスーフリ宣言をすると「今後は坂口道場で、カリスマ指導員になる」と豪語。さらに返す刀で、「古巣のパンクラスがガタガタしていると聞いている。買収して立て直す計画もある」と、「スーフリ」「カリスマ」「M&A」と、ここ数年のキーワードをちりばめて吠えまくったが、とりあえず06年12月現在、坂口道場の指導員ぐらいしか実現していないようだ。

上井は姉歯だ！（永田裕志）

■2月23日　永田さん、BMLの耐震偽造ぶりに疑問

ヒューザーの小嶋進社長や元・一級建築士の姉歯秀次氏らが暗躍した耐震データ偽造騒動。その追求・検証報道で世間は大騒ぎになったが、マット界でも我らの永田さんが、上井文彦氏や前田日明らがプロレス復興を掲げて活動していたビックマウス・ラウド（以下、BML）の骨格のなさをズバリ、指摘！　たしかに理念や言葉だけが先行して、現実的な骨組みに不安があったBMLではあるが、永田さんはなによりも上井さんが姉歯氏に酷似しているだけで、わざわざネタしているとしか思えない。あと、永田さんが他人の容姿をおもしろおかしく指摘するのって、なんだか楽しいですね！

足がお尻に当たっただけ（中山ドクター）

■2月24日　山本KID徳郁、ドクター暴言事件を謝罪

2・17修斗代々木大会で中山健児リングドクターに対し、暴言暴行行為を行なったとして、修斗協会から立ち入り禁止処分を受けていた山本KIDが、中山ドクターに謝罪し、和解したことを発表した。この事件に対し、修斗協会は当初「通常の社会ルールにおいてはもちろんのこと、格闘技選手としてはもっとも行なってはならない蛮行」と断罪し、KILLER BEE全選手の修斗全公式戦出場停止処分という重いペナルティを課したが、肝心の暴行は「足がお尻に当たっただけ」（中山ドクター）とのこと。もしかしたら、足が猛スピードでお尻に当たったのかとも思ったが、「軽く蹴られただけ」とのことだ。

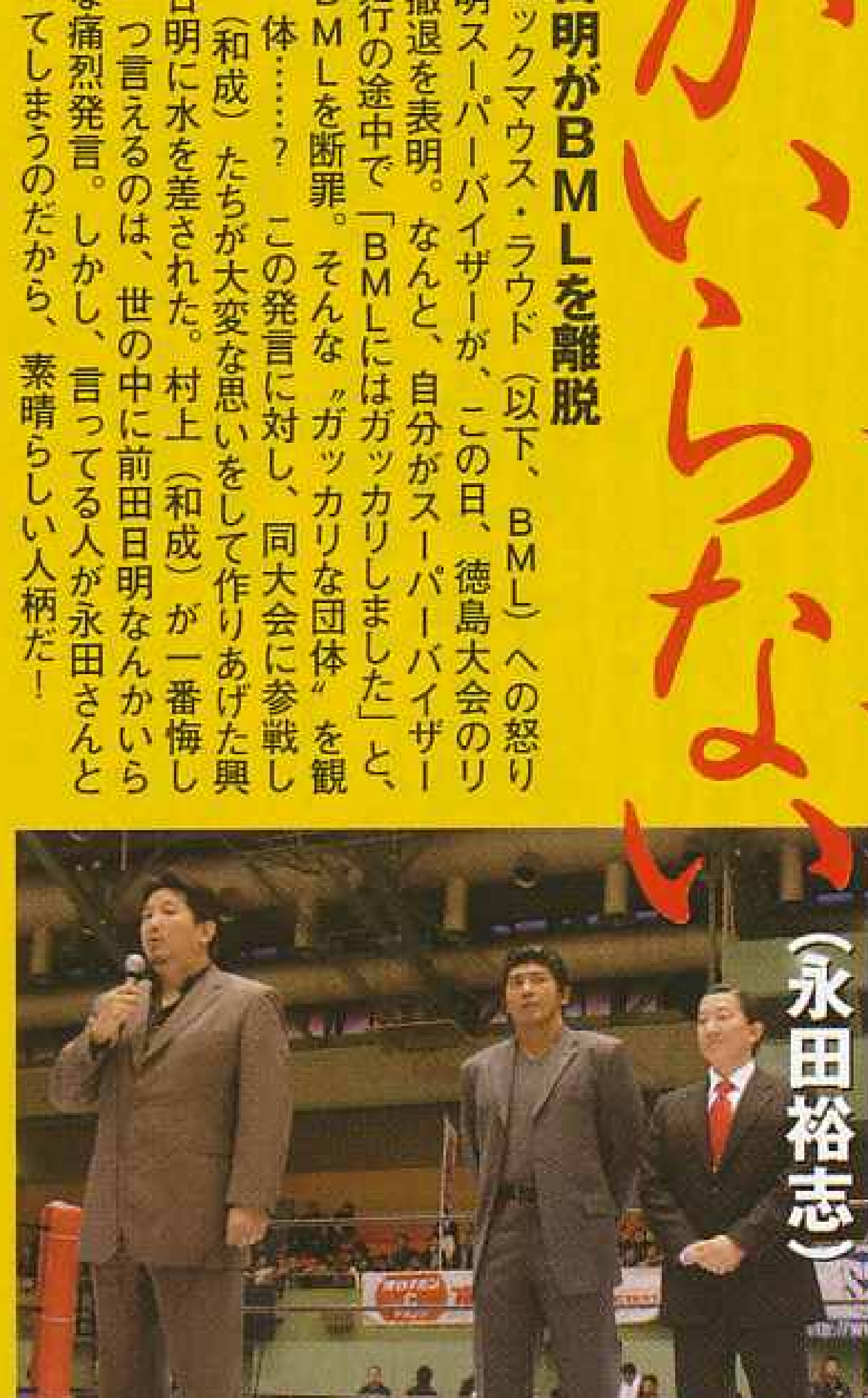


（ノゲイラvs田村の再戦は）誰も観たくないでしょう（榊原信行）

■2月24日　田村潔司、ノゲイラに完敗

3年連続、大晦日の『男祭り』で桜庭和志戦を熱烈オファーされながら、拒み続けた田村潔司が、誰も予想しないタイミングで『PRIDE』に登場！　なぜか15キロ以上体重差があるアントニオ・ホドリゴ・ノゲイラに挑んだが、結局ワンサイドゲームで一本負けを喫した。試合後、田村は「今後も目標として、ノゲイラを追いかけたい」と語ったが、田村vsノゲイラ戦再戦の可能性を報道陣から質問されたDSE榊原代表は、怖いくらいに冷たい瞳で「誰も観たくないでしょう」とピシャリ。やっぱり「榊原代表だけはガチ！」なのであった。

世の中に前田日明なんかいらない（永田裕志）



■2月26日　前田日明がBMLを離脱

1・4新日ドーム以降、ビックマウス・ラウド（以下、BML）への怒りを露わにしていた前田日明スーパーバイザーが、この日、徳島大会のリング上から同団体からの撤退を表明。なんと、自分がスーパーバイザーであるにもかかわらず、興行の途中で「BMLにはガッカリしました」と、BMLを観に来た客前でBMLを断罪。そんな〝ガッカリな団体〟を観に来てる観客の立場って一体……？　この発言に対し、同大会に参戦していた永田さんは、「村上（和成）たちが大変な思いをして作りあげた興行なのに、試合前に前田日明に水を差された。村上（和成）が一番悔しかったんじゃないか？　一つ言えるのは、世の中に前田日明なんかいらない！」と、ごもっともな痛烈発言。しかし、言ってる人が永田さんというだけで、なんだか笑ってしまうのだから、素晴らしい人柄だ！

俺の革ジャンを返してくれ!!（大仁田厚）

■4月1日　大仁田厚、革ジャンを盗まれる

売名行為ともとれる言動を繰り返す〝お騒がせ議員〟の大仁田厚が悲痛の叫び！　ZERO1・MAXの靖国神社〝奉納プロレス〟に出場した際、試合中に邪道の魂が込められた革ジャンを何者かに盗まれてしまった。大仁田が「命より大切な革ジャンです！　返してください！」と必死に呼びかけたかいもあり、「ついつい魔がさしてしまった」という都内在住の男性が大仁田の母親が経営するレストランを訪れ、返却。こうして「命より大切な革ジャン」は無事に大仁田の元に戻ったが、じつはその革ジャン、レプリカだったことが判明……。その微妙すぎる点を含めて、邪道イズム全開な事件だ！



いつか殺してやる！って思ってた（郷野聡寛）

■4月7日　失笑王が柔道王に殺意!!

『PRIDEウェルター級GP』の開催決定&出場選手決定会見が開かれ、郷野聡寛、瀧本誠、長南亮が出席。いきなり郷野が瀧本にさんざんに噛みつく大荒れの会見になった。どうやら郷野は、アブダビ王者という肩書きだけで大晦日に出陣してグダグダの試合をやった……じゃなくて！　〝柔道金メダリスト〟という肩書きだけで大晦日『男祭り』に参戦した瀧本誠が気に入らない。「会見で言ってることもつまらねえし、すべてにおいて俺の対極！」と言いきり、瀧本に対戦を要求。一気にガチンコムードが漂った会見場だが、そのドタバタに紛れて「去年もやったのに、また（ウェルター級GP）やるんですか？」とファンの本音をズバリ代弁したピラニア長南亮が一番シュートだったことを心にメモしておくように！

K―1出場は彼女をゲットするため（キム・ギョンソック）

■4月9日　シルム三銃士、K―1参戦！

格闘技熱が高まる韓国。K―1で成功を収めた〝シルムの横綱〟チェ・ホンマンに続けとばかり、シルム勢が続々と参戦！　そのシルム勢の不思議と笑いがこみ上げてくるデップリした容姿と、根拠なき自信を本誌は絶賛し続けたが、「K―1出場は彼女をゲットしたい」という〝ピュア・アイ〟なモチベーションだってたまらないんだ。よ～くわかった！　ゆうこりんな感じで、その姿勢のまま行け！

『殿、そろそろ決断を！』という手紙をもらった（藤波辰爾）

■4月14日　ドラゴン、『東スポ』紙上で新日本離脱を示唆

大荒れに荒れた新日本プロレスの契約更改。その中でも、最後まで揉めに揉めたのは、やっぱりこの人、ドラゴンだった！　これまで何度も〝離脱未遂〟を繰り返し、そのたびに、持ち前のコンニャクぶりを発揮して残留してきたドラゴン。しかし、今度ばかりは本気で離脱を決心するかと思ったが、案の定決断を先延ばしにして、ついに春を迎えてしまった。そんなドラゴンを見かねて、『無我』の支援者が「殿、そろそろ決断を！」という、抜群の内容の手紙を送付。それを見た〝裸の殿様〟ドラゴンが、ついに決起に踏み切った！　……と思いきや、ホントにそれを決心するのは、さらに二カ月後なのだから、ドラゴンのコンニャクぶりは筋金入りなのであった。

日本に帰ったら私は殺される!!（『猪木祭り』関係者）

■4月15日（発売号）『週刊現代』の『PRIDE』ネガティブ・キャンペーン
06年の秋頃、帰国したそうですけど、生きてますか——っ!?

俺は現場で藤波辰爾、一回も見てへんぞ!!（金村キンタロー）

■4月18日　金ちゃん、ドラゴン発言に激怒!!
新日本プロレス現場監督の長州力がインディーレスラーを起用することに坂口征二、木村健悟、藤波辰爾が「もう新日本じゃない」という具合に、それぞれ苦言を呈した。要するに、長州体制を批判するためのダシに使われたふうでもあるわけだが、怒りが収まらないのは金ちゃんだ。「坂口征二、木村健悟、藤波辰爾。インディーどうこうって現場見てない連中が勝手なこと言いやがって。長州は何を言われたって現場に立ってる。新日本が傾いたのは藤波辰爾が社長になってからやないか。責任を選手に押しつけんな！　俺は現場で藤波辰爾、一回も見てへんぞ！（当時はまだ新日本所属）」と、〝理不尽小僧〟の理不尽じゃない炎上劇が炸裂したのだった。

俺は丹下段平みたいなもん（前田日明）

■4月18日　前田日明、所英男にマンツーマン指導宣言
5・3『HERO'S』ミドル級トーナメント出場が決定した所英男を、前田日明がマンツーマン指導をすると宣言。所を『あしたのジョー』の矢吹丈に見立て、自らをジョーのトレーナー〝丹下段平〟と称した。しかし、前田段平による〝明日のための集中特訓〟のかいなく、所はブラックマンバに秒殺KO負け。やはり、前田SVも自宅特訓ではなく、ちゃんと泪橋の下に〝丹下拳闘ジム〟を作らないとダメなのではないでしょうか？　でしょ？

悩むサクの背中をボンと押しちゃった（上杉昌隆・弁護士）

■5月3日　桜庭和志、『HERO'S』へ電撃移籍！
コンノヤロォ〜!!（高田総統調）。



ヴァンダレイ・シウバの姿も目撃（『東京スポーツ』）

■5月3日　サクに続いてシウバも『HERO'S』へ移籍!?
桜庭和志が電撃登場した5・3『HERO'S』！　そんな一大事でマット界が混乱する最中、〝日付以外はすべて誤報〟とリスペクトされる『東スポ』が火にガソリンを注ぐスクープ投入！　なんとPRIDEミドル級王者シウバの姿も当日の『HERO'S』会場内にて目撃され、移籍が濃厚というのだ!!　……と思ったら、そのあと、またたく間に関係者がその報道を全面否定！　いったいどういうことだよ!?　おそらく和田（良覚）さんを見間違えた説が有力だが……。



ケツから毒霧が出た（武藤敬司）

■5月13日　グレート・ムタ、メキシコ初登場
ウルティモ・ドラゴンが昨年に引き続き、ルチャリブレの殿堂アレナ・メヒコで「闘龍門9周年記念興行」を開催。その目玉として、グレート・ムタ（武藤敬司）を招聘し、ムタのメキシコ初登場が実現した。しかし、世界のマットで闘ってきたムタであるが、慣れないメキシコルールに大苦戦。ムタはしゃべらないはずなのに、試合中に「誰が味方だか、わかんねぇ〜よ！」というボヤキまで飛び出した。さらに、メキシコの〝洗礼〟は続き、試合後は「便所でケツから毒霧が出た」とのこと。ルチャの世界はかくも奥が深い。

ねつ造です（榊原信行）

■6月5日　DSEがフジテレビ放映中止に対し、ファン公開記者会見開催
フジテレビ放映中止を受け、ファン600人を含む、総勢900人を集めた緊急記者会見を開いた。この会見には、榊原代表ほか、『PRIDE』に関係する選手54人が出席。榊原代表は〝疑惑〟を完全否定し、命懸けで『PRIDE』を守ると宣言した。そして会見終了間際、女性ファンの一人が「榊原さん、恫喝してないんですか？　本当に信じていいんですか？」と、突如大声で質問。それに対し、榊原代表は怖いぐらい真っすぐに質問者を見つめながら「大丈夫です。すべてねつ造です」と、キッパリ言いきった。

ますますもって地上波では放送できませんよ〜〜（HG）

■6月17日『ハッスル・エイド2006』にザ・エスペランサー登場
〝フジテレビ・ショック〟のあおりを受け、決定していた初の地上波全国放送も中止。さらにテレビ局との関係から、芸能人の出場はできなくなるのではないか？　と危ぶまれた『ハッスル・エイド2006』。しかし、フタを開けてみれば、HG＆RGはもちろん、〝有田総統〟まで登場し、まさにタイトルどおり「ハッスルを救え！」とばかりに、〝ハッスルLOVE〟が結集し、大爆発した。最後は〝髙田総統の化身〟ザ・エスペランサーまでもがついに登場。これに対しHGが「スペルマンサーとのTバックマッチ、フォー！　これは、ますますもって地上波では放送できませんよ〜〜」と勝手に盛り上がり、見事に逆境すらも肥やしにする、『ハッスル』の底力を見せつけたのであった。

ミルコップ選手（南明奈）

■7月1日　フジテレビ撤退後初の『PRIDE』開催！
フレッシュ・サポーターとしてこの大会より起用された、現役高校生アイドルの南明奈ちゃん！　格闘技はまったく触ったことがねえためトンチンカンなコメントを乱発！　こういうときに「格闘技をナメるな！」などといきり立つガチバカが続出するが、そこのキミ、ちょっと落ち着いてほしい。大げさに声を張り上げる大御所や、アナウンサーが閉口するくらいはしゃぎまくるタレントより、謙虚かつけなげに「大変だったけど楽しかった！」とブログで振り返る明奈ちゃんのほうがよっぽどマシ！　温かく長く見守るべき！　というわけで、次の『PRIDE』では、セカンドDVDのタイトル『あきないあきな』（飽きない明奈）、セカンド写真集のタイトル『HARU NATSU AKINA』（春・夏・秋な）という、アントンに通じるゴキゲンなダジャレを期待してま〜す！　ガンバ！（死語）。

マイネームイズ、タダシ☆タナカ（タダシ☆タナカ）

■7月10日　サップが外国人記者クラブで会見を開く
5・13K-1オランダ大会でのアーネスト・ホースト戦の試合直前に、バンデージを巻いたまま逃走という〝敵前逃亡事件〟を起こしたボブ・サップ。そのあと、しばらく沈黙を続けていたが、6月27日に突如マスコミ各社に〝声明文〟を送りつけ、事件から58日後の7月10日、ついに記者会見で公の場に姿を現わした。そこで、あらためて「K-1欧州GPの真相について」語ったサップであったが、この日は外国人記者クラブでの会見にもかかわらず、海外メディアはたったの3社。日本のマスコミによる〝報道自粛〟を見越しての海外向け会見だったのだろうが、その目論みは石原真理子同様、外れたようだ。しかし、日本人記者の中にも〝真実を伝える人間〟が存在したのであった。そう、〝自称・真実を伝えるジャーナリスト、タダシ☆タナカ氏の姿があったのだ。タナカ氏は会見場の最前列に陣取り、やる気満々。そして真っ先に質問の手を挙げ、「マイネームイズ、タダシ☆タナカ」と堂々と自己紹介。そして英語で「当日、石井館長と会ったのか？」など、〝カンチョー・イシイ〟に関する質問を連発するご立派なジャーナリストぶりを発揮したのであった。しかし、質問を終え席に戻ると、タナカ氏はおもむろにケータイを取り出し、なんと写メールでサップを繰り返し撮影！　取材者とは思えぬその姿は、まったくもって素人が紛れ込んだようにしか見えないのであった。



38万円の席を作る（アントニオ猪木）

■7月15日　『INOKI GENOME』で"猪木vsアリ"を再現

アントニオ猪木vsモハメド・アリ30周年記念イベントとして企画された9・1『INOKI GENOME』。この企画にノリノリのアントン総帥は、猪木vsアリ戦のリングサイド席と同額となる38万円の高額席を作ることを明かした。その後、アントンはことあるごとに「38万円の席が全部売れちゃった」と発言していたが、皆さんご存知のとおり、このあと『GENOME』は3度延期。それでも「全部売れちゃった」という38万円のチケットが払い戻しされたという話は、もちろん伝わってきていない。



手が当たっただけ（北の湖理事長）

■7月15日　露鵬がカメラマンに暴行し、3日間の出場停止

大相撲西前頭3枚目の露鵬が、名古屋場所7日目、大関千代大海との一番のあと、千代大海と口論となり風呂場のドアのガラスを割るなど大暴れ。さらにその模様を撮影しようとした『毎日新聞』と『中日新聞』のカメラマンに平手で暴行を加え、打撲を負わせてしまった。この件について北の湖理事長は、「暴行と誤解されてもも仕方がないが、手が当たっただけ」との見解を示した。ただ、KIDにしろ、露鵬にしろ、闘う男の手や足が素人に当たると、当たったほうは「当たっただけ」ではないのであった。

永久電機の実験は大成功。大変な数字が出た（アントニオ猪木）

■7月26日　アントンの大発明、今年こそ……!?

何が大変なんだがよくわからないが、あくまで実験が成功しただけです。そのうえ「アメリカで実験をやってるんだけど、夏休みに入っちゃうと長いんだ、アイツら」と、世紀の大発明より夏休みを優先する研究者を雇ってる模様。07年も首をなが～～～～くして、完成報告を待とうか。



催眠術の効果は、明日の曙の試合を見ていただければわかります（佐山聡）

■7月30日　曙、佐山の催眠効果でチェ・ホンマンに快勝か!?

あなたは絶対に勝て～る!!　という感じでマット界一の催眠術師が協力するも、曙は眠るように敗北！　このコンビ、06年の大晦日決戦に向けても、すこぶるゴキゲンな合同練習を敢行。今後も継続してほしいです!!

リバウンドにはビックリした（谷川貞治）

■7月31日　曙、ダイエットに失敗!!

"3度目の正直"となるチェ・ホンマン戦に向けて、大減量に挑戦した曙さん。試合前日の会見では、220キロあった体重を194キロまで絞ったことを明かし、"動ける身体"をアピールしたが、どういうわけかゴング直前の選手紹介では「202キロ」とコールされた！　契約体重計量後に体重を元に戻す選手は数多いが、曙さんの場合は……。

どんなもんじゃ～い!!（亀田興毅）

■8月2日　疑惑の判定はどんなもんじゃい？

日本中から非難を浴びたWBA世界ライト級王座決定戦のファン・ランダエタ戦、疑惑の判定騒動！　それまで亀田を絶賛していたのに、あの二宮清純ですら手のひらを返させるから、いかにあの試合以降の"亀田擁護"が危険な行為だったことがうかがい知れる。しかし、あの誰でもツッコミを入れられて楽しめるスキだらけの姿勢は、100年に一人の魅力的な逸材!!　じつは気が小さくて好青年らしい亀田興毅だが、懲りずに無駄に強気でヒンシュクを買う言動を続けてほしいものである。あと、大毅のフルコーラスのカラオケ熱唱、和毅の弁髪もそのまま続けて!!

『PRIDE』の一員になれてうれしい（マイク・タイソン）

■8月19日　マイク・タイソン、『PRIDE』ラスベガス大会イベントに登場

この日、ロス郊外にある『FOXスポーツ・グリル』で行なわれた、『PRIDE』ラスベガス大会に向けたファンイベントに、なんとあのマイク・タイソンが登場！　壇上でヒョードル、榊原代表らと握手を交わし、「『PRIDE』の一員になれてうれしい。このリングで俺も闘えたら幸せだ」と発言した。これを受けて、榊原代表はタイソンvsPRIDEファイターの大晦日マカオ決戦をぶち上げたが、タイソンは来るはずだった10・21『PRIDE』ラスベガス大会会場にも現われず、そのあとはすっかり名前を聞かなくなってしまったのであった。タイソンとビジネスをすることは、結局「大損（タイソン）」しなきゃいいんですけどね。ダーッハッハ！」（byアントン）ということなのだろう、きっと。



市長に卍固め!!（猪木快守）

■8月18日　ゲノム・ソウル炸裂！　熱海市長選に出馬!!

アントン実兄にしてテノール歌手の快守氏がなぜか熱海市長選に出馬！　その表明会見に静岡県内以外のマスコミで唯一、本誌が潜入した。その独占徹底レポートはNo・102を一読していただきたいが、おそらくここ10年で最高最強の会見だったと断りを入れておく。なにしろ記者の鋭い質問に対して「このあとコンサートがあるものですから、声がかれるといけませんので、これにて失礼させていただきます」とシメるのだから、ゲノムの片鱗はビンビン感じることはできるだろう。というわけで、選挙の結果は言わなくてもいいですよねっ！

太陽系第三惑星地球の格闘ファンの諸君、待たせたな（火星人）

■8月21日　MARSパンフに笑撃メッセージ！

そのドタバタぶりで毎大会、注目を浴びていたMARSシリーズ。MARSの司令塔、天野勇気氏の癒し系の性格にも惹かれて、本誌は無駄に特集していたわけだが、ズバ抜けた破壊力で我々を失禁寸前に陥らせたのが、新宿FACE『MARS ATTACK01』大会パンフに掲載された火星人からの挨拶文だ。「宇宙一"空気が読めない"団体がワレワレMARSだ！」という出だしからずいぶんゴキゲンなこの火星人。「"格闘技界のこと全くわかってねー成金だろ？"だの"デカいハコでやりゃあP●●●●みたいになれると勘違いしてる成金だろ"みたいなオクソクが、世界中を飛びかったのも、実は重々わかっておる」とか「ニホンじゃテレビでやらない格闘技は、無いのとおなじらしいからな。誰もまだ、彼らのことは知らないだろう。だが、俺たちは、そこに風穴を開ける」と侵略宣言！　最後は「夏の終わりのちっぽけな侵略開始宣言、見に来いよ」とクールに締めてみせたが、この火星人はMARSに二度と現われなかったのである。……いったいなんだったんだよ、これ。火星人、出てこ～ひ！



スーパーバイザーってなんなのかなって思った（前田日明）

■8月24日　桜庭和志、ケスタティス・スミルノヴァス戦であわやの大惨事!!

本当に頼むよ、日明兄さん！

こらぁ、森ぃ！悪そうな顔しとるのぅ！（〝brother〟YASSHI）

■8月27日　馳浩引退試合に森喜朗元総理来場

現職文部科学省副大臣レスラー馳浩が、この日の両国大会でついに引退。リングサイドでは同郷の森喜朗元総理までもがSPを連れてリングサイドで観戦したが、このVIPに対して、なんと馳の対戦相手であるブードゥーマーダーズの〝brother〟YASSHIが、マイクで暴言を浴びせたのだ！「森ぃ！　悪そうな顔しとるのう。おまえ、国会の黒幕らしいやないか。そのでっかい腹に何が詰まっとるんや？　金か？　おまえのようなヤツが総理大臣やっとったから俺みたいな悪ガキができんねん」。一国の元首相相手にこの言いぐさ、さらにツバまで浴びせかける暴挙！　これに対し馳もマイクを握り「おい、チンカス野郎！」といきなり放送禁止用語炸裂。そして「そんなおまえでも、こうして立派な社会人になれたのは、学校の先生のおかげだろう！　少しは文部科学省に感謝しろ！」と、見事な〝答弁〟をやってのけたのだった。なお、森元首相はYASSHIのマイクに本気で怒っていたらしいが、すべてをひっくるめてこの日の試合をプロデュースしているのは、もちろん陰でほくそ笑む馳浩、その人なのであった。



昨日、両国大会にて一部出場選手がご来場のお客様に対して、不快な言動をしたことを深くお詫び申し上げます（武藤敬司）

■8月28日　武藤敬司謝罪

というわけで、翌日、さっそくお詫びしておりました（笑）。

非常にレベルの低い試合を見せられるはめになった（髙田延彦）

■9月15日『PRIDE無差別級GP決勝ラウンド』大爆発も……？

ミルコ、ジョシュ、ヴァンダレイ、ノゲイラのベスト4がマット界史上に残る激闘を繰り広げたGP決勝戦。己の誇りを懸けた4人の闘いぶりに、髙田本部長も感動と興奮を隠しきれなかったが、しかし、西島洋介、中尾芳広、中村カズらの試合が低調に終わったことには大苦言！　「最低とは言いませんが」と前置きをしたからソフトに叱咤するかと思いきや、「見せられるはめになった」と冷酷に突き放す！　髙田総統の影がギラリとほの見えた瞬間であった。というか、最近の本部長は総統と〝ソウトウ〟融合しまくってますね。な～んってな、ダハハハハ！（なぜかアントン調）。



当初、所選手にこのカードをオファーしたら、初めて断られました。でも、数日後には快く受けてくれました（谷川貞治）

■9月26日　所英男vs金子賢決定

05年大晦日の『PRIDE男祭り』に出場していた俳優・金子賢が、『HERO'S』参戦！　これぞK―1！　と言いたくなる、まさに『Dynamite!!』な移籍だが、ここで問題となるのが対戦相手だ。ちょっと苦戦しただけで、何を言われるかわからないリスキーな相手である芸能人とは、誰でも闘いたくないもの。これまで『HERO'S』に出してもらえるだけでありがたい」と、どんなオファーも断ったことがない所英男も、さすがに金子戦は断ったようだ。しかし、その数日後にはなぜか「快く」受けるはめに……。テレビのスターでい続けるのは大変なのである。

挨拶がなかった（前田日明）

■10月8日　前田日明、金子賢の『HERO'S』参戦に大激怒!!

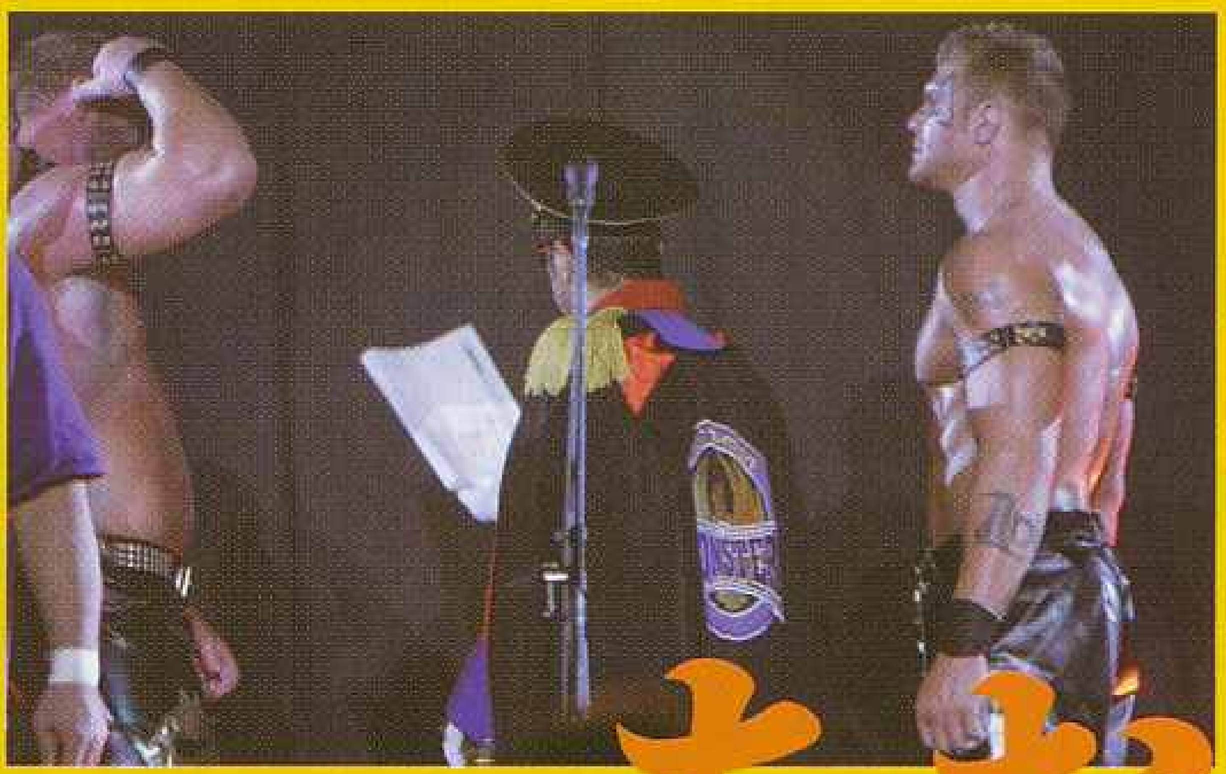
今年一番、ホットだった抗争劇。スーパーバイザーが出場選手に激怒という、客観的に見ると非常にくだらない論争といえば論争ですが（要するに、発表する前に処理すべき話ということ）、『HERO'S』の大爆発に火をつけたので、おもしろそうなところを抜き出してご紹介します！「あのね、話にならない話なんだけどね！」「でしょ!?」「俺が現役だったら俺がやって半殺しにしてやりますよ！」「HOW ARE YOU?と言われて無視するか？（記者の肩をつかみながら）」「某テレビ局の人間から出してくれというのがあったらしい」「あたりまえやんけ!!」「金子くんが先輩（小林旭※名前が出た理由は各自調査）の顔をつぶすのかどうかと思う」「某テレビ局の某プロデューサーが悪いんや!!」――以上、アキラのズンドコ節、ひさしぶりに爆発！

軍団入りの条件は〝強くて悪くてカッコイイヤツ〟（天山広吉）

■10月2日　恐怖!!　天山が悪の軍団を結成！

新日本プロレスのヒール軍団の習性といえば、かならず「本体をぶっ潰す！」とがなり、新日フラッグに黒スプレーで噴射するのが常だが、天山の新軍団入りするためには「強くて悪くてカッコイイヤツ」でなければいけないのである。リーダーの天山いわく「徹底的に悪いことをする！」という恐怖の軍団の名前は「G・B・H」（グレート・バッシュ・ヒール）！「H・B・K（ヒトシ・ボッシュート・クサノ）」ではない。そして以前、永田さんから「ビッグ・フェイス・ラウド」と一方的に命名されたことに腹を立てた天山は、「許さない！」と悪者らしからぬ発言。はたして悪者になりきれるのか……？　オラー!!





おい、忘れちゃったよ!!（髙田総統）

■10月9日　マイクの達人・髙田総統に異変発生！

『ハッスル19』大阪大会で大ハプニング!?　髙田総統が登場すると、古くからの友人の髙田延彦本部長の子どもの出生届が認められた件を受け、会場からは「おめでとう！」の声が飛ぶ。髙田総統は「いいよ、それはなしにしてくれよ。リズムが狂うんだよ！おい、よ～く聞いておくんだ……」と話し始めるも、なんと「おい、忘れちゃったよ。忘れちゃったよ！」と、不思議なコメントを連発！（それでも威風堂々だから、スゲエ！）。戸惑う観客を尻目に「おい、どうするんだ。ちょっと持ってこい！」と言いはなち、客席に背を向けると、なんと台本らしきものを確認……。のちに髙田本部長が電話で問いただしたところによれば、「あれは今日、発言することのメモ帳」で決して台本ではないとのこと。どんなに長いマイクアピールもよどみなくこなす総統だが、「ああいうことが起こるだろうという予感はあったみたいだよ、総統には」（髙田本部長）

人生ってのはな、そもそも残酷なもんなんだよ！（フィル・バローニ）

■10月24日『PRIDE』初のラスベガス大会開催！

格闘ゴールドラッシュをつかむため、『PRIDE』がついにラスベガスに進出！　主役はなんと〝筋肉三兄弟〟だ！　まずコールマンは試合前に「みんな俺が死ねばいいと思ってるんだろうが……」とコメントし（おまえ、被害妄想だよ！）、ランデルマンはホテルの中から縄跳びをしながら公開練習のリングに登場（おまえ、張りきりすぎだよ！）。バローニは、コールマンと娘の感動物語につまらない正論をぶつける女性記者を一喝！（おまえ、男だよ！）。勢い余って、ランデルマンにはドラッグテストで〝死人の尿〟差し替え疑惑も表沙汰に！（お、おまえ、人間じゃないのかよ!?）。母国開催ということで、とことん無駄にパワフルな筋肉三兄弟なのでした！（結論としては、おまえら、大好き！）。

イノキ氏は近年、口ばっかりで何も成し遂げたことはない（韓国メディア）

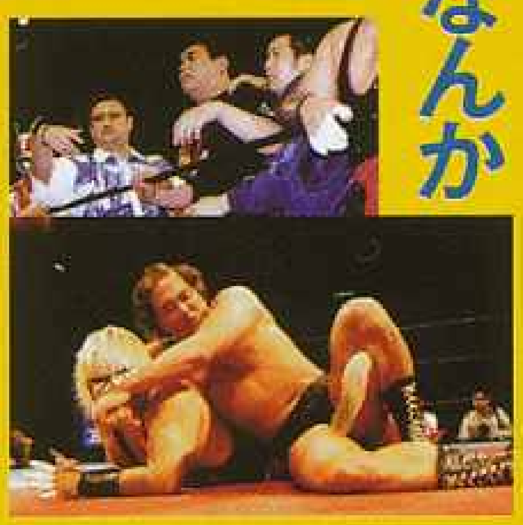
■10月某日　韓国メディアで『INOKI GENOME』中止の一報

日本での度重なる中止の末、なぜか11月24日に韓国・ソウルで開催されると発表されていた『INOKI GENOME』。これは日本でもおなじみのリー・ガクスーが主催するXWFという団体が運営する大会に『GENOME』の冠を被せて行なうということで、さすがに開催されると思いきや、正式なアナウンスがないまま、うやむやに3度目の延期決定！　韓国のメディアでは大会前から「イノキ氏は近年、口ばっかりで何も成し遂げたことはない」と、開催が危ぶまれていたようだが、イベントの中止＆延期天国でもある韓国でここまで言われるのだから、さすがはアントンと言えるだろう。それにしても、先の38万円席同様、『INOKI GENOME』観戦ツアーを申し込んだ人には、ちゃんと料金は返金されたのであろうか？　まさか、〝手作りの1000円札〟で返金されたわけじゃ……。

場外乱闘が裁判沙汰になるなら、ブッチャーなんか何回告訴されなきゃならないんだ（大仁田厚）

■10月26日　大仁田厚が場外乱闘暴行裁判を上告

〝自称・タイゾー議員の教育係〟大仁田厚が、かねてからセッド・ジニアスとのあいだで争われていた場外乱闘暴行裁判の倍賞命令を不服とし、上告する意向を示した。これは、2003年にUNWだか、悲しき天才興行だか、ナポレオン興行だか、とにかくジニアスが主催する興行に大仁田が参戦した際、場外乱闘で大仁田の公設第一秘書である中牧昭二に「打ち合わせにない」顔面蹴りを食らい視力が著しく低下したとして1500万円の損害賠償を求め訴えたもの。東京地裁は大仁田の使用者責任を認定。78万円の賠償を命じ、二審も一審の判決を支持し、大仁田側の控訴を棄却していた。この決定に対し大仁田は「場外乱闘が裁判沙汰になるなら、ブッチャーなんか何回告訴されなきゃならないんだ。こんな判決を認めてしまえば日本のプロレスは成り立たなくなってしまう」と、〝プロレスのために〟断固として最高裁まで争う決意を表明した。こうなると争点は、中牧の場外顔面蹴りが〝プロレス〟なのか、〝暴行〟なのかということ。とりあえず、リンチまがいの〝場外乱闘〟とブッチャーを確信犯的に一緒にする大仁田も、事件の告発本になぜか関係ない猪木vsシン伊勢丹事件の裏側やプロレスの仕組みなどを書いて売ろうとするジニアスも、どっちもどっちであり、この二人の争い自体がプロレス界にとって害以外のなにものでもないことだけはたしかなのであった。



皆さんはリアル中学生です



■10月29日　美濃輪育久が母校の中学校で講演会

〝本能のリアル・プロレスラー〟美濃輪育久が、母校である岐阜県羽島市立羽島中学校で講演会を行なったが、そこで衝撃的な爆弾発言が飛び出した！　生徒からの「リアル・プロレスラーとはなんですか？」という質問に対して「僕はずっとプロレスラーになりたいと思っていて、いま実際にプロレスラーになっている。これが〝リアル〟です」と美濃輪。はあ、たしかにそうだが……。「皆さんも小学生の頃は早く中学生になりたかったと思うんですけど、いま実際に中学生ですよね？　だから、皆さんは〝リアル中学生〟なんです」と続ける。はあ、それもたしかにそうだが……。「〝いま〟ということが〝リアル〟なんで、皆さんも〝俺は中学生だ！〟という気持ちで生きてほしいです」と、不思議説法で力説し、後輩たちを美濃輪ワールドに引き込んでいった。〝リアル・プロレスラー〟の意味が、〝いま実際にプロレスラー〟というだけの意味だったとは……。締めのSRF8回をろくに説明せずに初めて生徒をおいてけぼりで敢行！　一体感がなくグダグダで終わってしまったが、美濃輪育久だからも問題なし！　国会で青島幸雄が決めたのだ!!（追悼!!）。

準決勝では負けましたが、ケンカでは負けてません！（三崎和雄）

■11月5日　三崎和雄、奇跡のウェルター級GP優勝!!

ウェルター級GP決勝ラウンド一回戦にて、パウロ・フィリオに一本負けを喫したが三崎だが、そのパウロが負傷のため決勝戦を棄権！　繰り上がりで決勝進出をはたし、デニス・カーンを破って優勝するというミラクルを起こした！　じつはパウロは一回目のドクターチェックをクリアしており、三崎は出番なしと判断してすでに帰り支度を整えていた。試合開始5分前に繰り上がり出場の知らせを伝え聞いたという。スゲエ!!　というわけで、どう考えてもフィリオには〝ケンカでも〟負けていたと思うんだが、三崎の奮闘ぶりに免じて聞かなかったことにしましょう。



もっと時間をください（アントニオ猪木）

■11月16日『INOKI GENOME』またまた延期!!

年間を通じて一番、楽しませてくれたイベントといえば、『INOKI GENOME』だ。延期に次ぐ延期で、〝破綻興行〟への期待感は高まって、もうアントンの言葉も奮いたつものばかり！「何度も言ってるが、負け戦はしないよ」と自信満々で（開催のメドは立ってないが）、「38万円のリングサイドチケットは現時点で50枚も売れている」と余裕しゃくしゃくだし（でも、開催のメドは立ってないが）、「体調が良ければモハメド・アリも来ます！」と豪語（やっぱり、開催のメドは立ってません）。しかし、残念なことに開催までに「もっと時間をください」とアントン。ああ、時間がないなら延期もしょうがないですよね（無表情で）。どうやら今年もずいぶんと楽しませてくれそうだ！



私は妖精。残念ながらリングには上がれないの

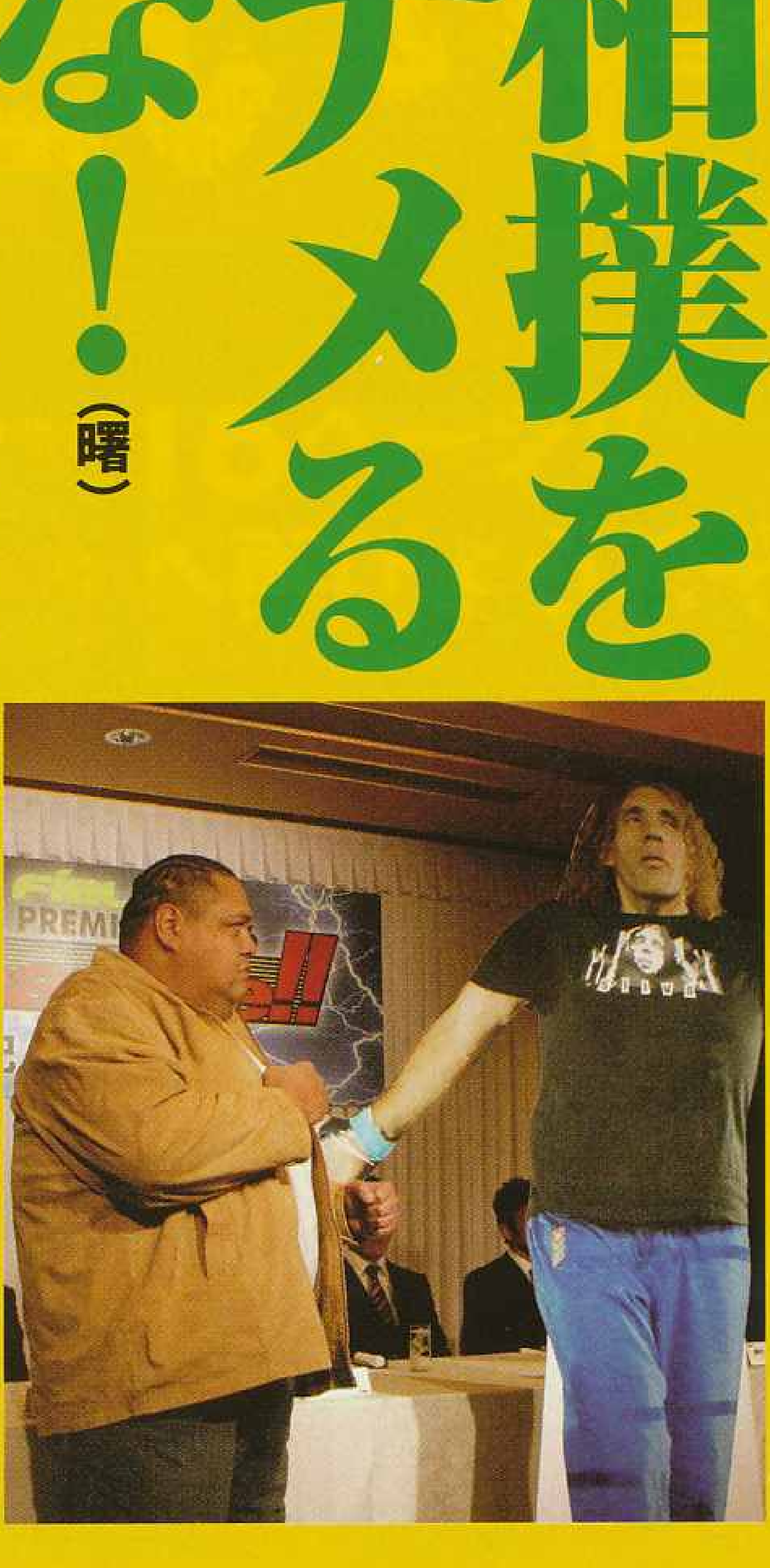
■11月23日『ハッスル・マニア2006』のオープニングに〝えい子〟似の〝妖精さん〟登場

ハッスルの年間最大のイベント『ハッスル・マニア2006』。ここに〝GMW〟こと坂田亘は、GM就任前から「えい子を呼ぶ！」と公約していたが、結局は〝大人の事情〟で来られないはずだった。しかし！　なんと、『ハッスル・マニア』のオープニングに「『ハッスル・マニア』に小池栄子～～！」の歌とともに、〝えい子〟ソックリの〝妖精さん〟が登場！　〝魔法によって〟残念ながら、リングには上がれず、GMWとのツーショットも実現しなかったが、『ハッスル・エイド』での有田総統ばりの〝男気〟を妖精さんも見せてくれたのであった。

相撲をナメるな！（曙）

■12月9日　曙vsジャイ・シル、世紀の一戦実現！

誇りは誰にも奪えない！　……こんな魂が震える言葉を吐けるのは、曙さんしかいないって!!



とうとう来るところまで来てしまった（谷川貞治）

■12月19日　ボビー・オロゴンvsチェ・ホンマン戦、実現！

No・106のインタビューで「いまはコアなカードの時代」と発言した翌日に曙vsジャイ・シル戦を発表してくれた、自称〝ヒョードルより強い男〟谷川FEG代表がまたやってくれた。なんと『Dynamite!!』でボビーvsホンマン戦実現！　この超異色の顔合わせには驚きだが、なぜかマッチメイクした張本人が他人事なコメントをしていることにも唖然！　やっぱり谷川さんは凄い!!　そして、このカードこそがK－1のコアであることを肌で理解した次第なのであります。

ゆだねてごらん（森本レオ）

■12月17日　石原真理子、「森本レオにレイプされ、処女を奪われた」と衝撃告白！

告白本『ふぞろいな秘密』（双葉社）で男性タレントとの恋愛遍歴を実名暴露して、芸能界を激震させた石原真理子が、12月19日付けの『東京スポーツ』で、今度は「17歳のときレイプされ、処女を奪われた」と衝撃告白！　その処女を奪った男とは、なんとプロ格者としても知られる、我らが森本レオ！『東スポ』によると石原は、レオの自宅で演技指導を受けた際、突然覆いかぶさられ、レオの優しい声で「ゆだねてごらん」などと言われ、うっかりヤられちゃったのだという。レオはかつて水沢アキからも「17歳のときにレイプされ、処女を奪われた」と暴露されたことがあり、女性誌などで反論するも、〝処女ハンター〟のイメージを消すことは、もはや難しいだろう。こうなるとやはりここは、スキャンダルを経営に結びつける猪木イズムを発揮し、おもいきって『ハッスル』参戦に期待したいところ。TAJIRI、金村キンタローとエロオヤジトリオを組むもよし、乙女軍団に「キャ～、私の貞操が奪われちゃうぅ～！」と言われるもよし、ニューリン様に「このエロジジイ！」とムチで叩かれるのもよし、だ。さあ、ゆだねてごらん。



珍事も、メカも、名勝負も

2006年 出てこいや～!!

2006年マット界を振り返る 総力全16ページ!!

——激動の一年へ再びようこそ——



2006年 1»2月を振り返る！

PRIDE無差別級GP前哨戦で波乱！あの″野獣″にPRIDE参戦の噂も

『男祭り』が視聴率戦争で大健闘 二月大会では大どんでん返しが……!!

2005年大晦日、『PRIDE』はその歴史においてある頂点を迎えた。『男祭り』地上波中継の平均視聴率が16・2パーセントを記録。ライバルである『Dynamite!!』の14・8パーセントに、わずかながら勝利したのである。

それまで格闘技ファンのあいだでは″視聴率はK―1、会場の熱では『PRIDE』″が定説だった。老若男女、お茶の間に支持されるのがK―1で、コアなマニアを熱狂させるのが『PRIDE』である、と。そんなイメージを、2005年の『男祭り』は覆してしまったのだ。あれだけコアな、『kamipro』的にいえば″変態″向けのコンテンツが、お茶の間にもウケてしまったのである。

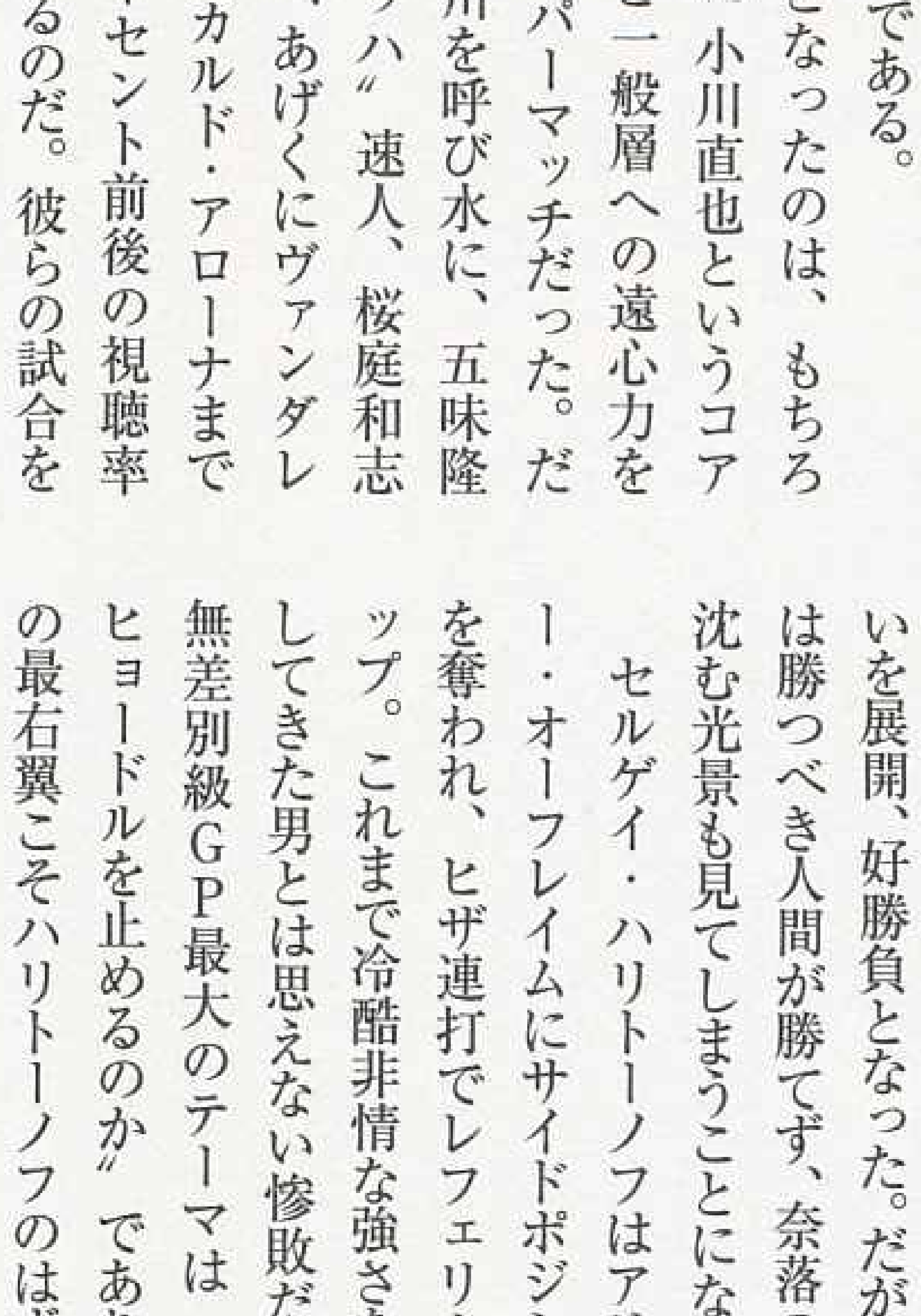
その原動力となったのは、もちろん、吉田秀彦vs小川直也というコア層への求心力と一般層への遠心力を併わせ持つスーパーマッチだった。だが、吉田vs小川を呼び水に、五味隆典vs桜井″マッハ″速人、桜庭和志vs美濃輪育久、あげくにヴァンダレイ・シウバvsヒカルド・アローナまでが軒並み20パーセント前後の視聴率を獲得してもいるのだ。彼らの試合を″お茶の間″が支持したという事実は、『PRIDE』のスタッフ、選手に大きな勇気と自信を与えるものだったはずだ。

そんな、いつもとは違う″大晦日の余波″の中で始まった2006年。『PRIDE』にはいきなりの波乱が待ち受けていた。2月26日、さいたまスーパーアリーナでの『PRIDE・31』。5月に開幕する無差別級GPに向け、この大会の対戦カードは「完全査定試合」（髙田本部長）として組まれていた。当然、GP出場への期待値が高い選手が勝たなければならない。事前の高揚感が薄かった西島洋介のデビューマッチ、マーク・ハント戦は両者の個性が噛み合って壮絶な打ち合いを展開、好勝負となった。だが、我々は勝つべき人間が勝てず、奈落の底に沈む光景も見てしまうことになる。

セルゲイ・ハリトーノフはアリスター・オーフレイムにサイドポジションを奪われ、ヒザ連打でレフェリーストップ。これまで冷酷非情な強さを発揮してきた男とは思えない惨敗だった。無差別級GP最大のテーマは″誰がヒョードルを止めるのか″であり、その最右翼こそハリトーノフのはずだった。だが、それもこの敗戦でかなわぬ夢となる。

さらには、前年のミドル級GP優勝から無差別参戦宣言を果たしたマウリシオ・ショーグンも敗れてしまう。マーク・コールマンとの対戦はショーグン圧倒的優位の下馬評だったのだが、タックルに受け身を取った際、右ヒジを負傷。レフェリーストップを宣せられたのだ。ストップ後も勢いで攻撃が止まらなかったコールマンにヴァンダレイ・シウバが襲いかかり、リング上で乱闘が展開される騒ぎにもなった。

無差別級GPのキーパーソンとなるべきだったハリトーノフ、ショーグンの敗北。絶対的中心のはずのヘビー級王者ヒョードルも、右拳のケガが癒えず出場は微妙な状態だった（のちに欠場が正式決定）。″これだけ人気選手を欠いてしまって、本当に盛り上がるのか？″。藤田和之出場の噂はあったものの、この時点での無差別級GPへの期待感は決して高くなかったのである。ジョシュという救世主の出現、名勝負の連続で″史上最高のGP″と呼ばれるなど、このときはまだ予想



2005年『男祭り』のメインでは小川 vs 吉田というとんでもないカードが組まれたのだが、もし田村潔司 vs 桜庭和志も実現していたら、いったいフジテレビの視聴率はどうなっていたことだろうか。

話題賞 T-1 二見社長

「女子プロなんていらねえ!!」の大暴言で女子プロ復興に貢献!?



大会のたびにキレまくる代表、『チケット＆トラベルT-1』社長・二見理氏（吉川晃司マニア）。その暴れっぷりが最高潮に達したのが２月23日新宿FACEでの第二回『T-1GP』。女子プロ復興を目指し2005年8月に大会を開催した二見社長だったが、この日のメイン後には因縁深い前川久美子だけではなく「女子プロなんていらねえんだよ!!」との決別宣言を筆頭に女子プロレスラー、関係者、マスコミに対し、ガチ発言のオンパレード。それ以来、大会を重ねるたびに敵を増やしていった二見社長。最近になってDVDでこの大会を目撃したタダシ☆タナカ氏が絶賛しているのも興味深い。

今期の主役 藤田和之

猪木事務所から独立。野獣獲得に向けK-1、PRIDEが動き出す!



今年の2月1日付けで猪木事務所の事実上の閉鎖に伴ないフリーの身となった“野獣”藤田和之。『PRIDE』か？　K-1か？　“神”アントニオ猪木のもとを離れ、その去就が注目されていた藤田が『kamipro』96号で久々に本誌に登場。インタビューでは「これからは、すべて自分で判断します」と発言していた藤田だったが、その決断が公になったのは約2ヵ月後の4月13日。藤田が選んだのは『PRIDE』、しかも「世界最強決定戦」といえる『PRIDE無差別級GP』の舞台であった。この野獣の決断が2006年の『PRIDE』を活性化させたのは間違いないところだろう。

05年は“オタクの論客”として活躍 田村vs桜庭戦熱望原稿まで寄稿

ジョシュ・バーネットで振り返る2006



2005年までのジョシュといえば、ミルコに二連敗と『kamipro』で大フィーチャーされる選手ではなかった。では、どんな存在だったかといえば“オタクの論客”である。選手なのに。しかしジョシュはもともとが大のプロレスオタク、とりわけUWF信者。2005年12月発売の94号では『男祭り』で実現が期待された田村 vs 桜庭に関する原稿を寄せている。ちなみに2006年初戦は2.26『PRIDE.31』の中村和裕戦。結果は一本勝ちだったが、体重差もあって「そりゃそうだろ」という印象が強かったのは事実。インタビューも『kami pro Hand』のみの掲載だった。

明るい未来しか見えません! っていう最高のスタートでした

DSEで振り返る2006



吉田秀彦 vs 小川直也という究極のカードが組めて、イベントは約6時間で平均視聴率16.2パーセントという凄い数字が取れて『Dynamite!!』の数字を上回ったんですよね。戦略を立てて、それがズバリはまり高い数字が取れて本当に気持ちよかったですね。社内も凄く盛り上がって、「明るい未来しか見えません！」っていうぐらいの勢いでスタートしたんです。年始のご挨拶でフジテレビさんに行ったときに、当然、大歓迎されて「今年もお願いします！」って言われたんですけどねえ（笑）。



笹原DSE広報局局長談

今期のトピックス 3 連発

2/11 健介デビュー20周年記念興行 マサさん登場



佐々木健介デビュー20周年を記念して、2・11後楽園ホールで健介オフィス初の自主興行が行なわれた。健介の人脈を物語るようにフロリダ・ブラザーズから小橋建太まで登場し超満員となった今大会。ハイライトは健介の父親代わりであり、健介オフィス相談役でもあるマサ斎藤さんが久々に公の場に登場したこと。健介はマサさんから花束を受け取ると大号泣。これを観た“kamiproの徳光和夫”松澤チョロももちろん号泣したのであった。

2/19 “ミスター新日本”ケロちゃんが退社



いい意味でも悪い意味でも最悪の意味でも、90年代の“ミスター新日本”であった、“ケロちゃん”こと田中秀和リングアナが、2・19両国大会を最後に、新日本プロレスを退社した。両国大会前は「最後はリング上から“プロレスの方向性”でもしゃべろうかな」と予告していたので、ケロイズム爆発が予想されたが、結局特別なメッセージはなし。伝説の「PRIDE、K―1、プロ野球、Jリーグ……」の再現はならなかった。

2/26 前田日明 ビッグマウス・ラウド離脱



「スーパーUWF構想」や「21世紀のストロングスタイル」など、故・I編集長が夢見たガッチガチのプロレスを実現させるべく、二人三脚で歩んできた前田日明と上井文彦氏が、2・26徳島大会を最後に分裂。まぁ、そもそも実力者・ディック東郷の試合を観て「ルチャでウケを取ってるだけ」という日明兄さんと、『W―1』にマスカラスが出ただけで涙が出そうになる上井さんとでは、相容れることなどあるわけないのであった。

“デザイン・キャプテン”ヒサくんの『kamipro』表紙物語2006

06年の表紙の中で一番、手間がかかったのは、96号の藤田和之キングコング・イラスト。斉藤くんの妄想を俺が現実に即した土台に作り上げるまで二週間近くかかったし（笑）。その土台をもとに特写した藤田選手をイラストレーターの岡村（昌明）さんが精密に描き起こすため、模型の戦闘機をつかむ右手や、ビルを踏みしめる足の角度とかを徹底的に計算した撮影をやって。ビルから落ちる佐伯（繁）さんも撮影したんだよね、わざわざ（笑）。最終イメージがなかなかよくならなくて苦労したけど、最終的にアルマゲドンな背景とか細部にいたるまで完成度の高いものなりました。（談）

No.95 06年1月号



新年一発目の表紙は、大晦日に王座に就いた五味隆典。寝起きの撮影だったために目立っていた寝グセはデザイン処理！

No.96 06年2月号



“闘魂”からの独立を表明した藤田の新たな戦場は、この時点で未定……。PRIDEジェット機をつかませたのは編集部のギャンブル。

Special 06年春号



PRIDEスペシャル企画がつるべ打ちだった増刊号。ノゲイラの“タカダ・ショーツ”表紙は新宿二丁目でも話題騒然！　フォ～！

金井ヒサくん。『kamipro』の“デザイン・キャプテン”を務める。本誌のスーダラでズンドコでデタラメな進行のせいで心労が絶えない。デザイン事務所Two Three所属。

マット界 はみだし事件簿

- ▼1月8日　全日本大阪大会で三冠王者・小島聡がTARUを破り、6度目の防衛に成功。諏訪間がヒールに転向。のちに諏訪魔と改名
- ▼1月中旬　新日本契約更改で後藤達俊、田中秀和、西村修、吉江豊ら11名が新日本を退団
- ▼2月4日　UFC57のライトヘビー級タイトルマッチで、チャック・リデルがランディ・クートゥアーにTKO勝利。クートゥアーは引退を表明
- ▼2月4日　MARS旗揚げ
- ▼2月5日　DEEP5周年記念興行開催

※GK情報　1月→藤田の去就について本誌のインタビューを受ける。2月→猪木事務所から独立した藤田和之にインタビュー



2006年3»4月を振り返る！

PRIDE全勝の五味がまさかの敗戦！ハッスルではタマゴから新たな生命が誕生

五味、アウレリオに衝撃の敗戦！ライト級は一気に戦国時代突入へ

無差別級GPと並び、2006年の『PRIDE』でも一つの柱となるはずだったのが『武士道』だった。その目玉は、ウェルター級GPの開催と地上波ゴールデンタイム中継である。2003年のスタートから二年あまり、当初はシウバやミルコなど本戦からのゲストに場をさらわれがちだった『武士道』だが、五味隆典の活躍もあってこの頃には完全にファンに認知されていた。加えて『男祭り』における五味vsマッハという名勝負。ゴールデンタイム中継に向けて、機は熟していたといっていい。

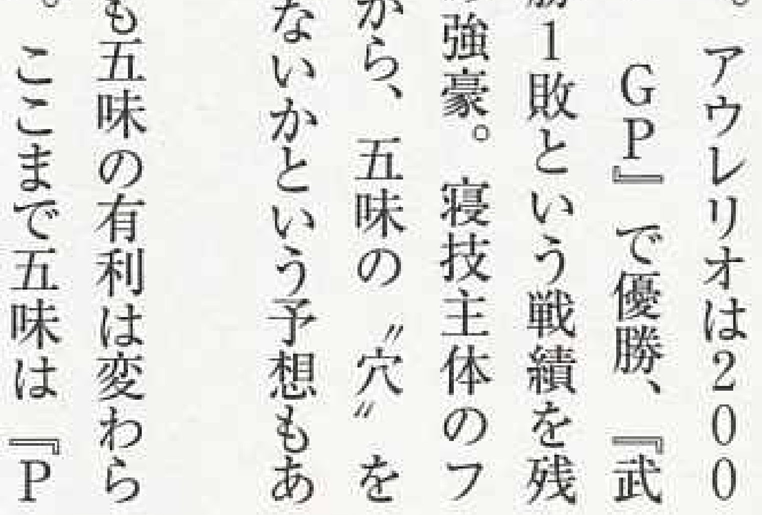
4月2日の『武士道・其の拾』（有明コロシアム）は、来たるべき『武士道』大ブレイクへの序章となるべき大会だった。メインは五味のライト級王者としての第一戦、vsマーカス・アウレリオである。アウレリオは2004年に『ZST GP』で優勝、『武士道』でも2勝1敗という戦績を残している柔術の強豪。寝技主体のファイトスタイルから、五味の〝穴〟を突ける選手ではないかという予想もあった。

ただ、それでも五味の有利は変わらないはずだった。ここまで五味は『PRIDE』10連勝。ヘビー級のヒョードルやミドル級のシウバと並ぶ絶対的な強さを発揮してきたのだ。五味のマッチメイクにはかなり時間がかかったのだが、それも打倒・五味に名乗りを挙げる選手が出てこなかったためだという。五味自身、大会パンフレットのインタビューで「相手じゃないでしょ」と豪語、アウレリオは光を消すタイプの選手だけに試合が地味になるのではという危惧にも「いまのボクには、そういったものを全部ぶっ壊すパワーがありますから」と語っている。

実際、試合は五味ペースで始まった。いつものようにパンチで圧力をかけ、おもしろいようにアウレリオを後退させる。が、次の瞬間……。

パンチのカウンターで放ったアウレリオのタックルが完璧に決まる。しっかりと抑え込んだアウレリオは、そのまま肩固めへ。まったく動きが取れない五味の身体から力が抜けていくのが、誰の目にもわかった。まさかの、そして衝撃的な一本負けである。

試合後、五味は敗因にモチベーション不足を挙げた。「体力維持程度の練習しかしなかった」とも。『武士道』の絶対的エースが迎えた最大の危機。



『武士道』初の黒星に呆然とするチャンピオン五味。なんともいえないその視線は、アウレリオに一本取られた自分の姿が映し出されている大型ビジョンに向けられていた。

それでも、『武士道』の洋々たる前途を疑う者はいなかった。修斗王者・石田光洋の豪快一本勝ちデビュー、ウェルター級転向をはたした近藤有己の秒殺KO負けなどインパクトの強い試合が続き、大会自体は大成功と言っていいものだったのだ。ライト級戦線は、五味の敗北によって一極集中時代から混沌とした戦国時代の様相を迎え、さらにドラマチックな展開が期待できた。

さらに、6月大会から始まるウェルター級GPと、その地上波ゴールデンタイム中継に向けて、桜庭和志のウェルター級参戦、さらには田村潔司出場というプランも持ち上がっていたという。噂レベルではあるが、フランク・シャムロックも出場候補になっていた。榊原信行DSE代表も、本誌98号のインタビューで「究極的にはトーナメント表の端と端に桜庭、田村がいてくれたら完璧ですよ」と語っている。

〝桜庭〟、そして〝地上波〟。5月、6月と立て続けに『PRIDE』に大激震をもたらす二つのキーワードは、このときはまだ希望とともに語られていたのである。

（橋本宗洋）

March - April

話題賞 K-1 シルム三兄弟

重量感爆発！ 韓国シルム界から K-1に3大ニュースター到来



K-1モンスター路線が突如、韓国で復活！ 4月7日に行なわれた会見で発表されたのが韓国シルム出身の3選手のK-1参戦だ。ホンマンの活躍で韓国でのK-1人気が高まり参戦を決めたのが、シルムヘビー級横綱のキム・ドンウック（中）、ヘビー級関脇のキム・ギョンソック（右）、90キロ以下級王者に18回輝いたシン・ヒョンピョ（左）の3人。ドンウックとギョンソックはデビュー戦ながら6月に地元・韓国で開催されたK-1アジアGPにエントリー。それぞれ、藤本祐介、キム・ミンス（同じく初出場）相手に健闘むなしく敗北を喫した。次は期待してマンセ〜！ 本誌・松林はこのモンスター目当てに渡韓！

今期の主役 ニューリン様

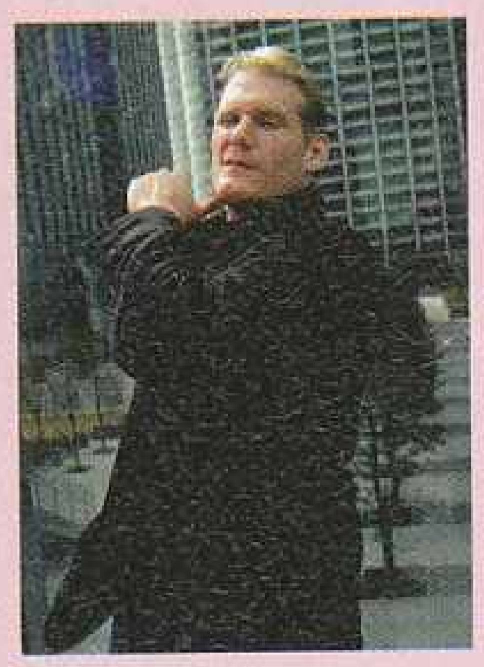
祝！ イン卵様からのご生誕 生後まもなくHGにフォール勝ち



4月のビッグサプライズといえば、4月20日『ハッスル16』大阪大会でイン卵様から誕生したニューリン様である。生まれて早々にハッスル軍のエース・HGに初黒星をつけるという衝撃デビューを飾った。当初はその名前とギャル言葉に違和感を感じたものの、いまでは自然に感じるから不思議なものだ。その後、ハッスル軍に電撃移籍をはたしたニューリン様は『ハッスル・マニア2006』でザ・エスペランサーのレーザー・ビターンで瀕死の重傷を負うも、12月の『ハッスル・ハウス クリスマス・スペシャル』で電撃復活。そのコスチュームとともに目が離せません！

ジョシュ・バーネットで振り返る2006

「ケンシロウは男のあるべき姿そのものだ」と持論を展開！



ジョシュの立ち位置、個性を認知させる重要な時期だった。3月発売の『kamipro Special』では『紙とインクのヒーロー』と題し、自身のマンガ・アニメ遍歴、『北斗の拳』が与えた影響を熱く執筆！（"誠実さをもって正義の守護者になりえるのなら、どれほど壮絶な痛みが生じようとも、そこには立ち向かう価値があるのだ"）。『PRIDE無差別級GP開幕戦』アレキサンダー戦に向けたインタビューでは、あくまで軸足をプロレスに置き、最後はケンシロウ調に締めるインタビュー・スタイルが確立。ヒョードル不在のGPにあって、ジョシュへの期待感は急上昇した。

DSEで振り返る2006

じつは五味選手の敗戦を一人予想していた人がいるんです



2月はドリームステージ・ピクチャーズの『シムソンズ』を冬季オリンピックの時期に公開しました。ウチのスタッフがいろんな会場で『シムソンズ』の旗を振って、そればっかり気になりましたけど（笑）。じつは『武士道・其の拾』での五味選手の敗戦をただ一人予想していた人がいるんですよ。ウチの社長なんですけど（笑）。「五味君が負けるならこういうタイプだよね」って。プロモーター的には負けても、そこからドラマが生まれるという確信があったんでしょうし、むしろこういう予想しない結末をどう次につなげていくかが腕の見せどころってことでしょう。



笹原DSE広報局局長談

今期のトピックス3連発

3/12 ヨウヨウヨウ〜 RG、GM就任、オッケ〜



この日行なわれた『ハッスル15』からRGがGMに就任、"RGM"としてハッスル最高責任者となった。流れの早いハッスルだけに、もうほとんどの人がどういう経緯でGM就任したか忘れてると思うので説明すると、前GM浩子が失職後、その後任に当時「鈴木家」の一員だったRGを指名という展開だった。しかし、その一方で健想&浩子はハッスルをリアルにフェードアウト。これだから、ハッスルは一筋縄じゃいかないのである。

3/19 プロレスでは強い！ 曙がIWGP王座に挑戦



K-1では、評価が低下する一方ながら、なぜかプロレスでは評価が上がり続ける曙が、なんとブロック・レスナーの持つIWGP王座挑戦。この一戦を前にアントン総帥は「プロレスだから許されるルールもある。リングではなく土俵でやってもいい。土俵から落ちたら負けとかね」と、もはやプロレスではなく相撲でしかないルールを提案したが、結局そんなルールになるはずもなく、曙はDDTであっさりフォール負けした。

3/21 全日で"ものまねバトル"勃発 W武藤vs小島&イジリー実現



ハッスルでニューリン様、HGら芸能人の参戦が話題になる中、老舗・全日本プロレスもついに一線を乗り越えた！ 後楽園ホールで開催された『ファン感謝デー』に、武藤のものまねで知られる神奈月と、腹の出具合が三沢そっくりのイジリー岡田が参戦。それぞれ、武藤、小島というトップと組んでホントに試合を行ない、会場は大盛り上がり。馳浩や新庄剛志も登場し（もちろんものまね）大成功に終わったのだった。

"デザイン・キャプテン"ヒサくんの『kamipro』表紙物語2006

"藤田和之キングコング・イラスト"に続いて、97&98号と岡村さんの描き起こし。イラストは写真と違ってデフォルメしやすいし、こうやってイメージを膨らませることができるけど、難点があるとすれば、締め切り間際に状況が覆ったときの大幅な修正は施せないところかな。98号の"PRIDEスターウォーズ"にしても、『PRIDE無差別級GP』のカードがなかなか決まらず、誰が主役なのか流動的なのに斉藤くんも無理な注文をつけてくるし、各選手のスポットの当て方に本当に一苦労。藤田選手の参戦が流動的だったので、同じ位置でコールマンの親父が吠えている別バージョンも用意してました。（談）

No.98 06年04月号



宇宙のバックには"ダースベイダー"なヒョードル。誰をアナキンにするかで編集部で激論になったが、決着がつかず不在のままGO!

No.97 06年03月号



"巨人の星"イメージで燃える五味隆典！ じつは目の炎がもっと大げさに燃え上がり、擬音が炸裂するバージョンもあったのだが……。

マット界はみだし事件簿

▼3月10日 全日本大田区体育館大会で小島聡がグレート・ムタを破り、三冠V7達成。試合終了後、鈴木みのるが乱入し、スリーパーで小島を絞め落とす。

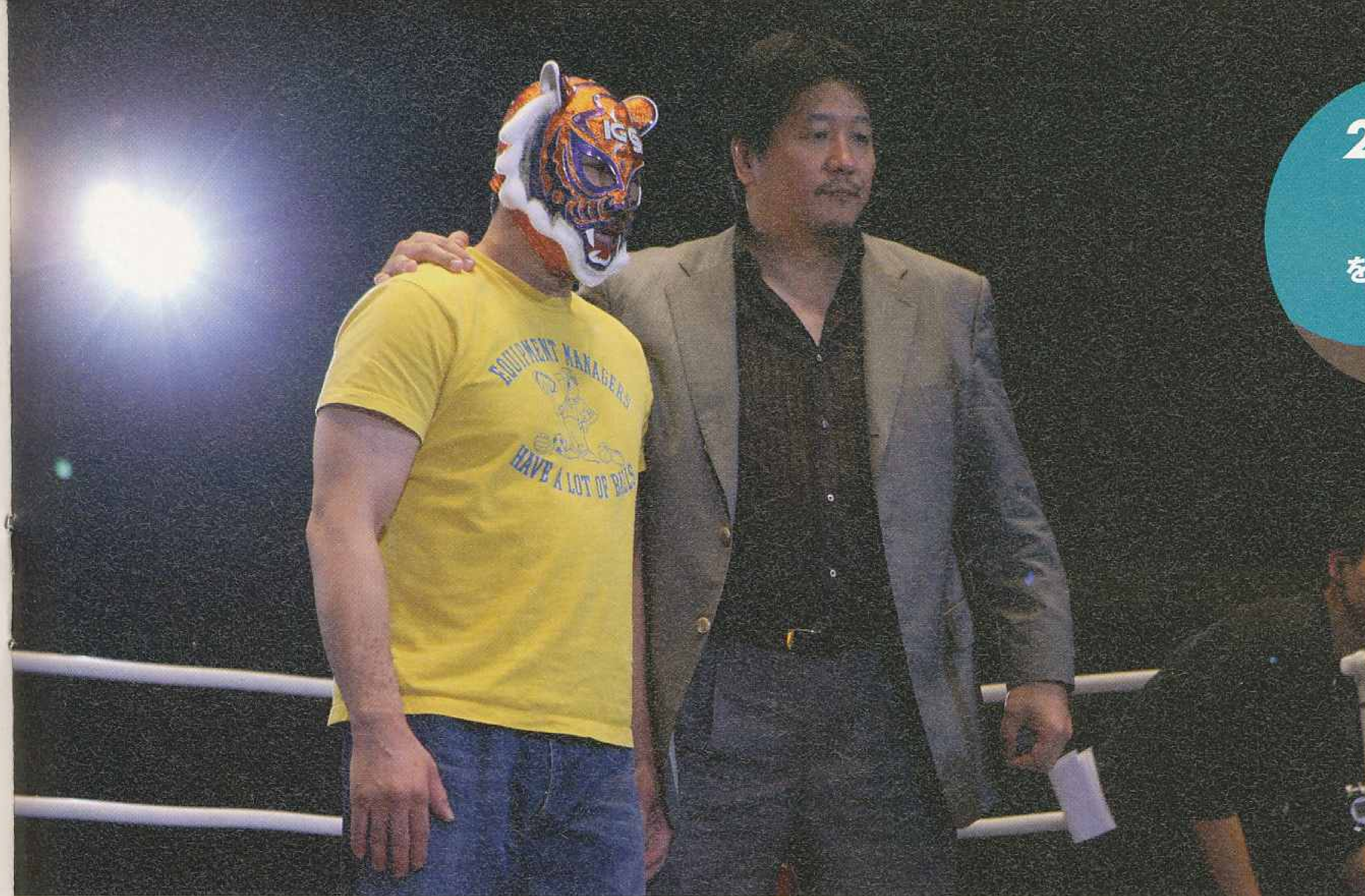
▼3月11日 U-Zeal旗揚げ

▼3月19日 新日本両国大会3日前に棚橋弘至vs柴田勝頼の再戦が中止に。当日、棚橋はキングスロードの宮本和志と対戦し勝利

▼4月15日 UFC59、ヘビー級タイトルマッチでティム・シルビアがアンドレイ・アルロフスキーを破り、新王者となる

▼4月20日 全日本代々木大会で太陽ケアがチャンピオンカーニバル初優勝

※GK情報 3月→プロレス週刊誌の行く末について本誌のインタビューを受ける。4月→『PRIDE無差別級GP』に参戦する藤田についてインサイドリポート



2006年5月を振り返る!

桜庭和志『HERO'S』へ電撃移籍!! PRIDE無差別級GPはショックを吹き飛ばす好発進

マット界に大地殻変動勃発! 桜庭、100年に一度の移籍劇

″PRIDEの象徴″桜庭和志の『HERO'S』電撃移籍。その事実は5・2『HERO'S』前半戦の休憩明けに、なんの前触れもなく告げられた。

前田日明の「武士(もののふ)の中の武士」という呼びかけを合図に、『PRIDE』の会場ですっかり聴き慣れた桜庭の入場曲『スピード2のテーマ』が流れだす。すると、花道にはタイガーマスクの覆面を被った桜庭和志が姿を現わした――。

アナウンサー どちらからいらしたんですか?

サク (入場口を指さし)あっちのほうですね。

アナウンサー 今日はどうしていらしたんですか?

サク 「行け」と言われたので、来ました。

事実上の『HERO'S』参戦表明となった、サクラバ・カズシらしいアナウンサーとの軽妙なやりとり。しかし、その桜庭とともに歴史を積み上げてきた『PRIDE』は、戦慄と衝撃をもってその現実を受けとめた。

桜庭は3月末日をもち、長年所属してきた高田道場を退団していた。しかし、それでもフリーとして『PRIDE』への参戦がほぼ約束されていた。水面下では6月から開幕するウェルター級GP参戦の動きがあった。

ところが、最終的な合意を得るはずだったミーティングに、桜庭は友人の弁護士を引き連れて席に着き、『HERO'S』への移籍を告げたという――。信じがたい現実。『HERO'S』に訪れていた、ある『PRIDE』関係者は『スピード2』のテーマが鳴った瞬間、おもむろに席を立ち、会場の外へと足を向けた。桜庭和志が『PRIDE』に別れを告げる決定的瞬間を直視できなかったのだろう。

――100年に一度の移籍劇。『HERO'S』を運営する谷川貞治FEG代表は、桜庭のこれからの格闘家人生の栄光を約束した。前田日明は『PRIDE』の桜庭起用のあり方に非難を向けた。桜庭の友人で顧問弁護士の上杉氏は、悩む桜庭の背中を「ボンと押しちゃった」ことを明かした。桜庭は「両団体の架け橋になりたい」と、今後の夢を語った。『PRIDE』離脱の真相については多くを語らなかったが、後日、師匠・高田延彦のもとを訪れ、突然の非礼を謝罪した。それは小雨が降る5月8日の午後だった。

「いつものように道場へ行くと、桜庭が待っていました。いつもどおりのTシャツとジーンズ姿で、顔は青白くむくんでいた。今にも泣き出しそうな表情でたたずんでいました。『順序が逆になり、挨拶もなく今回のような行動を取ってしまいました。すいません』」(『ゲーテ』高田延彦インタビュー、テーマは″パートナー″)

そうやって頭を下げる桜庭に、高田延彦はわずかな言葉を返して、その場を足早に立ち去った。

――この移籍の裏側で何があったのか? 誰が悪いのか、誰が被害者なのか? そのグレーなモヤモヤが取り払われ、すべてが立体的にとらえられたとしても、当事者たちの揺れ動く感情、それぞれの想いは計り知れない。

そして、裏側で何があって何が起きていたとしても、桜庭和志は『PRIDE』のリングには、もういない。桜庭和志を見守り続けてきた人間からすれば、その現実は悲劇であると同時に、新天地への挑戦という、苦しみの中から脱出する希望でもある。

『スピード2』のテーマは我々にとってもはや、桜庭が闘い続ける限り、その二面性を表現していく象徴的楽曲となるのだろう。

(ジャン斉藤)



『HERO'S』のリングに電撃登場した翌日、あらためて素顔で会見場に姿を現わした桜庭。谷川氏に「好き好き好き好き」と迫られ、『HERO'S』への移籍を決意したことを告白した。

話題賞 メカマミー

06年のメカブームの震源地!!
本誌も初メカインタビュー達成



あれよあれよという間に2006年プロレス大賞の話題賞を獲得してしまったメカマミー。昨年11月にメカ化に成功しユニオンプロレスで大暴れしていたメカマミーを『kamipro』はほかの専門誌に先がけプチ特集。これまでのマミーの歴史からライバルのメカスタンリーの証言、さらには本邦初公開の初インタビューまで収録。この直後の鈴木みのる戦でさらなる注目を浴びたメカマミーは『東スポ』でも頻繁に取り上げられた。ビッグマッチのたびに武器を新調し、先頃はメカボインなる新兵器もお披露目したメカマミー。2006年最後となる試合ではUWAI28号と一騎討ち！

今期の主役 髙阪剛

最後にしてベストバウトの激闘
“世界のTK”涙と感動の引退!



「負けたら即引退」を表明し『PRIDE無差別級GP』に挑んだ“世界のTK”こと髙阪剛。体重差30キロの元K-1王者のマーク・ハント相手に真っ向から殴り合いを挑み、倒されても何度も立ち上がってみせたが、最後は強烈な打撃で壮絶に散ったTK。その生き様と同様、前へ前へ出るその闘いぶりは多くの人々に感動を与えた。『kamipro』99号では、そんなTKの引退大特集を組み、ゆかりの深い糸井重里氏や和田良覚氏、さらにはTKおかんとして有名な高阪フミさんやTKオトンこと一男さんも初登場。泣いて笑って、おまけに感動できる、このインタビューは必読！

無差別級GPアレキ戦で激闘勝利 TKの引退にはたまらず涙!

ジョシュ・バーネットで振り返る2006



5月5日、『PRIDE無差別級GP開幕戦』で、ジョシュは“裏・優勝候補”と呼ばれたアレキサンダーと対戦。GPの行方そのものを左右しかねない重要な一戦だった。序盤こそ打撃で攻め込まれたジョシュだが、的確な反撃でスタミナを奪い、2ラウンドにV1アームロックで大逆転一本勝ち! “PRIDE救世主伝説”の本格的幕開けであった。試合翌日のインタビューでは、ハントに敗れ引退した髙阪剛について語りながら「もうTKが試合できないという事実が受け入れられないよ……」と涙を見せる場面も。この純情に多くの読者が心を打たれ、ファンの思い入れはさらに強まっていく。

“あの瞬間”は言葉がなかった ショックだったなあ……

DSEで振り返る2006



私、4月にプロモーションで桜庭さんと一緒に大阪に行ったんですけど、思い返せばあのときからいつもの感じじゃなかったです……。桜庭さんが5月3日に『HERO'S』に上がったと聞いたときは言葉にならなかったですね。「嘘でしょ？」って。ショックだったなぁ……。二日後に『PRIDE無差別級GP開幕戦』だったんですけど、大会自体は離脱のショックを吹き飛ばすぐらいのいい大会でしたからね。終わったあとに、この緊急事態を同じ気持ちで闘ったスタッフたちと言葉を交わさずにガッチリと握手したことを覚えています。



笹原DSE広報局局長談

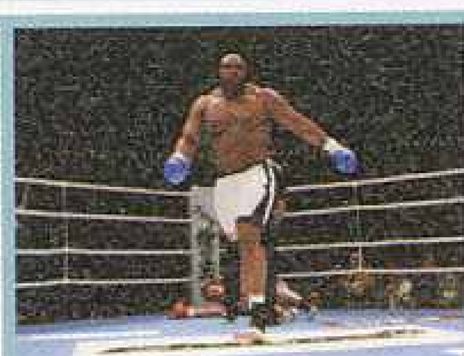
今期のトピックス3連発

5/13 プロレスハッピーランド『レッスルランド』がスタート



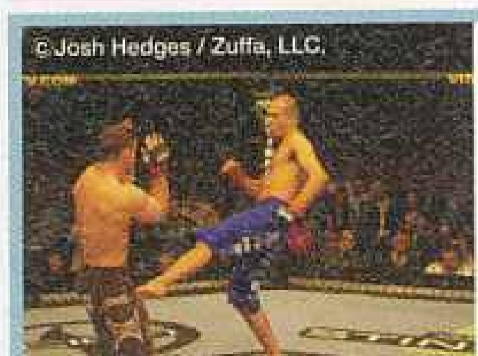
かつては、選手総出でハッスルポーズを阻止するなど、反エンタメを打ち出していた新日本が、遅ればせながらエンタメ路線のイベント『レッスルランド』を新宿FACEでスタートさせた。当初は下ネタ路線、海賊男登場など迷走が目立ち、本誌プロレス素人・松下ミワに「オチがない」とダメ出しされる始末だったが、いまは女性ファン向けにイケメンを揃え、中西学を〝神様〟にするなどして徐々に支持を増やしているという。

5/13 K—1オランダ大会で事件発生 ボブ・サップが敵前逃亡



この日のK—1オランダ大会で、引退試合が予定されていたアーネスト・ホースト。しかし、肝心の対戦相手サップが試合直前にバンデージを巻いたまま逃走！ 急遽、テレビ解説で来ていたピーター・アーツが闘い、なんとか興行を成り立たせた。この〝敵前逃亡〟にサップへ非難が集中したが、プロレス界でのエル・カネックの敵前逃亡に理由があったように、サップにも事情があったことが、のちに明らかにされたのであった。

5/27 ホイス、UFCに久々参戦 マット・ヒューズに完敗



©Josh Hedges / Zuffa, LLC.

ホイス・グレイシーが約11年ぶりにUFC復帰。なんと、当時のUFCウェルター級王者マット・ヒューズと対戦した。試合前、誰もが「ホイスの無謀な挑戦」と口を揃えたこの一戦は、ホイスがグラウンドでも何もできず最後はパックマウントまで奪われTKO負け。予想以上の完敗だった。なお、この一戦を実現させるため、UFCは莫大なファイトマネーを支払ったとされ、UFC巨大化の象徴のような試合でもあった。

マット界 はみだし事件簿

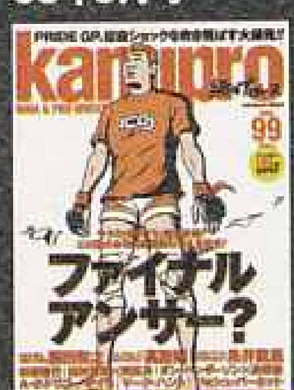
- ▼5月5日　『PRIDE無差別級GP開幕戦』が大阪ドームで開催〝世界のTK〟こと髙阪剛がマーク・ハント戦に敗れ、涙の引退
- ▼5月13日　『ハッスル17』でハッスル軍がタマアゴを初公開。その後、タマアゴの中身について新聞紙上などでしばしば取りざたされる
- ▼5月13日　新宿FACEで『レッスルランド』第一回大会が開催される
- ▼5月19日　タマアゴの中身がアントニオ猪木ではないかと噂されていることについて新日本側が「猪木さんが『ハッスル』に出るような話は聞いていない」と反論
- ▼5月21日　新木場1stRINGで長州力がプロデュースする『LOCK UP』第一回大会が開催される
- ▼5月23日　DEEP代表佐伯繁氏、念願のDEEP道場「IMPACT」がいよいよ開設されることを正式発表
- ▼5月23日　アラン・カラエフ、中国、河南省で行なわれる散打の大会へ挑戦することが決定。曙は同大会で小学生と相撲対決

※GK情報　5月↓『PRIDE無差別級GP開幕戦』で勝利した藤田和之にインタビュー

“デザイン・キャプテン”ヒサくんの『kamipro』表紙物語2006

これは『kamipro』どころか、マット界専門誌06年度ナンバーワンのデキでしょう。イラストレーターの師岡（とおる）さんに発注したもともとのイメージは、PRIDEウェルター級GPに参戦するサクが、孫悟空のように暴れ回るというもの。ところが締め切り間際にサクが『HERO'S』転出するという大事件！大の桜庭ファンの師岡さんは信じられず絶句しちゃって……。サクの昔のインタビューを読み返して、泣きながら筆を振るったそうです（笑）。真面目な話、桜庭和志へのファンの思いが100パーセント表現されている大傑作なので、背景や文字の色、風に舞うバンデージの配置を緊張しながらデザインしましたね。（談）

No.99
06年5月号



“『HERO'S』の悲劇”スミルノヴァス戦で、不安と哀しみが増したファンは多い。なんでもいいから、混じりっけなしのサク・スマイルが見たい!



2006年 6»7月を振り返る！

衝撃！ フジテレビのPRIDE放送打ち切り 大騒動の最中、最強の〝闘う化身〟まで誕生！

PRIDE&ハッスル大ピンチ フジテレビ・ショックの波紋とは？

〝桜庭ショック〟を超える大津波が『PRIDE』を襲う！　その「きっかけは〜、フジテレビ‼」だった。

6月5日、フジテレビがDSEとの契約を全面解除。DSEがプロデュースする『PRIDE』シリーズの放送を行なわないことを関係各所に通達した。その通達がなされる直前には、フジテレビ関係者がPRIDE道場の道場開きに訪れていたことから、事態は緊急を要していたことがうかがい知れる。

なにしろ、6・3『武士道・其の十二』はすでにテレビ放映用に収録済みでありながら、そのままお蔵入りという事態に。6月18日に予定されていた『ハッスル・エイド2006』の地上波中継も白紙！　『ハッスル・エイド2006』に出演を予定していた芸能人の中には、この騒動を受けてキャンセルをした人間も少なくなかった。なぜなら当時『ハッスル』に出演することとイコール、フジテレビに反旗を翻すというムードがあった。つまり、芸能生命に関わる問題でもあったのだ。

『ハッスル』には欠かせないHGの登場も当初は危ぶまれたが、HGは継続参戦を表明。HGの〝プロレスLOVE〟が浮き上がった瞬間だった。HGは、〝フジテレビ・ショック〟直後の『ハッスル』静岡大会で会場入りの際、選手や関係者から拍手をもって迎え入れられたという。ただし、相棒のRGにはなんの歓迎もなし！

このように『PRIDE』や『ハッスル』にクライシスをもたらした契約解除の理由については、守秘義務があるためにいまだ公にはされていない。フジテレビ側は「放送を継続することが不適切な事象があったため、契約違反に該当する」ことだけを主張している。……不適切な事象。それを聞いて誰もが頭に思い浮かべたのは、03年大晦日三大格闘技戦争の爪痕だった。

06年2月頃から、03年『猪木祭り』を主催した関係者が、一般週刊誌上で当時の興行戦争の裏側、そして『PRIDE』に絡む事実不明瞭なスキャンダルを次々に暴露。

DSE側は一連の報道内容を「ねつ造」とし、全面否定したが、そのネガティブ・キャンペーンは何か作為的なものを感じさせるほど執拗に続いた。フジテレビの決定の一因に及ぼしていたのは明白だった。

こうして『PRIDE』は、莫大な地上波放映権料を失なうことになったが、PPVとゲートの収入にも重きを置く経営方針だったため、即時の消滅は避けられた（一時はPPV中止の可能性もあったが）。開催中だった『PRIDE無差別級GP』は大成功で幕を閉じたが、未曾有のMMAバブルにより圧倒的な資金力を手にしたUFCの魔の手の前に、トップファイター流出の危機にさらされている。

06年大晦日に期待された『PRIDE』の地上波中継復活プランは、とうとうかたちにならず、TBSが放送を手がける『Dynamite!!』との〝視聴率戦争〟で燃え上がっていた通年の〝大晦日テレビ狂騒曲〟のムードを感じることはできなかった。『PRIDE』の地上波中継撤退は、マット界自体のスケールダウンにもつながったのだ。

この〝フジテレビ・ショック〟でマット界が失なったものも大きいが、〝世界最高峰の舞台〟の存続をかけた『PRIDE』の闘いは、まだまだ続いている。それは大津波の傷痕を癒す作業ともいえるのだ。

（ジャン斉藤）



この日はマスコミ250名をはじめファン600名が会見場に詰めかけ、異様な雰囲気の中で会見が行なわれた。また、この様子は会見当日の夕方のニュースでも報道されており、予想以上の波紋を呼んだ。

話題賞 DJ GOZMA

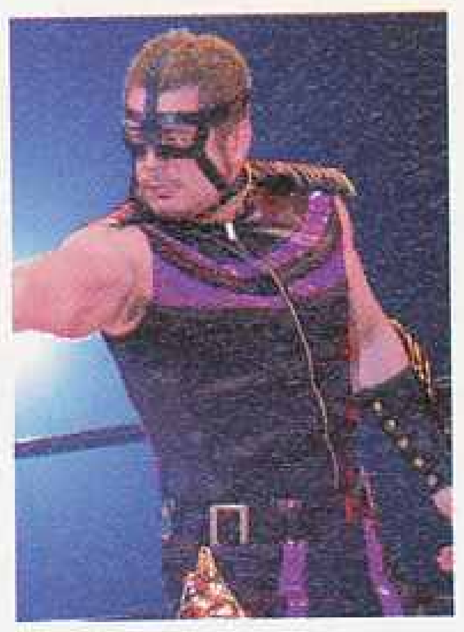
予想外! スーパースター電撃到来 アフロ&グラサンで軽快ダンス



『PRIDE』マットを襲ったフジテレビショックを吹き飛ばすかのように『武士道』に突如現われたのがDJ GOZMA（郷野聡寛）。『アゲ♂アゲ♂EVERY☆騎士』に乗って本家DJ OZMAばりのダンスを披露したDJ GOZMAは、いろんな意味で観客の度肝を抜いた。それからはリング上はもちろん、会見などでもデーブ・スペクターばりのダジャレを連発するなどDJ GOZMAというキャラを作り上げていった郷野。先のウェルター級GP決勝戦では、ついにDJ OZMAとの競演もはたしたGOZMA。2006年の締めである『男祭り』でのパフォーマンスは……!!

今期の主役 ザ・エスペランサー

フジテレビ騒動の最中に奇跡の誕生! 髙田総統の"闘う化身"



6月5日、突然飛び込んできた「フジテレビ、『PRIDE』放送中止」という衝撃ニュース。この衝撃は『PRIDE』だけではなくDSEが主催する『ハッスル』にも多大な影響を及ぼした。フジテレビでの放映が決まっていた6月17日『ハッスル・エイド』も当然のことながら放送中止となり、大会前はハッスル最大の危機とまで言われていた。その『ハッスル・エイド』のメイン後、髙田総統がタマアゴにハイパー・ビターンし、中から現われたのがハッスルの救世主ともいえるザ・エスペランサーであった。TAJIRI、HGを下したザ・エスペランサーが次にその姿を見せるのはいつ!?

ケンシロウvsキン肉スグルの勝者をめぐり美濃輪と激論!?

ジョシュ・バーネットで振り返る2006



高まり続けるジョシュ人気に、本誌は記念すべき100号で大特集を掲載! アナハイムでの特訓風景取材では割れた腹筋と「ジゴクノレンシュウ」を披露したほか、自身が選ぶマンガ、アニメ、音楽のベスト5を発表。『PRIDE無差別級GP二回戦』ではハントに羽根折り固めで圧勝し、"フジテレビ・ショック"に見舞われた『PRIDE』をファイトにおいてもメディアでの発言においても盛り上げまくった。本誌101号で実現した美濃輪との対談では"ケンシロウvsキン肉スグル、もし闘わば"で激論! ゆでたまご・嶋田先生も絶賛の内容で読者アンケート1位も獲得。

フジテレビ騒動後、「奈落へ昇れ」のキャッチコピーを決めたのは……

DSEで振り返る2006



最初、記者の方からフジテレビの件で問い合わせがきても「まさか、そんなことあるわけないじゃないですか!!」って答えてたんですけど、どうも会社の雰囲気が違うぞ、と（笑）。6月8日に記者会見をやったんですが、藤田選手が二つ返事で出稽古先のアメリカから駆けつけてきてくれたんです。涙が出るくらいうれしかったですね。『PRIDE無差別級GP二回戦』のコピー「奈落へ昇れ」はフジテレビ騒動の前に作ってたんですけど、文字どおり奈落へ昇ることになってしまいましたね。もう一本、別のコピーがあったんですが、これを選んだのは社長です（笑）。



笹原DSE広報局局長談

今期のトピックス3連発

6/15 そういうことだよ! 川田総統代行が衝撃の登場



06年、最も大化けした男といえば、"モンスターK"川田利明をおいてほかにいない! これまでもお笑い好きとして知られてはいたが、『ハッスル』で大変身。髙田総統の衣装を勝手に着こなし総統代行を名乗り、隙あらば総統のキメ台詞「バッドラックだ」を言ってしまおうとする、仏頂面のちゃっかり者。平成の荒井注と呼ばれるまでになった。その"顔芸"は本職の芸人をうならせるほど。川田はどこへ行こうとしているのか……。

6/23 メカブーム到来! みのるvsメカマミー実現



本誌の特集から火がついた空前のメカブーム。その頂点ともいえるのが、『UD：FESTA』で実現した鈴木みのるvsメカマミーの一戦だ。パンクラス出身のみのるが、現代科学の枠とエジプト4000年の神秘の結晶であるメカマミーにどう挑むか注目されたが、みのるはメカギミックに当初は付き合わないようにしながら、最後はメカに水をかけてショートさせるというギミック返しで勝利。絶賛を浴びたのだった。

7/10 渦中のボブ・サップが外国人記者クラブで会見



5・13K—1オランダ大会で"敵前逃亡事件"を起こして以来、しばらく沈黙を続けていたサップが、外国人記者クラブでの会見というかたちで、58日ぶりに公の場に姿を現わした。ここでサップは「K—1欧州GPの真相について」という声明文を読み上げ、自らの正当性を訴えたが、石原真理子同様、肝心の海外マスコミの数は少なく、大きく報道されることはなかった。平行線をたどるK—1とサップの関係、これからどうなる?

マット界 はみだし事件簿

▼7月8日 UFC61にヴァンダレイ・シウバが登場。チャック・リデルに対戦要求。

▼7月17日 新日本月寒グリーンドーム大会で行なわれる予定だった棚橋弘至vsブロック・レスナーのIWGP戦が、急遽6名によるワンデートーナメントで王者決定に変更となり、これを勝ち抜いた棚橋が第45代王者となる

▼7月22日 山本KID徳郁が北京五輪挑戦を表明

※GK情報 6月↓『PRIDE無差別級GP二回戦』へ向かう藤田和之にインタビュー。7月↓凸凹大学校3年G組の講師に就任

"デザイン・キャプテン"ヒサくんの『kamipro』表紙物語2006

100号だけにジョシュの"百裂拳"表紙も候補に挙がっていたんだけど、大きな節目だけにもの凄く作りづらかった! 誰をどう扱うか? というよりも、まず"100号"というテーマを落とし込まないといけないから。それに『kamipro』は、編集者がいい意味でテキトーに作ってるから、姿勢を正して記念を祝ったりすべきじゃないと思います（笑）。106号も10周年記念号だったけど何もやってない。そのノリでいいと思いますね。ヴァンダレイ表紙の103号は、最初ちょっとカッコよくなりすぎちゃったので、ポイントにピンクを使ってできるだけカッコよくならないように仕上げました!

No.101 06年07月号



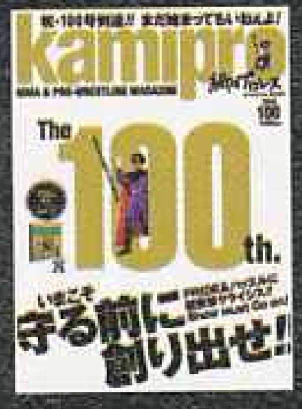
地上波撤退で未曾有の危機を迎えた『PRIDE』が海外に目を向け、ヴァンダレイをUFCへ。だが、チャックとの一戦はいまだ実現せず……。

Special kamiスペ夏



『kamipro』初の速報号は無差別級GP2ndラウンド。ロープ越しの写真は表紙としては基本的にNG。しかし、あまりのド迫力にソク採用—っ!!

No.100 06年06月号



フジテレビショックが襲う大事態が起こった100号記念号。表紙コピーは危機と直面した『PRIDE』に本誌が投げかけたものとなった。



2006年 8»9月を振り返る！

PRIDE無差別級GP決勝戦大爆発！ 桜庭は『HERO'S』初戦の死闘で議論百出

ミルコ、崖っぷちからの返り咲き 悲願の初PRIDE王座に涙

〝フジテレビ・ショック〟もさめやらぬ7月1日の『PRIDE無差別級GP二回戦』を勝ち上がった4名。吉田秀彦の足をローキックで破壊したミルコ・クロコップ、マーク・ハントをグラウンドで葬ったジョシュ・バーネット、ファブリシオ・ヴェウドゥムとの柔術対決を制したアントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ、藤田和之を撃破したヴァンダレイ・シウバ――。9月10日、この4名が〝60億分の1〟の座を懸けてさいたまスーパーアリーナで激突した。

ミルコとシウバは2002年4月に一度対戦しているが、そのときは特別ルールのため引き分けに終わっている。その間にミルコはK―1ファイターから『PRIDE』の顔となり、挫折を繰り返しながら頂点へと上り詰めようとしていた。一方のシウバは『PRIDE』の顔として、ミドル級の頂点に君臨してきた。ともに打撃を得意とする両者の激突は、勝っても負けてもタダでは済まないと思われたのだが……。

まず先手を取ったのはミルコだった。ミルコの左ストレートがヒットしてシウバは右目を大きく腫らす。目の腫れをドクターがチェックしているときも、シウバは「まだ闘える」としきりにアピールする。試合が続行になるとシウバも凄まじいパンチを繰り出していく。しかし、幕切れは唐突に訪れた。シウバの死角からミルコの左ハイキックが飛んできたのだ。崩れ落ちるシウバ、表情を変えずに勝ち名乗りを受けるミルコ、両者に観客は惜しみない拍手を送った。

続いてアントニオ・ホドリゴ・ノゲイラとジョシュ・バーネットの究極の寝技師対決が実現する。柔術とキャッチ・レスリングというそれぞれのバックボーンを活かした闘いで、まさに世界最高峰の攻防が繰り広げられた。先手を取ったのはジョシュだった。首を捻じ切らんばかりの力でフロントネックロックでキャッチする。ノゲイラもグラウンドの流れの中でアームバーでキャッチするがジョシュは脱出。2ラウンドではジョシュがノゲイラをヒザ十字固めでキャッチしたところで時間切れ。判定で寝技対決を制したジョシュが決勝へと駒を進めた。

数試合を挟んで迎えた決勝戦。泣いても笑っても、この試合で〝60億分の1〟が決まる。序盤からミルコの鋭いミドルキックがジョシュの腹にめり込んでいく。ジョシュも体重の乗った重いローキックで反撃を開始する。しかし、立ち技ではミルコに分があった。パンチをヒットさせてグラウンドで上に乗ると容赦ないパウンドを顔面に打ち下ろしていく。まったく反撃を許さないほど、ミルコは圧倒的な集中力で攻め手をゆるめず、最後はジョシュがタップした。

それは長らく〝無冠の帝王〟と呼ばれ、なぜかタイトルや優勝とは無縁だったミルコが初めて大舞台で頂点に立った瞬間だった。表情を崩さず闘いきったミルコは初めて涙を流した。チーム・クロコップの面々と抱き合い、母国の国民のためにクロアチア語でリング上からスピーチを行なった。

「やっと夢がかなった」

数々の激闘と挫折を経てようやく頂点にたどり着いたミルコがしみじみと語ったこの一言。多くのファンもそのドラマを共有して、惜しみない拍手を送ったのだった。

それは逆境に追い込まれながら「世界最高峰」の名にふさわしい最高の闘いを提供した『PRIDE』の意地が爆発した瞬間でもあった。（坂井ノブ）


ミルコに並び、無差別級GPのMVP級の活躍をしたのがやっぱりこのジョシュ・バーネット。“柔術vsキャッチ”となったノゲイラとの一戦はまさに格闘技史に残る名勝負となった。

話題賞 猪木快守

無念！"新生熱海"を夢見るも熱海市長選、最下位で落選



ミルコ優勝で幕を閉じた9月10日『PRIDE無差別級GP決勝戦』の裏側で、ひっそりと行なわれていたのが静岡県の熱海市長選。この選挙に立候補していたのが、アントンの実兄で『kamipro』でもロングインタビューを掲載したこともある猪木快守氏（テノール歌手・パブロ猪木としても一部で有名）。「日本の名所、熱海もゴーストタウン化している。"新生熱海"を再建したい」と選挙演説で熱弁していた快守氏。投票日直前にはアントンも応援演説に駆けつけたが「ズバリ言って非常に迷惑している」とバッサリ。結果は4候補者中最下位の771票で残念ながら落選。ダー！

今期の主役 桜庭和志

『HERO'S』初戦で論争爆発！スミルノヴァス戦でまさかの死闘



6月の「フジテレビ・ショック」より一ヵ月前、『PRIDE』から『HERO'S』へ電撃移籍をはたした桜庭和志が『HERO'S』初戦に臨んだのが8月5日有明コロシアムで開催されたライトヘビー級トーナメント準々決勝でのスミルノヴァス戦。この試合でスミルノヴァスの打撃を食らい意識朦朧となりながらも最後は本能の腕十字で勝利を収めた桜庭だったが、そのレフェリングに対し、前田日明スーパーバイザーが「桜庭を殺す気か」と大激怒するなど、試合後はマスコミ、関係者、ファンを巻き込んでの大論争が巻き起こった。初参戦となる『Dynamite!!』でのサクの運命は……!!

ケンシロウ・コスチュームで初『kamipro』表紙ゲット!!



ジョシュ・バーネットで振り返る2006



本誌102号ではついに表紙を奪取！ ケンシロウ・コスプレでの撮影で、『PRIDE無差別級GP決勝戦』もこの格好で入場するかと思われたが「安っぽいから」と却下したのはさすがのこだわり。また大会に向け日本でプロモーション活動も展開。一般誌、さらには『映画秘宝』にまで登場してみせた。本来なら日本人選手がやるべきことをジョシュがやっているところからも、彼の存在価値がわかるというもの。試合でも準決勝でノゲイラを至高の名勝負の末に下し、決勝もボロボロの身体でミルコ相手に奮闘。もはや評価は不動のものとなった。

プロレス同好会の自転車隊は各地で相当いいものを食べていた！

DSEで振り返る2006



8月の『ハッスル』で草間（政一）さんとリングに上がったんですけど、あれをやるって聞かされたのは前日ですよ！　まあ驚きもしなかったですけど（笑）。9月は地上波がなくてまともに宣伝ができない状況でしたから「やれることはなんでもやろう！」と。プロレス同好会の子たちが自転車で全国を回って『PRIDE』とGP決勝戦をアピールしてくれたんですよね。ありがたいことに本当に『PRIDE』ファンは温かい人が多くて、相当にいいものを食べてたみたいですけど、終わったあとに「もう勘弁してください」って言ってました（笑）。



笹原DSE広報局局長談

今期のトピックス3連発

8/1 永田さんが実業界に進出！株式会社ナガタロック設立



我らが永田さんが実業界に進出！　千枝子夫人を社長に株式会社ナガタロックを立ち上げると、アパレルに手を広げ、永田さん自身も"裏原宿""ヒップホップ"の勉強を開始。さらにリラクゼーション施設『enishing』を開店！　この『enishing』はケープを被った状態で中をミストサウナ状態にして、汗から身体の老廃物を出す健康法。開店時には、さっそく永田さん自身も実演。ごらんのとおり何をやっても絵になる男だと再確認する次第だ。

8/8 川田19：55衝撃の登場！後楽園で"伝説"を作る



あさっての方向へ疾走する男、川田がまたやってくれた！　江頭2：50が伝説を残すためハッスルに再登場し、リング上でウ○コしようとしたそのとき、『スリル』のテーマに乗って、江頭と同じ黒タイツで登場！　江頭のお株を奪う倒立をリングで披露し、芸人でもないのに「芸人の血が騒いだ」と乱入の動機を説明。これには江頭も「おまえ、壊れすぎ！」と頭を掻きむしった。こうして川田はまた一つ伝説を残したのであった。

8/19&20 インディー真夏の祭典レッスルエキスポ開催！



「インディー・サミット」を主催した『週刊ゴング』の関連会社ミック・エンターテインメントが、真夏にぶっ放したビッグイベント。お台場の広場でインディー、女子プロ、女子格などが二日間で約50試合も提供する大規模なものだったが、観客数は思いのほか小規模。それでも鈴木健想vs高木三四郎の電流爆破マッチの最中に停電したりと、伝説は残した。本誌チョロの大会感想は「暑かった」と、その一言でした。

マット界はみだし事件簿

▼8月2日　無我ワールド・プロレスリング旗揚げ
▼8月13日　G1クライマックス最終戦で天山広吉が全勝優勝を果たす
▼8月26日　UFC62でチャック・リデルがレナート・ババルにわずか95秒でTKO勝利。ライトヘビー級王座防衛を果たす
▼9月19日　金子賢が『HERO'S』移籍
▼9月27日　桜庭和志が椎骨脳底動脈血流不全で倒れ、10・9『HERO'S』を欠場

※GK情報　8月→3年G組の課外授業で『レッスルランド』に潜入。9月→3年G組でビッグマウス・ラウドについて授業

"デザイン・キャプテン"ヒサくんの『kamipro』表紙物語2006

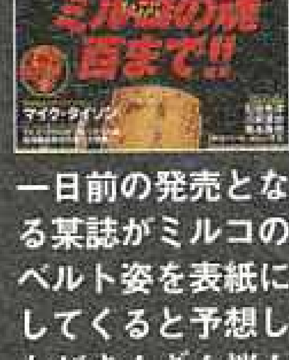
102号は北斗コスプレでついにジョシュが専門誌初表紙。これだけ文字がゴチャゴチャしているのに、見やすくまとまった表紙は珍しいと自画自賛！　実物はナイロン製だったので、革ジャンに見えるように加工して重厚感を出しました。それにしても『kamipro』の表紙コピーって、意味は不明でもとにかく勢いが伝わればいいんだ！　ってことが如実にわかるよね（笑）。103号のヒョードル侍は『ハッスル』ポスターのイラストでおなじみの金子ナンペイさん。『ハッスル』の世界観と被らないように、表紙コピーは書道家の富永（泰弘）さんにお願いして侍テイストを強調しました。（談）

No.103 06年09月号



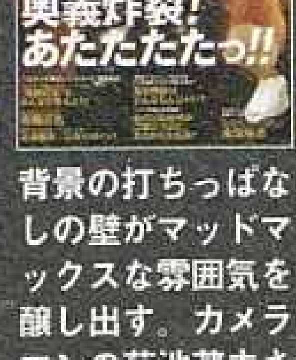
PRIDEラスベガス決戦直前号。表紙完成直後に「ヒョードル、大会欠場」の怪情報が飛び込んできたが、何も聞かなかったことにして印刷所へ。

Special kamiスペ秋



一日前の発売となる某誌がミルコのベルト姿を表紙にしてくると予想したが、さんざん悩んだ末に本誌はやはりこの表紙に。一方の某誌は……。

No.102 06年08月号



背景の打ちっぱなしの壁がマッドマックスな雰囲気を醸し出す。カメラマンの菊池茂夫さんの加工でさらに重みを感じさせるかたちに。



2006年10月を振り返る!

ヘロウ、アッメ～リカ! PRIDEの存亡を賭けたラスベガス上陸が大成功に

PRIDE王者に挑む筋肉三兄弟がラスベガスの夜にドラマを生んだ

『PRIDE』初となる海外大会、『PRIDE・32』ラスベガス大会に向けての仕込みは夏前から始まっていた。8月19日にはアメリカ・カリフォルニア州でカード発表記者会見が行なわれ、そこに元世界統一ヘビー級チャンピオンのマイク・タイソンが出現!! 榊原信行DSE代表とのツーショット写真は全世界に衝撃を与えた。

この大会は「日本の『PRIDE』をそのままアメリカに持っていく」というコンセプトで日本の演出機材を大量に投入! 日本人スタッフも大挙して乗り込んだ。しかし、運営面では左ページで笹原GMも言っているように、言葉の壁と仕事に対する感覚の違いから現地スタッフとの意思の疎通がなかなかうまくいかなかった、という側面もあった。前日会見では厳重すぎるセキュリティチェックのおかげで、本来ならば〝顔パス〟であるはずの佐伯繁PRIDE広報ですら入口で足止めを食らって会場に入れないという事態が勃発! 時差ボケと睡眠時無呼吸症候群による睡眠障害と持病の糖尿病で悪戦苦闘していた佐伯氏が「どうなってんの?・」と鼻息を一層荒くしていたのがじつに印象深い。

ケーブルテレビやPPVで『PRIDE』を観て、アメリカ大会をずっと待ち望んでいたアメリカのファンは、凄まじい盛り上がりで『PRIDE』のアメリカ初上陸を熱烈に歓迎した。とくにエメリヤーエンコ・ヒョードルとマウリシオ・ショーグンの人気が凄まじく、なんと日本では大ブーイングが発生する島田裕二エグゼクティブ・ルールディレクターに対しても大歓声が起こり、日本の関係者とPPV視聴者をおおいに驚かせた。

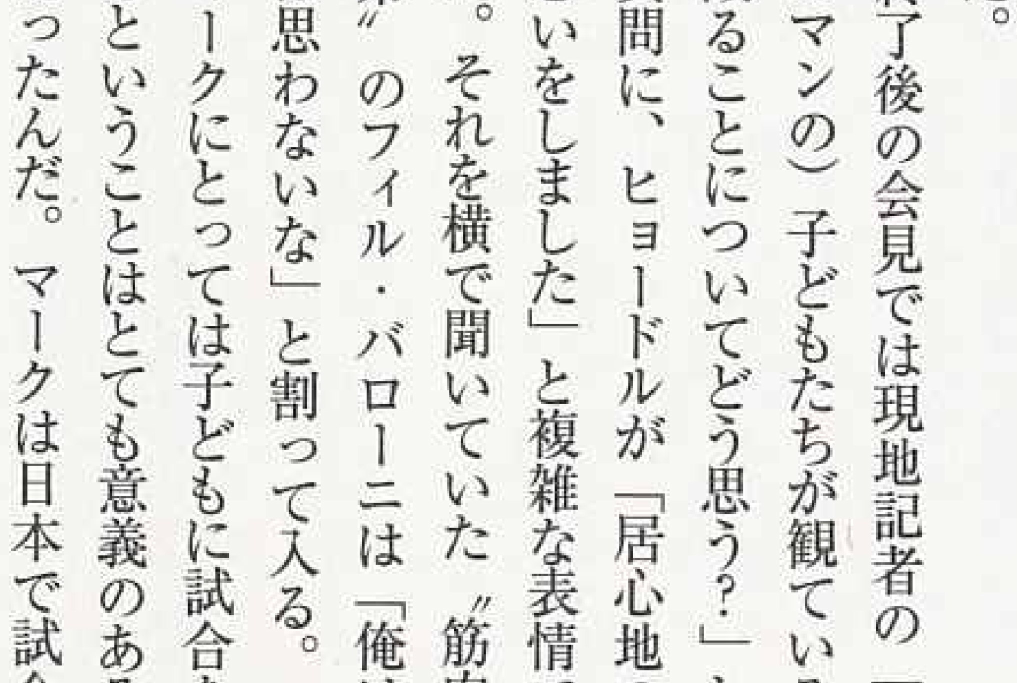
試合もKOや一本での決着が多く、メインのヒョードルvsマーク・コールマンでは、コールマンの娘がリングで父親と抱き合う感動のフィナーレを迎えた。

終了後の会見では現地記者の「(コールマンの)子どもたちが観ている前で殴ることについてどう思う?」という質問に、ヒョードルが「居心地の悪い思いをしました」と複雑な表情で答えた。それを横で聞いていた〝筋肉三兄弟〟のフィル・バローニは「俺はそうは思わないな」と割って入る。

「マークにとっては子どもに試合を見せるということはとても意義のあることだったんだ。マークは日本で試合をしていたから、子どもたちは試合をビデオでしか観たことがなかった。残酷だって? 人生ってのは残酷なものなんだよ。自分の父親がもしあんなに凄いパンチを受けて生きてリングから降りてくる姿を観たら、父親の仕事を誇りに思うし尊敬するよ。将来マークの娘たちが大きくなったら、この瞬間を思い出して『自分の父親は凄かったんだ』『自分たちも人生を頑張っていこう』と思えるはずだ。俺はマークを尊敬するね」、この感動的な名演説に会見場は大きな拍手に包まれた。

浪花節とは言わないまでも、ここまでの過剰な熱さがアメリカで受け入れられていたのは驚きだった。だが、『PRIDE・32』はアメリカの国民性に合わせたわけでもなければ、単なるレベルの高い総合格闘技でもなかった。闘いの中でドラマを紡いでいくという『PRIDE』の本質が色濃く出た、日本で行なわれている大会となんら変わりのない、いつもどおりの『PRIDE』だった。

(坂井ノブ)



〝ミスター・60億分の1〟ヒョードルを相手に、ひるむことなく自分の生き様を見せつけた42歳・コールマン。この男のドラマをはじめ、PRIDEそのものがラスベガスの夜を歓声の渦に巻き込んだのだった。

話題賞 前田日明

日明兄さん復活！ 金子賢に対し、「半殺しにしてやる」とキラー発言



8〜9月のマット界の話題をかっさらったのが『HERO'S』の前田日明スーパーバイザーだ。桜庭の『HERO'S』初戦後には「スーパーバイザーってなんなのかな？」と語っていた前田の存在が久々にクローズアップされたのが愛弟子の所と金子賢の対戦が決定したときだった。「俳優に戻れないように顔、ボコボコにしてやれって。俺が現役だったら半殺しにしてやる」と激怒し、所を戸惑わせた前田。テレビの煽りにもさんざん使われるも、試合後は握手を交わした前田と金子。その陰で谷川さんは「前田さんのおかげで、いいドラマができました」とニッコリ。さすがだ！

今期の主役 髙田延彦

ファイター顔負けの大インパクト ラスベガスでも"髙田節"爆発！



「ヘロウ？　アッメ〜リカッ!!」と『PRIDE』初進出となる『PRIDE.32』ラスベガス大会のリングで挨拶し、日本と変わらぬ声援を受けた髙田延彦統括本部長。休憩後、リングに上がった髙田本部長はジャパニーズテイストあふれるイングリッシュでのスピーチを披露。最後にはお約束の「出てこいや〜ッ！」も飛び出し、ファイター顔負けのインパクトを残したのだった。翌日の会見には大会成功に気をよくしたのか二日酔いで登場。第一声は「すいません、酔っぱらってます！」とアメリカでも、らしさ全開。来年2月のラスベガス大会でのマイクパフォーマンスも期待してます！

特製PRIDEトランプとともに ラスベガスで特写！

ジョシュ・バーネットで振り返る2006



10月といえば、もちろん『PRIDE.32』ラスベガス大会。母国での開催に、ジョシュもGPの激闘直後ながら当然のように出撃、パウエル・ナツラと対戦した。当然、本誌でもそんなジョシュをフィーチャー。特製PRIDEトランプを持っての特写に試合翌朝のロングインタビューと、またしても大活躍である（観戦に訪れたTAJIRIとの"電撃合体=ハッスル軍入り?"も報じられた）。試合では電光石火の足首固めで一本勝ちを果たしたものの、序盤はテイクダウンを許すなど思わぬ苦戦。本人も認めるように連戦の疲れが見られたのだが、なんと……!

10月のラスベガス大会は いま思い出しても……!!

DSEで振り返る2006



9月の『PRIDE無差別級GP決勝戦』は感動的でしたよね。「地上波がなくても大丈夫だね」っていろんな人に言われたのは凄く印象に残ってます。『PRIDE』の底力を見せられたと思います。で、10月の『PRIDE.32』ラスベガス大会は思い出すだけで吐き気がしますね（笑）。「よくできたな」と思いますよ。現地のアメリカ人スタッフとの意思の疎通ができなかったり、仕事の取り組み方が日本式と違ったりして、イライラしてました。なんだか『PRIDE.1』をやってるような感覚でしたから。でもアメリカのファンの熱には正直圧倒されましたね。



笹原DSE広報局局長談

今期のトピックス3連発



10/25 アントニオ猪木酒場 池袋に堂々オープン！

昭和を舞台にし、アントニオ猪木をテーマにいた居酒屋、その名も『アントニオ猪木酒場』が、池袋に堂々オープン！　入口にはアントンの巨大フィギュアが置かれ、店内には常時『炎のファイター』が大音量で流れているという、まったく落ち着かないこのお店。オープニングセレモニーでは、アントンやサイモン社長も出席した。ちなみに二号店となる沖縄店は「1・2・3・ダーッ！の日」という12月3日にオープンした。



12/13 サイモン猪木社長が 極悪プレジデントに変身

新日本プロレス社長サイモン猪木が極悪プレジデントに変身した。9・24大阪大会で蝶野＆天山組のタッグ王座剥奪を発表した際、蝶野に暴行を受けながらも「アイアム・プレジデント・サイモン！」と、なつかしの笹原GMばりに大見得を切ったサイモン社長。この日の会見からグラサン、葉巻キャラをオフィシャルでスタートさせ、『週プロ』の表紙も奪取したが、大方の予想どおり、蝶野との抗争は尻すぼみとなったのだった。



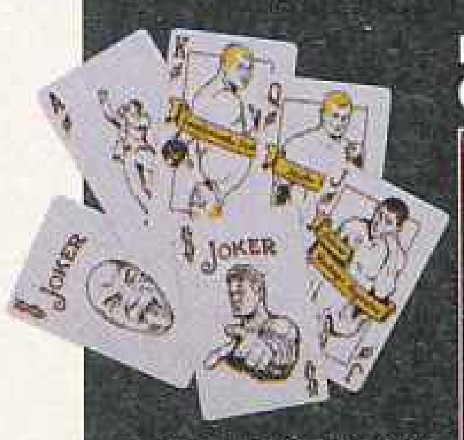
11/8 『上井ステーション』 発車できずに無人駅

前田日明と絶縁後、村上和成らビッグマウス・ラウドと袂を分かち、『上井ステーション』として、シュポーっと再出発するはずだった上井文彦改め上井駅長。しかし、「納得のいくカードが提供できない」と、前代未聞の大会二日前に後楽園ホール大会延期を発表。夢列車は発車せず、駅長は"無人駅"の入口で払い戻しに対応。結局、12月3日に再出発したが、いきなりSUWAとメカマミーから一騎打ちを迫られるなど、嵐の発車となった。

"デザイン・キャプテン"ヒサくんの『kamipro』表紙物語2006

斉藤くんがエスペランサーの写真だけ送りつけてきて「とにかく怖い感じで！」「ヒゲは淡い感じに削ってください！」くらいしかイメージを伝えてこなくて、もの凄く苦労してデザインした表紙（笑）。ヒゲを消す作業は地味だった〜。あとロゴにはHGを入れ込んでいるけど、『kamipro』の表紙って、こういうアクセサリーが超重要。100号の川田総統の「死刑！」な感じとかね（笑）。個人的にこの104号で思い入れ深いのは、ジョシュのラスベガス取材用にわざわざ作った"PRIDEトランプ"！　師岡さんが描いたイラストをシール印刷して、手作業で貼り合わせて完成。素晴らしい出来映え！

No.104
06年10月号



ラスベガスといえば、トランプ！……ということで、わざわざ作成したPRIDEトランプ。10セット限定なので超プレミア。ジョーカーには佐伯さん案もあったのだが……。



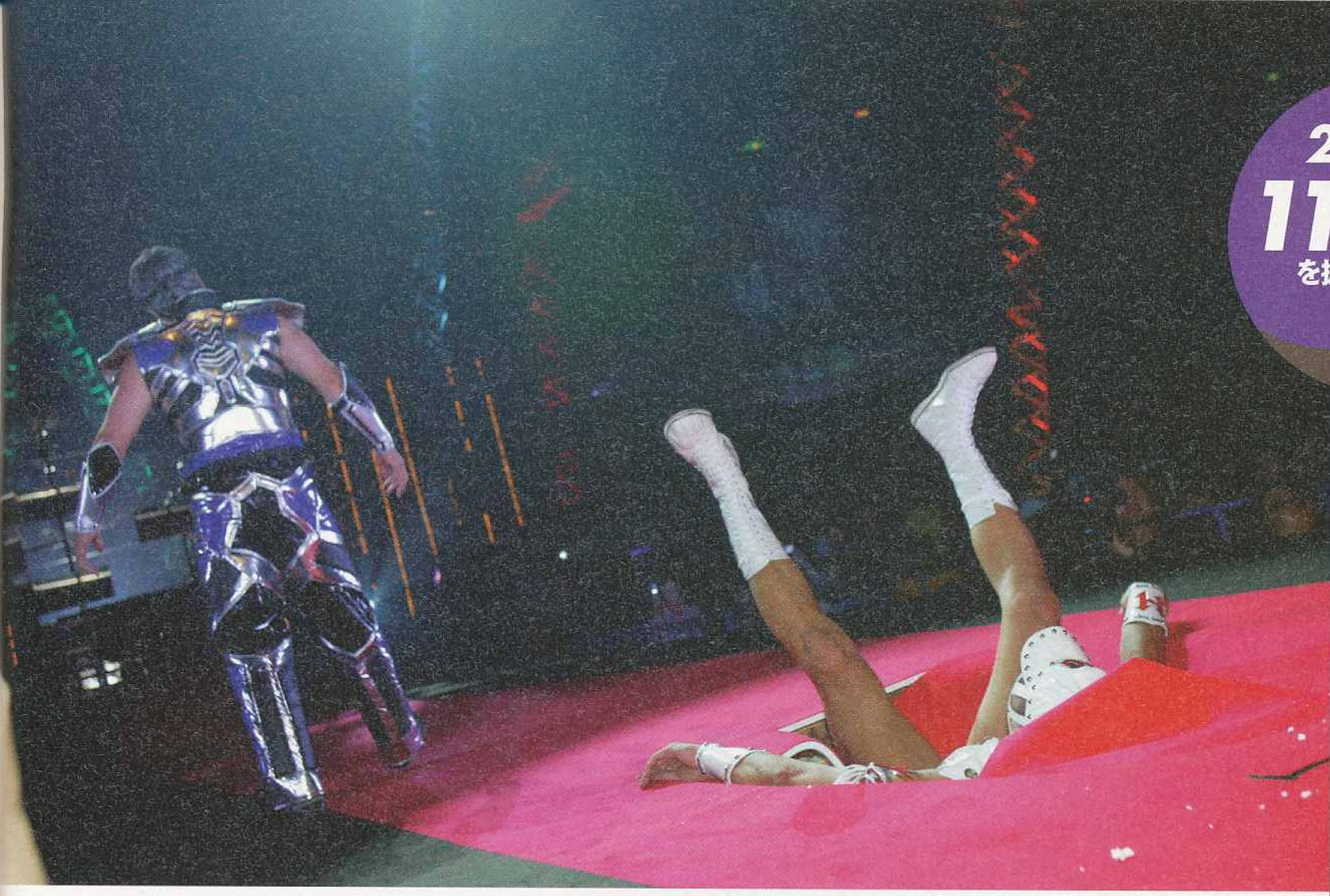
伝説の『マーダーブック』（本の中身は各自調査）を彷彿とさせるショッキング・カバー。一応『kamipro』はプロレス・格闘技マガジンです。

マット界 はみだし事件簿

▼10月8日　『レッスルランド』後楽園大会で中西学が神として降臨
▼10月9日　秋山成勲が『HERO'S』ライトヘビー級王者に輝く。ミドル級王者はJ・Z・カルバンに
▼10月10日　『UFN』でティト・オーティズに敗れたケン・シャムロックは引退を表明
▼10月11日　FEG代表谷川氏がボブ・サップの契約違反に対し「訴えます！」
▼10月15日　天山広吉が越中詩郎、真壁刀義とヒールユニットGBH結成を表明。のちに矢野通、石井智宏も加入
▼10月14日　UFC64でアンデウソン・シウバがリッチ・フランクリンを破り、ミドル級新王者に。ライト級もショーン・シャークがケニー・フロリアンに勝利し、新王者が誕生

※GK情報　10月→3年G組の課外授業で新日本プロレス道場に潜入。プッシュアップを披露

ハッスル・マニアにかつてない衝撃結末到来 PRIDEにはあの〝煽りV〟の天才が復活!



ザ・エスペランサーの恐怖、再び ハッスルがまた新たなる実験を展開

10月のある日、「小池栄子ハッスル参戦」というド派手な文字が『東京スポーツ』の一面に踊った。ご存知のように〝GMW〟坂田亘の彼女である。9月のGM総選挙で当選した際に公約として掲げていた「えい子参戦」がついに実現か⁉ と思ったら…どうも雲行きが怪しい。いつまで経っても〝GMW〟が来場を明言しないと思ったら、11月15日の『ハッスル・ハウスvol・21』(後楽園ホール)で「『ハッスル・マニア』に連れてくるつもりだったが、無理かもしれねえ」と言いだしたのだ。一斉にブーイングが起きたのは言うまでもない。

だが、『ハッスル・マニア2006』のオープニングに突如として「♪ハッスル・マニアに来い!けえいこ〜」と、小池栄子そっくりの妖精さんが出現したのだ。スタッフですら当日まで知らされなかった妖精さんの開催宣言で『ハッスル・マニア2006』は幕を開けた。

この日、デビュー戦を迎えた海川ひとみはKUSHIDA&バンザイ・チエと組んでジャイアント・バボと3対1ハンディキャップマッチで対戦した。現役グラビアアイドルとは思えぬ動きとやられっぷりで鼻骨を折りながらも涙を流してハッスルした。

中指を突き立てて突如モンスター軍入りしたカイヤは、ハッスル軍在籍時に控室でもピリピリしたオーラを闘わせていたニューリン様と激突するが、『東スポ』でも「カイヤ、太め残り」と書かれていたように体重を絞りきれずに後半で失速。一方、ニューリン様は天から降りてきた新たなムチでアン・ジョー司令長官を斬り捨てて見事にフォール勝ちを挙げた。

そして迎えたハッスル軍とモンスター軍の頂上対決。HGと、髙田総統の〝闘う化身〟であるザ・エスペランサーの一騎打ち。ザ・エスペランサーはいきなりレーザー・ビターン!を繰り出す。これはHGが間一髪でかわしたが、その背後にあるセットが破壊されるという凄まじい威力! プロレス史上初の凄まじい破壊行為に呆然とするHGは一気に追い込まれる。しかし、ここでニューリン様がザ・エスペランサーの弱点であるオカリナを吹きながら登場すると耳をふさいで苦悶するザ・エスペランサーだが、二発目のレーザー・ビターン!でニューリン様の胸を打ち抜いてしまう。

回復したザ・エスペランサーはHGに必殺のハイキックを炸裂させて悠然と3カウントを奪うと、完全にグロッギー状態のHGをツームストン・パイルドライバーで花道にめり込ませた。このバッドエンドには賛否両論あるものの、豪華芸能人が多数参戦して、ありとあらゆる斬新な実験が繰り広げられたという意味では、『ハッスル・マニア2006』は確実にネクストレベルのプロレスを表現したと思う。

そんな中でなぜか非常に評価が高いのは〝世界一性格の悪い男〟鈴木みのるに気をつけの姿勢のまま絞め落とされるという見事なやられっぷりを披露したRGだったりする。ただ、RGが活躍すればするほど、不思議な力が働くというジンクスを忘れてはならない。「RGが外車を買った途端にそのメーカーが日本撤退を決定」「RGがGMを務めていた6月にフジテレビ問題などが勃発」「RGがハッスルの現場で仕事をすると雨が降る」など、RGウィルスに感染すると、すべてのことがネガティブな方向へ舵を取ってしまう。RGが活躍するいまこそ、『ハッスル』は最も警戒レベルを上げるべきであろう。

(坂井ノブ)



ザ・エスペランサーに重傷を負わされたのはHGだけではなかった。ザ・エスペランサーを衰弱させるべくオカリナを奏でたニューリン様までもレーザー・ビターンで瀕死の状態に。

話題賞 上井駅長

上井ステーション、無事発進! 07年はこの男がキーパーソンか



2006年師走、ほのかにブレイクの兆しを見せているのが上井文彦氏だ。2006年の上井氏は前田日明に去られ、新日本からは絶縁宣言、村上和成から糾弾されると、頼みの柴田勝頼もフリー宣言をするなど踏んだり蹴ったり。再起をかけ10月8日後楽園で『上井ステーション』を発進させようとするも、直前で自ら組んだカードに納得がいかず大会は延期に。もはや、これまでかと思われた上井氏だったが、12月3日後楽園大会で駅長ルックに身を包み自ら駅長を名乗ったところプチシルマならぬプチブレイク。12月30日後楽園にはUWAI28号なるメカまで登場。栄光に向かって走れ!

今期の主役 佐藤大輔

あの煽りVTRが帰ってきた! ナレーター立木文彦氏も復活!!



「おまえも男だ!」と『PRIDE』ファンの誰もが声をかけたくなるほど待ち望んでいた男が帰ってきたぜ〜! そう、『PRIDE』名物の選手紹介煽り映像を作っていた佐藤大輔ディレクターが11月5日『武士道.其の十三』で復活。なんと、佐藤ディレクターは『PRIDE』の映像制作をするため天下のフジテレビを退社したというからビックリ。佐藤ディレクターの復帰戦(?)となった『武士道』のオープニング映像では「フジテレビ・ショック」以降、その美声が聞かれなくなっていたナレーターの立木文彦氏の復活も明らかになり、詰めかけた観客からは大歓声が巻き起こった。

ジョシュ・バーネットで振り返る2006

激渋スーパーマン・イラストで『kamipro』二度目の表紙に抜擢!



2006年、『PRIDE』ナンバーシリーズ、GPシリーズにフル出場したジョシュは、疲労をものともせず『男祭り』にも出場! その“プロレスラー=スーパーマン幻想”を現実にする活躍に、本誌も105号で表紙イラスト&インタビューでリスペクト。しかも対戦カードがノゲイラとのリマッチだっていうんだから驚いた。「さすがに今回はイージーな試合を」って、全然ならないんだよこの人!? 常にプロレスラーとしてどうあるべきかを考え、『PRIDE』という過酷すぎる戦場でそれを実践してきたジョシュは、最後の最後まで我々の期待を裏切らなかった。

DSEで振り返る2006

“断髪式”から“全裸”まで いったいこの会社はなんなんだ!



11月の『武士道.其の十三』はとにかく長かった! 招待した私の親戚も途中で帰った『PRIDE.2』をやってるような感覚に陥りましたね(笑)。ジャイアント・シルバ? 凄いカードを組むなぁと思いました。あのとき使ってたシルバの等身大パネルは足をクロスしてるへんてこりんな写真でしたね。言ってくれれば写真ぐらい貸すのになぁ(笑)。12月は佐伯さんが断髪式をやった数時間後に江頭2:50さんが全裸で大暴れするという奇跡的な一日がありましたね。自分たちでやってることですけど、ここはなんの会社なんだって思いました(笑)。



笹原DSE広報局局長談

今期のトピックス3連発

11/8 NOSAWA GENOME INOKIより先に開催!



延期を繰り返す本家『INOKI GENOME』に先がけ、NOSAWA論外が『NOSAWA GENOME〜無茶ワールド・プロレスリング』を開催。新木場1st RINGということでチープ感が漂うかと思いきや、鈴木みのるvs風香、NOSAWA論外vs高山善廣、メカマミーやロボ京平も登場と、本家よりも豪華そうなメンバーが揃い大成功に終わった。なお、次回は武藤のアドバイスで『INOKI』より先に韓国で開催したいとのこと。

12/12 『東スポ』プロレス大賞 メカマミーが話題賞受賞



TBS『レコード大賞』同様、ここ数年、その存在意義が問われっぱなしの『プロレス大賞』。06年もMVP鈴木みのる、ベストマッチ丸藤正道vsKENTAと大方の予想どおりの結果となったが、唯一目を引いたのが話題賞のメカマミー。

史上初のメカ受賞となった喜びをメカマミー本人は「この受賞で世界中のメカ、ひいてはIT産業界に夢と希望を与えられたと思う。来年も一生懸命、情報操作するぞ」と、メールでコメントした。

12/18 “生きる伝説”江頭2:50 禁断の“生テポドン”発射!



エガちゃんがついに“伝家の宝刀”を抜いた。12月26日で、大谷晋二郎&金村キンタローと組み、プロレスデビュー戦を行なうことが決定した江頭2:50が、興奮のあまりこの日の会見で早くも“暴発”した。「当日は芸人魂バンバン見せてやる!」と息巻いた江頭ははやる気持ちを抑えられず、禁断の“生テポドン”をモロ出しして岸本PRを急襲! しかし、報道陣からは「あれではテポドンとは言えない」と“サイズ”を疑問視する声が挙がったのだった。

マット界はみだし事件簿

▼11月6日 蝶野正洋&中邑真輔組がG1タッグリーグ優勝

▼11月18日 UFC65でジョルジュ・サンピエールがマット・ヒューズにKO勝利。ウェルター級新王者となる。ヘビー級タイトルマッチはティム・シルビアがジェフ・モンソンに判定勝ちを収め、ベルト防衛成功

▼12月2日 『世界最強タッグ決定リーグ戦』で天山広吉&小島聡組が優勝

▼12月3日 上井ステーション、無事に出発進行

▼12月8日 『Dynamite!!』曙vsジャイアント・シルバが発表される

▼12月20日 亀田興毅がWBAライトフライ級タイトルマッチでベルト防衛

※GK情報 11月→3年G組の授業で特別講師・夏目ナナ先生を赴任させる。12月→3年G組の授業で“ドラゴン”藤波辰爾の豪邸に潜入

“デザイン・キャプテン”ヒサくんの『kamipro』表紙物語2006

105号は師岡さんの描いたジョシュの“スーパーマン”表紙。今年はイラスト表紙が続いてたけど、このアメコミ調はイラスト新機軸の手応えがあり。ジョシュの顔って、よく見ると“悪人顔”だしデフォルメもしづらいんだけど、これは見事にハマりました。06年最終号は、久しぶりにストレートなヒョードル写真で締め。たとえると『kamipro』って、変化球だと思わせる90キロのストレートをすまして投げる雑誌だから(笑)。こういう150キロ豪速球表紙はらしくないけど、たまに投げると印象に残るよね。あと海外の写真なので、質感もいつもと違っておもしろい雰囲気になりました。

No.106 06年12月号



市場拡大で“怪物化”したMMAのビッグウェーブが『PRIDE』を襲う!! 皇帝を不安の象徴としてイメージした2006年ラストカバー。

No.105 06年11月号



プロレスラー=超人追求の道! 過酷な連戦ロードを突き進んだ英雄、ジョシュ。06年のMVP前祝祝いの表紙でした

2006年を振り返る!
番外編

06年、もっとも〝ミステリアス〟だった事件……ケンドー・カシンが〝空手の達人〟に弟子入り!!

取材・写真／丸井乙生（スポーツニッポン新聞社）

2006年度ミステリアス大賞はこの人しかいないだろう。北拳派中国空拳法道の最高師範、福田祥園氏だ。そろそろお忘れかもしれないが、06年4月に勃発した「シンガポール空手家事件」の関係者である。この事件は、劇画の世界が久しぶりに現実のものとなった心温まる一件だった。

4月4日夜、夏服姿のシンガポール人一行が青森県の白神山地で遭難しているところを青森県警弘前署に保護された。かつてシンガポールで最強を誇った空手家の遺言を実現させるべく、「北の果てにいる達人に秘伝書を譲ってもらう」ために未亡人、息子たちが来日して達人探索。その結果、残雪光る白神山地をウロウロして遭難した。

この事実だけをおかずにごはん3杯はいけそうだが、青森県平内町に住む男性が「その達人は私かもしれない。秘伝書持ってるし」と手を挙げたことで夢はさらに広がった。

その人物こそ福田祥園氏である。青森県蟹田町に生まれ、中学卒業と同時に拳法修行へ旅立つと中国、米ハワイなど各国を放浪。中国で秘伝書を譲り渡され、最終的に北拳派中国空拳法道の最高師範まで上り詰めた。地元テレビ局が主催するカルチャースクールで武術の指導をしているステキな60歳すぎの男性である。シンガポール人一行と対面を果たしたが、結局は別人だったことが判明し、シンガポール人の皆さまは青森県を去る。秘伝書を抱えた福田氏は立候補した手の行き場をなくしてしまったわけだが、そこにケンドー・カシンが「青森県に生まれて良かった」と弟子入り希望に手を挙げた。青森県の達人に青森県出身のカシンが弟子入りし、その様子を青森県出身の記者が取材する。リンカーンもぐったりの青森づくしとなった。



秘伝書強奪までもくろんでいたカシンだが、「見せてください」と頼んだところ、福田最高師範は「ウン。今日は私、見せるよ」とあっさり承諾。修行が終わったあとに石澤常光氏がカシンに代わって秘伝書を伝授されている。この直前、カシンさんと丸井は福田最高師範の奥さんが作ったカレーライスをご馳走になっていた。



秘伝書だけを見せてもらっただけでなく、ちゃんと修行しましたの証拠写真。礼儀作法から始まって、呼吸法、打撃、そして頭突きによる瓦割り。カシンさんは素直に教えてもらってました。



福田最高師範、カシンの背後にある壁を見てください。道場にはおよそ不似合いな、ふざけたお面がかかっています。師範、これはなんですか？「ウン。うちの子どもが昔つくったのサ」。道場に飾らなくても。わざわざその顔を作らなくても。いろいろ疑問が噴出しましたが、この写真はプリントアウトして、つらいことがあったときに見るようにしています。

その福田氏、経歴にまつわるエピソードがいちいち凄い。弟子入り前に話をうかがったのだが、本人談によると中学卒業後は日本各地を放浪。まずは九州・博多にて六角棒を使用した武道と出会う。

お次は当時米軍統治下にあった奄美大島へ無理矢理渡る。入国手段としては漁船に乗り、石垣島沖でリリース。通りすがりの船に拾われて上陸し、嘉手納基地前へたどり着いた。そこで基地のガードマンがいたずら半分に「カモン」と言ったので、「OK」と塀を跳び越えたら不法侵入で逮捕された。罰金刑に処せられたが払えるわけもなく、強制送還を避けるために日本語も英語もわからないふりをしていたら、米軍関係者の夫婦の下でハウスボーイとして働く職を紹介された。

名前も名乗らなかった福田氏はその夫婦に「スティーブ」と呼ばれながら数カ月間働き、罰金を払い込むことができたという。

米軍としてはスティーブをそのまま置いておくわけにもいかず、担当官は「どこの国へ行きたいんだ」と世界地図を取り出した。適当に指したところが台湾で、あっさり送り届けてもらった。「一丁上がりですよ」と福田氏が胸を張る。「蒋介石の息子が私を丁寧に迎えたもんですよ」。そこで武術の修行をしたうえで、マカオ経由で中国へまたも不法入国をかまし、北拳派中国空拳法道にたどり着いた。

また、時系列的に若干不安ではあるが、米ハワイにも滞在し「殴らせ屋」を生業とした時期もあったという。「ボーイフレンドにふられた女の子とか、夫に先立たれた婆さまとかに殴られてたね。ほかのアルバイトとしてはワイキキのはずれにある動物園でカメの甲羅を洗っていた」と証言する。

グレート東郷とも知り合いとなり、あるときは前座に出場予定だった選手が負傷したことから田吾作スタイルでプロレスデビューを果たしていた、と衝撃の告白までしてくれた。昔むかしのことじゃった。

経歴説明ですでに満腹になったが、修業後には大切な秘伝書を公開してくれた。福田氏は金属製の金庫から取り出し、うやうやしく礼をしてから巻物を開いた。すべて漢字で記された漢詩のような内容は「呼吸法は息が山びこになるくらいまで修練すること」など、武術において〝神〟の領域に達するための秘訣が書かれていた。

福田氏は噛み砕きながら説明してくれたが、カシンが最終的に気にかけていたのは、福田氏の横に控える佐藤師範のことだった。若き時分に弟子入りした佐藤師範はそのまま住み込み、夢を見たまま50歳越え。殺伐とした現代社会においても理想を追い続ける「チーム秘伝書」を垣間見て、弟子入りの旅はいつの間にか癒しの旅となった。

丸井乙生／まるい・いつき　スポーツニッポン新聞社、元プロレス担当、現・プロ野球担当。プロレス記者時代にはZERO―ONE、天龍源一郎らを数多く取材。最近は剣道四段を取得した。



「チャックとファッ●したい」
06年アメリカ名言大賞はこれだ!?

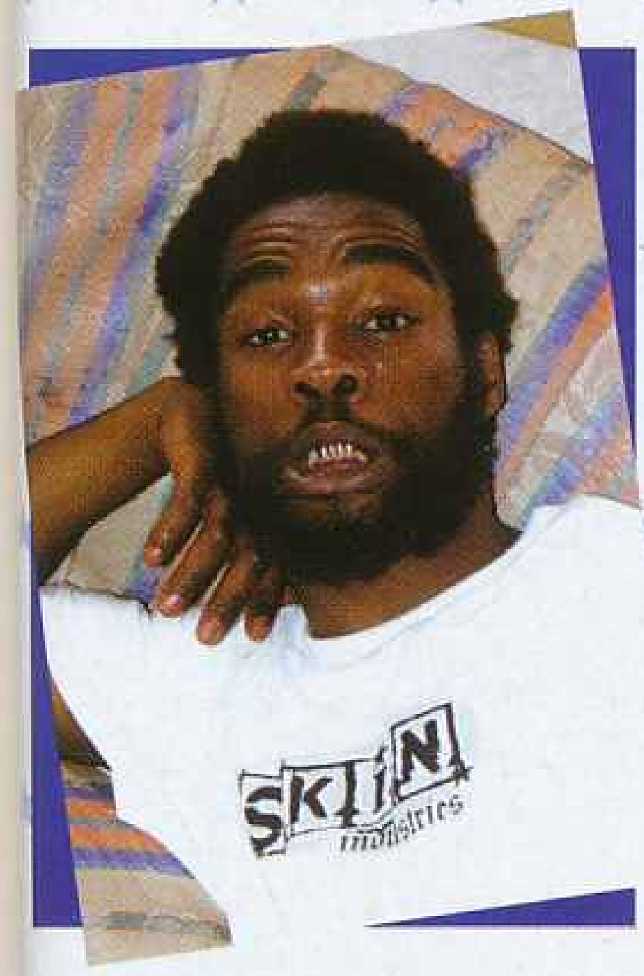
激動、波乱の一年を読み返す!!

ヘロウ〜!
アメリカMMA界 2006

UFCが巨大化の一途をたどるとともに、多くの新興団体が旗揚げし、アメリカ格闘技界の様相が変化した2006年。その市場拡大を受けて『PRIDE』が初のラスベガス大会を開催するなど、これまで“海の向こう”でしかなかったアメリカがより身近になってきた。とはいえ、現地発のニュースは玉石混淆。そこで2006年、アメリカMMAシーンで何が起こったのか、あらためて振り返ってみたい。

構成／上杉秀人

ザッツ・アメリカン!! 底抜け NEWSで振り返る USA2006



デューク東郷（以下、デューク） ジャッチャラッチャラッチャラッチャ～ン♪　報道によりますと！……というわけで、今日は『テレビ三面記事 ウィークエンダー』形式で、2006年のアメリカMMAシーンを振り返りま～す。

スコット・ピーターソン（以下、スコット） 今年もいろいろあったからな。

デューク 基本的にバカネタ中心でお送りするけどね（笑）。さっそくいってみよう！ ジャッチャラッチャラッチャ～ン♪

❶ クレイジーホースが誘拐容疑で逮捕!!

デューク フロリダ州マリオン郡保安官事務所公表の拘留者情報によると……チャールズ・"クレイジーホース"・ベネットがついに逮捕された！

スコット （冷静に）彼の普段の素行からしたら、べつに驚かない話だけどね。

デューク その情報では、ベネットと同じ生年月日で、名前や身体的特徴の同じ人物が載っているとのこと（笑）。しかも顔写真つきで！

スコット KOTC（キング・オブ・ザ・ケージ）の関係者に確認したら「クレイジーホースは刑務所にいるよ」って。詳しいことはわからないけど、逮捕容疑は誘拐、監禁、暴行（笑）。性的なものではないらしいけど。

デューク ホントにクレイジーだよ!!

スコット 保釈金の金額は65万ドル（約6500万円）という、とんでもない金額が設定されているから、しばらく彼の姿を見ることはなさそうだね。

デューク 話題性的にも金子賢のリベンジマッチはおもしろそうだけどなあ。谷川さん、お願い!!

❷ 元UFCファイター110億円の強盗!!

デューク 英大衆紙『サン』によりますと、強盗容疑で指名手配されていた元UFCファイター、リー・マーレイが6月25日、モロッコで逮捕されたとのこと。

スコット それ、イギリス史上最大の強盗事件だってよ！　事件後、マーレイは家族とマネージャーに「スペインに行く」と言ったきり行方不明だったんだけど、まさかアフリカまで逃げていたとはね。

デューク なんの罪に問われているかというと、昨年2月にイギリス・ケント州トンブリッジで警備会社のマネージャーが拉致され、その会社の金庫から5300万ポンド（約110億円）が盗まれるという事件が発生していたんだけど、マーレイにかかっている容疑は誘拐と強盗の二つ。しかも、マーレイと一緒に逮捕された友人が大量のハシシとコカインを所持していたことから、もし有罪判決が下った場合、まずモロッコで服役することになるとのことだ。

デューク イスラム圏はドラッグに厳しいじゃん。その後に、イギリスで刑務所入ったんじゃ、いつ出てこられるかわからない。

スコット マーレイは05年にもロンドンのクラブで喧嘩して刺されて世間を騒がせたし、その前にもクラブでティト・オーティズを殴ってKOしたりと、無茶苦茶なヤツ。その半生が映画化されるらしいから、楽しみにしたいよ。

デューク 映画化！　ただじゃ転ばないみたいだね、しかし（笑）。

❸ 薬物疑惑のランデルマン死人の尿を提出!?

デューク 報道によりますと、10月21日『PRIDE』ラスベガス大会に出場したケビン・ランデルマンが試合後、ドラッグテスト用の尿を別のモノにすり替えて提出。しかも、そのサンプルには人間のホルモンが含まれてなかったとのことで、人間以外の動物、もしくは死んだ人間から尿を取ったんじゃないかと報道されている。……死人の尿って。

スコット そんなバカな（笑）。死んだ人間からどうやって尿を取るんだよ!?

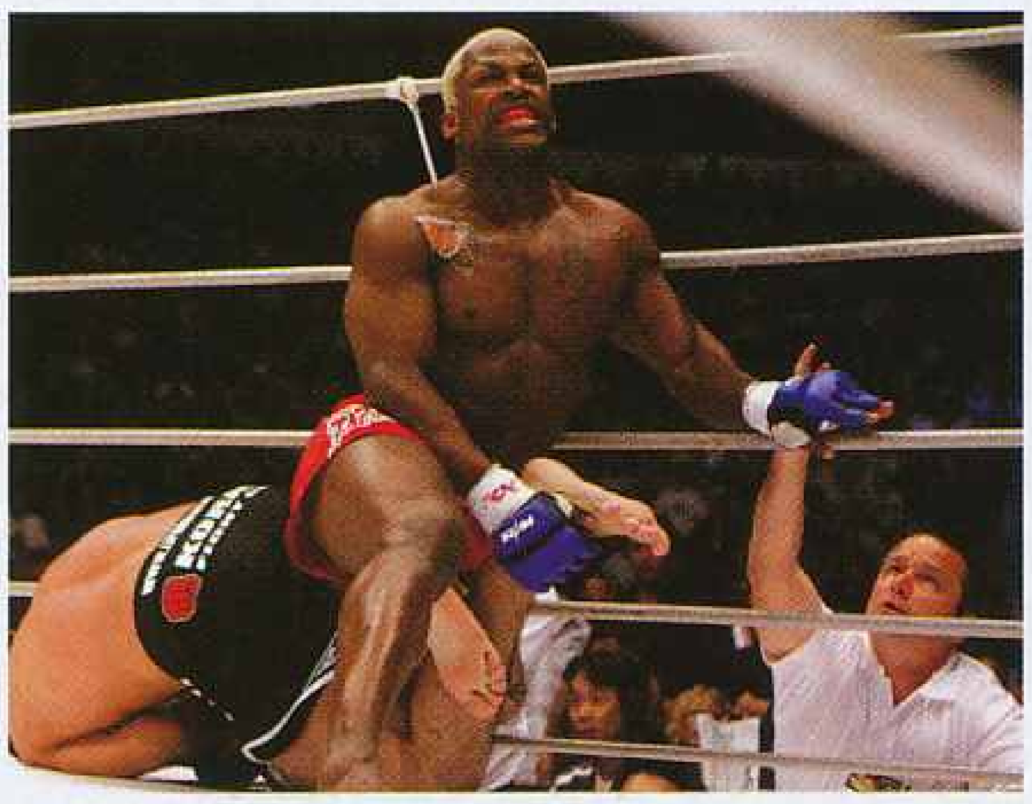
デューク まったくわからない（笑）。で、ランデルマンはどうなるの？

スコット もしすり替えたのが事実だとしたら、25万ドル以下の罰金や長期間の出場停止が科せられることになるし、最悪の場合はライセンスを剥奪されることになるかもしれない。

デューク そうなると、しばらくラスベガスでの興行には出られなくなる、と。

スコット アスレチック・コミッションは、ネバダ州で興行を行なうすべての団体に対して、その意向を尊重するように要請しているから、『PRIDE』がラスベガスで大会を開く以上、ランデルマンは日本でも試合ができなくなるかもしれない。

デューク いったい真実はいかに!?　どういうルートでそんなブツを入手したのかもあきらかにしてほしい（笑）。



大会前の会見でもなぜか「ウアァーッ!!」と叫んでいたというランデルマン。その破天荒ぶりがまた人を魅了するのだ。

❹ ダナとティトのボクシング戦が消滅!?

デューク 報道によりますと、昨年10月中に予定されていたダナ・ホワイトとティト・オーティズのボクシングマッチが消滅したとのこと。

スコット これは、そもそもアマチュアでボクシングをやってたというだけなのに、なぜか自信満々のダナが「ティトとやる！」って言ってたんだよね。

デューク キャンセルになったのは残念！　チャック・リデル vs ティト戦よりも全然、観たかったのに。

スコット 詳しく説明すると、ティトがUFCに復帰した際に、両者のボクシング・マッチの実現が契約書の内容に盛り込まれていたということだけどね。

デューク どんな契約書だよ、それ（笑）。

スコット いやいや、ホントらしいよ。当時ティトはダナを嫌っていたから、その一文を盛り込ませたらしい（笑）。で、両者の話だと3Rのエキシビション・マッチが実現して、しかもPPVで放映される予定があったんだって。でも、それ誰が観るんだよ！

デューク 俺は観るよ！　でも、どうせその話自体、ただの話題作りだったんじゃないの？

スコット その可能性は非常に高い。アスレチック・コミッションが両者の体重と経験を考慮して却下したと報道されているけど、実際にコミッションに確認したら、UFCからは申請はなかったって。

デューク やれやれ（笑）。

❺ 元WFAオーナーを賃金未払いで告訴!!

デューク 報道によりますと、昨年11月、UFCに団体を売ったWFAの元オーナー二人が、ジェレミー・レイペン元WFA社長に賃金未払いなどの契約不履行で

スコット・ピーターソン

格闘技情報サイト『MMA WEEKLY』（http://www.mmaweekly.com/）を主宰。本誌連載『USA cool 宅急便』のナビゲーター。ビッグマッチのたびに来日。八王子某所に居を構え、日米格闘技事情に精通している。

デューク東郷

本誌連載『USA cool 宅急便』のドライバー。スコットのよき相棒のはず。

訴えられていることが判明した。

スコット　ヒドイ話だ。雇われ社長だったレイペンやほかの従業員は半年間も給料をもらってなかったらしいよ。クイントン・〝ランペイジ〟・ジャクソンやヒース・ヒーリングなどの契約選手ごとWFAをUFCに売り飛ばした元オーナーは「ビジネス・チャンスが目の前にあったんだ。みんなにとって素晴らしい決定だったと思うよ」だって。

デューク　のんきなコメントを出しているな（笑）。

スコット　WFAは12月9日にラスベガスで大会を開催するはずだったのに延期になってた。結局、一人ほくそ笑んでいるのは、したたかなダナだけさ。ダナはWECも買収してファーム化しているしね。

デューク　プロレス業界でいうところのWWEとOVWみたいな関係か。

スコット　それに加えて、UFCがビジネス関係を模索しているケーブルテレビ局のHBOがMMAコンテンツをほしがっていることから、WECをあてがおうという考えもあるみたいだ。

デューク　ちょっと待って。それってどういうこと？

スコット　UFCはスパイクTVとの契約があるから、ほかのテレビ局とは契約を結ぶことはできない。でもWECなら傘下に収めた上で、他局と契約できるだろう。これで、UFCというか親会社であるズッファは安泰なわけだ。

デューク　なるほどね。ホントにダナは抜け目ないねぇ。

6 『ボードッグ』代表はいまどこにいる……？

デューク　報道によりますと、昨年12月1日、カナダのバンクーバーで『ボードック・ファイト』初のPPV大会が開催されたが、オーナーにしてオンライン・カジノ王のカルビン・エアー代表は来場を見合わせた。

スコット　（あっさりと）逮捕されるからでしょ。

デューク　オンライン・カジノの法規制が厳しくなったアメリカはともかく。カナダは大丈夫なんじゃないの？

スコット　詳しくはわからないけど、北米には行きたくないんじゃないかな。それどころか、本社だってコスタリカからイギリス領アンティグア・バーブーダ島に移転するらしいしね。

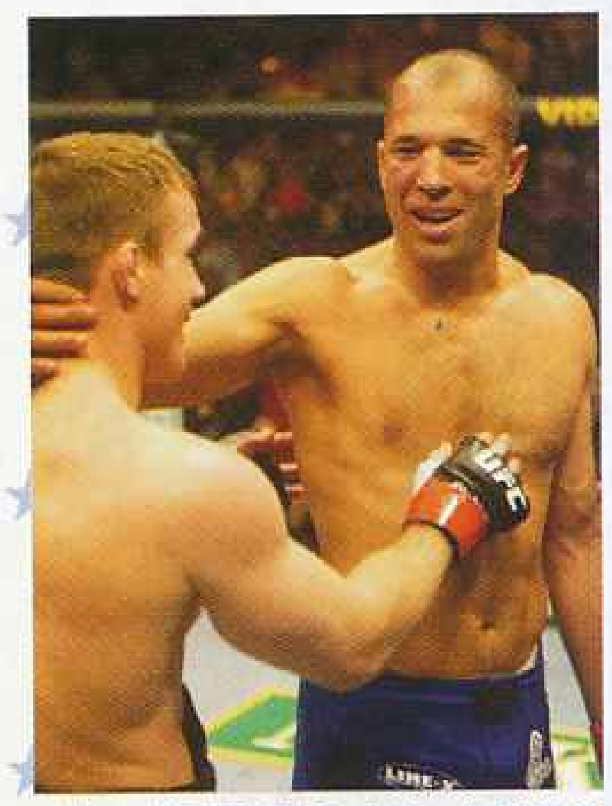
デューク　コスタリカですら、どこにあるかよくわからないのに、アンティグアなんとかってどこなのさ？

スコット　カリブ海の小島で、アメリカではイリーガルとされたオンライン・カジノ会社がたくさん集まっているところらしいよ。

デューク　とにかく、ますます安全で、かつ税制の優遇されるところに逃げていくわけね。

スコット　アメリカでのオンライン・カジノ禁止法制定の影響で、顧客は離れていくだろうし、今後『ボードック』はどうなってくのかねぇ。

7 〝レジェンド〟ホイスがUFCにまさかの電撃復帰！



パウンドで顔が腫れ上がった試合後のホイス。再挑戦はあるのか？

デューク　あれほど「ギは脱がない」とまで言い張ってUFC参戦を拒否していたあのホイス・グレイシーがギを脱いでUFCに復帰した。

スコット　（冷たく）要は、銭ってことなんじゃないの？

デューク　ミもフタもないこと言うね。しかも復帰戦の相手は、当時無敵のマット・ヒューズ！

スコット　つまり、それぐらいのことをホイスにさせる力がUFCには当時からあったってことでしょう。

デューク　ホイスはその復活戦でマット・ヒューズと闘ってボコボコにされるわけだけど、その大会のPPV売り上げは60万件を突破して新記録を達成。勢いづいたUFCは次の大会で、なんと！　77万5000件を記録！

スコット　PPVの価格が約40ドルだから3000万ドル！　日本円にしたら、約35億5000万円!!　言葉にならないよ。

デューク　制作費をテレビ局からもらって、コンテンツを作るという日本式のビジネスモデルとはまったく違うね。

スコット　日本のPPV件数はその10分の1ぐらいだから。そもそも日本にはPPV文化はまだ根づいてないしね。

デューク　『PRIDE』もアメリカに打って出ようとしているけど、数字の部分では、先行者メリットの強いUFCとはまだまだ勝負にならない。打開策があるのか、ないのか……。

8 アントンが国際大使のIFLが株式上場!!



なぜか大使に任命されたアントン。隣はカート・オットーIFLオーナー。

デューク　報道によりますと、昨年4月のIFL旗揚げ戦でアントンが国際大使に就任した！　んだけど……。

スコット　『東京サーベルズ』というチームを作った以外、何も具体的な動きはないよね（笑）。

デューク　本当に〝報道〟だけの話かい（笑）。まあ、『PRIDE』エグゼクティブ・プロデューサーって肩書きのときもべつに何かしていたわけじゃないんだからさ。

スコット　それよりも、IFLは11月29日に株式上場したんだよ。活動実績なんかたいしたことないのにねぇ。

デューク　アメリカはIPO（株式公開）の基準がゆるいのかな。

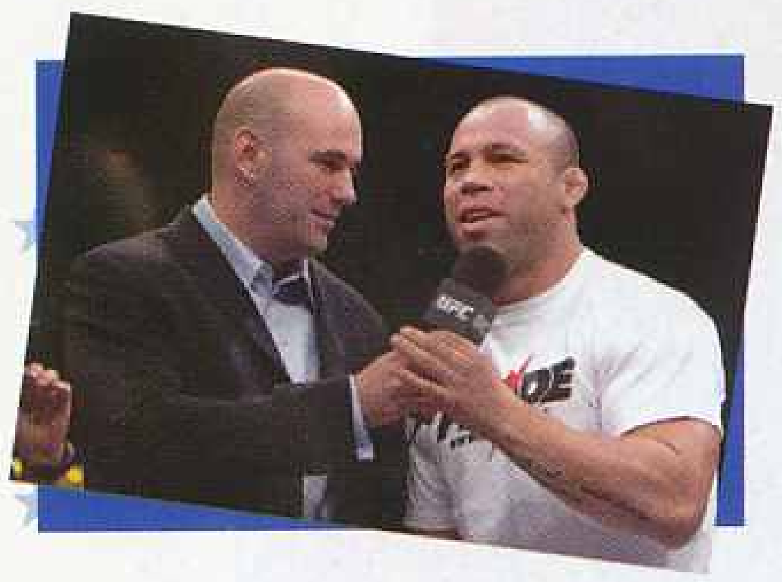
スコット　自動車メーカーのスズキやXboxをスポンサーとして獲得し、経営力だけは評価されていたにしてもねぇ。

デューク　だいたい格闘技で都市別対抗戦なんて、観たくもないなあ（笑）。株式が市場で買えるようになって、誰が投資したいのさ？

スコット　明るい話をすれば、上場直後にネバダ州の興行ライセンス取得を発表して株価を上げたり、IR活動には長けているみたいだよ。株式時価総額は15億ドル（≒約172億円）にもなっているしね。

デューク　172億円？　選手はマイナーな選手ばかりなのに、どういうこと？　ランデルマンの〝死尿〟疑惑並みにミステリーだ！

9 ヴァンダレイがオクタゴンに初登場！



デューク　7月8日のUFC61にヴァンダレイ・シウバが初登場！　これは日本で一番、有名なアメリカMMAニュースだね。

スコット　「チャックとファイトしたい」と言おうとして「チャックとファッ●したい」とマイクアピールして、一部で話題を呼んだよね（笑）。

デューク　でも、それ以来、まったく進展はなし。いったいどうなったんだろうね？

スコット　本来は11月のUFCでリデルとシウバが闘うはずだったけど、実現せず。お互いが「相手の団体が動いていない」と責任をなすりつけていたけどね。ま、当然だけど、結局、UFCは『PRIDE』の宣伝をする気はないってこどだよ。

デューク　ダナは、シウバをオクタゴンに上げたときも『PRIDE』の王者とは一言もいわなかったしね。言うに事欠いて、「ボクの友だちを紹介しよう！」って言ってヴァンダレイを呼び込んだけど、いつから友だちなんだ（笑）。

10 タイソン、やっぱりラスベガス大会に来場せず！

デューク　10月21日の『PRIDE』ラスベガス大会に来場予定だったマイク・タイソンがやっぱりドタキャン!!

スコット　タイソンについては、案の定と言うしかないけどね（笑）。

デューク　なんでも、タイソンは娘が手術するということで、DSEのスタッフを振り切って、ラスベガス大会中に急遽ワシントンに向かったらしいね。

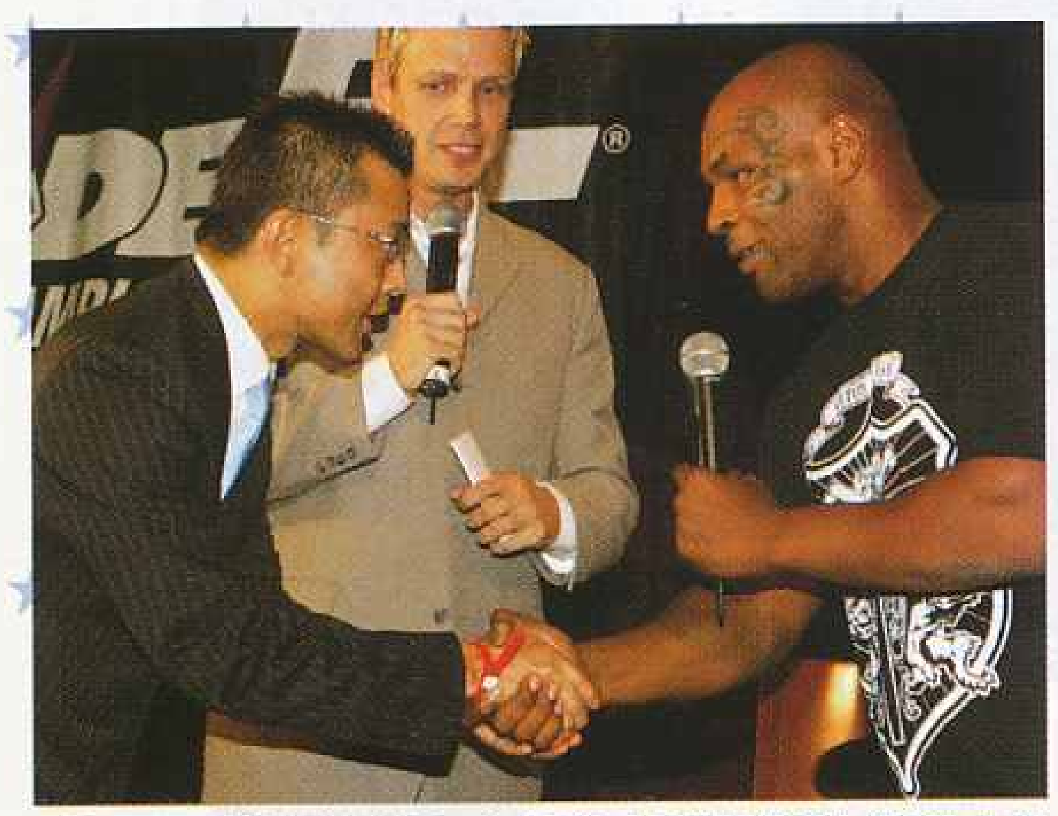
スコット　ハハハハ！　困ったときの親族というわけかな（笑）。

デューク　格闘アイコンとしては、ラスベガス大会前は、大きな打ち上げ花火になったタイソンだけど、いまではすっかり話題にもならなくなってしまったね〜。

スコット　K—1もタイソンにはさんざんな目に遭ったらしいから、DSEには気をつけてほしいけど。

デューク　一部報道によりますと、2月のラスベガス大会でバタービーンと試合するという話も出ているけど。

スコット　……。



8月にロスで行なわれたファンイベントで榊原代表と握手したタイソン。本誌の取材に「金が稼ぎてぇ」と本音をチラリ。

ホルモンが含まれてなかったとのことで、

イト・オーティズのボクシングマッチが消

A社長に賃金未払いなどの契約不履行で

コールマン
“浪花節劇場”の
余波とは?

格闘技版“アメリカで成功したニッポン”物語!?

PRIDEラスベガス大会がアメリカ格闘技界の“正論”を覆した!!

アフター〈10・21〉の世界



文／橋本宗洋　構成／真下義之
試合撮影／乾晋也
ヒョードル写真／黒田史夫
UFC写真／DAVE CONTRERAS

過去のどんなアメリカ格闘技大会とも違っていたPRIDEスタイル

スクリーンいっぱいに、トウモロコシ畑が映し出された。古きよきアメリカの原風景である。そのあいだの道を、一人の男が走る。BGMはブルージーなギターの響き。男の言葉がそこに重なる。

「私は選手である前に、父親だ」

「子どもたちのためにもう一度、世界で一番になる」

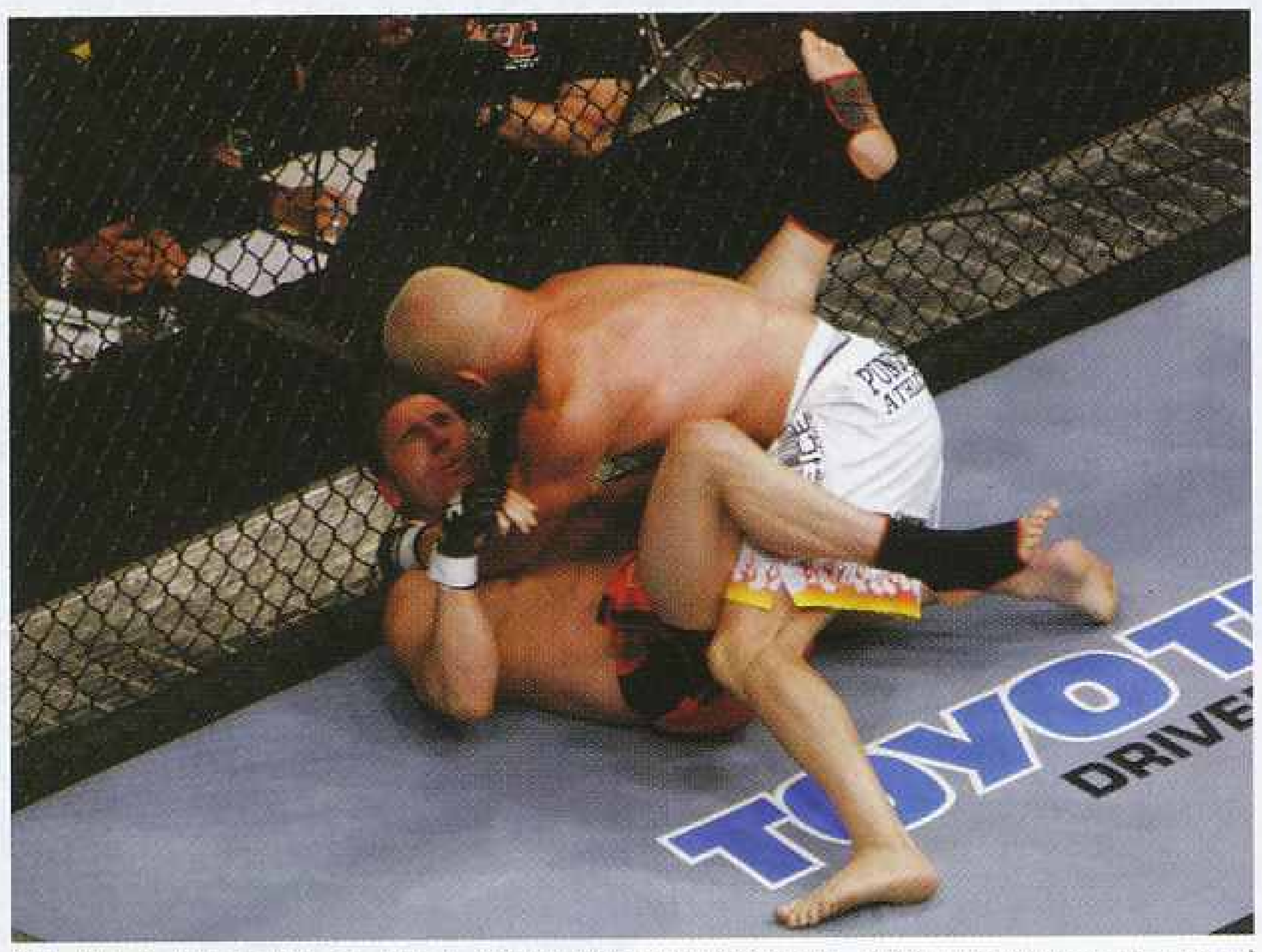
二人の娘と居間でくつろぐ男。突然、対戦相手を徹底的に叩きのめすチャンピオンの映像が割り込んでくる。苦痛に歪む敗者の表情とともに。

「娘たちのために闘う」と決意を語るアメリカ人と、冷酷に敵を打ち据えるロシア人のカットバック――。

2006年10月21日、トーマス&マックセンターで開催された『PRIDE・32』ラスベガス大会のメインイベント、エメリヤーエンコ・ヒョードルvsマーク・コールマンは、これまでアメリカで行なわれてきたどんな格闘技イベントとも違うテイストの〝煽りV〟で始まった。娘たちのため、もう一度かつての栄光を取り戻すために闘うオールドタイマーと、非情なまでの強さを誇るロシア人王者。

映像はどこまでも饒舌で、これでもかとばかりに観客のエモーションをかきたてる。それが「アメリカにも、日本でやっているのと同じ大会を持っていかなければ意味がない」と主催者が言い続けてきた『PRIDE』のスタイルだった。

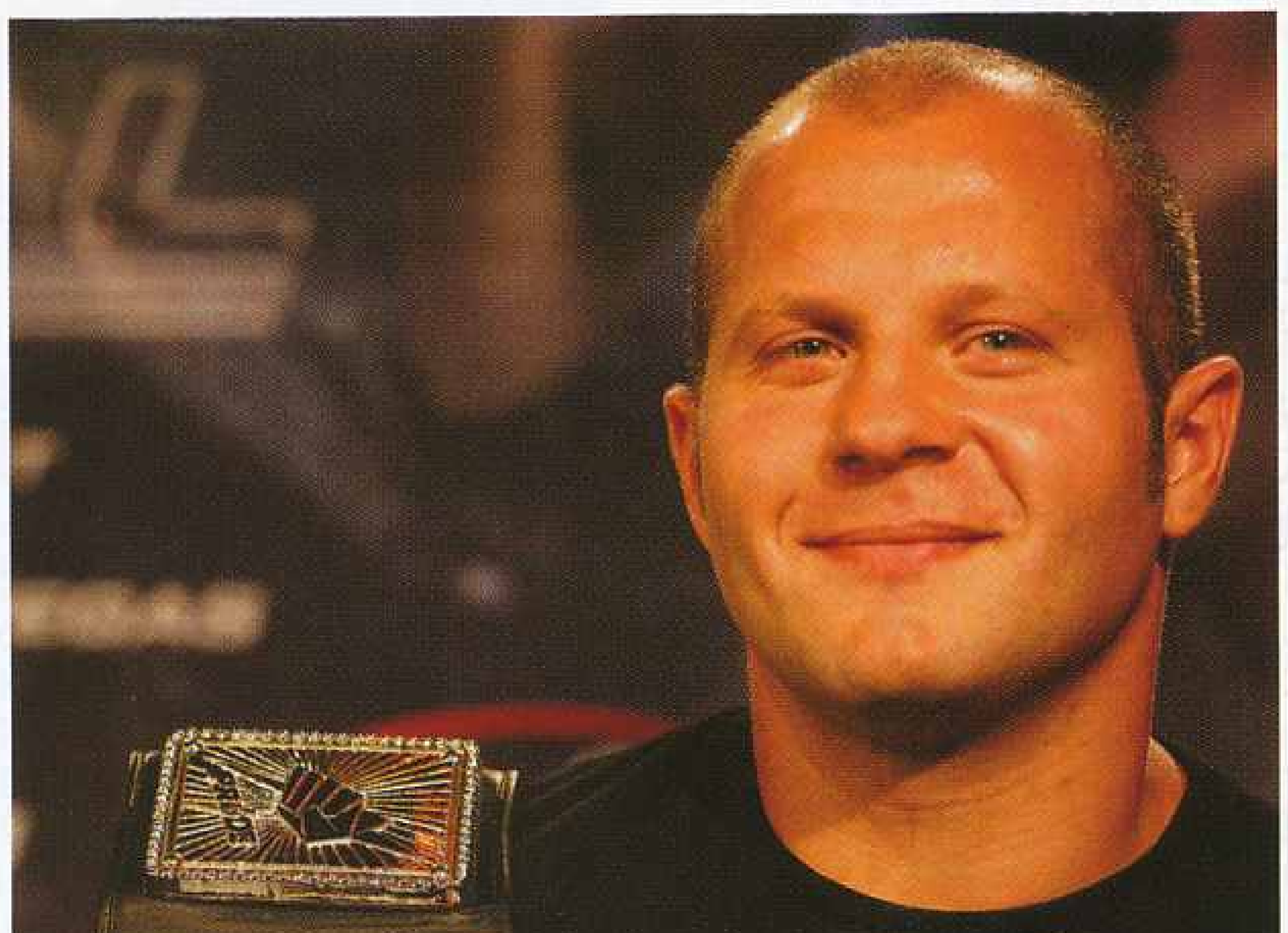
ほとんどすべての格闘技イベントにおいて、試合前に流されるのは〝選手紹介VTR〟である。戦歴やファイトスタイルの紹介と、インタビューから抜粋された試合への豊富。選手間の因縁がフィーチャーされることもあるが、観客にとっての〝予備知識〟以上のものにはならない。対して『PRIDE』が用意するのは〝煽りV〟である。文字どおり観客を煽り、試合の観方、テーマを共有させるのだ。そして実際、試合展開は〝煽りV〟が打ち出したテーマと完璧に噛み合った。



“アメリカ人同士による、アメリカ人のための総合”その代表カードが、UFCのティト・オーティズvsケン・シャムロック戦。両者の遺恨劇をベースに、一般層を巻き込み、好視聴率を獲得した。

タックルを放ち、テイクダウンを狙うコールマンと、それを冷静に切ってパンチを浴びせるヒョードル。1ラウンド中盤で、コールマンの顔面は無残に腫れ上がっていた。それでも、コールマンは〝自分にはこれしかないんだ〟とばかりに何度となくタックルを仕掛けていく。2ラウンド、ついにコールマンはテイクダウンに成功するのだが、その直後にヒョードルは表情一つ変えることなく腕十字を極めてみせた。ヒョードルの圧倒的な強さと、それに立ち向かうコールマンの〝思い〟あるいは〝執念〟。そのどちらも、観客の心に深く刻み込まれたはずだ。

試合後、マイクを向けられたコールマンは会場にいる娘たちに呼びかけた。「パパは大丈夫だよ」と。そしてリングに上がった娘たちを、しっかりと抱きしめる。そこにあったのは〝親子愛〟のドラマであり、まぎれもない〝浪花節〟の世界だった。浪速節？　アメリカの観客に⁉



「フェドー！　フェドー！」と大熱狂するアメリカ上陸時の歓迎ぶりに、微笑で応えるヒョードル皇帝。本誌インタビューで「アメリカの観客は“新しい闘い”を求めている」と自己分析している。

アメリカにおいて、というより世界中どこでもそうだが、格闘技とは何よりもまず強さを競い合うものである。見せるべきは鍛え上げられた肉体であり、磨き抜かれた技術であり、敵を倒すための闘争心。それでなんの不足もないはずだ。

そこに『PRIDE』とコールマンは親子愛という浪花節の世界を持ち込んだのである。そしてそれが観客に届いた。娘たちとともにヒョードルと握手を交わし、アゴにコツンとパンチを入れるコールマンの姿（ほら、パパだって強いんだぜ）に、会場に残っていた観客は大歓声を送ったのだ。

大会後の記者会見でも、ドラマは続いた。ある女性記者が、ヒョードルにこんな質問をする。

「コールマンの娘たちが泣きながらリングに上がったとき、居心地の悪さを感じませんでしたか？」

いわゆる〝正論〟であり、格闘技に〝強さの競い合い〟以外の余計なものを持ち込んだ、という批判の意味もあったのだろう。そこに割って入ったのが、コールマンの弟分フィル・バローニだった。

「質問の意味がまったくわからないな。自分の父親が拍手と歓声を受けてリングに上がる姿を見るのは素晴らしいことじゃないか。残酷だって？　人生ってのはそもそも残酷なもんなんだよ。負けはしたけど、世界最強の男を相手に闘って、あれだけ強いパンチを浴びても生きてリングから降りる姿を見たら、彼女たちは自分の父親を誇りに思えるはずだ」

バローニの熱弁に、場内は大きな拍手で満たされた。〝正論〟よりも〝ドラマ〟が、〝浪花節〟が支持されたのだ。

「うん。私は会見場にいなかったんだが、その話は聞いてるよ」

12月に来日したコールマンは、インタビューでヒョードル戦を振り返ってくれた。もちろん、聞き手が質問を挟む余裕もないほどの勢いで、である。

「あれは自分にとって、本当に特別な大会だったね。ヒョードル戦が決まったときは



もの凄いプレッシャーを感じたが、すぐに気持ちは切り替えられた。彼との闘いを自分の中に受け入れて、やるだけやってみよう！　試合を楽しんでやろう！　とね。

もし試合でKOされなかったら、娘たちをリングに上げてくれとDSEには頼んでおいたんだ。試合が終わったとき、真っ先に会いたいのは彼女たちだからね。私の人生で一番の目標は、いい父親であること。だから、彼女たちには父親が仕事をしている姿を見せてあげたかったんだ。練習と試合の連続で、私と娘たちは離れて過ごさなきゃいけない時間が多いからね。父親が何をやっているのか、マーク・コールマンがどんな人間なのかをわかってほしかったんだよ」

娘を会場に呼ぶことには、コールマン自身ためらいもあったという。ただ、自分がやったことに後悔はしていない。

「子どもたちが会場に来るのには、正直、迷いもあったよ。彼女たちにも『本当に行きたいのかい？』って何度も念を押したんだ。彼女たちの答えは、いつでも『イエス』だった。『パパがいつも何をしているのか見たい。ファイターってどんな仕事なの？』って。最後は子どもたちに説得されたようなもんだよ。DSEも、私の希望を尊重してくれた。『ぜひ娘さんたちを連れてきてほしい』とね。

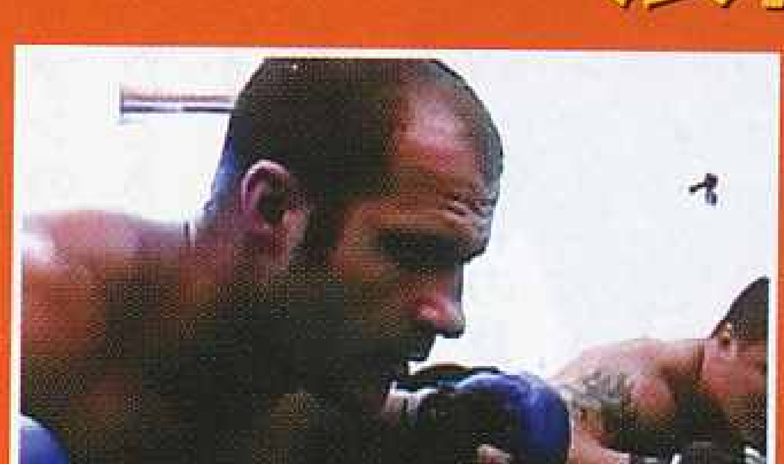
批判があるだろうってことは、もちろんわかってたさ。でも『やめろ』って言われても絶対にやめなかっただろうな。私はマーク・コールマンであって、ほかの誰でもない。法に触れないかぎり、やりたいことをやらせてもらうさ。

確実にいえるのは、試合のあとで親子の絆がさらに深まったってこと。トラウマなんか残っちゃいないよ。残ってるのは一生

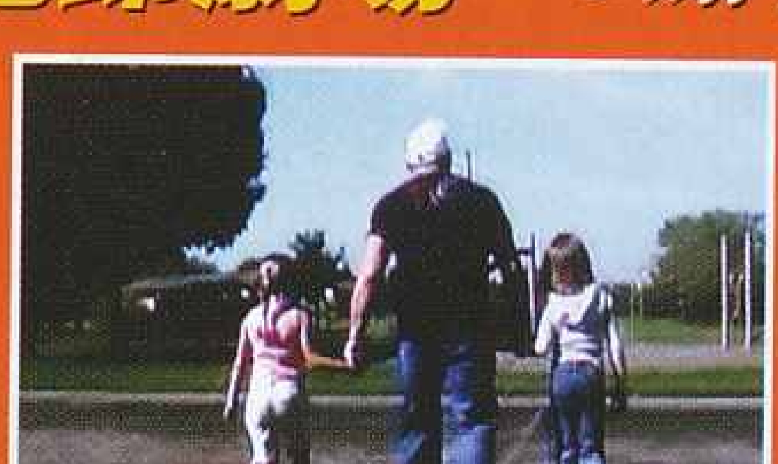
これがコールマン“浪花節劇場”の煽りVだ!!



「誰が勝つと思う？」「ダディ！　……お家の中ならね」とふたたびキュートに愛娘たちが登場し、クライマックスへ。「あの娘たちのために闘う」と不退転の決意とともに、ついに闘いのときが訪れる！



さらに転調！　優雅なクラシックが流れる中、“皇帝”ヒョードルの映像が次々とカットバック。圧倒的な脅威がじわじわと広がり、ヒョードル兄弟の背筋運動が不気味なコントラストを描く。



一転、ピアノの調べとともに“父親”コールマンと愛娘たちとの日常が描写される。携帯で話すコールマン、公園ではしゃぐコールマン親子の様子。闘う男の“コア”の部分が観客に静かに提示される。



まるでロードムービー!?　なローアングル映像と「WHO IS MARK COLEMAN?」という問いかけで“煽りV”開始！　ランニングするコールマンに、過去の栄光がフラッシュバック。「私はまだ終わってない」と再起を表明。

アメリカが気づいた新しい価値観……
「他国の選手にもファンは夢中になる」

忘れられない、いい思い出だけだね。試合の翌日から、私たちはすぐに普通の生活に戻れたし、娘たちはずっと会場で誰と会って何を話したか、何を見たのかを話してる。彼女たちは特別な経験をさせてもらったんだ。そして、その場の主役の一人だった父親を尊敬してくれてる」

『PRIDE』ラスベガス大会成功の大きなカギは〝演出〟である。ステージに組まれた巨大なセット、飛び交う花火と吹き上がる炎、さらにはヒョードル入場時に舞った雪。アメリカの格闘技サイト『MMA WEEKLY』を主宰するスコット・ピーターソンは「UFCのライブショーがかすんで見えた」という。

〝演出〟はそれだけにとどまらない。観客に試合のテーマ、そのエモーションを共有させる〝煽りV〟や、コールマンの浪花節的親子愛劇場もまた〝演出〟だ。コールマンが娘たちを会場に呼ぶことを認め、試合後にリングに上げたことも〝どんな大会を観客に見せるか〟という主催者側の意図に入っていたこと。試合後のリング上では、ヒョードルよりも先にコールマンにマイクが向けられた。勝利者インタビューのあいだも、カメラが追ったのは娘たちとともにバックステージへ引き上げるコールマンの姿である。それが〝演出〟なのだ。

もう一つのカギは、アメリカ人以外の選手たちへの大声援である。大会前、多くの人間が「アメリカ人はアメリカ人以外には興味を持たない」と語っていたもの。だがフタを開けてみれば、ロシア人のヒョードルやブラジル人のマウリシオ・ショーグンはアメリカ人選手以上の人気を博した。真の強さと個性を持つ選手なら、人種にも国籍にも関係なく支持される。そんな『PRIDE』の世界観が、アメリカ文化の定説を覆したのである。

日本大会のテイスト＝演出を変えることなく持ち込み、浪花節的人間ドラマというアメリカ人にとって新しく映る感情を提示する。『PRIDE』の手法は、他ジャンルでの〝アメリカで成功したニッポン〟の成功例と見事なまでに一致していた。それはたとえばイチローであり、アニメであり、ジャパニーズ・ホラーである。



<10・21>以降、『開運！ なんでも鑑定団』の鑑定士もビビッてたじろぐ、高騰ぶりとなった『PRIDE』トップファイター評価額。ヒョードル、ミルコはいまや世界格闘界垂涎の“お宝”となった。

イチローは技術とスピードを駆使して安打と盗塁の山を築き、パワーヒッティングに慣れたアメリカの野球ファンを魅了した。細かいアジャストはあったものの、基本的なプレースタイルは日本でのそれと変わりがなかった。

アニメもそうだ。『宇宙戦艦ヤマト』が『スターブレイザーズ』に、『超時空要塞マクロス』が『ロボテック』に（注1）と〝アメリカ仕様〟に変えられた時代ではなく（それは確かな土壌を作りはしたのだが）、『AKIRA』（注2）や『攻殻機動隊』（注3）がそのままのかたちでビデオ発売されたとき、アメリカに〝OTAKU〟市場が出現したのだ。日本製アニメはカートゥーンにはなかったリアルで精密なメカ、喜怒哀楽すべてを盛り込んだストーリーでOTAKUたちを熱狂させ、美少女キャラは〝萌え〟させた（デカルチャ！）。

Jホラーのアメリカ進出で最も重要なのは、ハリウッドにリメイク権が売れたことではなく、映画『呪怨』を撮った清水崇（注4）という日本人監督がそのままリメイク作品、『THE JUON／呪怨』のメガホンを託されたことだったはずだ。

『PRIDE』ラスベガス大会は、アメリカ格闘技界が気づいていなかった価値観と魅力を見せつけ、MMAの世界を変えようとしている。噂されている『ボードッグ』ロシア大会へのヒョードル出場、ミルコ・クロコップに対するUFCの高額オファーも〈10・21〉がアメリカの関係者に与えた気づき、――アメリカ人選手ではなくても、ファンは夢中になる――によるものなのだ。『ボードッグ』の大会では『PRIDE』ばりの派手な舞台演出が施されるようになったともいう。

〈10・21〉をきっかけに、MMAイベントのクオリティは確実に上がり、それはファンにさらなる興奮をもたらすことだろう。そして業界の市場規模は、ますます大きなものとなる。

もちろん、試合をダイレクトなかたちで魅せる興行スタイルにも抗いがたい魅力がある。忘れられないのは、あるボクシング記者から聞いたこんな話だ。

「マイク・タイソンの試合で何が凄いって、入場テーマもなしで、ただ通路から出てきただけで客が総立ちになるんだよ。飾りがないぶん、とてつもない求心力がある」

ただそれも、アフター〈10・21〉の世界では〝何もしないという演出〟として認識されるのではないか。

『PRIDE』アメリカ進出は、単なるUFCや『ボードッグ』との興行戦争、市場争いとは違う。MMAの世界そのものに変革をもたらす〝文化的侵攻〟にほかならないのだ。

（注1）**『宇宙戦艦ヤマト』が『スターブレイザーズ』に、『超時空要塞マクロス』が『ロボテック』に**＝かってアメリカに輸入される日本アニメは、アメリカ向けに再編集されるのが常識で、本来はシリアスな物語の『宇宙戦艦ヤマト』は、台詞を変え、勧善懲悪な内容に再編集された『スターブレイザーズ』に変更。また、『超時空要塞マクロス』は、別番組の『超時空騎団サザンクロス』、『機甲創世記モスピーダ』との連続物語『ロボテック』として放送された。

（注2）**『AKIRA』**＝大友克洋作。未来都市、ネオ東京を舞台にした超能力SF漫画を88年にアニメ化した劇場作品。緻密かつ革新的な描写は世界的な影響を与えた。

（注3）**『攻殻機動隊』**＝士郎正宗作。近未来の日本が舞台のサイバーアクション漫画を押井守が監督した劇場アニメ。アメリカでは96年にビデオの週間売り上げ1位を記録。映画『マトリックス』に影響を与えたことでも知られる。

（注4）**清水崇**＝02年に監督した映画『呪怨』、03年に『呪怨2』が大ヒットし、注目を浴びる。04年には『呪怨』のハリウッドリメイク『THE JUON／呪怨』、続いて06年に『THE JUON／呪怨2』を製作。日本人監督の実写作品として初めて全米興行成績1位を連続で獲得。

シルム・バブル、大木金太郎死去……

重要事件で振り返る

韓国マット界2006



不思議な魅力が詰まったギョンソックら〝シルムだんご三兄弟〟を生で目撃するために、わざわざ6月3日アジアGP韓国大会へ取材出張した本誌。負けてしまったが、そんなことはどうでもいいんだ。

文／大川〝隊長〟義之　撮影／e_ji

格闘技ブームが起こっていると言われている韓国だが、実際にはK―1や『PRIDE』のような外国ブランドが支持を受けているだけで、国内に格闘技ブームを担える団体はほとんどない。大会自体が減っているため、韓国特有の〝破綻系興行〟の割合も自然と姿を消している韓国格闘技界。その2006年を振り返ってみよう。

◆06年の韓国はシルム・バブルだった?

日本の格闘技界への選手供給源として、韓国ではなぜかシルムが大人気！　これにはチェ・ホンマンの成功と韓国シルム界の崩壊によって起きた現象だ。そのような状況の中でシルム界の大横綱イ・テヒョンが『PRIDE』に参戦し、K―1にはシルム界のだんご三兄弟（キム・ドンウック、キム・ギョンソック、シン・ヒョンピョ）が参戦したが、いいところなく全敗。せっかくのバブルも早々にはじけてしまった。

しかし、彼らに続いて大晦日には砲丸投げの韓国王者ランディ・キムや、ボクシングで90年代に世界王者だったキム・ヨンスが約8年ぶりに唐突に復活参戦するなど、もうなんでもありの状況。韓国では各界の有名選手がホンマンの成功につられて一攫千金を目指す者が激増しているが、そろそろ中身のある選手が出てきてほしいものだ。

◆大木金太郎、チャン・ヨンチョルが死去

1960～70年代の韓国プロレスの黄金期を支えた両エースが時期を同じくしてこの世を去った。チャン・ヨンチョルは、大木金太郎が日本で活躍している60年代に韓国内で絶大な人気を誇った選手。力道山の死後に、韓国に凱旋帰国した大木金太郎とは、当然のように「国内派」と「海外派」として衝突する。

1965年11月の大会で、チャンは大木が日本から連れてきた大熊元司と対戦するが、ブックを破って仕掛けた大熊のキャメルクラッチにギブアップしてしまう。ところが大熊が技を解かなかったため、激怒したチャンの後輩らが一斉にマットに乱入し、大熊の頭をビンやイスで殴る事件を起こしてしまった。



チェ・ホンマンより実績は上！　シルムの大横綱イ・テヒョンも『PRIDE』で総合デビューをはたしたが、大膠着の末、ヒカルド・モラエスに判定負け!!　そのグダグダはある意味で奇跡的だったが……。



〝闘う橋本宗洋〟と勝手に本誌が呼んでいるキム・ドンウックは、〝シルムだんご三兄弟〟の一人。もし来日したときは、橋本宗洋氏との日韓肉弾対談を企画中だからお楽しみに！　え？　誰も期待してないだって!?

この事件の捜査過程で、チャン・ヨンチョル氏は刑事立件を避けるために、〝プロレスの筋書き〟を洗いざらい話してしまい、警察に話した「プロレスはショーだ」という発言が大きく報じられ、韓国プロレス界の人気は没落の一途をたどることになった。大熊にシュートを仕掛けさせたのは大木だという説が有力だが、結果的にマット界の秘密をさらけ出してしまったチャンと大木は、以後対立を続けることになる。

しかし06年1月になって、突然大木が病床のチャンを見舞い、両者のあいだに41年ぶりの和解が成立した。このことは韓国の一般紙でも大きく報道されたが、張は8月に他界し、あとを追うようにして大木も10月にこの世を去った。

韓国プロレスを自らの手で復興し、またその地盤を揺るがした両巨頭がほぼ同時期に世を去ったことは、何かの必然であったように思えてならない。

◆新興破綻系大会MARSの上陸

06年4月29日に開催された新興破綻系大会であるMARS韓国大会も、さまざまな話題を振りまいた大会だった。直前までゴングやリングをどこから調達するかも決まっておらず、いつ中止になってもおかしくない雰囲気の中でなんとか開催までこぎつけたが、知名度のない新興団体ゆえに集客で苦戦。試合でも世界対韓国の対抗戦で韓国勢がほぼ全滅（しかも惨敗続き）だった。

リング外での話題も派手で、MARSエグゼクティブ・ディレクターの天野氏は「できれば既存の団体と協力しながらやりたい」とのんきに発言したが、結局、選手の引き抜き問題で韓国老舗団体SPRIT MCと裁判沙汰の抗争劇を引き起こしてしまった。

また、大会当日のバックステージではキム・ジョンワン側と大会関係者がつかみ合いとなる事件も起こり、試合後キムはMARSとの契約が残っているにもかかわらず、これを無視してWXFへの参戦を表明した。

当初、一年に4大会を開催すると発表していたMARSだったが、問題が噴出したことへの反省か、韓国大会はこの一回だけで、来年も開催の予定もメドも立っていない。

◆INOKI GENOME騒動


数度の日本国内大会延期を経て、韓国に飛び火した『INOKI GENOME』。韓国では、〝韓国の異種格闘技の父〟リー・ガクスーと世界のアントンの邂逅という予想不可能な企画となった。しかし、『GENOME』が関わるところ大会が消滅するという不思議なジンクスは、海外の韓国でも生きていた。きっちり大会が延期となり、その遺伝子はしっかり韓国でも発揮されたと言える。一方、韓国メディアの猪木叩きは容赦なく、「猪木に関わるとろくなことがない」などと批判された。

◆好調SPRIT MCの行方

03年以来、唯一韓国で継続的に活動している総合格闘技団体SPRIT MCは、デニス・カーンを輩出した大会であり、紆余曲折を経ながらもしぶとく生き残っている。

05年からはテレビ局の協力を得て、UFCの『TUF』シリーズを模倣したリアリティショー『GO! スーパーコリアン』を放送し、大好評を得ている。視聴率でも好調な『GO!～』のおかげで知名度を上げたSPRIT MCは、今年4大会を開催し、各大会で人気を博した。しかし、国際色豊かになりつつある大会とは裏腹に、まだまだ韓国人選手の層は薄く、業務提携を結んでいるDEEPかアメリカン・トップチームとの選手と対戦したときは圧倒的に戦績が悪いのが現実。今後は国際戦で通用する選手の育成が急務だろう。

ちなみに好調だといわれている『GO!～』のシーズン1の出場者も、いまだに出演料の半額分のギャラをもらえていないらしい。景気がよくても、ことん理不尽でダイナミックな韓国格闘技界……。来年もその動向に目が離せない。2007もピリ辛な電波を受信しろ！



PRIDE 創成期を支えた男たち

いまや、世界のトップファイターが集うリングとなった『PRIDE』だが、その陰には、黎明期、強豪外国人選手たちに真っ向から闘いを挑み、礎を築いた日本人ファイターの存在があったことも忘れてはならない。現在は総合格闘技の檜舞台からは離れてしまっているが、いまも奮闘する彼らの生き様に、いまあらためて迫ってみよう。

「いまの俺がPRIDEに上がるのは失礼。でも、もう一度這い上がりたい!!」



——今日のインタビューは、初期の頃から『PRIDE』に上がっている日本人ファイターの特集になるんですが、松井さんには、伝説のUWFインターナショナル時代までさかのぼってお話をうかがっていきたいと思います。

松井 そんな昔の話からですか（笑）。

——ぜひ、よろしくお願いします（笑）。まず、松井さんのプロとしての最初の拠点となるそのUインターですが、そもそも入団しようと思った動機はなんだったんですか？

松井 もうボク、純粋に髙田（延彦）さんに憧れてたんですよ。北尾光司戦やスーパー・ベイダーと闘った試合とか、髙田さんが凄く好きでよく観てて。

——いわゆる〝最強〟髙田延彦時代の頃ですね。

松井 そうです、そうです！ だから、やっぱ一番好きな髙田さんの下で頑張りたいという思いが強かったんで、その素直な気持ちに従ったら自然とUインターに足が向いてましたね。

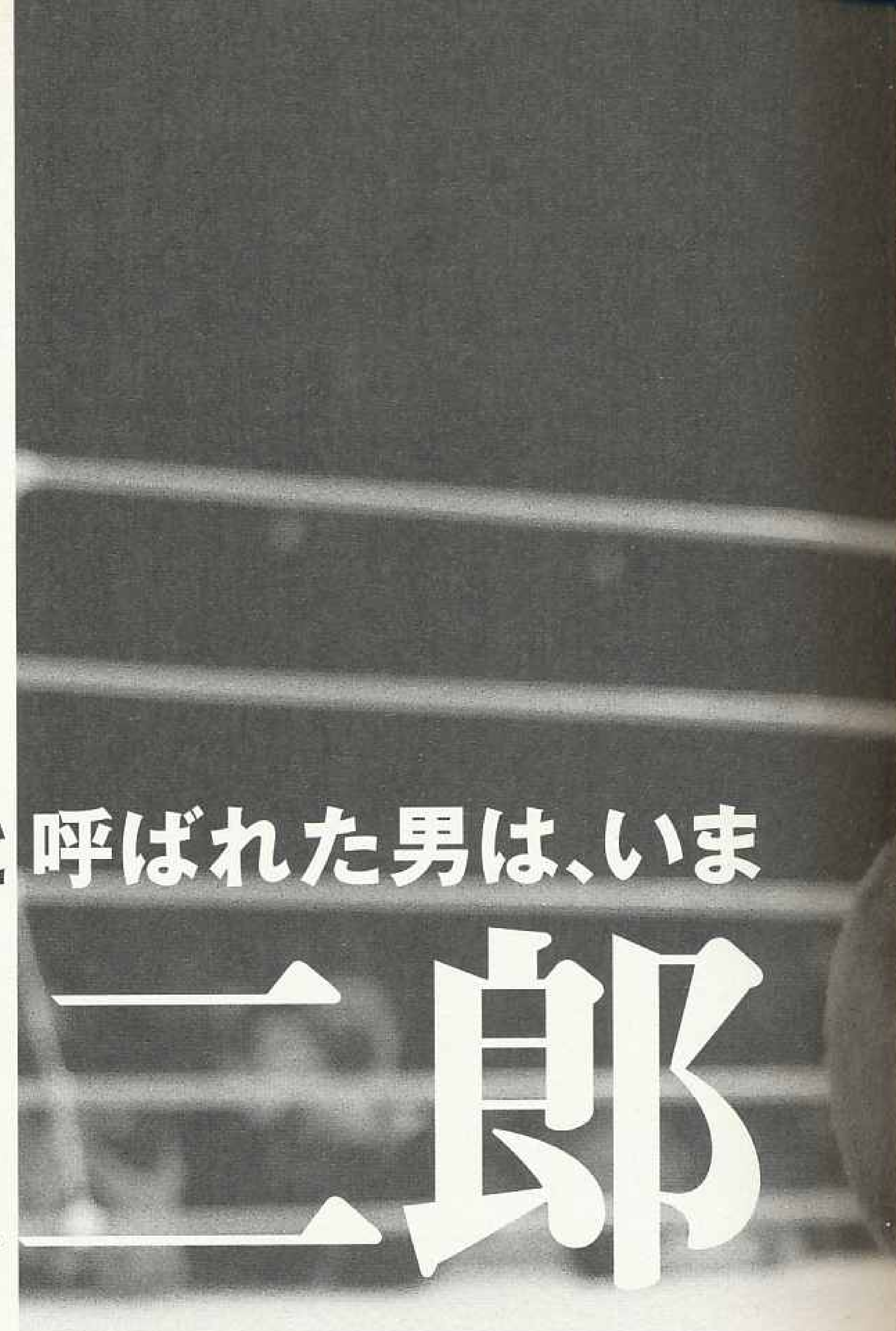
——そのUインターは、いまでいう総合格闘技とは違ったスタイルでしたが、実際の試合や練習はどうだったんですか？

松井 練習も練習以外も考えられないぐらいのハードな内容だったんで。基礎体力と、当然、総合でも通用するスパーリングを当時からやってましたね。

——当時にしては先鋭的な格闘集団でしたよね。メンツも凄いですし。安生（洋二）さんをリーダーに、若手バリバリだった桜庭（和志）さんに金原（弘光）さん……。

松井 高山（善廣）さん、垣原（賢人）さん、ヤマケン（山本喧一）さん。ボクが一番下だったんで、スパーリングがホント、キッかったですよ！ 安生さんが終わったら次は金原さんって感じで「いったい何時間や

ったんだろう……?」って。
――それは想像するだけで気が遠くなりそうですね（笑）。
松井　あと、体重を増やせってことでたくさんメシを食わされましたねえ。当時は身体が大きくないとダメじゃないですか。
――ああ、いまのように階級がきちんと分かれているわけでもなく、基本的にミドル級かヘビー級という世界でしたからね。しかし、いまの若い選手がそういう環境に放り込まれたら、まず……。
松井　（さえぎって）ついてこれないでしょ！　昔の道場論というのは、いまだったら成り立たないですよ。
――でも、高田道場も当初はそういう道場論をもとに指導をしてたんですよね？
松井　そりゃ、厳しくしてましたね！
――当然、逃げ出す練習生とかも……。
松井　いました、いました。だって、スクワットやって、腕立てやって、それからスパーリングですからね。いまはこなせないでしょ。

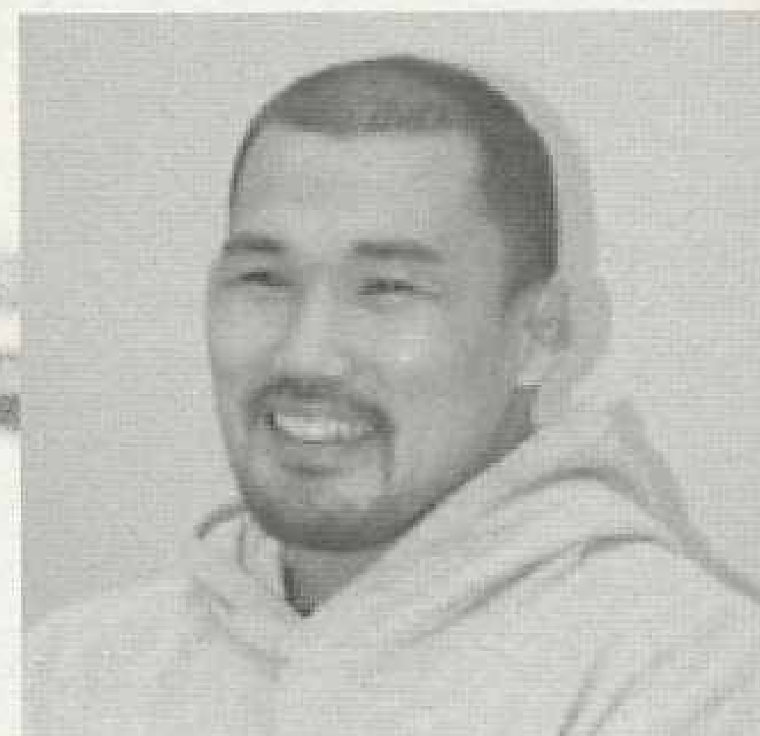


かつて“高田道場の特攻隊長”と呼ばれた男は、いま

松井大二郎

『PRIDE』の創成期を支えた男たち・第一弾は、高田延彦、桜庭和志に続き高田道場・第三の男として98年6月『PRIDE.3』から『PRIDE』に登場した松井大二郎。高田に憧れ、UWFインター、キングダム、『PRIDE』を高田と同時に渡り歩いてきたこの男は、いま『PRIDE』、そして高田道場から距離を置き何を思うのか。その心中を激白！

聞き手／安田潤司　構成／松下ミワ



――できないですよねえ。
松井　ボクだって、もう一度、練習生やるのはハッキリ言ってキツいです！（笑）。
――ハハハ！　おまけに下っ端は雑用もこなさないといけないですし。
松井　そう！　ハッキリ言ってプライベートとかなかったですから。で、Uインターの練習生の給料は●万円だったんですよ。……24時間働いて●万円（笑）。
――たったの●万円（笑）。とても生活できないんじゃないですか？
松井　いや、それが使うヒマすらないから、その●万円が月々貯まっていくんですよ！
――●万円すら使うヒマもない（笑）。
松井　はい。寮住まいでメシは道場でちゃんこが食えましたし。忙しすぎてお金を使う機会がないんですよ。練習が終わったらちゃんこ食って、洗濯やって、それで先輩から「練習やるぞ！」って言われたら何があろうと付き合って、夜は寮でメシも作らなきゃいけなかったんで。
――そんな生活の中で、松井さんが唯一楽しみにしていたことってなんですか？
松井　う～ん……（しばらく考えて）。やっぱり、二週間に一回できるかどうかだった日曜日の二時間の昼寝ですかね。
――それが唯一の楽しみですか！（笑）。
松井　はい（笑）。二週に一回、日曜のちゃんこ番が回ってきたんで、当番じゃなかったら昼寝ができたんですよ。逆にそこで用事ができたら本当に悔しかったですねえ……。そういう生活がUインターから高田道場に入るまで続きましたよ。ボクの下に後輩がずっと入ってこなかったんで。
――過酷な生活がしばらく続いたんですね。ちなみに、普段のスパーリングで「この人は強いな」って思ったのは誰でした？
松井　みんな強かったですけど、やっぱり桜庭さんは印象深いですね。あと金原さんも。これは『キングダム』になってからの話ですけど、桜庭さんと金原さんの試合もとんでもなく凄かったじゃないですか！
――『キングダム』は、いわゆる〝理想のプロレス〟ではありますよね。〝スーパーストロングスタイル〟というか。グローブ着けてバンバン殴り合って、それでいて関節技の攻防もあって。
松井　あんまり試合が激しすぎて、みんな「試合のことは覚えてねえ」とか言ってましたし。凄かったのは大分でやった高山さんと安生さんの試合ですね。高山さんが安生さんの頭蓋骨が揺れるようなパンチをバンバン打って、安生さんがグラングラン揺れて……。ホントにヤバかったです！

【松井大二郎のPRIDE戦績】

1998.06.24 PRIDE.3 日本武道館
△ vs 小路晃［3R ドロー］

1998.10.11 PRIDE.4 東京ドーム
△ vs 菊田早苗［3R ドロー］

1999.07.04 PRIDE.6 横浜アリーナ
× vs カーロス・ニュートン
［延長R 判定 3-0］

1999.09.12 PRIDE.7 横浜アリーナ
○ vs ボブ・シュライバー
［反則（注意3回により）］

1999.11.21 PRIDE.8 有明コロシアム
× vs ヴァンダレイ・シウバ［2R 判定 6-0］

2000.06.04 PRIDE.9 名古屋レインボーホール
× vs イゴール・ボブチャンチン
［1R 5分3秒 TKO］

2000.08.27 PRIDE.10 西武ドーム
× vs ビクトー・ベウフォート［2R 判定6-0］

2001.05.27 PRIDE.14 横浜アリーナ
○ vs ペレ［3R 判定3-0］

2001.07.29 PRIDE.15 さいたまスーパーアリーナ
× vs エベンゼール・フォンテス・ブラガ
［3R 判定3-0］

2001.09.24 PRIDE.16 大阪城ホール
× vs ムリーロ・ニンジャ［3R 51秒 TKO］

2001.12.23 PRIDE.18 マリンメッセ福岡
○ vs クイントン・“ランペイジ”・ジャクソン
［1R 14秒 反則］

2002.02.24 PRIDE.19 さいたまスーパーアリーナ
× vs ホドリゴ・グレイシー
［3R 28秒 フロントチョーク］

2002.12.23 PRIDE.24 マリンメッセ福岡
○ vs 大久保一樹［3R 判定3-0］

髙田さんがヒクソンに負けたときは……瞬間的に「俺のせいだ！」って思いました

——さらに凄いのが、そういう試合をしたあとに酒を飲みまくるっていう（笑）。

松井　だいたいその流れでしたね。いまでも試合が終わったら飲んじゃいますね（笑）。

——ところで、あの『キングダム』のスタイルは、当時勢いを増してきたバーリ・トゥードを見据えたものだったんですかね？

松井　そうですね。その頃から柔術のテクニックがいろいろ入ってきて、みんなで新しいことをやっていこうということになったんで。でも、当時はまだバーリ・トゥードっていうと本当に〝殺るか、殺られるか〟という世界だと思ってたんで。だから桜庭さんがUFC－Jに出るって聞いたとき、ボクはビックリしましたね。

——桜庭さんが優勝したUFC－J（1997年12月21日・横浜アリーナ）の1DAYトーナメントですね。

松井　あれに出るって聞いたから、桜庭さんに「下になったりしたらボコボコに殴られますよね!!」って言ったんです。そうしたら桜庭さんは「じゃあ、下にならなきゃいいじゃん」ってアッサリ言われてしまって（笑）。

——まあ、そうですね（笑）。

松井　そこでバーリ・トゥードの意識が切り替わったことを覚えてますね。その頃ちょうどガードのテクニックとかが入ってきた頃だったと思うんですけど、桜庭さんはそもそも下にならなかったですから。

——話は変わりますが、『PRIDE・1』でヒクソン・グレイシーと闘った頃の髙田さんとは、どういう関係だったんですか？

松井　髙田さんはヒクソン戦に備えるために『キングダム』には上がってませんでしたけど、ボクは当時、髙田さんの付き人をやってたんですよ。だから、試合の半年前くらいからランニングやウェイトの練習を一緒にさせてもらって。かなりハードな練習してましたね。一緒についてくれたトレーナーの方も、髙田さんの身体能力に驚いてましたから。「35歳でいまだに基礎体力が上がるなんて、信じられない！」って。

——でも、その髙田さんはヒクソンに負けてしまうわけですが。あの敗戦を松井さんはどう受けとめたんですか？

松井　う〜〜〜ん。なんて言うんだろう？　瞬間的に「俺のせいだ！」って思ったりしました。一緒に練習した者の責任として。

——自分がやってきたことの自信がなくなったりしたところもあったんですか？

松井　それはなくはないですけど、でも、そこで立ち止まってもしょうがないですからね。それにボクなんかより髙田さんのほうがキツい状況なのに「ここから始まりです」って試合後に言っていたわけですから。

——その後、『キングダム』が解散して松井さんは髙田道場に移ることになりますよね。

松井　やっぱり、純粋に髙田さんに憧れてた部分があったので、普通に髙田さんについていきたいという気持ちがあったんだと思います。

——そこから『PRIDE』に参戦することになります。松井さん自身が初めてバーリ・トゥードで闘ったのは『PRIDE・3』小路晃戦からですよね。実際に試合が決まったときはどういう心境だったんですか？

松井　あれはたしか試合の一ヵ月前に髙田さんに「『PRIDE・3』、決まったぞ」って言われたんですよ。ボクの中で『PRIDE』ってまだ決闘のイメージでしたから、「本当にボクがやんのかよ⁉」って感じでかなりビビってました（苦笑）。

——それに、あの試合は小路さんの勝利というのが大方の予想でしたよね。小路さんは『PRIDE・1』ではヘンゾ・グレイシーと互角に闘ってましたし。

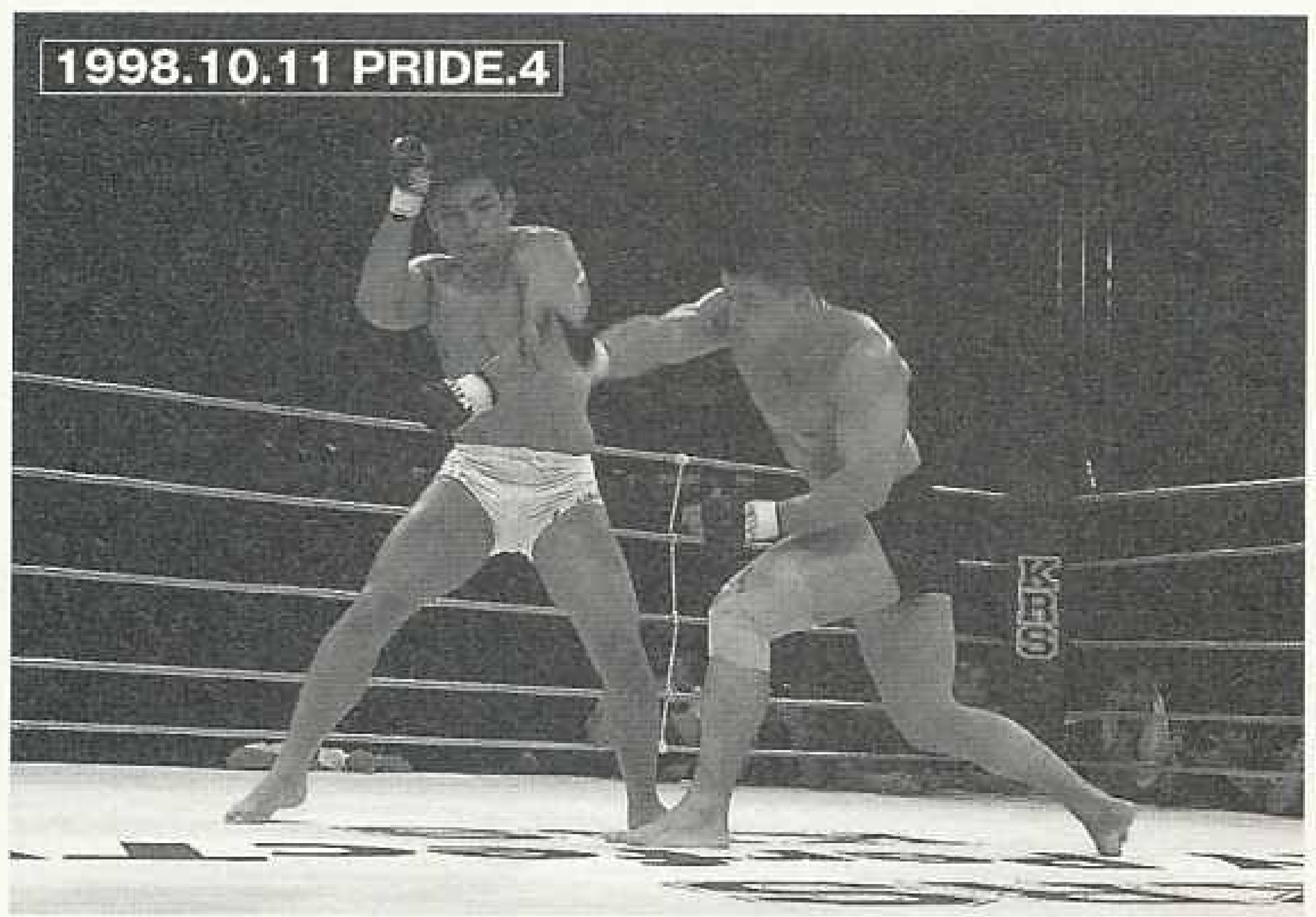
松井　9対1で小路さんでしたね。でも、



1998.6.24 PRIDE.3

△ vs 小路晃 [3R ドロー]

PRIDE初戦の相手は、『PRIDE.1』のヘンゾ・グレイシー戦で引き分け、『PRIDE.2』でジュアン・モットを下した絶好調の小路。前評判でも９割が小路の勝利を予想していたが、40分間の死闘の末、なんと松井は引き分けに持ち込むという大健闘ぶり！　内容的にも松井のアグレッシブさが非常に目立った試合となった。



1998.10.11 PRIDE.4

△ vs 菊田早苗 [3R ドロー]

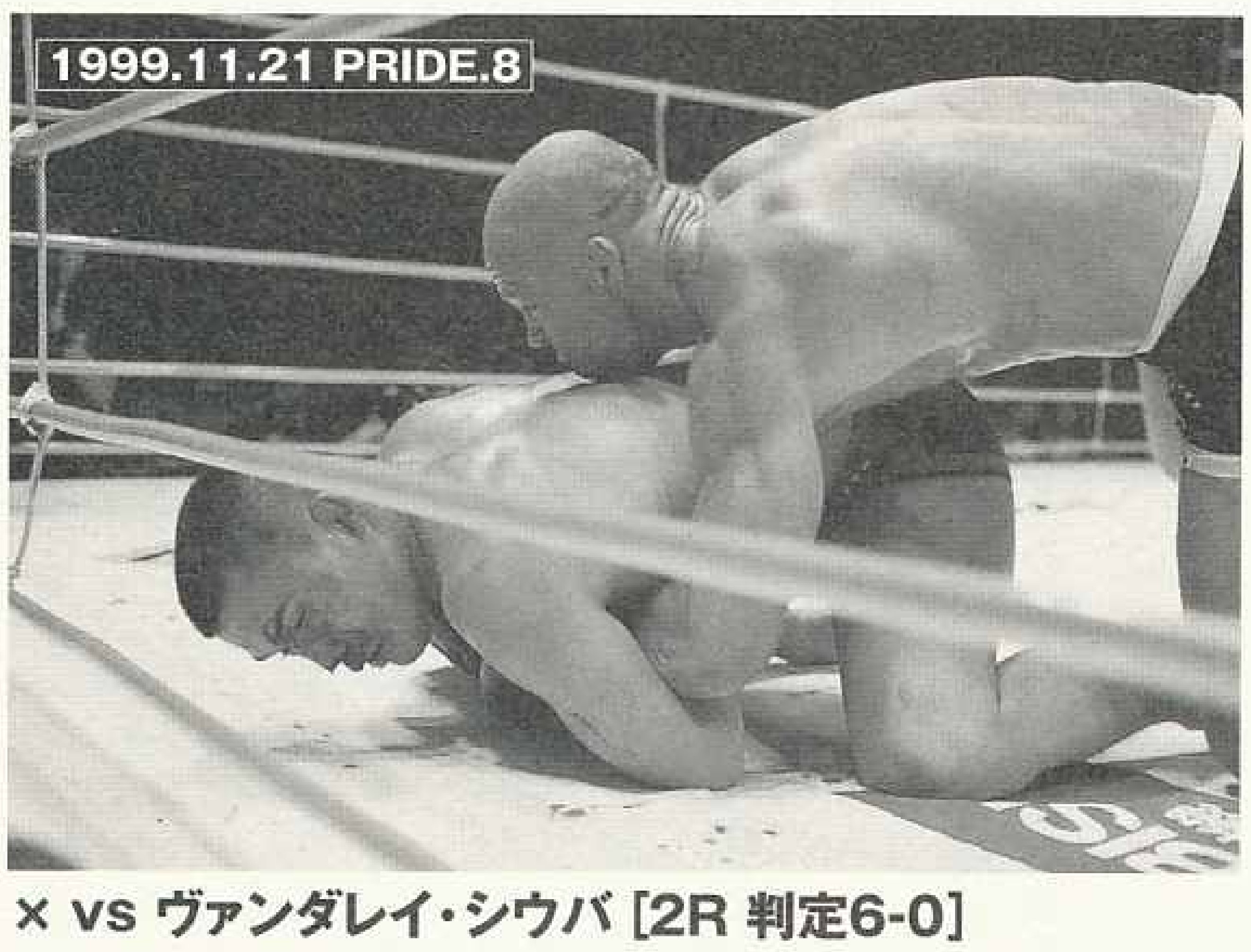
「1ラウンドの短期決戦で決める！」と菊田に過激に挑発された松井。その言動に触発されたのか、松井は執念のドロー決着にまで持ち込んだ。が、試合自体は菊田に抑え込まれ膠着気味な展開に。試合後のコメントでは両者「練習しなおします」と同じ言葉を残した。



1999.7.4 PRIDE.6

× vs カーロス・ニュートン [延長R 判定3-0]

松井に初の黒星がついたのがニュートン戦。しかし、膠着しがちだった菊田戦とは別人のように積極的に打撃を繰り出し、側転でガードポジション越えを狙うシーンも。このアグレッシブファイトが〝特攻隊長〟としての地位を築くことになっていく。



1999.11.21 PRIDE.8

× vs ヴァンダレイ・シウバ [2R 判定6-0]

いまや〝絶対王者〟としてミドル級に君臨するヴァンダレイ。松井との試合は『PRIDE』二戦目だったが、いまと変わらぬアグレッシブファイトで松井を圧倒。だが、ここでも松井のタフさを発揮！　一歩も引かない松井の勇姿にヴァンダレイもおおいに驚いた。

ボクはプロレスラーとしての意地があったし、小路さんの勝ちという結果をひっくり返したんで「ざまあみろ！」って気持ちはありました。ただ、髙田さんと桜庭さんには「ここまでもつとは思わなかった」って言われましたけど（笑）。

—身内をも裏切る活躍だった、と（笑）。

松井　はい（笑）。引き分けでしたけど……。

—『PRIDE・4』の菊田早苗戦も戦前の予想を覆しましたね。

松井　そうですね。あのときは試合前にいろいろ挑発を受けましたし。

—要は、松井さんの"プロレスラー"という肩書きが色眼鏡で見られていた部分もあったんじゃないかと思うんですよね。当時はプロレスラーが格闘技に交わることに対して偏見に満ちた報道もされてましたから。

松井　たしかに格闘家も本当にキツい練習をしてリングに上がってきたと思うんですよ。でも、ボクはそれ以上にキツい練習をやってきてるし、どこの道場のどんな練習よりもキツい練習やってきたんだ！　という自信がありましたから。

—いまは合理的なトレーニングが主流ですが、昔はその理を超えたところで力をつけていたということですか？

松井　そうですね。やっぱり毎日500回ヒンズースクワットとか基礎体力をやると（心臓を押さえて）ハートが強くなるというか、精神的な部分が鍛えられますから。

—しかし、初期の『PRIDE』で松井さんは凄いメンバーと闘ってますよね。『PRIDE・8』で闘ったヴァンダレイ・シウバはちょうど上り調子でしたし、ボブチャンチンはかなりピーク時に闘ったんじゃないですか。で、いずれも善戦している。

松井　ボブチャンチン戦は、ちょうど彼が『PRIDE GP』で準優勝した直後でしたね。だから、周りの人にもいろいろ言われましたよ。「あのボブチャンチンとやるの⁉」って。でも、ボクはGPで準優勝する人がどれくらいのレベルなのか、自分がどれくらい通用するのかっていうのを試したいというか、その気持ちのほうが大きかったんですよね。そう考えると、『PRIDE』で闘うことで慣れが出てきて、だんだんそういうハングリーさがなくなってきていたのかもしれませんね……。

—『PRIDE』初期は、たとえ負けても試合内容自体は凄く認められてた部分があったと思うんですけど。

松井　でも……結局は結果が追いついていかなかった部分があるじゃないですか。

—そこにはストレスがありましたか？

松井　もちろんありましたね。どっかで"負け癖"がついてたんでしょうね。あの頃はやっぱり結果が出てなかったのが一番、悔しかったです。もう、判定でもなんでも、とにかく勝ちたかったですね。

桜庭さんに何があったかわからないですけど どう言えばいいのか……難しいですね

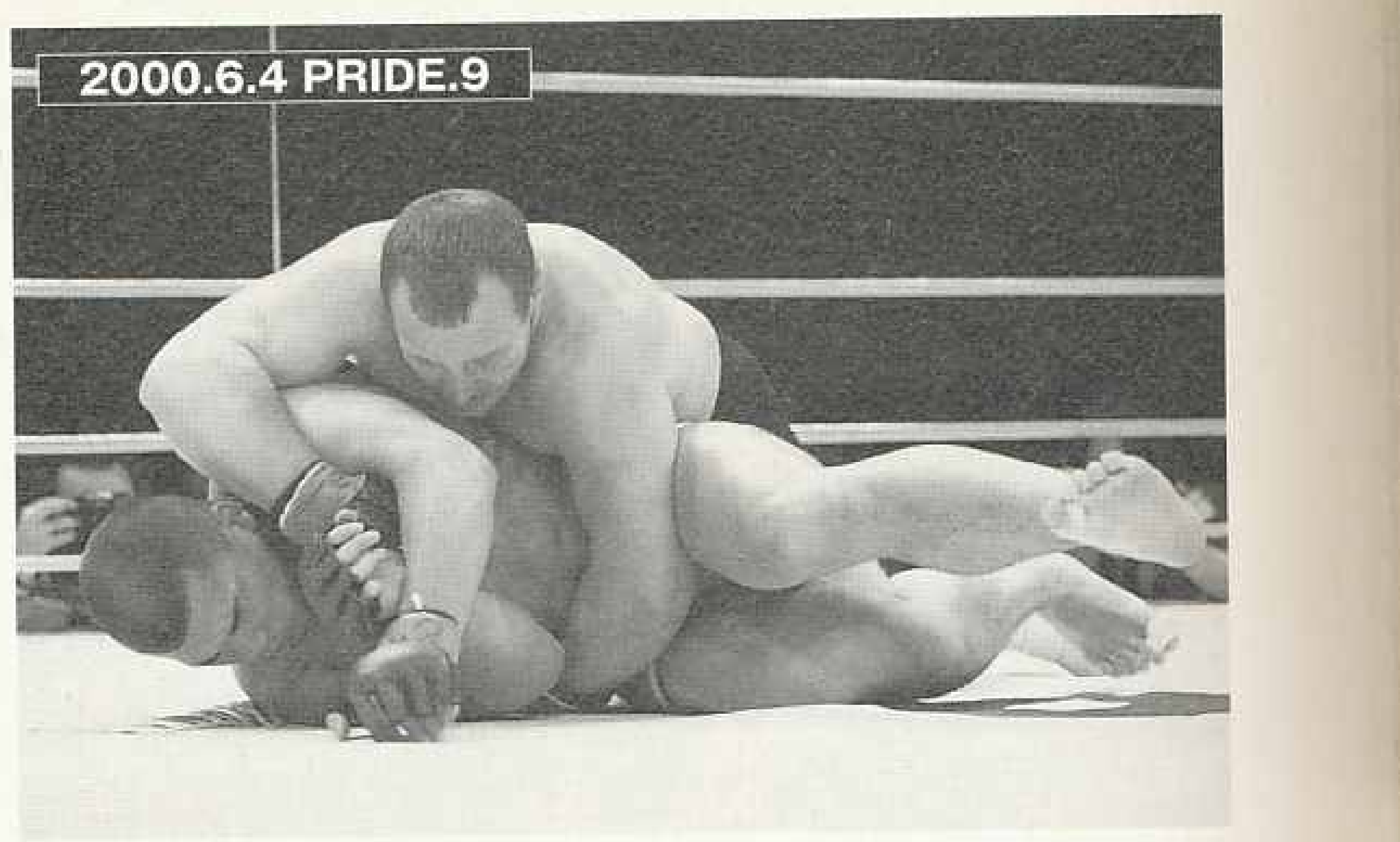
—勝ち星に恵まれなくなったことが、最終的には髙田道場から離れることにつながったんですか？

松井　それもありますね……。やっぱり道場は本当に大好きだったし、髙田さんのことも大好きだったし、本当に辞めまいと思ってたんですよね。だけど、逆にどっかで甘えがあったんじゃないかなって思い始めてて。いままで以上の結果を出そうと思ってやっていくんだったら、生活自体変えないといけないかなって。

—時を同じくして、桜庭さんが髙田道場を辞めたこともきっかけには……。

松井　いや、それはないですね。

—レフェリーの豊永（稔）さんは桜庭さ

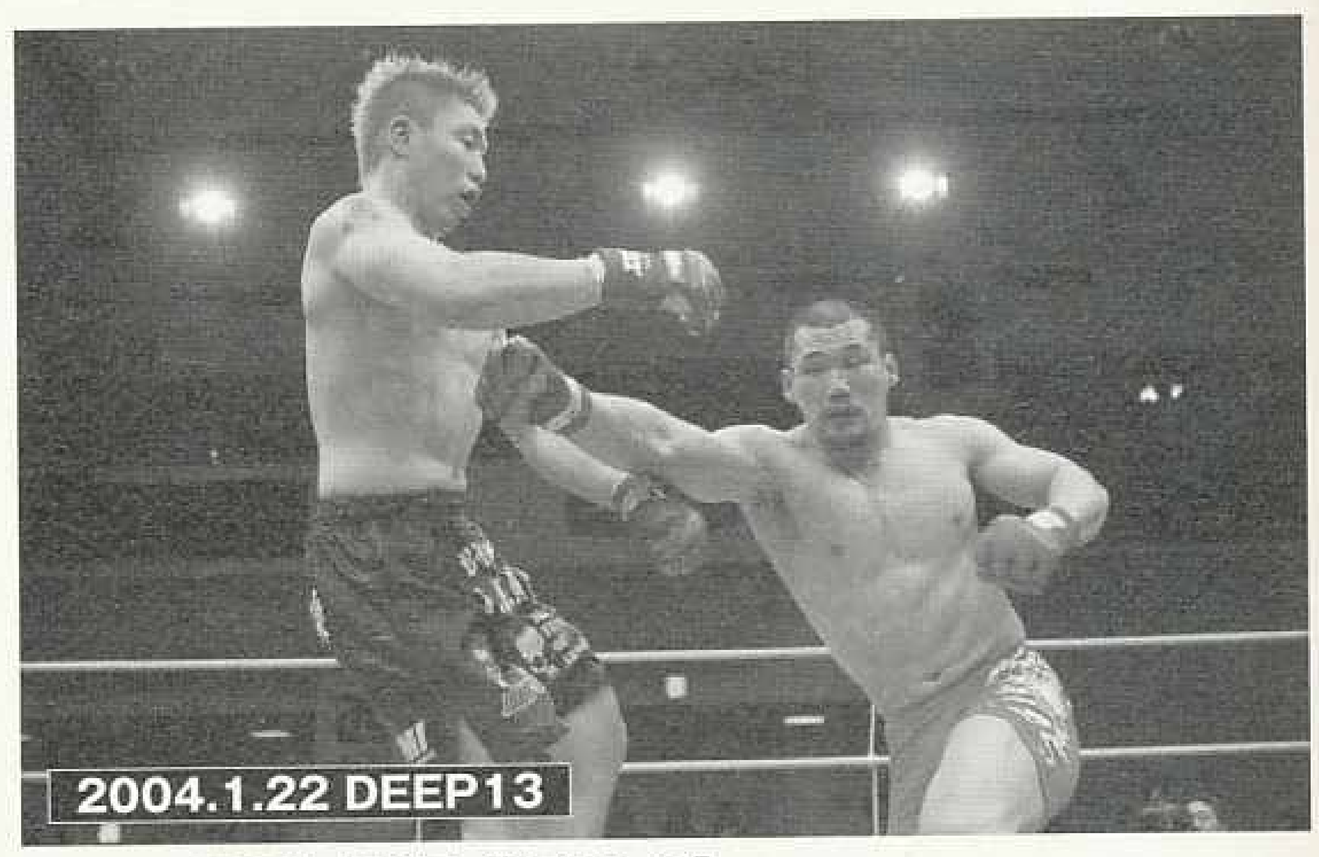


× vs イゴール・ボブチャンチン［1R 5分3秒 TKO］

「自分の力を試したい」と果敢に松井が挑んだのは、なんと2000年GPで準優勝に輝いたボブチャンチン。この試合で強烈なパンチ連打を受けた松井は目尻をカットし大出血に見舞われる。ドクターチェック後、一度は再開されたが、その後も出血が止まらずTKO負けに。



このペレ戦は松井が『PRIDE』史上、最も弾けた試合となった。ヴァンダレイの兄貴分であるシュートボクセのペレを相手に、松井はドロップキック、四点ポジションからのヒザ蹴りと大爆発！　文句ナシの判定勝利を勝ち取った松井は『PRIDE.9』で敗戦を喫したヴァンダレイに対して、自信満々に再戦をアピールした。



× vs 長南亮［3R 判定2-0］

松井が『PRIDE』から距離を置いているのは『DEEP13』長南戦から。DEEPでキャリアを積んできた長南との対戦で、松井はまたも出血し判定負け。これをリングサイドで観戦していた髙田延彦は、裁定が下った瞬間に何も言わぬまま会場をあとにした。



× vs 近藤有己［3R 判定3-0］

髙田道場退団後、初めての国内戦が近藤とのタイトルマッチ。得意の粘り強さで近藤相手に3ラウンドまで持ち込んだが、足関節、ヒザ蹴り、踏みつけ攻撃など全般的に攻め込まれがちだった松井が3-0で敗北。『PRIDE』復活へ向けて、松井はどう再起を図るか⁉

んについていくかたちで髙田道場を離れたじゃないですか。松井さんは桜庭さんとともに、という選択肢はなかったんですか？

松井　というよりも、ボクはボクで自分の道を築きたいという思いがありましたから。髙田さんともお話をしたわけですから。

──松井さんは桜庭さんが電撃的に『HERO'S』へ移籍することもご存知だったりしたんですか？

松井　いや、まったく知りませんでした。だから凄く驚きましたけど。昔のプロレスラーの移籍ってああいう感じだったんですかね。

──桜庭さんが髙田道場を離れて、そうやって『PRIDE』を去ったことについては率直にどう思いますか？

松井　そうですね。………う〜ん。桜庭さんの中で何があったのかはわからないですけどね。……どう言えばいいんだろうな。難しいですね。

──桜庭さんが辞めるという話はご本人から直接聞いたんですか？

松井　直前に聞きましたね。なんというか……ビックリしましたよ。だから、〝えっ⁉〟っていう気持ちと、それからまあ、正直……〝桜庭さんも？〟っていう気持ちもありましたよね。

──一緒に練習されていたわけですから、そういう空気を感じていたという。

松井　なんとなくですけど。でも、ボクが辞めたことと桜庭さんは関係ないですから。

──松井さんは道場での練習以外にも髙田さんが経営するジンギスカン屋『モンゴリアンチョップ』の手伝いもされてましたよね。もっと練習に集中したいことが道場を離れる理由の一つになったりとか？

松井　それはなかったですね。ボク、道場での練習だけやってそれで生活できていたんで、本当に恵まれた環境にいたと思うし、ボクらのレベルで格闘技だけじゃ生活できなくてバイトやっている格闘家なんていっぱいいますからね。もちろん、練習に集中したい気持ちはありましたけど、「いまは、しょうがない」って思いましたね。

──納得していた、と？



まつい・だいじろう■1972年12月5日、岡山県出身。UWFインターでデビューし、キングダム、髙田道場を経て現在はフリーで活動。『PRIDE』は『PRIDE.3』から出場し、その傍らではバトラーツや新日本プロレスにも参戦している。最近はCage Rageなど海外の大会にも積極的に出場。177cm、87kg。松井大二郎のHPはコチラ→http://www.d-matsui.com/

松井　勝てばいいんだ、勝ち上がっていけばいいんだって思いました。だから、ボクの場合は考えが変わったうえでの退団ではなくて、成長のうえでの独立だと思ってるんです。それに、あの頃にはもうボクの中ではある程度「辞めたほうがいいんじゃないか……？」って思ってましたね。道場にいたら逆に迷惑がかかるんじゃないかって。だって、負けるばっかりの男を抱えてても しょうがないじゃないですか。桜庭さんは勝ってばっかりだったのに。だから、ボクがいるせいで道場の看板に傷がつくのかなって感じてたんです。

髙田さんからは「おまえは退団じゃなくて卒業だ」って

──髙田さんに退団を申し入れたときの反応はどのようなものだったんですか？

松井　そうですねえ……。やっぱり、寂しそうな顔をしてましたね。でも、あとで髙田さんには「おまえは退団じゃなくて卒業だから」ってことを言われたんですよね。

──〝卒業〟ですか。

松井　髙田さんには本当に温かく送り出していただいたんですよ。「おまえは卒業だから、これからも道場で練習してかまわないから」っておっしゃってくれたんで。

──いまは海外での試合が多くなって、しばらく『PRIDE』には参戦されてませんが、ちょっと時間と距離を置いてみて、『PRIDE』というリングはどういう印象ですか？

松井　ボクはいままでは髙田道場にいたから『PRIDE』に上がれてたんだなって、そういう気持ちが湧いてきますね。だから、逆にいまは実力で這い上がってやろう！って。いままでなかった気持ちが起こってきたというか。それだけ『PRIDE』のリングは高いところなんで。……『PRIDE』の実力に自分が到達してなかったことが、道場を離れてやっとわかりましたから。

──でも、もう一度、突貫精神を持って臨むことができれば……。一昨年の韓国『グラジエーターFC』であのパウロ・フィリオ相手に判定まで持ち込んだりしてますし。

松井　う〜ん。ただ……。

──ただ？

松井　やっぱり自分はまだ『PRIDE』に上がらせてもらえるレベルじゃないんですよね。だから、たとえばですけど、髙田道場にいるユン・ドンシクの調子が悪くて代わりに「出ろ」って言われていたとしても「松井を応援しよう！」って、ファンは誰も思わないと思うし、もっと海外なり国内でも実績をちゃんと作ってから『PRIDE』なり『武士道』なりで闘いたいなって思います。

──それは、いまいきなりオファーが来たとしても断るってことですか？

松井　……考えますね。本当の気持ちを言えば、上がりたいですよ。上がりたい！　でも、いま上がったら、やっと『PRIDE』に上がった選手に失礼だと思うんで……。

──いまは『PRIDE』に若い選手が出てきている中で、年齢的なプレッシャーというのは正直どうですか？

松井　ボク、もう33歳ですからね。だからこのへん（頭を指差して）にちょっとはありますけど、ほとんどないに等しいですよ。ボクの中では練習も以前と同じようにやれてるし、まだまだ闘いたいんですよね。


──では、いまの松井さんにとって『PRIDE』のリングっていうのは、一言で言うとどんなリングになるんでしょうか。

松井　本当に頑張った者しか、強い者しか上がれない、高いところにあるリングですよね。それにまた上がりたいですね。今度は自分の力で。

──そのリングに上がるきっかけをくれた髙田さんなり、そして桜庭さんにはどういう思いがありますか？

松井　やっぱり、どちらもボクにとっては大先輩であり大ヒーローであり、それに〝生きる伝説〟ですからね。本当に感謝の気持ちはいっぱいというか、それ以外にないですよ。だから、そういう先輩方に恩返しする意味で、もう一度『PRIDE』を目指したいという気持ちがあります。これからいろいろ大変なことはあると思うんですけど、ボク、ある意味バカなんで（苦笑）、自分のために闘えると思うんですよね……。

【06年11月24日／東京・渋谷の「ルノアール」にて収録】



「PRIDEが誕生するまでバーリ・トゥードは〝殺し合い〟だった！」

“元祖PRIDEファイター”が語る総合格闘技創成期

村上和成

“平成のテロリスト”の異名でプロレス界をかき回し、いまやビッグマウス・ラウド社長の座に就いている村上和成。じつは彼こそが、記念すべき『PRIDE.1』（97年10月11日、東京ドーム）の第一試合を務めた“元祖PRIDEファイター”だったのだ。まだルールすら定まっていなかった、総合格闘技黎明期に“巻き込まれた男”が、当時の体験を語ってくれた。

聞き手／堀江ガンツ　写真協力／DSE

PRIDEができる前は、職業・総合格闘家じゃ、保険にすら入れなかったんですよ！

――今日は〝初期PRIDEを支えた男たち〟というテーマで、村上さんにお話をうかがいに来ました！

村上　自分、全然支えてないっスよ（笑）。

――でも、村上さんは〝『PRIDE』のトビラを開いた男〟ですし、じつはPRIDEファイター第一号じゃないですか。

村上　ハハハハ！　そうなんですよね（笑）。ああいう経験は、よっぽどタイミングが合わないとできないですよね。

――記念すべき『PRIDE・1』の第一試合ですよね。

村上　そう。本当に記念ですよ。

――でも、当時はまさか『PRIDE』がここまで続くとは思わなかったんじゃないですか？

村上　ここまで定着するとは思いませんでしたね。だって当時は、総合をやってる人自体、少なかったじゃないですか。僕が初めてアメリカで試合したときなんか、「この競技に人生を救われた。これがなかったら、ブタ箱に入ってた」とか「俺は何人殺した」とか「何人の目ん玉潰した」とか、そんな会話してるヤツばっかりなんですよ！（笑）。

――ダハハハ！　まさに反社会的なジャンルですね（笑）。

村上　もう明らかにスポーツじゃなくて、殺し合い。日本でも世間的には「あんなことやって、バカじゃねえの？　メシ食えねえだろ」ってくらいの反応でしたし。

――つまり、〝総合格闘家〟っていう職業自体がまだ認知されてなかったわけですよね。

村上　そうなんですよ。じつはその当時、保険に入ろうと思って、いくつかの保険会社に相談したことがあったんです。「誰でも入れる」ってうたい文句もあったから電話したんですけど、職業を聞かれて「職業と言えるかわからないですけど……総合格闘家なんです」って言ったら、「なんですか、それ？」って聞き返されて。

――ダハハハ！　総合格闘技自体を知らなかった、と。

村上　いくら説明しても、わかってもらえないんですよね。「リング上で殴ったり、蹴ったりするんです」「あ、プロレスですか？」「プロレスじゃなくて……」「あ、K－1ですか？」って感じで（笑）。

――しかし、噛み合いませんね（笑）。

村上　最後にはもの凄くシンプルに「寝てる相手にまたがって殴ったりするんです！」って説明したら、「それは無理ですねぇ……」って断られたし（笑）。

――寝てる相手にまたがって殴る人は、保険には入れなかった（笑）。

村上　唯一ＯＫだった保険会社もあったんですけど、「掛け金が通常の5倍で、下りる額は5分の1です」って。さすがに断りましたけど（笑）。

――そんな社会的にまったく認知されてなかった総合格闘技を、もともとやろうと思ったきっかけはなんだったんですか？

村上　いや、やろうと思ったことは一度もなかったんですよ！（キッパリ）。

――あ、なかったんですか！（笑）。

村上　いま一生懸命、練習してる格闘家の方には失礼ですけど、ホント興味がなかったんですよ。柔道はずっとやってましたけど、「殴る、蹴る」は喧嘩しかやったことなかったし。ただ、自分は拓殖大学の柔道部にいたんですけど、和術慧舟會の西（良典）さんが大学の先輩なんですよね。

――西さんは、あのヒクソン（・グレイシー）とも闘って、慧舟會を設立した日本総合格闘技界のパイオニアですよね。

村上　ええ。それで、ウチの監督にメシ屋に呼び出されたら西さんがいて「今度、慧舟會が東京で格闘技の興行をやるんだ」という話をされたんです。そうしたら監督が「ここにいいのがいるよ！」って、僕を出そうとするんですよ。

――村上さんにその気はあったんですか？

村上　いや、まったく（笑）。ただ、先輩には「押忍！」しか言えませんから。「よし！　おまえ、今度試合やるか！」「押忍！」「本当にわかってんのか？」「押忍！」という流れで出ることになって（笑）。

――イエスしか選択肢がなかった、と（笑）。

村上　それで「どうやって闘ったらいいんですか？」って聞いたら、「殴って、蹴って、ぶっ倒して、腕の骨を折ればいいんだ！」って言われて。こっちも単純だから「あ、そういうことか」って。

――「殴って、蹴って、腕の骨を折ればいい」って、まさに当時のバーリ・トゥードを言い表わしてますね（笑）。

村上　ホント、スポーツというより、ただのケンカでしたから。

――そうして95年の『真・格闘術トライアルトーナメント』に出ることになった、と。

村上　ええ。試合に向けて拓大の道場で練習してたんですけど、「おまえ、キックの練習もしろ！」ってことで、黒崎（健時）先生の道場へ出稽古に行くことになったんですよ。

――鬼の黒崎！　また、恐ろしいところに送り込まれましたね（笑）。

村上　自分、黒崎先生のことは全然知らなかったんですけど。いきなり拳立てをやらされましたよ。

――腕立て伏せじゃなくて、拳立て！

村上　黒崎先生はどんな練習でも「俺が『やめ』って言うまでやれ！」って言うんですよ。でも、命令された練習してると、いつの間にか先生がいなくなっちゃうんです（笑）。こっちは「やめ！」って言われるまで、やらなきゃいけないじゃないですか？　帰ってくるまで、一時間半ですよ！

――ダハハハ！　それでやっと帰ってきたら、違うメニューを命令されるんですか？

村上　はい。「じゃあ次、サンドバック蹴って」って言われて蹴ってると、またどこかにいなくなる（笑）。蹴り方なんかわからないから、スネは腫れるし。だから、もう意地だけを勉強する練習ですよね。

――西さんのアドバイスも「殴って、蹴って、腕の骨を折ればいい」ですし（笑）。

村上　「殴って、蹴って」というか、一回戦の相手が空手着を着てたんですよ。で、大

【村上和成の総合格闘技戦績】

1995.10.13 第1回真・格斗術トライアルトーナメント
新宿スポーツセンター柔道場
○ vs 大塚裕一［重量級決勝 2分55秒 KO］

1995.10.13 第2回ザ・トーナメント・オブ・J
駒沢公園屋内競技場
× vs 郷野聡寛［一回戦 2分55秒 KO］

1996.03.30 第3回ザ・トーナメント・オブ・J
駒沢公園屋内競技場
○ vs 大杉勇［一回戦 4分10秒 アームロック］
○ vs 郷野聡寛［二回戦 延長 判定3-0］
× vs 須田匡昇
［準決勝 2R 1分46秒 腕ひしぎ十字固め］

1996.10.18 Extreme Fighting 3
フェアグラウンド・アリーナ・エキスポ・スクエア・パビリオン
○ vs バート・ベイル［1R 4分33秒 TKO］

1997.03.28 Extreme Fighting 4
ベテランズ・メモリアル・オーデトリアム
× vs モーリス・スミス［1R 4分23秒 TKO］

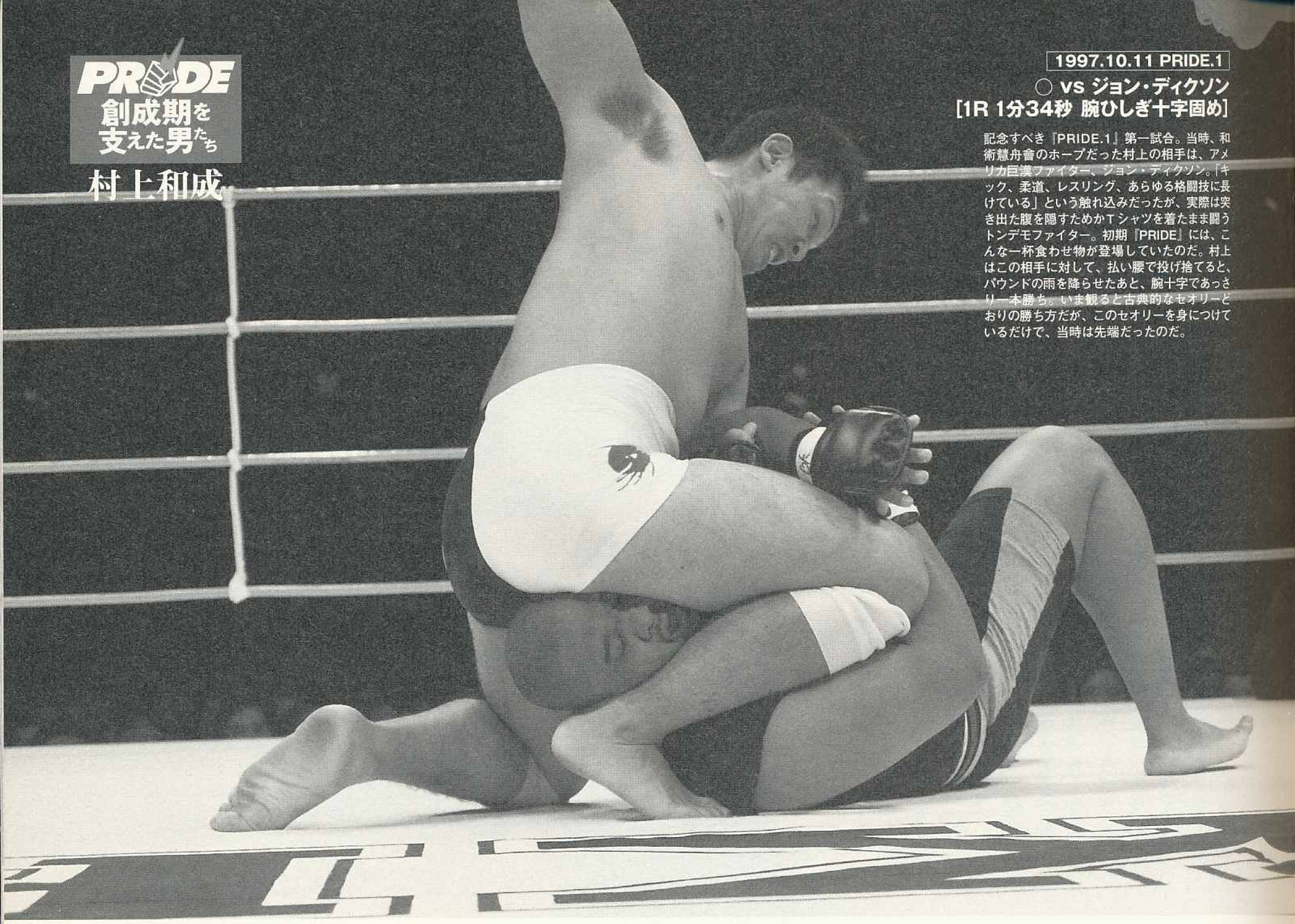
1997.10.11 PRIDE.1 東京ドーム
○ vs ジョン・ディクソン［1R 1分34秒 アームバー］

2000.08.27 PRIDE.10 西武ドーム
× vs 佐竹雅昭［1R 6分58秒 TKO］

2002.08.08 UFO LEGEND 東京ドーム
× vs ヴァリッジ・イズマイウ
［2R 3分3秒 レフェリーストップ］

2003.12.31 イノキボンバイエ2003
神戸ウイングスタジアム
× vs ステファン・レコ［1R 1分8秒 KO］

PRIDE
創成期を支えた男たち
村上和成



1997.10.11 PRIDE.1
○ vs ジョン・ディクソン
［1R 1分34秒 腕ひしぎ十字固め］

記念すべき『PRIDE.1』第一試合。当時、和術慧舟會のホープだった村上の相手は、アメリカ巨漢ファイター、ジョン・ディクソン。「キック、柔道、レスリング、あらゆる格闘技に長けている」という触れ込みだったが、実際は突き出た腹を隠すためかTシャツを着たまま闘うトンデモファイター。初期『PRIDE』には、こんな一杯食わせ物が登場していたのだ。村上はこの相手に対して、払い腰で投げ捨てると、パウンドの雨を降らせたあと、腕十字であっさり一本勝ち。いま観ると古典的なセオリーどおりの勝ち方だが、このセオリーを身につけているだけで、当時は先端だったのだ。

会関係者に聞いたら、「彼はトーワ杯という流派を越えた空手のオープン・トーナメントで、その全国3位の人だ」って説明されて。……そんなヤツと、殴り合えるわけないじゃないですか！

—村上さんは打撃初心者ですからね（笑）。じゃあ、寝かせて腕を折るしかないですね。

村上　それが、当時はボクシンググローブを着けて闘うから、相手をうまくつかめないんですよ（笑）。

—まだオープンフィンガー・グローブがポピュラーじゃなかったんですね。

村上　しょうがないから、相手の腕をかんぬきでロックして、がぶり寄りみたいな感じでテイクダウンして、上からブン殴ってって十字を取ったり。そんな感じでバンバン闘ってたら決勝戦までいったんです。

—それも凄い話ですね！（笑）。

村上　もうケンカ腰でやりましたから。決勝戦でも相手の顔にヒジを入れたら、審判の西さんに「ヒジ入れんな!! 反則取らなきゃならねぇじゃねぇか！」って怒られたんですけど（笑）。

—「取らなきゃならねぇじゃねぇか！」って、取るべきですよ（笑）。

村上　僕も興奮してましたからねえ。あげくには「板の間にブン投げてやろう！」と思って。場内の周りが板の間だったから、相手をそこに連れていったら、西さんが「待て！」って叫んでるんですよ。俺が板の上にブン投げようとしてたのがわかったんでしょうね（笑）。でも、聞こえないフリしてブン投げたんですよ。しかも、のど仏に二の腕押しつけて、おもいきり体重を乗せて。

—ダハハハ！　もう完全に反則ですね！

村上　でも、〝注意〟を取られただけでしたね。相手も脳しんとう気味になってるのに（笑）。

—そこまでやったのに、〝注意〟で済むところが素晴らしいです（笑）。

村上　それでも試合が続行されたから、最後は見よう見まねで、アキレス腱固めをやったんですね。そしたら相手がタップしちゃって、優勝しちゃったんです。

—その勢いもあって、10月の『トーナメント・オブ・J』にも出られたわけですか？

村上　それも「オイ、今度またやるから出ろよ！」って感じで、出されちゃうんです（笑）。ただ、一回戦で郷野（聡寛）選手にハイキックもらって、KO負けしたんですよ。そっからですね。自分より小さい選手にハイキックで負けたことが納得できなくて、就職活動もせずに練習に没頭したのは。

—それにしても、『トーナメント・オブ・J』って、いま振り返ると凄いメンバーが揃ってますよね。

村上　まさに〝総合の虎の穴〟ですよ。総合に人生を懸けてた人間が「やっと場所ができた」ってことで集まってたし、あそこに出てた人は、のちにほとんど日の目を見たんじゃないですか？

—のちのPRIDEファイターがたくさんいますね。TK（髙阪剛）、菊田（早苗）、郷野（聡寛）、美濃輪（育久）、アレク（サンダー大塚）、須田（匡昇）、イーゲン井上。

村上　小路（晃）とか、宇野（薫）くんもいましたし。そういう中で、自分もバイトしながら総合格闘技の練習を真剣にやって、そうこうしてるうちにアメリカで金網の試合のオファーが来たんですね。

—96年10月の『エクストリーム・ファイティング・チャンピオンシップ』ですね。相手は藤原組でも活躍していたバート・ベイル。

村上　でも、そのオファーも急で、試合まで一ヵ月を切っていたタイミングだったんです。それに実際の試合では、事前に聞いて

たルールとやってることが全然違うんですよ！　相手は目の玉はえぐってくるし、鼻には指を突っ込んでくるし、ファールカップをズラしてくるし。「なんだよ、これ！」って。

――当時のアメリカのバーリ・トゥードっていうのは、まさに〝地下プロレス〟みたいな世界だった、と（笑）。

村上　そのとき実感しましたね。「コイツを殺さなかったら、俺が殺されるんだ！」って。そういう気持ちになることって、人生でなかなかないじゃないですか？

――ま、普通はないですよね（笑）。

村上　それをハッキリ感じたんですよ。もう頭は真っ白で。無我夢中でバッカバカ殴ってたら、いつの間にか勝ってたんですね。

――それによって格闘技業界的にも、一躍〝村上一成（当時）〟の名前がクローズアップされてきましたよね。

村上　ただ、試合後にそこのプロモーターから、「今度はモーリス・スミスだから」って言われて。「なんだよ！　モーリスって、世界チャンピオンじゃねーかよ！」って。

――いくらなんでもヤバイだろう、と。

村上　でも「もう、タイトルマッチが決定しちゃったから」ってことで取り合ってもらえないんですよ。結局、翌年3月にモーリスとやったんですけど、さすがに負けて。自分としては「もう、総合格闘技はいいや。世界チャンピオンともやったし、もういいだろう」と思ってたら、『PRIDE』の話があったんですよ。オファーの内容を聞いたら、東京ドームのオープニングマッチだっていうから「それいいじゃないの！」って感じで。……しかし、僕ってここまで完全にノリだけで試合してますよね（笑）。

――でも、格闘技マスコミ的には、〝慧舟會のエース〟とか〝次世代の格闘界を背負う男〟って将来を嘱望されたわけじゃないですか。ご本人はそういう気持ちは……。

村上　全然、ありません！（キッパリ）。「勘弁してくれ！」って思ってましたから。慧舟會には宇野くんも小路もいたし。俺よりも「こっち！　こっち！　こっちにちゃんとした選手がいるよ」って（笑）。僕は総合に人生を懸けようなんて気持ちはさらさらなかったですから。

――巻き込まれてしまっただけだった、と。

村上　だから、『PRIDE』は、記念すべきオープニングマッチをとんでもないヤツに任せてしまったわけですよ（笑）。

――いやいや、『PRIDE』側は、体格やツラ構えも踏まえて、「コイツを売り出そう」って気持ちもあったんだと思いますよ。

村上　ハハハハ！　あったんですかねぇ？

僕の心とは真逆のことですけど。

――でも、東京ドームという大舞台で勝利したら「俺もプロでイケるかな」とは思いませんでした？

村上　それはなかったですね。逆に東京ドームで試合をして「もう俺の役目は終わったな」って思ったくらいですよ。ハッキリ言って、総合ではメシは食えてませんでしたから。アルバイトしながら練習して、応援してくれる人たちのおかげで、なんとか総合をやることができて。そういう苦しいときに応援してくれた人とのつながりはいまも大切にしてますね。その一方、僕が総合から退いたときに、背を向けた人もいました。寂しくはなかったけど、「世間ってこういうものなんだ」「人じゃなく、商品としての付き合いなんだな」って実感したり。

――『PRIDE』に出た頃は、格闘家として区切りを考えていたときだったんですね。

村上　いろんな葛藤がありました。慧舟會も表面上は、僕が〝エース〟って言われてたけど。仲間内のやっかみとかが見え隠れしてた時期だったんですよ。みんなで汗を流して「頑張ろう！」って言いつつ、陰では「アイツばっかり」とか「マグレで勝った」と言ってた人もいた。「夢を与える人間が小さいことでイジイジすんなよ」って思って、そこからは一気に冷めましたね。「もう、総合はやりたくないな」って。

――格闘家をやめてからのことは何か考えがあったんですか？

村上　実家に帰ろうって思ったんですけど……。「練習を教えてくれ」って言う人もいたんで、教えるぐらいならいいだろうと思って、道場をやってたんですけどね。で、その頃に佐山（聡）さんと知り合うんですけど、そこからがまたいままでと一緒なんですよ！（笑）。

――といいますと？

村上　まあ、また巻き込まれていくというか……（笑）。まず、ある日、佐山さんに「今度、会長を紹介してあげるから遊びにおいで」って誘われたんですけど。

――佐山さんが〝会長〟と呼ぶ相手と言えば……。

村上　もちろん猪木さんなんですけど、当時は「誰だろう、会長って？」感じでしたから（笑）。言われるがままについていったら、猪木さんがいてビックリしましたね。

――どういうことかと思いますよね。

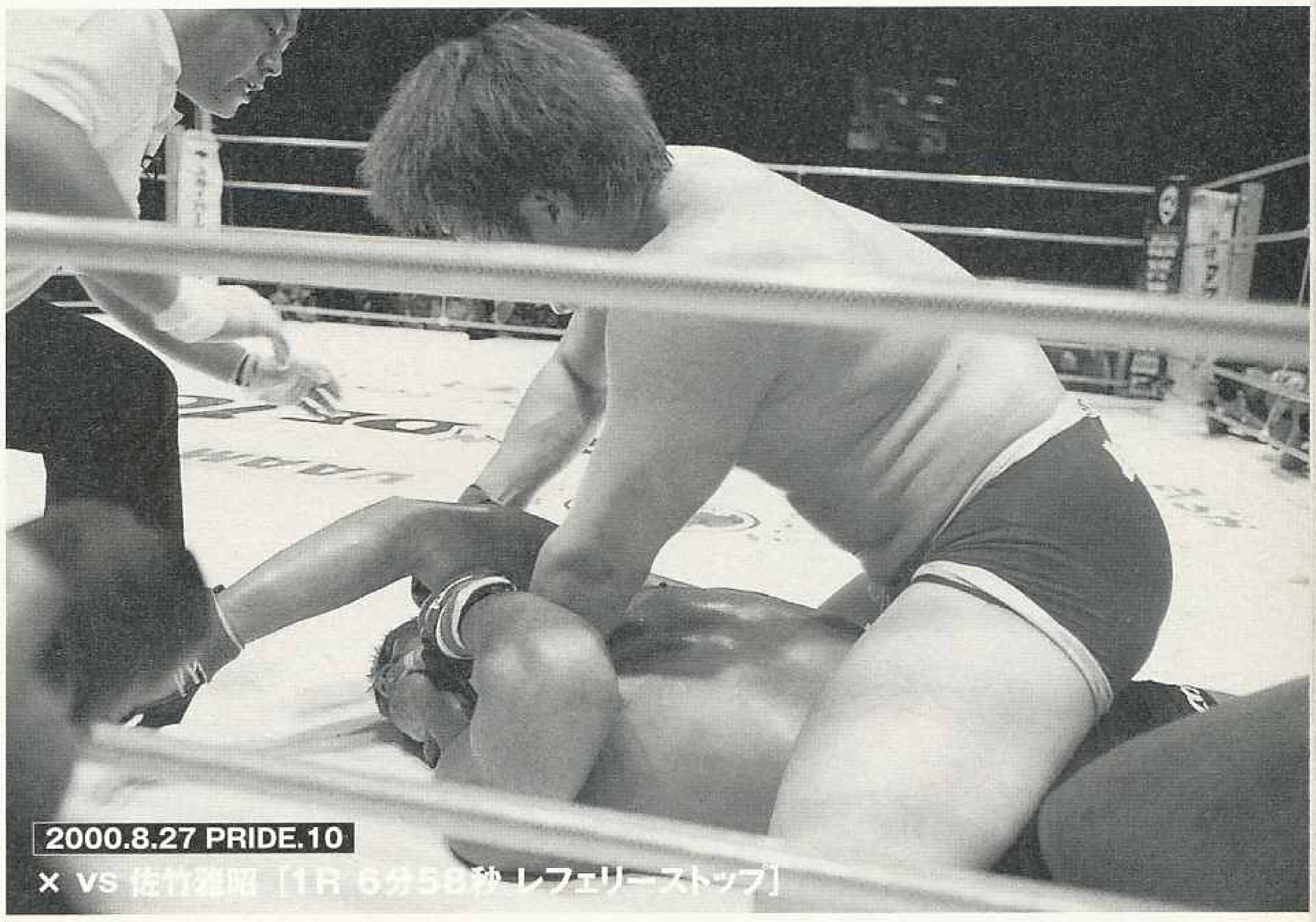
村上　僕はプロレスファンじゃなかったんですけど、普通に「あ、アントニオ猪木だ！」って驚いていたら、佐山さんは会長に「彼ですよ！　僕が二年前から言ってたのは！（UFO＝世界格闘技連盟に）入れましょう！」とか言ってるんですよ（笑）。

――いきなり「入れましょう！」と。ホントにUFOに拉致されたって感じで（笑）。

村上　で、一週間後にまた佐山さんから電話がかかってきて「オーちゃんがいるから、来て！」って。「オーちゃんって誰だよ？」って思ったんですけど。

――当時は「オーちゃん」って言われても、誰のことかわからないですよね（笑）。

村上　そしたら、小川（直也）さんが現わ



2000.8.27 PRIDE.10
× vs 佐竹雅昭【1R 6分58秒 レフェリーストップ】

K-1離脱後、『PRIDE』に戦場を移した佐竹の総合デビュー戦の相手に名乗り出たのが、UFOの村上。村上はプロレス同様のブチ切れファイトで挑み、一時は寝技でバックマウントも奪ったが、佐竹のパウンドで逆転負けを喫した。されど、この敗戦が続く『PRIDE.11』での小川 vs 佐竹につながったのだった。

PRIDE 創成期を支えた男たち

村上和成

れたんですよ！　僕は柔道やってたから、小川さんは憧れの人だし、雲の上の人ですよ。だから、小川さんに会ったときは緊張しまくりましたねえ～！　それでまた一週間もしないウチに佐山さんから電話がかかってきて。

―またかかってきましたか（笑）。

村上　それで「村上く～ん。明日から時間空いてる？　明日からロスに行こうよ。オーちゃんの練習相手で」って（笑）。

―しかし、急な話が多すぎますね、佐山さんは（笑）。

村上　自分は、あの小川直也とマンツーマンで練習できる機会なんて滅多にないから「やった！」と思ったんですけど、ちょうどバイトがあったんですよ。ボクはバイトを休むほど、お金がなかったですから。でも、佐山さんは「大丈夫、大丈夫！　お金は、オーちゃんが出すから。練習道具だけ持っていけばいいから」って。

―そのロス行きが事実上のプロとしてスタートだったんですね。

村上　そうですね。ロスでは猪木さんからプロとしての心構えのお話をしていただきましたし。猪木さんに「おまえ、リングの上で絵を描いたことはあるか？　リングで絵を描くってどんなことかわかるか？」って聞かれて、ボクが「勝ち負けのことですか？」って答えたら、「おまえは、まだまだ素人だな」って言われて。意味はわかんなかったんですけど、凄く恥ずかしかったんですよ。僕は総合のリングにも上がって、どこか天狗になってた部分があったんでしょうね。

―でも、実際はプロの世界のことを何も知らなかった、と。

村上　そのあとで「3分間、逃げ回っても試合だよな。寝てずっと動かなくても試合だよな。それで勝敗はつくよな。……でも、お客はどう思う？」って聞かれて。僕は「おもしろくないと思います」って答えたら、「だから、選手はお客とも闘わなくちゃいけねぇんだ！」って。それで「あ～。俺はそんなこと一回も思ったことなかったな」って、これまでを振り返ったんですよ。で、猪木さんは続けて「じゃあ、おまえ、ケンカするときはどうする？」と聞いてきて、僕が『殴ってこい！』とか。『そんなの効かねぇよ！』とか。意地の張り合いをしますね」って答えたら、「だろ？　顔出すだろ？　それが、プロだ。それがプロレスなんだよ」って言われたんです。僕はそれまでプロレス否定派だったんですけど、その話を聞いて「プロレスってスゲェや！」って思っちゃって。



むらかみ・かずなり■1973年11月29日、富山県婦負郡生まれ。95年に総合格闘家としてデビュー、97年には『PRIDE.1』の第一試合に出場。98年にアントニオ猪木率いるUFO所属となりプロレスラーへ転向。魔界倶楽部のリーダーなど新日本マットを中心に活動。05年にビッグマウス・ラウドへ移籍、同団体の社長に就任。186cm、105kg。

―シンプルな言葉だけど、核心を突いてますよね。

村上　まあ、僕も単純なところがありますからね（笑）。たしかに、プロレスのリングって怖いんですよ。後ろから100キロ以上のヤツにラリアットやミサイルキックをやられたり、「ここで胸を出したくないな」と思っても我慢したり。そこは自分との闘いですよね。そう考えたら「プロレスってスゲェんだなぁ」って。

―そこでプロレスに気持ちが傾いていくわけですね。

村上　だから、よく「総合で通用しないから、プロレスに行ったんでしょう？」とか言われるんですけど、「勝手に言ってろ！」って感じですね。僕は、自分の心が動かされたものを忠実にやってるだけですから。

―じゃあ、『PRIDE・1』で格闘家として出場したときと、『PRIDE・10』でプロレスラーとして佐竹（雅昭）さんと闘ったときでは、意識は違いましたか？

村上　違いますねぇ。だって、僕が佐竹選手と殴り合う必然性なんてないじゃないですか？　でも、そのときの自分は勝ち負けより「お客さんをどうヒートさせるのか？」ということが重要でしたから。

―それで打撃勝負に出た、と。

村上　相手の土俵で闘うことで、お客さんは盛り上がると思うんですよ。僕も本当は勝ちたいですよ。でも、そういうヤツが一人くらいいてもいいんじゃないか？って。

―実際、あの試合は盛り上がりましたもんね。それに小川vs佐竹戦（『PRIDE・11』で実現）にもつながりましたし。

村上　ええ。小川さんに「あとは頼みます！」ってバトンを渡す役割は果たして。

―ところで、村上さんはまた総合格闘技をやってみたいって気持ちはありますか？

村上　もう、ないですね。いまの自分はプロレスしか魅力を感じないですし。それに、生半可な気持ちでそういう場所に出たら、ほかの選手にも、いま僕を応援してくれてるファンにも失礼ですしね。

―でも、03年の『イノキボンバイエ2003』では、ステファン・レコと闘ってますよね。

村上　だから、あのときも総合じゃなくて、あえて向こうの土俵の「K―1ルールでやらせてください」とお願いしたんですよ。レコはK―1ファイターとしても本当にトップどころですよね。そういう人間とK―1ルールで闘ったときに、「俺ってどうなんだろ？」って興味もありましたし。

―でも、K―1のチャンピオンクラスに「殴ってこい、オラー！」という姿勢で挑むのも凄いですよ（笑）。

村上　お客さんがそれで2分間くらい興奮してくれたら、僕の中では〝マル〟なんですよ。大会全体を考えても、ああいう試合ができたのは〝マル〟だと思いますし。だから、極端な話、「一億円払うから総合をやってくれよ」って言われても、もう僕にはできないです。それをやってしまったら、自分が心を動かされたものを裏切ることになりますから。もう「客が呼べるんだから出ろや！」とか「ネタで出ろや」みたいなノリはやりませんから（笑）。


―村上さんは、自分の心に忠実に突き進んでいくということですね。

村上　……でも、会長に「村上、いけ！」って命令されたら、また「押忍！」って言っちゃうかもしれませんけどね（笑）。

―ダハハハ！　今後の活躍を期待してます！

【06年12月6日／『カフェ・ミヤマ』渋谷店で収録】

ボクがいま総合に出るのはファンにも失礼。たとえ一億もらえても、もうやりませんね



「育ててもらった恩があるので どんなことがあっても PRIDEのために生きたい!!」

【小路晃のPRIDE戦績】

1997.10.11 PRIDE.1 東京ドーム
△ vs ヘンゾ・グレイシー [3R ドロー]

1998.03.15 PRIDE.2 横浜アリーナ
○ vs ジュアン・モット
[1R 3分47秒 スリーパーホールド]

1998.06.24 PRIDE.3 日本武道館
△ vs 松井大二郎 [3R ドロー]

1998.10.11 PRIDE.4 東京ドーム
○ vs ヴァリッジ・イズマイウ [2R 1分26秒 TKO]

1999.04.29 PRIDE.5 名古屋レインボーホール
× vs イゴール・ボブチャンチン [2R 判定]

1999.07.04 PRIDE.6 横浜アリーナ
○ vs ガイ・メッツァー [延長R 判定2-1]

1999.09.12 PRIDE.7 横浜アリーナ
○ vs ラリー・パーカー [延長R 判定3-0]

2000.01.30 PRIDE.GP2000開幕戦 東京ドーム
○ vs エベンゼール・フォンテス・ブラガ
[1R終了 判定2-0]

2000.05.01 PRIDE.GP2000決勝戦 東京ドーム
× vs マーク・コールマン [1R終了 判定3-0]

2000.06.04 PRIDE.9 名古屋レインボーホール
○ vs ジョン・ザ・セイント・レンケン
[1R 6分44秒 アームバー]

2000.10.31 PRIDE.11 大阪城ホール
○ vs ヘルマン・レンティング
[1R 3分48秒 アームバー]

2000.12.23 PRIDE.12 さいたまスーパーアリーナ
× vs ヒカルド・アルメイダ [2R 判定4-0]

2001.05.27 PRIDE.14 横浜アリーナ
× vs ダン・ヘンダーソン [3R 3分18秒 TKO]

2001.09.24 PRIDE.16 大阪城ホール
× vs セーム・シュルト [1R 8分19秒 KO]

2001.12.23 PRIDE.18 マリンメッセ福岡
× vs ジェレミー・ホーン [3R 判定3-0]

2002.09.29 PRIDE.22 名古屋レインボーホール
× vs パウロ・フィリオ
[1R 2分48秒 アームバー]

2003.03.16 PRRIDE.25 横浜アリーナ
○ vs アレックス・スティーブリング
[3R 判定2-1]

2003.10.05 PRIDE武士道
さいたまスーパーアリーナ
× vs マウリシオ・ショーグン [1R 3分47秒 TKO]

2003.12.31 PRIDE男祭り2003
さいたまスーパーアリーナ
× vs ムリーロ・ニンジャ [1R 2分41秒 KO]

2004.05.23 PRIDE武士道–其の参– 横浜アリーナ
○ vs 玉海力 [1R 0分18秒 TKO]

2004.07.19 PRIDE武士道–其の四–
名古屋レインボーホール
× vs パウロ・フィリオ [2R 判定2-1]

2005.04.03 PRIDE武士道–其の六– 横浜アリーナ
× vs ディーン・リスター
[1R 3分13秒 トライアングルチョーク]

PRIDE創成期を支えた“最後の日本男児”のこれから——

小路 晃



『PRIDE』創成期を支えた男たち・第三弾は、いま現在、桜庭和志に続き『PRIDE』参戦数の経験を持つ日本人ファイター小路晃。『PRIDE.1』でヘンゾ相手に大番狂わせのドローに持ち込み脚光を浴びると、その後もコンスタントに『PRIDE』に出場し続けていたが、ここ最近は、なかなか結果も出ず、気がつけば『PRIDE』のリングからは遠ざかってしまっている。“最後の日本男児”の心境やいかに!?

聞き手／松澤チョロ　試合撮影／乾晋也、平工幸雄

——今回は〝ミスターPRIDE〟と言われた小路さんに「『PRIDE』と私」というテーマで話をうかがいたいと思います。

小路　過去形になってますけどね（微笑）。

——いやいや（笑）。それこそ小路さんは『PRIDE・1』から出てますし、初期の『PRIDE』を代表するファイターの一人というのは間違いないわけで。ところで、最近は元気ですか？

小路　元気です！（微笑）。『PRIDE』には、ここ一年近く出てないんですけど、試合は海外だったり、このあいだはDEEPで地元の富山でやったりしてますから。

——初の地元凱旋試合だったみたいですね。で、いきなりなんですが、小路さんにとって、『PRIDE』って、どういう場所になります？

小路　僕にとって『PRIDE』っていうのは、もう生活の一部みたいなもんで。それぐらい『PRIDE』に懸けてきたんで、ホントに身体の一部みたいに考えてますね。

——『PRIDE』は身体の一部！　そもそも、小路さんは『PRIDE・1』の前にも後楽園ホールで骨法の大原（学）さんとメインで闘ったりしてますけど、本格的なプロデビューはヘンゾ戦って感じですよね。

小路　そうですね。あれだけのお客さんの前で闘うっていうのはなかったですからね。

——その前に、じつはマスクマンの誠軍団1号としてプロレスのリングに上がっていたというのは、いまは知らない人も多いと思うんですけどね（笑）。

小路　あ〜、そうでしょうね。僕はもともとプロレスやってた頃から考えても（苦笑）。プロレスラーになりたくて、村上（和成）に誘われて入ったのがきっかけなんで（笑）。

——そうなんですよね。でも当時、プロレスではありましたけど、格闘技の大会をドームでやるってなかったじゃないですか？

小路　まだなかったたし、夢にも思ってなかった世界だったんで。そんなとこでやれるってだけで、もう舞い上がってましたね（笑）。

——そりゃ、舞い上がりますよね。東京ドームで、しかも当時話題沸騰のグレイシーとの対戦ですもんね。

小路　そうですね。でも、僕は〝噛ませ犬〟だって思われてたと思うんですよ（笑）。

——あのときは、ほとんどの人がそう思ってたでしょうね（笑）。

小路　なので、それが凄い発奮材料になって試合に臨めたのがよかったのかなって。

——当時は知名度や実績からいうと〝噛ませ犬〟と思われてもしょうがない部分があったと思うんですけど、本人的には「イケる」っていう自信はあったんですか？

小路　まったくなかったですね（微笑）。

——あ、自信はなかった（笑）。

小路　まったくなかったですけど、警察の柔道の先生とかに、ずっと稽古はみっちりつけてもらってたんで、グレイシーっていっても、その警察の先生よりは強くないだろって、周りの人にも言われてたんで。

——その警察の方って、高瀬大樹選手とかも「メチャメチャ強い先生」って、よく言ってる方ですか？

小路　そうです。その先生も「これだけやりゃ大丈夫だ」って言ってくれたんで、それが凄い背中を押してくれて頑張れましたね。

——小路さんは、これまでいろんな強い選手と練習してると思うんですが、その先生は別格なんですかね？

小路　別格ですね。たぶん、吉田（秀彦）さんとか小川（直也）さんとかとやっても寝技だったら全然強いと思いますよ。立ち技はヒザが悪いんであれですけど、寝技だけだったらホントに強いんで。

——それは凄そうですね。でも、当時のヘンゾは年齢的にもバリバリでしたよね。

小路　バリバリでしたよね。相手もそうだし、初めての東京ドームだったんで、花道へ出るところのカーテンをチラッとのぞいただけでも震え上がってましたから（笑）。

——相手よりも、雰囲気に飲まれていた部分があったと？

小路　そうですね。学生時代はマスク被りながらプロレスしてて、後楽園だとか地方の大会とかも出てましたけど、田舎のほうに行けば100人ぐらいしか入ってない会場とかもありましたからねぇ（笑）。

——東京プロレス（※全日本出身の石川敬士がWAR離脱後に立ち上げた団体。小路は現在NOAH等で活躍する青柳誠司率いる誠軍団1号として活躍した）の地方大会だと、そんなもんでしょうね（笑）。

小路　でも、そういうのも、いい経験になったと思うし、おかげであんまり緊張もしなくなったと思うんですけど、さすがに東京ドームで相手がグレイシーだと、すんごい緊張しましたね（笑）。

——結果的にはヘンゾ相手に大健闘の引き分けで、試合後はマイクアピールも飛び出したわけですが（笑）。

小路　ありましたね（苦笑）。その頃、〝日本最弱〟って言われてたじゃないですか？

——『格闘技通信』の表紙にデカデカと打たれたことがありましたからね。

小路　「絶対にそんなことない」って自分では思ってたんで、ついつい「何が日本最弱じゃ〜！」って言っちゃいました（苦笑）。

——それから初期の『PRIDE』には、ほぼ毎大会出て、結果も残してますよね。

小路　おかげさまで（笑）。

——〝最後の日本男児〟という素敵なキャッチフレーズもつきましたし（笑）。

コールマンとの試合は自分の格闘技人生の中で何かをつかんだような気がします！

小路　あ～、あれは誰がつけたか知らないんですけど（笑）。

―『PRIDE』で一番印象に残ってる試合というと誰との試合になります？

小路　いろいろありましたけど、やっぱり、（ヴァリッジ・）イズマイウ戦（1998年10月11日）と、あとは一番最初のグランプリでやったマーク・コールマン戦（2000年5月1日）ですね。

―コールマンが優勝したときですね。

小路　あのときコールマンとの試合では負けちゃいましたけど、自分の格闘技人生の中で何かつかんだような気がしましたね。

―当時のコールマンは間違いなく最強の一人ではありましたからね。その頃は、いまみたいに階級別っていう概念もなかったので、普通に（イゴール・）ボブチャンチンとか（セーム・）シュルトとかとも闘ってましたよね。

小路　階級とかなかったですからね（笑）。

―小路さんは階級とか、それほどこだわりはないのかなって思うんですけど。

小路　あ～、そんなに気にしないですね。

―そういう考えっていうのは、美濃輪（育久）さんとかもそうですけど、やっぱりプロレス好きっていうのが大きかったりするんですかね。

小路　そうですね。それに路上とかは体重別とかないですし、自分はそういうつもりでやってますね。僕はいまでも無差別でもいいと思ってるんですけど、DSEさんのほうから「83キロでチャレンジしたら」って勧められて階級を下げた感じなんで。

―いまでも、無差別で闘うことには抵抗はないと？

小路　全然オッケーですね。お客さんの目もありますけど、やっぱりやる側として、最強を目指すには無差別が基本だと思ってるんで。それに僕は柔道時代から小さいほうだったんで、「デカいヤツには負けたくない」っていうのは小さい頃からずっとあって、そういう思いがいまでも続いてる感じですね。

―見る側としては、小さい選手が大きい選手を倒すっていうのは痛快ですけど、『PRIDE』の初期の頃と比べて総合格闘技自体のレベルが上がってきてるわけじゃないですか。無差別はもちろん、同じ階級でも、正直しんどい闘いが続いていますよね。

小路　そうですよね。シュルトとやったときなんて全然ダメでしたからね。

―シュルトは、いまはK―1で大活躍してますからね。

小路　ですよね。ホント強かったですよ。

―いくら無差別志向といっても、あれだけサイズが違うと、やっぱり厳しいなって感じたんじゃないですか？

小路　そうですね。それにシュルトはデカい中でも一番デカいじゃないですか（笑）。

―たしかに（笑）。シュルト以外にも『PRIDE』ではコールマン、ボブチャンチン、ダン・ヘンダーソン、（パウロ・）フィリオ、（マウリシオ・）ショーグンなどなど、ホント凄い相手とばっかり闘ってますよね。

小路　一通りやりましたからね。

―ビッグネームと言われる強豪とこれだけ闘っていると、それこそ世界の頂点はどれほどのもんかっていうのは、自分の中ではわかってくるんじゃないですか？

小路　だいたいわかりましたね。

―相手が強いっていうのもありますけど、正直、ここ最近の『PRIDE』では結果が出せなくなってきてるじゃないですか。誰との試合ぐらいから、スランプというか、ちょっと厳しいなっていうのを感じました？

小路　『武士道』でショーグンとやったとき（2003年10月5日）とかですかね。

―あ～、踏みつけでやられちゃった試合ですね。それより前の『PRIDE・12』（2000年12月23日）での（ヒカルド・）アルメイダ戦から5連敗してるじゃないで

1997.10.11 PRIDE.1

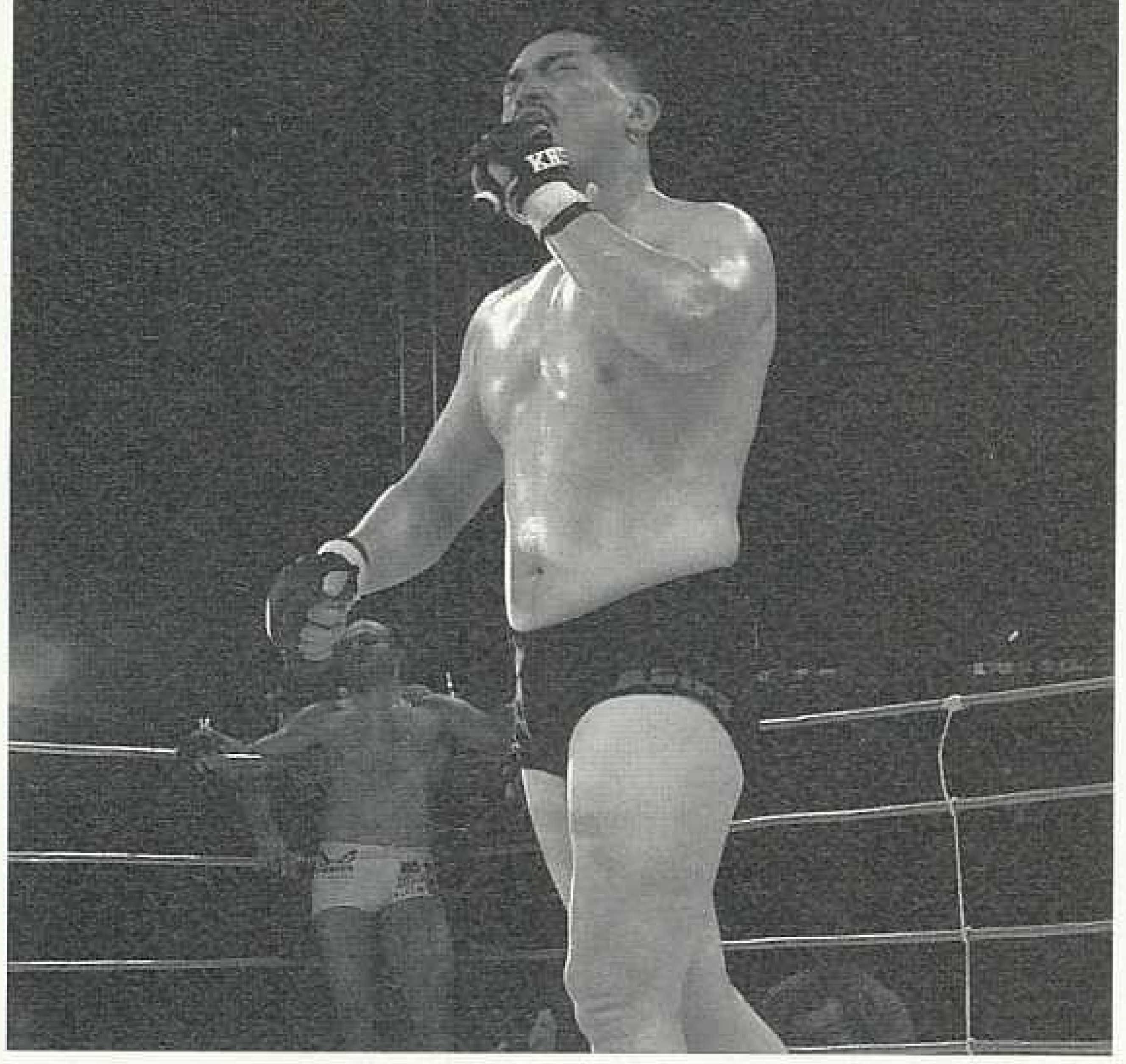


△ vs ヘンゾ・グレイシー［3Rドロー］

『PRIDE.1』の第3試合でヘンゾと対戦したのが当時・慧舟會所属の小路晃。戦前の予想ではヘンゾ勝利の声が圧倒的だったが、互角の攻防を展開し引き分けに持ち込んだ小路は「何が日本最弱じゃ～!!」と大仁田ばりに絶叫し一躍脚光を浴びた。

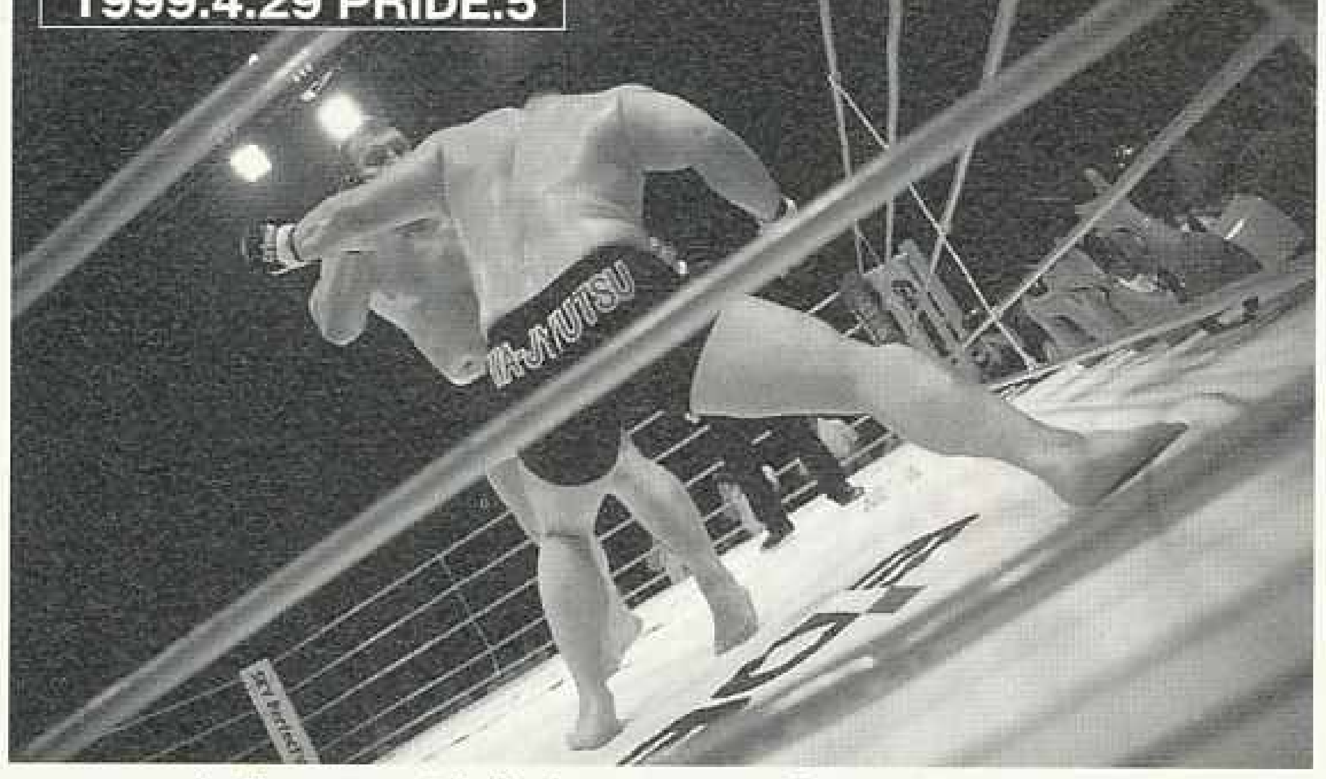
1998.10.11 PRIDE.4

○ vs ヴァリッジ・イズマイウ［2R 1分26秒 TKO］



『PRIDE.2』でジュアン・モットに勝利、『PRIDE.3』では松井相手にドローと、これまで『PRIDE』無敗の小路が『PRIDE.4』でイズマイウと対戦。このクセ者相手にTKO勝利を収めた小路は、この頃から"ミスターPRIDE"と呼ばれ始めた。

1999.4.29 PRIDE.5



× vs イゴール・ボブチャンチン［2R判定］

『PRIDE.4』でグッドリッジ相手に衝撃のKOデビューを飾ったボブチャンチンの『PRIDE』二戦目の相手を務めた小路。破壊力抜群のロシアンフックをかいくぐり打撃で打ち返すなど健闘した小路だったが判定で敗れ、『PRIDE』初黒星を喫した。

2000.5.1 PRIDE.GP2000開幕戦

× vs マーク・コールマン［1R終了 判定3-0］



のちにGP初代王者となったコールマンと対戦し、体格差ももろともせず真っ向から立ち向かっていった小路。判定で敗れはしたものの試合後、コールマンに「絶対に諦めない男」と言わしめた小路は"最後の日本男児"と呼ばれるようになった。

小路 晃

すか。まあ相手はホント錚々たるメンバーですけれども。

小路　でも、それぐらいのときまでは、負けたけど、頑張れたと思ってたんで。ただ、そのあとショーグンとか（ムリーロ・）ニンジャとやって、「つえ～なぁ、コイツ」って思って。打撃で完璧にやられちゃったんで、もっと打撃をやんないとダメなんだなぁって。

——それぐらいの時期から頻繁にアメリカにトレーニングに行き始めたわけですけど、それはやっぱり現状を打破したいと？

小路　そうですね。ＤＳＥさんのほうからも「アメリカにいい先生がいるから行ったらどうだ？」って言っていただいたっていうのもあって。

——先生というのは、『ＰＲＩＤＥ』でジャッジをやられているマット・ヒュームのことですよね？

小路　そうです。行ったら、ホントにいい先生だったんで。練習環境もジョシュ（・バーネット）がいたり、ボブ・サップがいたり、いろんな選手が出稽古に来てたりして。これはいい環境だと思って、それからずっと行くようになりましたね。

——ホント、一時はアメリカを拠点にしてるような感じでしたよね。

小路　4年ぐらい行ったり来たりで。

——マット・ヒュームと練習してる人はみんな口々に「マット先生はもの凄く強い」って言いますよね。（桜井）マッハさんとかもよく言ってましたけど。

小路　ホント、メチャメチャ強いですよ。

——最初に言っていた柔道の先生とは、また違った強さなんですかね？

小路　マット・ヒュームは打撃も寝技もどっちもバランスよくできますからね。それに教え方もうまいんで。最近、僕も西やん（西島洋介）とか『ＰＲＩＤＥ』とかでセコンドにつくことが多いんですけど、マット先生を見てて、選手としてできなくなっても、そういうかたちで携わっていきたいなって思うようになりましたね。

——トレーナーとして選手をさまざまな面でサポートしていくっていうことですね。

小路　そうですね。あとは練習だけじゃなくて、精神的にも凄い勉強になって。よくマット先生が言うのが「オマエたちはいい時代に生まれたんだぞ。オレたちはやりたくないことも生活のためにやらなきゃいけない時代だったんだ。オマエたちはいまを一生懸命、マジメに取り組みなさい」って。そういう話をマット先生やモーリス・スミスやら、いろんな人から聞いて、ホントいい経験をさせてもらったと思ってます。

——〝最後の日本男児〟的にはアメリカの水が合ったという感じですかね？（笑）。

小路　そうですね（笑）。会話とかも細かい話はわかんないですけど、普通に暮らしていくぶんには問題ないですね。ホントに練習環境的には最高だったと思いますね。それでアメリカで『キング・オブ・ザ・ケージ』に出て勝って、万全な体調でパウロ（・フィリオ）とやったんですけど、腕十字で負けちゃったんですよねぇ。

——結果を見ると1ラウンド2分48秒での完敗でしたから、かなりショックだったんじゃないですか？

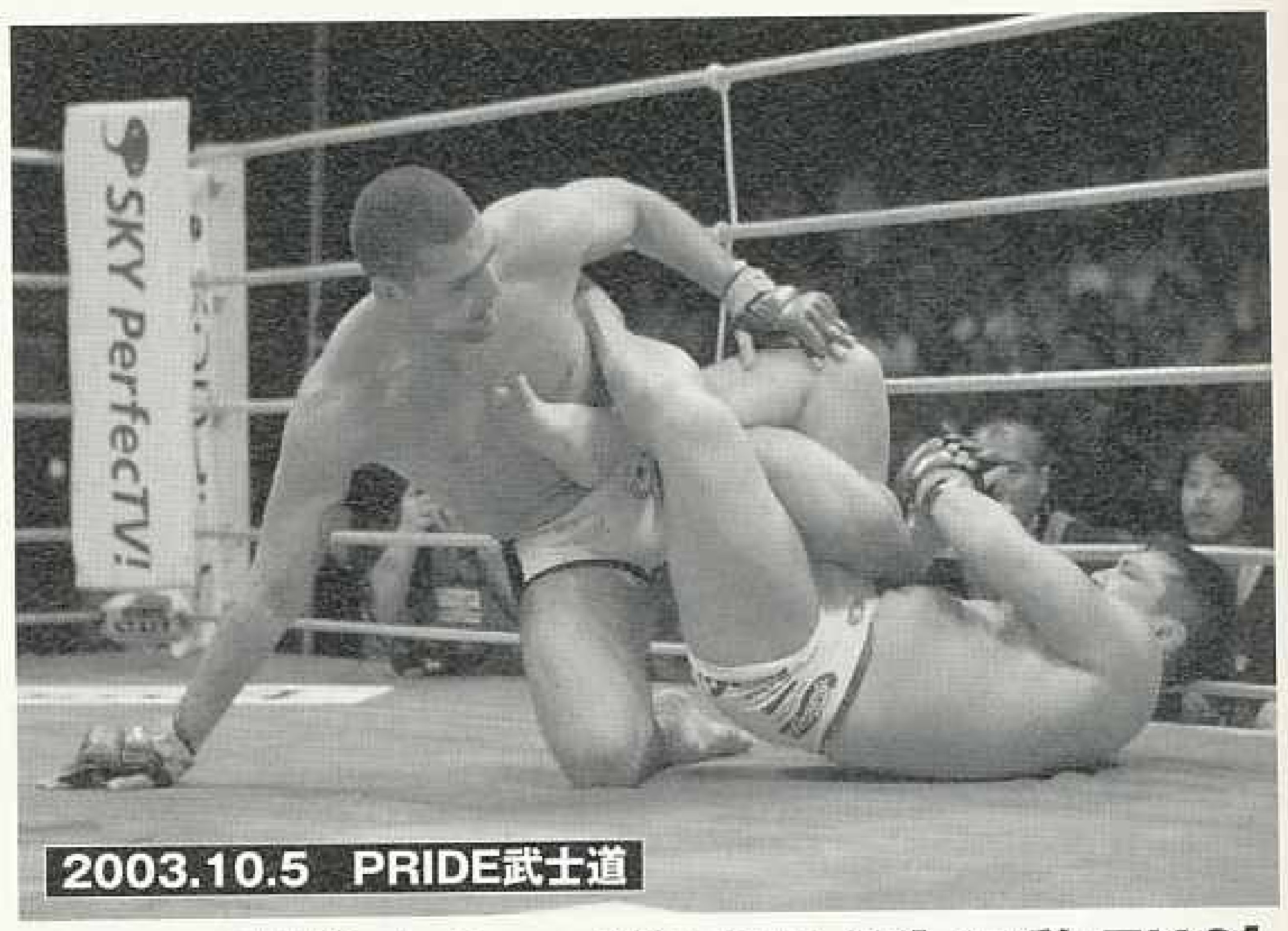
小路　すっごい泣きましたね。絶対に勝てるって自信もあったんで。それで、負けてから、またアメリカに行ったんです。

——ベストの体調で負けたってことが相当なショックを受けたわけですね？

小路　そうですね。環境的にはベストだっていうのがわかってたんで、気持ちを切り

マット先生のところはジョシュがいたりサップがいたり、ホントいい環境でしたね


2001.9.24 PRIDE.16
× vs セーム・シュルト［1R 8分19秒 KO］
当初はブラッド・コーラーと対戦予定だった小路と、同じくボブチャンチンと対戦予定だったシュルトが激突。約40センチの身長差があるシュルト相手に小路はテイクダウンに成功し会場を沸かせるが、強引に切り返されると最後はパンチで撃沈！


2003.10.5　PRIDE武士道
× vs マウリシオ・ショーグン［1R 3分47秒 TKO］
一回目の『PRIDE武士道』に出場した小路は、いまやミドル級GP王者のショーグンの『PRIDE』デビュー戦の相手を務めた。小路はテイクダウンからマウントを奪いチャンスを得るも、最後はショーグンの代名詞となっている踏みつけで敗戦。


2004.7.19 PRIDE武士道−其の四−
× vs パウロ・フィリオ［2R 判定2-1］
2002年の『PRIDE.22』で一本負けを喫しているフィリオ相手と、日本vsブラジリアン・トップチーム対抗戦の先鋒戦として対戦した小路。リベンジを狙い、海外修行で自信をつけた打撃で勝負にいった小路だったが結果は判定負けに終わった。


2006.2.5 DEEP
× vs 三崎和雄［1R 2分31秒 フロントチョーク］
『PRIDE』のリングには2005年４月の『武士道-其の六-』でのディーン・リスター戦で敗れて以来遠ざかっている小路。2006年２月のDEEPでは先日『PRIDE』ウェルター級GPを制した三崎と対戦するもフロントチョークで完敗を喫した。


替えて、またやっていくしかなかったんで。
――いま『PRIDE』では83キロのウェルター級でやってるわけですけど、小路さん的にベスト体重ってどれぐらいになるんですか？
小路　たぶん88キロぐらいだと思うんですけど。
――じゃあ、やっぱり減量はキツい感じなんですか？
小路　楽ではないですけど、それが自分の仕事ですからね。大好きな試合に出れると思えば苦にはならないです。
――小路さん的には、やはり『PRIDE』のリングには特別な思いがあったりします？
小路　そうですね。僕も、このままでは終わりたくないし、もう一回『PRIDE』のリングで勝たないとやめれないですから。それに、『PRIDE』は来年で10周年じゃないですか。
――あ～、そう言われればそうですよね。
小路　来年（２００７年）の10月９日で10周年なんで。だから髙田vsヒクソン戦から10年ですよ。で、『PRIDE・１』から10年間出てる選手って、ほとんどいないじゃないですか？
――見事にいなくなっちゃいましたよね。まあ、それだけ過酷なリングっていうことも言えると思うんですけど。
小路　だから、来年は僕の格闘人生の集大成だと思ってるんで。気合いを入れて挑もうと思ってます。来年一年間、海外とかでも何試合かして、しっかり実績を作って、万全の体調で『PRIDE』に出たいッスね！（キッパリ）。
――現実的に考えると、無差別というより、ウェルター級で勝負をかけていきたいって感じですか？
小路　そうですね。まあ、できれば無差別でもやりたいですけど（笑）。
――へんな話、引退の時期とか考えます？
小路　35歳まではガンガンやろうと思ってますね。あと一カ月ぐらいで33なんで……（苦笑）。
――アハハハ！　まあ、年齢だけでいうと、上には上がいますからね。


しょうじ・あきら■1974年１月31日、富山県出身。学生時代に知り合った青柳政司の勧めで誠軍団１号として東京プロレスでプロレスデビューをはたす。その後は、村上和成に誘われ慧舟會へ入門。以来、『PRIDE』を中心に総合格闘家として活躍。2001年、慧舟會を離れ現在は再度『PRIDE』のリングを目指しフリーにとして活動中。172ｃｍ、90kg。小路晃のHPはコチラ→http://www.akira-shoji.com/

小路　でも、わかんないですね。たとえばランディ・クートゥアーとか40過ぎてバリバリやってましたし、マット先生も40歳ぐらいですけど、強い人はいくらでもいますから。それに自分も、もし現役を引退しても練習はやめないと思いますね。
――高阪さんとかもそんな感じですよね。生涯格闘家というか。
小路　自分もそういう感じですね。ちょっ

来年は『PRIDE』10周年なんで、気合い入れて頑張ります！

と前のDEEPの富山大会で、初めて母親が会場に観に来てくれたんですよ。
――いままで一度もなかったんですか？
小路　10年間やってて一回もなかったんですよ。18歳から実家を離れて、いつ会っても「早くやめて違う仕事しろ」って言われてたんで（苦笑）。
――いつになっても親は心配するって言いますからね。
小路　そうですね。それで今回、初めて会場に招待したんですけど、まったく試合は観てなかったみたいで（苦笑）。
――怖くて観られなかったんですかね？
小路　そうみたいです。それでも試合後、「元気なうちにやめてくれ」って。そう言われても、もう元気じゃないし（笑）。
――アハハハ！　まあ、10年も現役をやってれば五体満足ではないでしょうしね。
小路　そうなんです。痛いとこだらけだし。両親には「一生格闘技をやり続けるし、ずっと格闘家で居続けるよ」とは言ったんですよ。「人生は一度きりなんで、初志貫徹するからね」って。
――それで理解してもらえたんですか？
小路　「もうあきらめるから頑張りなさい」って言ってもらえました。試合内容は納得いってないですけど、初めて地元で試合ができたんで、ちょっとは親孝行できたかなって思ってますね。そういう意味では満足してるし、いまは来年に向けて、ちょっとでも地力を上げてグッドコンディションを保てるように頑張ってる状態です。
――今年の『PRIDE』はフジテレビの撤退をはじめ、さまざまなことが起こりましたが、それについてはどう思いました？
小路　ショックでしたけど、僕はもう絶対に揺るぎないと思ってたんで。たとえ規模が小さくなって、会場も小さいところでやることになっても、『PRIDE』は『PRIDE』だと思ってるんで。テレビがなくなっても僕のスタンスは何も変わりはないし、ずっと闘い続けていくし、『PRIDE』に携わり続けていこうと思ってます。
――そうですか。ちなみに小路さんは、またプロレスやってみたいとか思いません？
小路　どうなんですかねぇ。いまでもプロレスは大好きですし、中邑真輔の応援に新日本に行ったり、アレクさんの応援で、みちく（プロレス）に行ったりはしてますけど。
――中邑さんは、よく小路さんのセコンドにもついてますからね。
小路　はい。どっちかっていったら、いまはファン的な視点で観てますね。チビッコの頃から、プロレス大好き少年だったんで。田舎には『プロレススーパースター列伝』しかなかったですから（ニッコリ）。
――そんなことはないと思いますけど（笑）。
小路　まあ、機会があればって感じですけど……そうそう機会もないですからね（笑）。
――総合やりながらだと、なかなかタイミングも合わないでしょうし、好きだっただけに、やるんならしっかり練習してっていう部分もあるでしょうね。
小路　そうですね。やっぱり、プロレスラーの人は、みんなプロフェッショナルですから。にわかでやるのはお客さんに対しても失礼にあたると思うんで。やるんだったら、どっぷり浸かってやらないと。
――わかりました。また『PRIDE』のリングで大暴れする小路さんが観られるのを楽しみにしてます！
小路　期待してください！　いまは、お世話になった『PRIDE』のために少しでも恩返しできるように頑張っていくしかないと思ってるんで。
【12月４日／都内・浜松町の喫茶店にて収録】



Dynamite!!に激震!!

ヒーローの悲劇、再び……。

桜庭和志にオイルショック!?

―秋山vs桜庭戦でいったい何が起こったのか―

文／橋本宗洋　撮影／乾晋也　構成／松下ミワ

「すっごい滑るよっ!!」

——。

志は何に負けたのか



『Dynamite!!』メインイベント後、リング上には「滑る！　滑るよ!!」と異様な剣幕で激高する桜庭と、セコンドと喜びを分かち合う秋山という対照的な二人の姿があった。この試合に関して、ネット上では“オイル問題”などと題してあっという間に激論がかわされ、すでに大混乱状態となっているのだが、はたして桜庭の敗戦は“オイル問題”という一言で片づけられるのか。そして桜庭のこれからは——。

京セラドーム大阪に『SPEED TK RIMIX』が鳴り響く。ステージに登場したのはオレンジ色の柔術衣にタイガーマスクを被った二人の男。マスクを脱ぐと、一人は桜庭和志、もう一人は阪神タイガースの下柳剛だった。いかにも桜庭らしい入場である。しかし観客から送られたのは、それなりの拍手とそれなりの歓声でしかなかった。かつて『PRIDE』で感じられた、場内総立ちの熱狂には程遠かった。

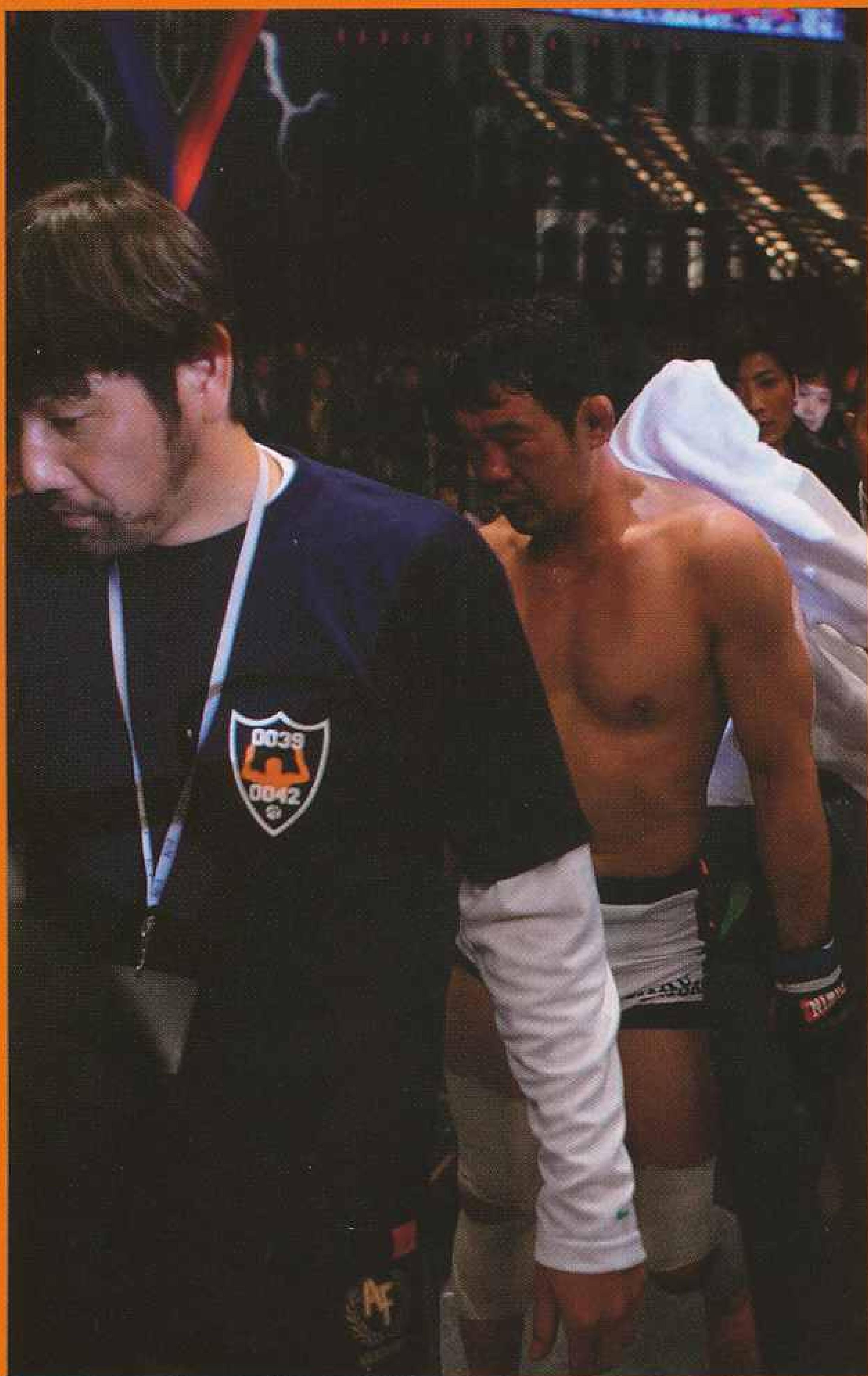
『Dynamite!!』の観客は、これまで桜庭の試合を観て、支え続けてきたファンとはまったく層が違っていた。彼らは魔裟斗や山本KID徳郁、須藤元気の試合を観て格闘技に興味を持った人々であり、おそらく〝記憶という財産〟の中にホイス・グレイシー戦の歓喜も、ヴァンダレイ・シウバ戦の屈辱もない。いい悪いの問題ではなく、桜庭が移籍したのはそういう場所だったということだ。

試合のテーマも、これまでと同じではなかった。『PRIDE』における桜庭の試合は、常に〝桜庭目線〟の試合だった。我々はいつも〝桜庭が何をやってくれるか〟に期待していたし、桜庭が負けても桜庭のほうばかりを見ていた。勝った相手を見るのはあと回しだった。

今回も、そういう目線で試合を観ようとしていた人間はいたはずだ。だが秋山成勲vs桜庭和志戦は〝桜庭目線100パーセント〟の試合ではなかった。むしろテーマは『Dynamite!!』でプロデビューし、『HERO'S』でキャリアを重ねてきた秋山のほうにあった。ライトヘビー級王者が、トーナメントで闘えなかった憧れの存在に挑む。真の王者として、乗り越えなければならない試練。本誌106号のインタビューで、谷川貞治K－1イベントプロデューサ

競技と興行の狭間で――
桜庭和志は





不服の表情でリングをあとにした桜庭。試合後のインタビューにも応じることなく、控室でも荒れていたという。解説席でその様子を見ていた谷川プロデューサーは「あんなサクちゃん、見たことないですね」とコメント。

秋山戦で感じた哀しさは 〝桜庭が桜庭ではない哀しさ〟

ーはこう語っている。

「正直言うと、サクちゃんの相手は秋山選手がいいかっていうと本当はそうは思っていないんですけど、とにかく秋山vs桜庭戦では、秋山選手に勉強してもらえればいいかなと、そういう気持ちで組みました」

桜庭という〝生きる伝説〟との闘いで、秋山が〝プロとは何か？〟を学ぶ試合ということである。極端にいえば、この試合における桜庭は〝秋山の相手〟だったのだ。

試合は、蹴りを使った探り合いからスタートした。桜庭のタックルは、秋山がバックステップでかわす。そんな〝序章〟ともいえる展開が終わったのは、桜庭のローキックが秋山の金的にヒット、試合がしばし中断されたあとだった。再開すると、桜庭はジャンプしながらの左ミドル。フック、アッパーも放ち、攻撃のテンポを早めていく。インファイトを挑もうとする桜庭に、秋山もパンチで応戦した。さらに桜庭は低空タックル。これを秋山がかわしたところで、桜庭はコーナーに下がりながら「タイム！タイム！」と叫んだ。だが梅木（良則）レフェリーはこれを認めず、秋山は攻撃を続行する。バックブロー、パンチの連打。そして桜庭のタックルを潰すと、秋山は渾身のパウンドを打ち下ろしていった。

桜庭が足関節を狙っても、秋山はかまわず殴る。その数、じつに100発以上。ガードの構えは見せていた桜庭だが、パンチは確実にヒットしていた。レフェリーの「アクション！」「止めるぞ！　動け！」というコールにも、桜庭は動けない。桜庭が殴られ続ける時間は、異様なほど長く感じられた。秋山も、殴りながら〝まだ止めないのか？〟とでも言いたげな目でレフェリーを見る。

そしてついにゴングが鳴った。ゴングが先に鳴り、それを受けてレフェリーがストップを宣告したため、場内には〝え？〟というムードが充満する。だがそれも一瞬のことだった。桜庭の顔は無惨に腫れ上がり、耳からは出血。誰もが試合終了を納得した

ことだろう。そのまま、大会はエンディングへとなだれ込んでいった。
　レフェリーの「ストップ」コールより先にゴングを鳴らしたのは、リングサイドのスタッフだった。谷川プロデューサーの説明によれば、レフェリーだけでなく平直行、角田信朗、前田日明の三氏に試合をストップする権限があり、この試合でそれが行使されたという。権限を持つのは平、前田、リングドクターの3名だという情報もあるが、いずれにしてもルールに則って試合が終了したことは間違いない。
　問題となったのは、桜庭による「タイム」要請だ。桜庭の抗議は「タックルにいったら秋山の身体が滑る。オイルを塗っているんじゃないか」というものだった。桜庭はレフェリーの「アクション！」コールに「アクションできるわけないだろ！」と返し、試合をストップされたことよりも試合中にオイル塗布の確認がなされなかったことに怒っていたという。控室に戻っても桜庭の怒りは収まらず、「とてもコメントさせられる状態ではない」という主催者側の判断で、桜庭はノーコメントのまま会場を去った。
ただ、この〝オイル問題〟は一応の決着を見ている。試合終了直後、レフェリーが秋山の身体をチェックし、オイルの塗布が認められなかったのだ。桜庭のセコンドも「異状なし」と認めたという。
　〝桜庭目線〟で見ると、この試合はあまりにも哀しいものだった。桜庭が負けたから哀しいということではない。彼がシウバやヒカルド・アローナに惨敗を喫したときにも哀しさはあったのだが、今回の試合で感じた哀しさは、それらとはまったく異なる類のものだ。それは〝桜庭が桜庭ではない哀しさ〟である。

桜庭が主役である『PRIDE』ではなかった


オレンジの道衣姿で登場した二人のタイガーマスク。花道の途中でマスクを脱ぎ捨て現われたその正体は、もちろん桜庭和志。そしてもう一人は桜庭の親友・阪神タイガースの下柳剛だった！ 桜庭はそのままリングインし、下柳はセコンドへ。


秋山はなんと総勢100人を超える子どもたちと一緒に登場し正座で「礼!」。これに時間を浪してしまったのか、曲が終わる前にリングインするため秋山は花道半ばからダッシュ！ リングインは間に合ったが、はたしてボディチェックも間に合っていたのか……。


試合開始。相手の出方を見ながらローキックで様子を探る二人。桜庭のインローが秋山の金的に入ってしまい、一旦試合がストップするというアクシデントもあったが、問題なく再開。同じように、間合いを探る二人だったが、次の瞬間……！

　たとえば試合中の反則行為があったと感じたときに、レフェリーに抗議をするのは当然のことだ。しかし桜庭がタイムを要請した瞬間には、攻防は完全に途切れていなかった。「グローブがずれた」「ロープブローが入った」という主張ならともかく、単なる「タイム！」ではレフェリーも止められないだろう。試合翌日の会見で秋山が言った「試合中にタイムと言われて（レフェリーが止めてもいないのに）タイムする格闘家はいない」というセリフにはうなずくしかない。
　また、桜庭はパウンドを浴びながら、レフェリーの「アクション！」コールに反論している。あの場面でファイターがまずやるべきは、窮地を脱することだ。しっかりとガードポジションを取り、攻防の流れをいったん止めたあとであれば、レフェリーもその場で試合を中断し、秋山の身体をチェックしていたかもしれない。だが、桜庭はそうしなかった。あるいはできなかった。足関節を狙った場面はあったものの、桜庭が動いたのはそこだけ。あとは対戦相手である秋山よりも、レフェリーに意識を向けていたのである。
　秋山が仮にオイルを塗っていたとして、そのことに対する怒りで桜庭が我を忘れたと考えるのは不自然だろう。身体にオイルを塗るというのは、反則としては〝基本中の基本〟だ。あってはならないことなのだが、しかし絶対にありえないことではない。秋山の身体に何か違和感を感じたとして、桜庭はそれで我を忘れるような選手ではないはずだ。いや、なかったはずだ。
　UWFインターナショナルの新弟子時代から桜庭を知り、現在は彼のフィジカル・トレーナーを務める和田良覚氏は、秋山戦での桜庭の姿をこんなふうに語っている。
「僕は大会の審判団の一人でもあるので、試合に対する論評はできません。あの試合では、公平を期するためにレフェリー、ジャッジとして試合に直接タッチするのも避けさせてもらいましたし。ただ一言だけ言えるのは、これまで彼の試合を何十戦と見てきましたけど、サクがあんな行動に出たのは初めてだっていうことです」
　あんな行動、とはつまり、攻防の真っ最中にタイムを要求し、相手と向き合うことよりもレフェリーへの抗議を優先させたということだ。
　重要なのは、そのことだというのが、本誌の見解だ。秋山がオイルを塗っていたかどうかではなく、桜庭がいままでのような桜庭ではなかったこと、桜庭が〝闘い〟よりも〝抗議〟に意識を向けていたこと。それがこの試合の問題であり、哀しさだった。いままでなら乗り越えられていたことを、いまの桜庭は乗り越えられなくなっている。少なくとも、そう見える。
　秋山は入場時、曲のエンディングに合わせるため花道から走ってリングインしている。そのあいだにリング下でのボディチェックが行なわれたかどうかは、中継の映像では確認できない。柔道着を脱いだのはリ


桜庭戦に勝利したあと、秋山はセコンドについた清原和博や会場で観戦していた肉親らと記念撮影。この瞬間、もはや『Dynamite!!』のリングは秋山のための舞台と化していた。

ング中央でレフェリーから注意事項を聞き、桜庭と握手をかわしたあと、試合開始のゴングが鳴る直前である。試合後のボディチェックはされていたのだが、レフェリーが触っていたのは胸や背中の部分。オイルを塗っていたとしたら（タックル対策として）ヒザの裏や足首のはずだが、そこをチェックしていたかどうかを映像で見ることはできない（写真にあるように、実際には行なわれていたが）。そういう事柄を取り上げて、秋山に疑惑の目を向ける人間もいるだろう。あるいは、主催者側の管理体制の甘さを指摘することもできる。

だが、いかにルールを詳細に設定し、徹底した管理に努めても、必ずどこかに〝隙〟は生まれるものなのだ。UFCなどアメリカの大会ではアスレチック・コミッションのスタッフが控室や入場ゲートでも目を光らせているのだが、日本の大会にはそもそも総合格闘技を管轄するコミッション、試合を監視する第三者がいないのである。アクシデント、あるいは悪意を完全に防ぐことなど不可能だろう。これはK−1系イベントや秋山vs桜庭戦に限った話ではない。

「僕は試合をするとき、レフェリーも敵だってくらいの気持ちでやってましたよ」

以前、ある元キックボクサーがそう語っていたことがある。レフェリーを信頼しなければ試合などできないが、レフェリーに甘えるのは禁物だ。まして秋山vs桜庭戦は〝秋山目線〟の試合。桜庭が絶対的な主役である『PRIDE』のリングではなかった。いくら公正な運営が心がけられていようと、そこは桜庭にとって敵地といってもいい戦場だったはずだ。いや、敵地であろうとなかろうと、選手は自分の力で身を守らなくてはいけない。頼れるのは自分だけ。それが格闘技の絶対的な原則なのだ。

秋山vs桜庭戦は“秋山目線”の試合。桜庭



桜庭の猛抗議を受け、レフェリーは試合後に秋山の身体をチェック。秋山は道衣を着ていたのだが、写真をご覧のとおりレフェリーは裾の部分をまくり上げて、ワセリンなどが塗られていないかを再度確認している。



だが、桜庭の抗議虚しく試合が中断されることはなかった。殴られ続ける桜庭が危険だと判断し、リングサイドの協議によりここで試合終了のゴング。秋山のTKO勝ちがコールされたのだが、桜庭はこの表情で「滑るよ!」と激怒。



秋山の左フック、バックブローが次々と顔面にヒットし、態勢を崩す桜庭。秋山は桜庭を抑え込み、パウンドを落とす。しかし、マットに沈みながらも桜庭は「滑る!　滑る!」と、レフェリーに向かってしきりにアピール。

場内が一瞬〝え?〟となったストップのタイミング、レフェリーのコールよりも先にゴングが鳴ったのはルールどおりだった。もちろん試合を最も間近で見ているレフェリーにすべての権限が委ねられていないという状況は、常識的に考えれば疑問符がつく。ただそれは、8月の『HERO'S』で行なわれた桜庭vsケスタティス・スミルノヴァス戦の〝ストップ問題〟を受けて決定したルールであり、競技と興行の狭間に生まれた〝ひずみ〟のようなものだろう。そして現在の桜庭は、その〝ひずみ〟を支えきれなくなっている。

かつての桜庭は〝ひずみ〟を乗り越える達人だった。ホイス戦を思い出してほしい。トーナメントの中で一試合だけ15分無制限ラウンドの特別ルールが採用されるというのは、まさに競技と興行の〝ひずみ〟としか言いようがなかった。しかし桜庭はそれを見事にクリアし、90分にわたる名勝負をやってのけたのだ。〝なんでもあり〟〝なんでもあり〟という過酷な状況を逆手に取り、〝なんでもあり〟を楽しい状況にしてしまうファンタジスタが桜庭だった。だが、いまの桜庭は〝なんでもあり〟の過酷さをまともに浴び、競技と興行のひずみに押し潰されているように見える。

フィジカル・トレーナーの立場から、和田氏はいまの桜庭のコンディションを「壊れているのが前提」だと言う。

「年齢も年齢ですし、あれだけの強者と闘ってきたキャリアがあるわけですからね。正直、サクの身体はボロボロですよ。打撃を食らって蓄積したダメージもあるから、いままでなら踏んばれていたようなパンチで崩れてしまうこともある。反応だって、明らかに前よりは悪くなってます。それはね、加齢とともにどんなファイターにも訪れることなんですよ。

だからね、僕とサクのトレーニングのテーマは〝壊れているのを前提に、そこから何ができるか〟なんです。もう若くはない。しかも年々、ダメージもあって、もう若くはない。しかも年々、総合格闘技のレベルは上がっている。若くて勢いのある選手がどんどん出てくる。そういう中で、いまのサクにできることは何かを追求していこうよ、と。

これからのサクは、若い頃とすべて同じってわけにはいかないでしょう。ファイトスタイルをガラッと変えることはできないけど、シフトチェンジは必要。サクならそれができると思うし、やらなきゃいけないでしょうね。久々に肌を合わせてみて感じたんですけど、サクは相変わらずパワーと強い。あの身体からは想像できないくらいテクニックがあるし、ムチャクチャ極めがですよ。そういうよさを活かすためにも、これからは治せるケガは治して、フィジカルをもっと強化しなきゃいけない。サク自身もね、そのことはしっかり受け止めてますよ。もう若くない、ケガだらけの自分が何をすべきかってことを。フィジカル・トレーニングなんて大嫌いだったサクが、今回は本当に真剣にやってましたから。その効果は徐々に出てきてますし、これからはもっと出るでしょうね」

桜庭は、かつてのような〝バーリ・トゥードのファンタジスタ〟ではない。桜庭自身も、それに彼が置かれた状況も、あらゆる面が『PRIDE』時代とは違っているのだ。だから我々も〝桜庭和志の見方〟を変えていく必要があるだろう。〝あのときのような桜庭〟を求めるのではなく、〝これからの桜庭〟をどう捉えていくか。秋山戦は、そのきっかけとしてのショック療法になるはずだ。

FieLDS K-1 PREMIUM 2006 Dynamite!!
12.31 in 京セラドーム大阪

桜庭vs秋山、衝撃の結末!!

ファンはこの現実をどう受け止めたのか!?

大晦日“オイルショック”騒動を Do The Judge!!

携帯サイト『kamipro Hand』で緊急アンケート実施!!



いったい何が起きたのか? 大晦日『Dynamite!!』のメインイベント、桜庭vs秋山戦のスッキリしないエンディング。ファンは何をどう感じたのか? オイル疑惑がささやかれた大会直後から翌々日まで携帯サイト『kamipro Hand』で緊急アンケートを実施!!

構成/上杉真犯人
撮影/乾晋也

議論百出! 桜庭の“オイルショック騒動”に対して、『kamipro Hand』に寄せられた声は数えきれず。正月の、のんびりしたムードの中、携帯アンケートに意見を打ち込まずにはいられぬほど、試合を観た人にとって消化しにくい結末だったと言える。テレビだけでは事件の全貌が見えづらかったことで、大会運営サイドに対する不満の声が上がる一方で、スミルノヴァス戦に続く衝撃から桜庭の今後に不安を抱く者も多かった。

●ルール確認後に道衣を脱いだら、ボディチェックの意味ないじゃん。

●桜庭は今日、とうとう完全に役割を終えた。ホイスの花束が印象的だった。

●前年のKIDvs元気は早すぎるし、早く止めるのか、ギリギリまで引っ張るのかはっきりしてくれ!

●桜庭の「滑る」と抗議した姿を見たくなかった。

●秋山完勝だったのに、なんであんなマイクやるの? まあ、このリングの主役は格闘家以外ってことでしょう。

●桜庭和志よ、どこへ向かう。

●柔道時代から言われたヌルヌル疑惑がついに公に! 凄いぞ秋山さん!

●メインは桜庭選手の使い方がますます難しくなったと思った。

●MVPは桜庭和志です! 負けていません!

●桜庭が噛ませ犬になってしまい、寂しいです。

●メインがあの結末で非常に後味が悪かったです。桜庭にも秋山にもレフェリーにもガッカリです。真相をハッキリさせてほしいです。

●『HERO'S』転出で逆にシビアな現実に晒された桜庭。移籍は間違いだったのかな……。

●桜庭の敗北は非常に後味が悪かった。絶対に勝利すると思ってただけに……。

●サクの試合はタイムの声が聞こえていただけに、レフェリーの対応が残念だった。

●「凄い滑るよ!」。秋山も大会も……。

●桜庭が残念。レフェリーが試合を止めてでもチェックすべき。

●それにしてもサクの試合は切なすぎる。

●桜庭は、もう誰にも勝てないと思う。

●桜庭「滑るよ! なんか塗ってるよ!」。なんともプロレス的な出来事が起きたもんだ。やはりドラマは作るものじゃなく、自然と起きるものなんだなぁ。

●桜庭選手が負けて、新しい時代が来たと思いました。秋山選手は2007年の『HERO'S』の王者として頑張って、来年はぜひ海外進出してください。

●今回は顔見せ的なカードばかりだったので、他にも桜庭vs秋山のようなスリルあるカードで勝負してほしい。

●ヌルヌルは秋山の武器なので対処しきれなかった方(選手だけではなく)が悪いと思う。

●秋山成勲は強すぎる! あとはマッチメイクに難あり!!

●後味が悪い。あそこまでサクが興奮するのは異様。秋山の入場には寒気がした。試合後のマイクはいい加減バカらしくて見てられない。

●相手が「タイム」と言っても、秋山の言う通り、レフェリーが止めない限り、試合は止められない。

●桜庭がかわいそうなので、『PRIDE』に戻ってきてほしいです。

●桜庭vs秋山のレフェリー。リアル・ミスターフレッドかよ! 観客と選手をマジにさせたからMVP!

●これから、どーすんのサク? それ以外興味なし。

●サクのことを考えると、とても落ち着いた正月など過ごせません。

●番組構成滑りすぎ。サダハルンバのマッチメイクも滑りすぎ。とにかく、何か滑るよ! なイベントでした。

(ほか、多数)

Q1. 今大会のベストバウトは?

1位は、「グレイシーからサイドポジションを奪うだけでも凄いことなんですよ～」という谷川さんの解説が耳に残った所vsホイラー。また本誌イチオシだった巨人対決は堂々の2位に。同じくモンスター路線では、オープニングマッチにも関わらずキムの試合がトップ5にランクイン!　波紋を呼んだ秋山vs桜庭にも票が集まった。



まさにベストバウト製造マシーン
大舞台では常に実力以上を発揮!!

1st 188票

○所英男 [3R 判定3-0]
ホイラー・グレイシー×

前年の『Dynamite!!』でホイスと好試合を展開した所がその名勝負製造機っぷりをまたしても発揮! 下からの寝技で勝負を挑むと十字の体勢に。さらにスタンドでも至近距離からの跳びヒザをヒットさせるとストレートで追撃。大舞台になると、普段以上の力を出すいやらしさを持つ所が判定で完勝。しかしその判定を憮然とした表情で聞いていたホイスは「自分がジャッジだったらドローにする」とコメント。

2nd 124票

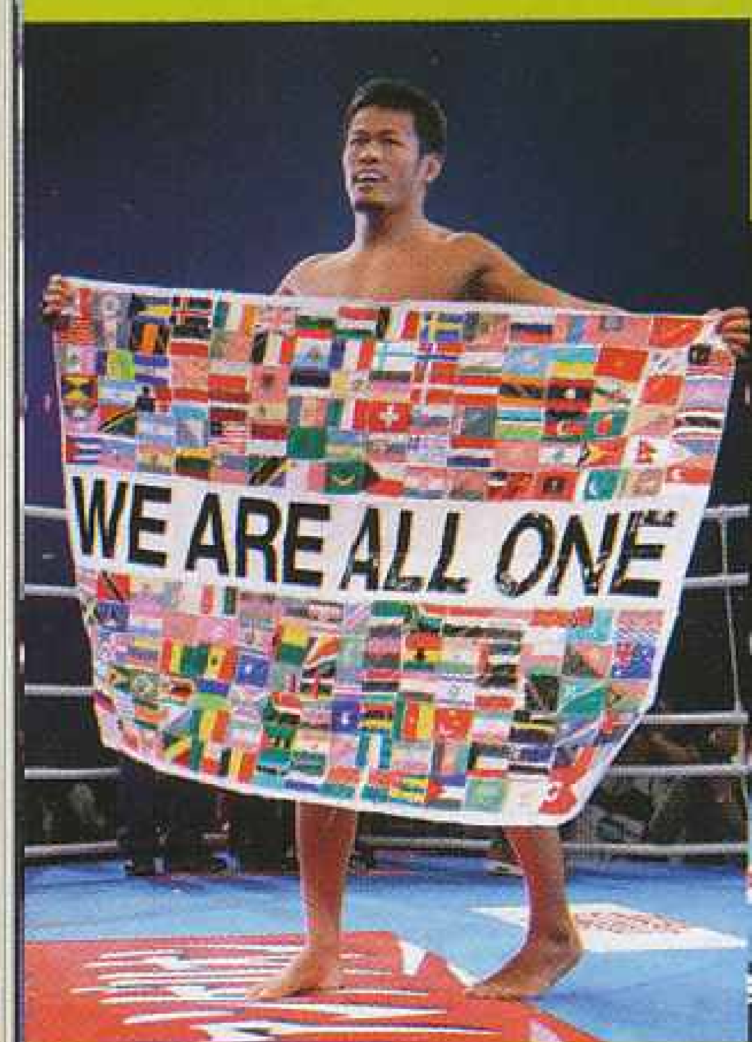
○ジャイアント・シルバ [1R 1:02 ジャイアント・アームロック] 曙×

3rd 104票

○秋山成勲 [1R 5:37 TKO] 桜庭和志×

4th 95票

○須藤元気 [1R 3:05 三角絞め] ジャクソン・ページ×





神の啓示を受けた元気
中南米でバックパッカーに

首のヘルニアで戦線離脱気味の元気が〝重大な決意〟を抱えてリングイン。突進したジャクソンがテイクダウンからパウンドを見舞うと、元気は下から三角絞めに捕らえてアッサリと一本。元気は噂されていたとおり、「今日でリングの上での闘いを終わりにします。素晴らしい格闘技人生でした。すべては一つです」と引退表明。今年からは中田ヒデばりに世界を放浪することを宣言。

5th 48票

○内藤征弥 [3R 1:11 パウンド] キム・ドンウック×

6th 44票

○魔裟斗 [2R 2:22 KO] 鈴木悟×



試合前に「蹴り倒す」と宣言した魔裟斗が、その言葉どおり、ローキックをガードの上から叩き込み、鈴木の脚を破壊。試合後、細木数子から「おめでと」と電話で祝福されたことを報道陣に明かした。

7th 28票

○金泰泳 [1R 2:48 KO]
石澤常光×

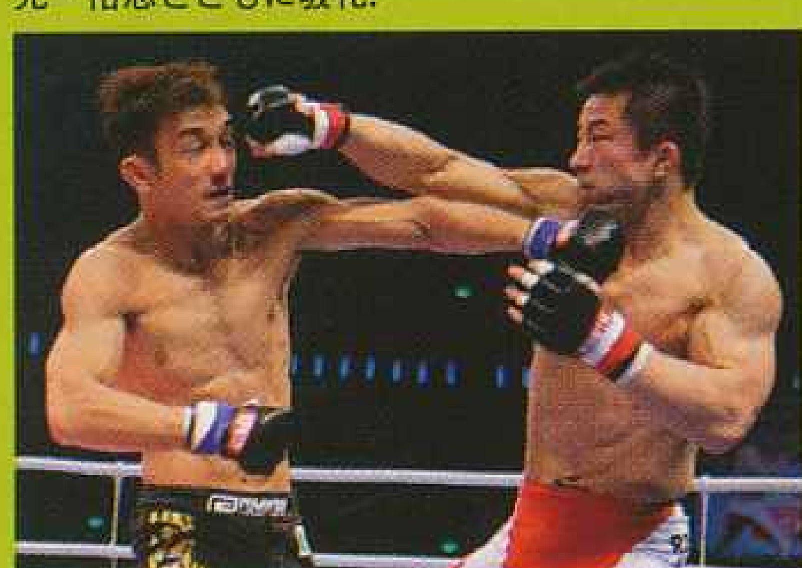
煽り映像で、初めてケンドー・カシンのマスクを脱いだかのように紹介された石澤。金は目でフェイントをかけておいてハイキック一閃!　鮮やかなKO勝利を飾った。



8th 25票

○永田克彦 [1R 4:12 TKO]
勝村周一朗×

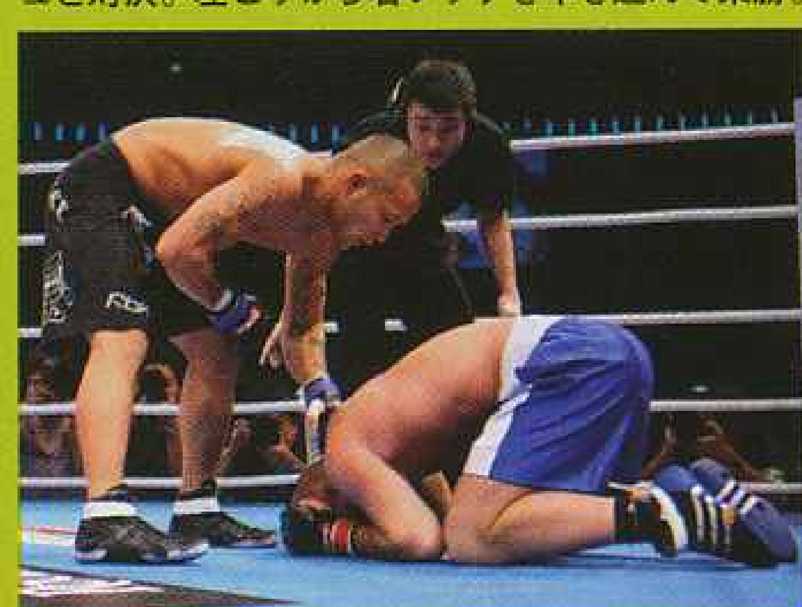
地上波初登場となった勝村が体格で上回る永田をトリッキーな動きで攪乱。しかし永田はカウンターの右フックからパウンド連打。勝利した永田は、兄・裕志とともに敬礼!



9th 10票

○山本KID徳郁 [1R 3:46 KO]
イストバン・マヨルシュ×

シドニー五輪を目指していたはずのKIDが電撃総合復帰。本来は階級が下の金メダリスト、マヨルシュと対決。左ヒザから右フックを叩き込んで楽勝。



10th 6票

○チェ・ホンマン [1R 0:16 KO]
ボビー・オロゴン×

11th 5票

○バダ・ハリ [2R 1:28 TKO]
ニコラス・ペタス×

他の格闘イベントへの出場も噂されていたペタスが、K－1復帰。しかしバダ・ハリのフックが左腕に当たると苦悶の表情。〝悪童〟らしく負傷個所を攻めたバダ・ハリがTKO勝ち。



Q2. 今大会のMVPは?

1位　該当者なし
2位　所英男　3位　須藤元気
4位　秋山成勲　5位　桜庭和志

MVPの最多投票は、なんと該当者なし!　メインの後味の悪さが影響したか?　ベストバウトを獲った所が2位に。膠着しがちなホイラー相手に、試合を動かし続けたのはお見事!!

12th 2票

○アンディ・オロゴン [3R 判定3-0] 金子賢×

「負ければ引退」と煽られた金子だがローをもらって判定負け。試合後「自分は芸能人だからプロとやらせてもらっているけど、マスコミに叩かれるのは好きじゃない。ほかに仕事があればやりたいし、これからの生活もどうしていいのかわからない」と胸中を激白。



マスコミに叩かれるのは好きじゃない
これからの生活も
どうしていいかわからない……

13th 1票

○武蔵 [3R 0:33 KO]
ランディ・キム×

14th 0票

○セーム・シュルト [3R 判定3-0]
ピーター・グラハム×

K－1GP覇者にもかかわらず、出場発表が前日になるなど人気がまったくないことがあらためて強調されたシュルト。この試合への投票数もゼロ。やはり牛と闘うしかない!



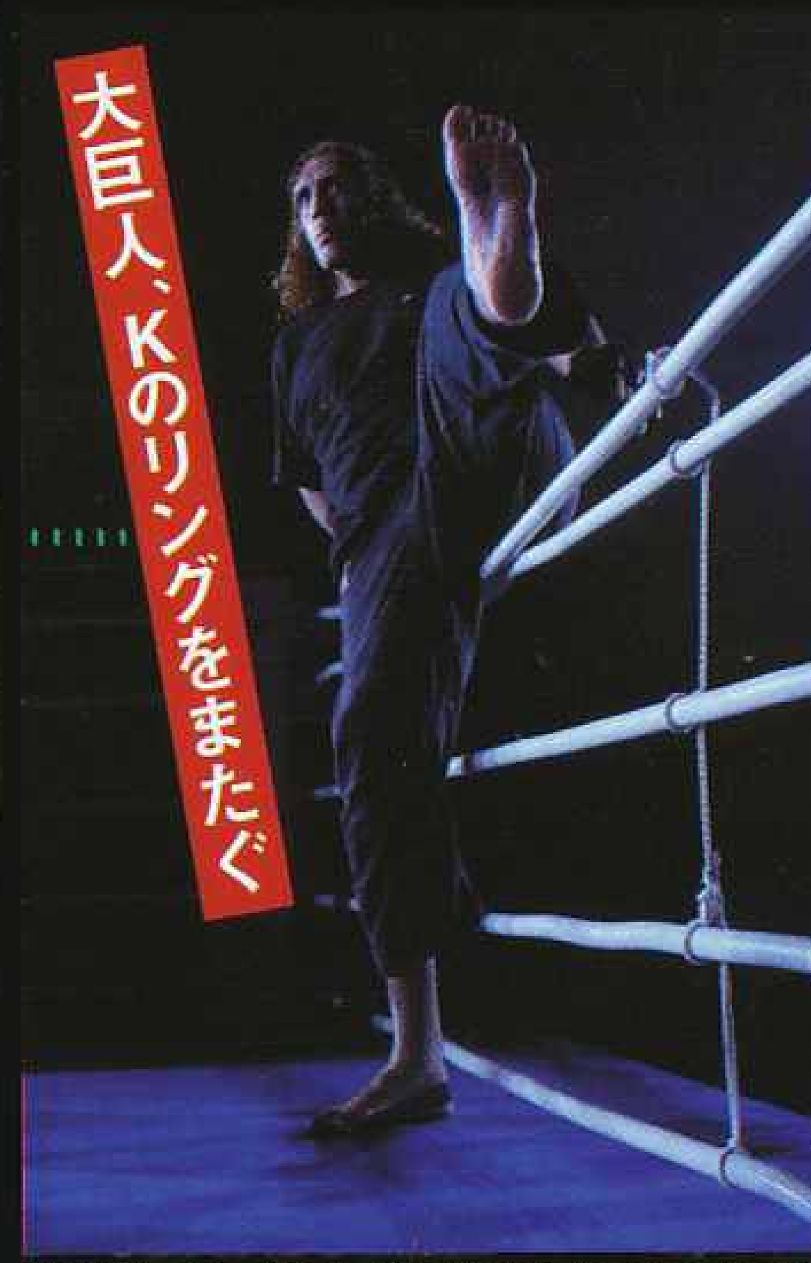
K-1のKは“怪物(モンスター)”のK

谷川モンスター軍『Dynamite!!』で大爆発!!

VIVA! モンスター写真館

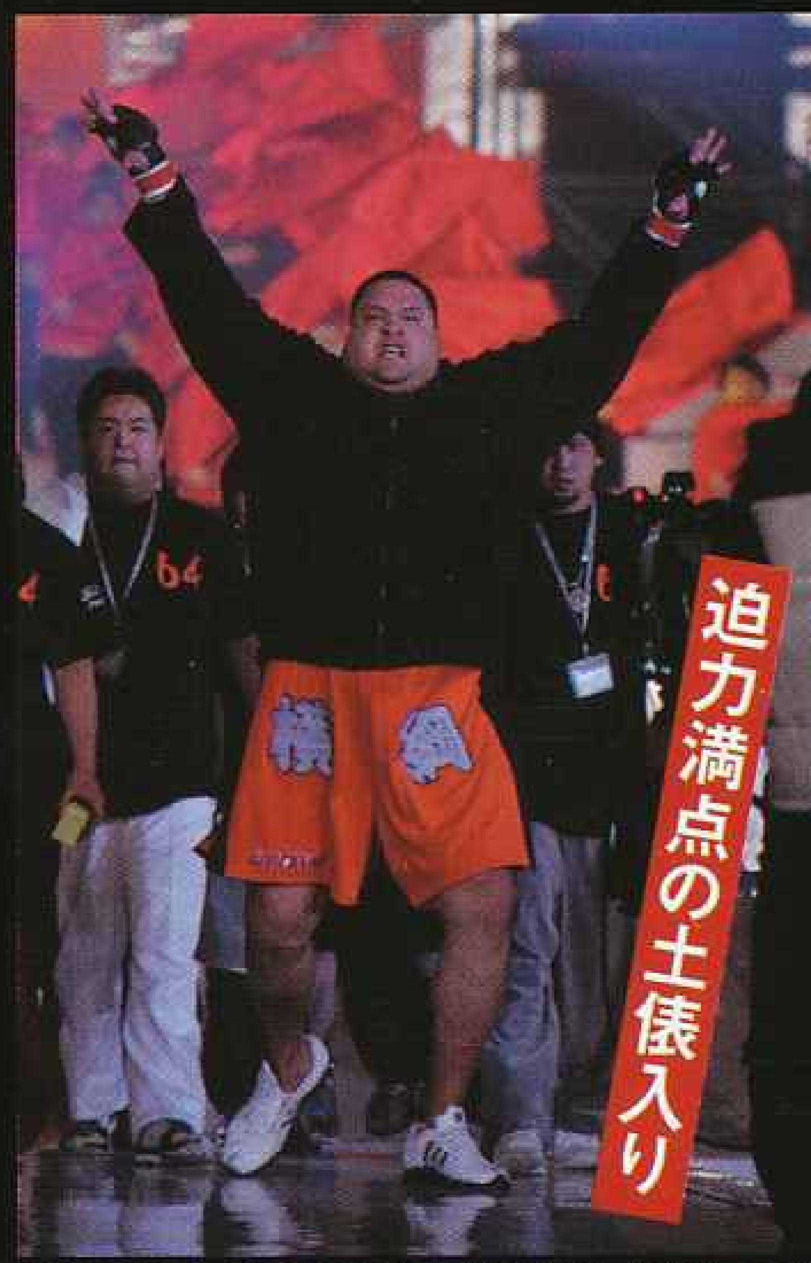
12・31『Dynamite!!』で異彩を放っていたモンスターたち。試合自体は短時間に終わってしまい、谷川P自身もしきりに悔やんでいた。たしかに視聴率には貢献できなかったかもしれないが、むしろ観れば観るほど味わい深い。「谷川モンスター軍の魅力は本誌が伝えるしかない!」と大きなお世話でお届けするのがモンスター写真館だ。ん～、ダイナマイッ!

構成／坂井ノブ　撮影／乾晋也



大巨人、Kのリングをまたぐ

高田モンスター軍の巨神兵が突然、Kのリングにやってきた! これも髙田総統の差し金なのか?



迫力満点の土俵入り

最愛の母の死を乗り越えて曙が大晦日に帰ってきた! 雄たけびをあげて気合満点! さあ、試合だ!



流した汗は嘘をつかない――

[Dynamite!! 第4試合]

○ジャイアント・シルバ vs 曙×

(1R 1分02秒 ジャイアント・アームロック)

あっという間の決着に、誰もが呆然。誰よりも悔しい思いをしたのは谷川P……ではなくて、曙本人だろう。胸と腹のあいだを伝う一筋の汗がとても切ない。



ラップしながら登場のチェ・ホンマン(ダンスが得意)。世界最大のラッパー誕生だ。これでヒップホップの四大要素(ラップ、ダンス、DJ、グラフィティ)のうち二つは制したことになるのだが、流れていた曲はわりと普通の歌謡曲だったことにも注目しておきたい。

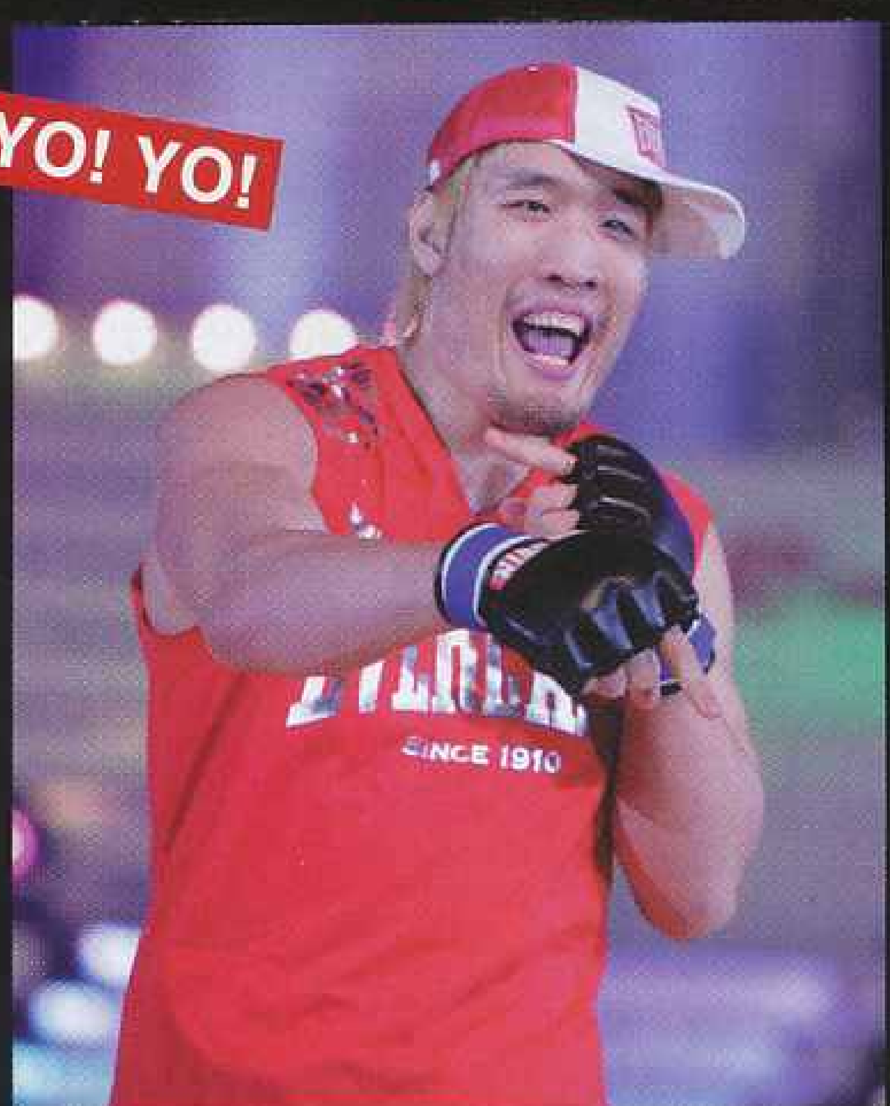


闘う男の横顔はかくも美しい。曙はプロレスと格闘技から遠ざかり、約半年の充電期間に入る。プリーズ・カムバック、曙!

完全図解 これが必殺 ジャイアント・アームロックだ!!



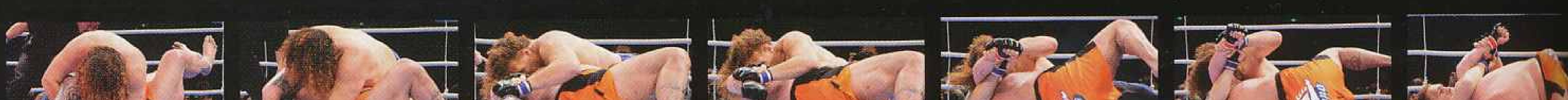




普通の格好になってもこんなにセクシー。手の動きがいやらしすぎる！ じつに男前だ。



帯同した女性ダンサーが曲の途中でチェ・ホンマンの衣装を剥ぎ取る。中から出てきたのは『紅白歌合戦』でＤＪ ＯＺＭＡのバックで踊っていたダンサーのような全裸ボディスーツ……ではなかったのでひと安心。



高田モンスター軍の巨神兵が谷川モンスター軍のエース格を粉砕！ これもジャイシルのたゆまぬトレーニング、並外れた体格とパワー、そして高田総統のビターン!効果の賜物であろう。この日のフィニッシュは、かつて戦闘竜に対して極めたのと同じ、下からのジャイアント・アームロック！ ちなみに、ジャイシルが2006年に闘った相手はカイヤ、美濃輪、そして曙だったことにも注目しておきたい。









突っ込んでいったボビーに二階の高さからパンチを叩き込むチェ・ホンマン。強さは際立っていた。

この闘いが終わったら2006年ももう終わっていい……



［Dynamite!!　第10試合］

○チェ・ホンマン vs
ボビー・オロゴン×

（1R 0分16秒 TKO）

アジアの大きい人vsアフリカのおもしろい人。この異次元グローバル感覚こそ『Dynamite!!』の魅力だと言える。この身長差も試合のスパイスでしかない。谷川モンスター軍の懐はじつに深い。



内藤のパンチがわき腹に文字どおりめり込んだ。通常の選手ならこれでダメージを受けるのは必至だが、すべてが吸収されてしまいそうだ。



ライターの橋本宗洋氏と瓜二つという噂の〝シルム（韓国相撲）三兄弟〟の一人、キム・ドンウックが日本初上陸！　次世代を担う谷川モンスター軍の希望の星だ！



心なしか試合前よりも身体が大きくなっているように見えるのは錯覚だろうか？

［Dynamite!!　オープニングファイト］

○内藤征弥 vs キム・ドンウック×

（3R 1分11秒 タップアウト）

体重差を気にせずパンチを打っていく内藤。キムもド迫力のパンチで応戦する。当たれば百発百中のパンチを持つキムの豪腕がうなる！

K-1のKは"怪物（モンスター）"のK

彼らが世界の格闘史を塗り替える日も近い！

谷川モンスター軍とは、谷川貞治イベントプロデューサー就任以降、（『HERO'S』や『Dynamite!!』も含めた）Kのリングで暴れまくる愛すべきモンスターたちのことを指す（この定義でいくとセーム・シュルトは谷川モンスター軍には含まれない）。ジャイシルが視聴率を「持っている」という事実からもわかるように、テレビの向こう側に広がる世界は異形のモンスターを待ち望んでいるし、そんな彼らはK-1の持つダイナミズムのある側面を確実に体現している。1月2日の記者会見ではDSE榊原代表も「モンスターGP」の開催をブチ上げるなど、日本格闘技界の風向きがモンスター方面に変わりつつある。彼らの闘いが今後の日本マット界を盛り上げていく重要な鍵を握っているのだ。　（坂井ノブ）



［Dynamite!!　第6試合］

○武蔵 vs ランディ・キム×

（3R 0分33秒 KO）

砲丸投げ韓国記録保持者にして2002年アジア大会優勝のランディ・キムが初参戦！　ストレートパンチの威力はかなりのものだが、試合巧者の武蔵攻略はならず。次戦に期待！

テレビのためのスペシャルゲストから
観客だけのお楽しみネタまで

やや 全部見せます!
2006年Dynamite!!のオモテとウラ



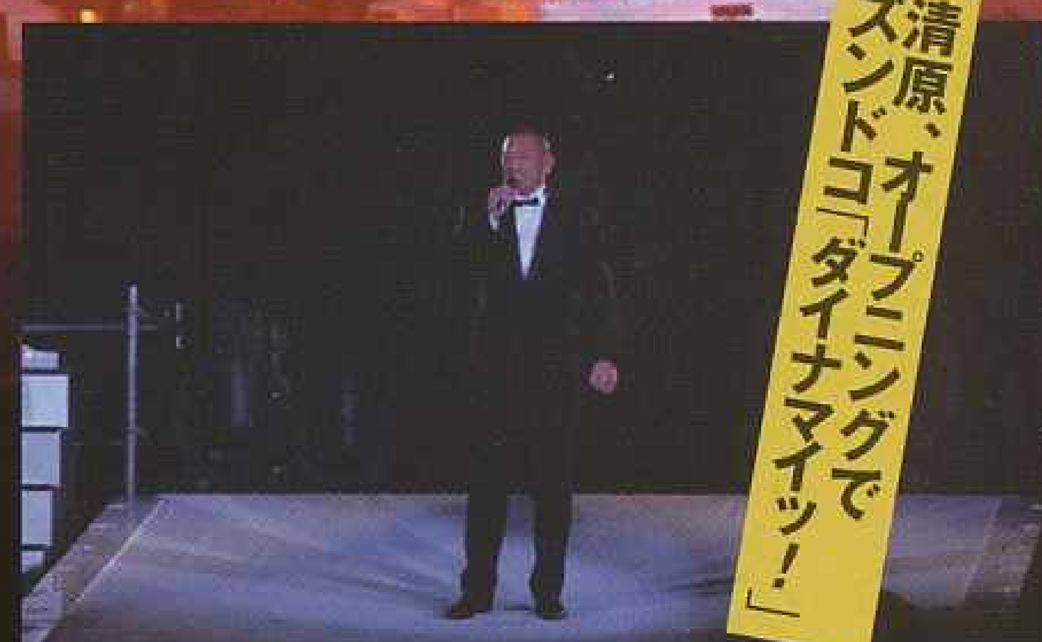
構成／松下ミワ　撮影／乾晋也



今回、ボビーのスペシャルサポーターとして解説席に座った押切もえ。大巨人チェ・ホンマンに壮絶な敗戦を喫したボビーをリングサイドで直視してしまい、なんと号泣! 押切もえの『Dynamite!!』に“笑い”の二文字はない。



『Dynamite!!』のメインキャスターを務めた井上和香。TBSの番組サイトでは『井上和香の格闘技百科事典』なる格闘技講座も行なっている物知りさんなだけあって、解説席でも堂々とコメント。打倒・紀香の構図も視界に入ってきたか。



オープニングに登場した“番長”清原。マイク片手に「格闘技史上!」と叫んだものの、あとのセリフを忘れてしまい「あれ?」と照れ笑い。しかし最後は無事に「ダイナマイッ!」と叫び、会場もスタッフも一安心。滑ったわけじゃないですし。

ジャン斉藤（本誌編集統括本部長）　いやあ、橋本さん、『Dynamite!!』の大阪出張、お疲れさまでした。

橋本宗洋（日本最重量級ライター）　ホント、疲れたよ！『kamipro』編集部が相変わらずテキトーだったからっ‼

ジャン　あらら。新年早々、おだやかじゃないですねえ。いったい何があったんですか？

橋本　あったも何も、指定された朝8時の新幹線に乗ったら、同行するはずの編集部員（松下ミワ、上杉真犯人）がいなくてさ。のんきにあとからやってきたんだよ。「あの新幹線じゃなくてもよかったんですよ」って感じで。担当として問題あるだろ！

ジャン　それは困ったもんですねえ(他人事)。

橋本　編集長ならなんとかしろよ！　だいたいさ、松下はキミから「ジャイ・シルの取材だけは絶対に取れ‼」という命令しか受けてないそうだけど、もっと指令すべきことはたくさんあるでしょ（笑）。

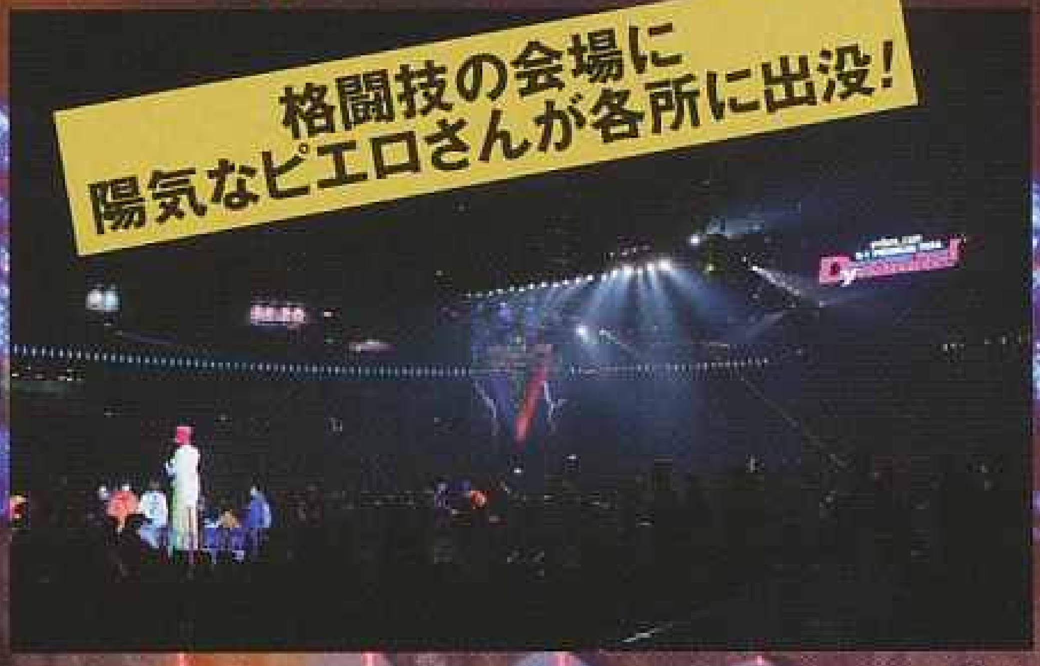
ジャン　ほかに何があるんですか‼　……と、言いたいところですけど、起きちゃいましたね、〝オイルショック騒動〟。ネットなんかでは〝K－1公式HPですぐ消されたという桜庭の試合後コメント〟として偽造された文書が飛び交う騒ぎにもなっているし。あれ、サクというか、ターザン山本！のポエムにしか読めないんですけど。

橋本　とにかく〝火に油を注ぐ〟騒ぎになってるよね。

ジャン　まあ、速報号の締切の都合で、この件に関しては22日発売の本誌1月号で徹底的にやります！　それで、ここでは「テレビでは見えない『Dynamite!!』」というテーマで、現地取材班の橋本さんからいろいろ聞かせていただこうかな、と。

橋本　とにかく不思議なことだらけだったよ、『Dynamite!!』は。ピエロがいる

格闘技会場なんて、そうそうないじゃん。
ジャン　ピ、ピエロ？　それって体重200キロくらいある人のことですか？
橋本　比喩としての〝道化〟じゃなくて！　客入れの時間帯に、むやみに高いクツを履いてジャグリングを披露したりしてるんだよね。要は、ファミリー向けというか、お客さんを楽しませようという意味の演出なんだろうけど。あと休憩中なんて、気づいたらなんの説明もなくいきなりステージ上で総勢何十ペアの社交ダンスが繰り広げられてるんだよ！
ジャン　なぜ社交ダンス……。
橋本　まあ、現実的に考えると、テレビ番組の社交ダンス企画で優勝した角田（信朗）さん絡みの演出なのかなって。もしかしたら角田さんも一緒に踊ってるんじゃないかなと思って、目を皿のようにして探したけど、ちょっといなかったみたいだね。
ジャン　競技統括プロデューサーの役割を顧みずに踊っていたら、それこそ「よっ！　角田!!」って声をかけたくなりますけどね。
橋本　あとさ、これはテレビでも流れてたけど、須藤元気の試合を峰竜太がリングコールしてるんだよね。非常にK－1らしい発想だけど、あの元気の引退試合に峰竜太って……。
ジャン　どうやら二人はジム仲間。もしかしたら須藤元気は石原軍団入りして、いずれは炊き出しに参加する姿を見られる日がくるんじゃないか、と。



まだ客入りが少ないオープニングファイト前、アリーナの通路やスタンドの各所でジャグリングを披露するピエロたち。中にはパフォーマンスに無反応な客に向かって「お客さん少ないけど、そこ盛り上がってよ」と普通に暴言を吐くピエロも。



マヤ文明をモチーフにした須藤元気の入場シーンに会場のファンは大喜び！　しかし、関係者通路付近のお客さんは、所英男が元気の引退試合を見届けにアリーナに出没すると、試合そっちのけでケータイで激写。……複雑な心境である。



リアルタイガーマスク・勝村に怒濤のパウンドで勝利し、『Dynamite!!』二連覇をはたした永田克彦。この日、セコンドについていた我らが永田さんも、弟の大勝利に大喜び。2006年ラストの敬礼ポーズを、堂々と地上波で披露したのだった。



2000年5月1日、『PRIDE GP』で桜庭和志と90分の死闘を繰り広げたホイス・グレイシーが秋山vs桜庭の試合前、双方に花束を贈呈。桜庭の闘いを間近で観ていたホイスは、今回の試合をどんな思いで観ていたのだろうか……。



この日、前田日明が唯一リングインしたのが、シュルトへのトロフィー授与のシーン。有名人が多数出没する『Dynamite!!』に日明兄さんの出番も少なくなってしまったが……。それにしてもこの写真、シュルトのデカさがちっとも際立たない！



この日は解説も船木誠勝、宇野薫、畑山隆則と気合いの布陣。砲丸投げ出身のランディ・キムに「砲丸投げは右ストレートと同じ軌道ですから」と当たり前のようにコメントする畑山の名解説など、聞き逃せないコメントも飛び出した。



須藤元気の引退試合のリングコールを峰竜太が登場。解説席で峰は「元気選手とは同じジム仲間なんで」と元気との接点を語っていたが、元気は石原軍団入りするのではないかという説も一部（編集部のみ）で沸き起こっている。

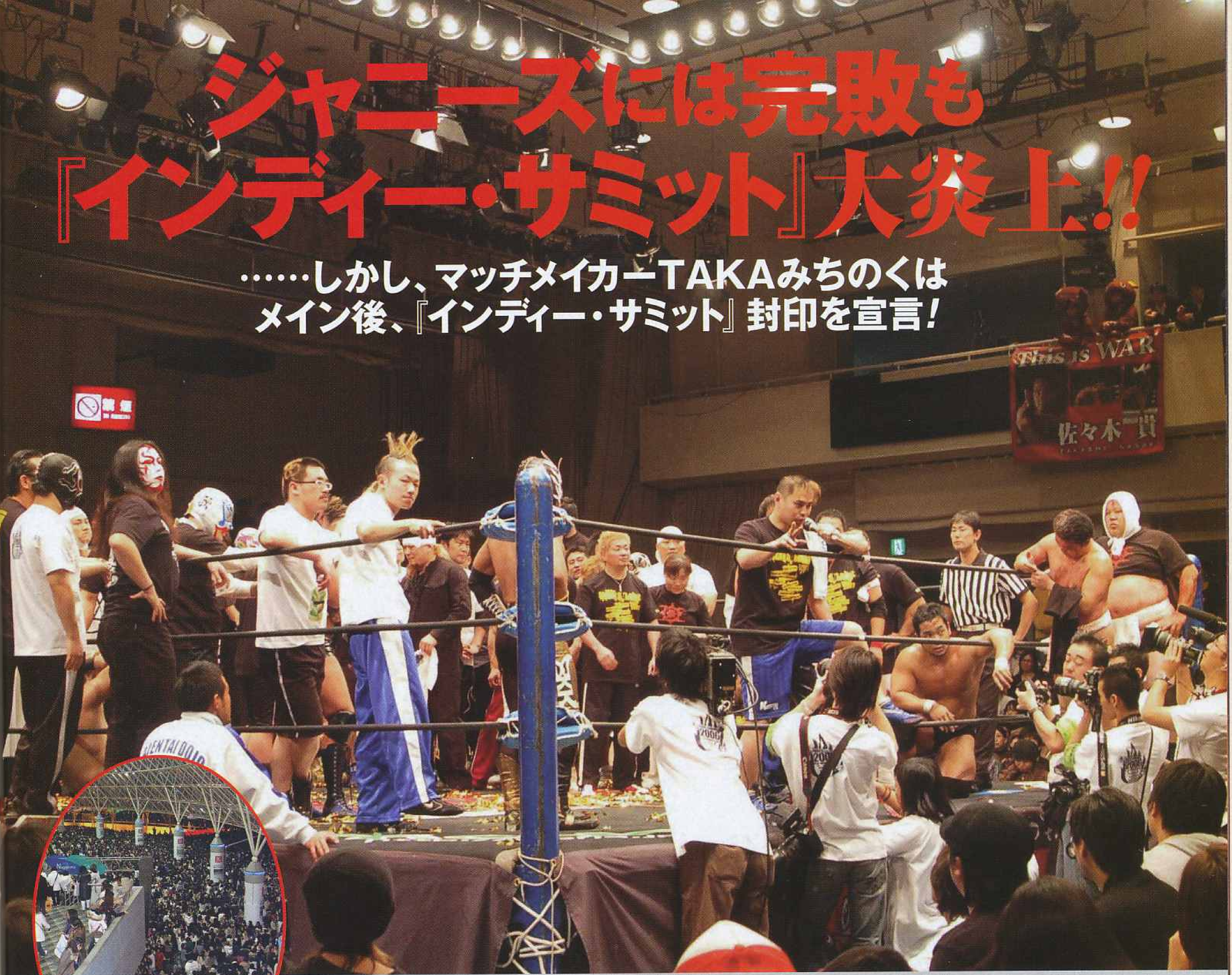


KIDのリングコールを務めたのは、TBSドラマ『花より男子』で財閥の御曹司役を演じる小栗旬。地上波では番組CMもバンバン流れ、まさにテレビ的な演出となったのだが、会場では人物確認がなかなかできず、若干残念な反応に……。

橋本　で、テレビに映ってない話に戻すと、パンフのキャッチフレーズも凄い。たとえば金子賢は、なんと「俳優を超えた格闘家」ですよ！
ジャン　おお、言葉の意味はわからないが、とにかく凄い自信だ！（キン肉マンの脇役調）。
橋本　ジャイアント・シルバのキャッチフレーズは「ジャイアント相撲キラー」。まあ、かつて戦闘竜を下したファイターだけどさ（笑）。そんな中でも、一番健在ぶりを見させていただいたのは谷川さんかな。秋山vs桜庭があぁいう騒ぎになったじゃない。でも、試合終了後の大会総括の第一声は「やっぱり曙選手とボビー選手の試合がもうちょっと長かったら視聴率もいけたと思うんですけど」なんだよ！（笑）。
ジャン　んあ～!!　さすがですね、谷川さんは。よっ！　サダハルンバ!!
橋本　「桜庭選手の件なんですが……」じゃないんだもん。そこは幻想を守りましたよ、いろいろな意味で（笑）。
ジャン　テレビ至上主義ですねぇ……。『Dynamite!!』番組終了後に流れた『カウントダウンTV』の煽りコーナーもそんな感じでしたし。
橋本　ん？　なんかあったの？
ジャン　本当に凄かったんですよ！　サクがボコボコにやられたリプレイ映像の直後に、番組司会の恵俊彰とベッキーが「いや～、秋山さん強かったね～」「強かったですね～」「桜庭もまだ納得してなかったね～」「ちょっとなんかね～」「でもこっちもまだ負けてませんよ～！」というライトなやりとりをしてて！
橋本　……あんな大事件さえ、あっという間にテレビに消費されてるんだ。良くも悪くも『Dynamite!!』はテレビのものってことだねぇ。

ジャニーズには完敗も『インディー・サミット』大炎上!!

……しかし、マッチメイカーTAKAみちのくはメイン後、『インディー・サミット』封印を宣言!



マジだぜ!　5万人を超える熱狂的ファンが水道橋に集結!!



カウントダウン後には全選手での記念撮影。さすがに52選手が出場した今大会、かなりの数の選手が見切れてます。まあ、しゃあないな、と。



2007年まで残り3分でようやくメインが終了。あわててリングインしたTAKAの音頭でカウントダウン＆モチまきが行なわれ新年を祝った。



年明け後、メインで真霜に敗れた関本が「今年はあまり闘えなかったけど、来年は……」とアピールすると場内からは一斉にツッコミ。



冗談抜きでマジで凄かったこの日の水道橋周辺。東京ドームでのジャニーズカウントダウンイベントを目指す女の子（＆婦人）の行列は隣の飯田橋駅までズラリ!

他のページで、たっぷりと紹介されていますが、やはり『kami-pro』読者にとっての大晦日といえば、『PRIDE男祭り』や『Dynamite!!』が定番イベントでしょう。

しかし、昨年はプロレス界も大晦日決戦に殴り込みをかけていたんです。知らない人のために説明しておくと、プロレス界の活性化を目指し、2005年12月に第1回大会を行ない成功を収めた『インディー・サミット』が第2回大会を大晦日の後楽園ホールで開催したのです。

さまざまなインディー団体から、この大会に出場したのは、なんと総勢52名!「いったいギャラはいくらなんだ!?」と余計な心配もしてしまいましたが、当日は「『男祭り』や『Dynamite!!』より、やっぱプロレスっしょ」という見るからに濃いファンが後楽園に集結しました。前売りチケットは早くからソールドアウト、わずかな当日券を求め、水道橋には行列ができていたのです。これ、ホント!

水道橋の駅を降り、目に飛びこんできたのが「チケット譲ってください!」というお手製のプラカードをこしらえた女の子の姿。それも4～5人ではききません。しかも、後楽園ホールが入るビルの横には終わりが見えないほどの大行列!「プロレス界の活性化、大成功!バンザ～イ!　バンザ～イ!!」と、両手を天高く突き上げそうになったのですが、ボクもそんな、おっちょこちょいではありません。

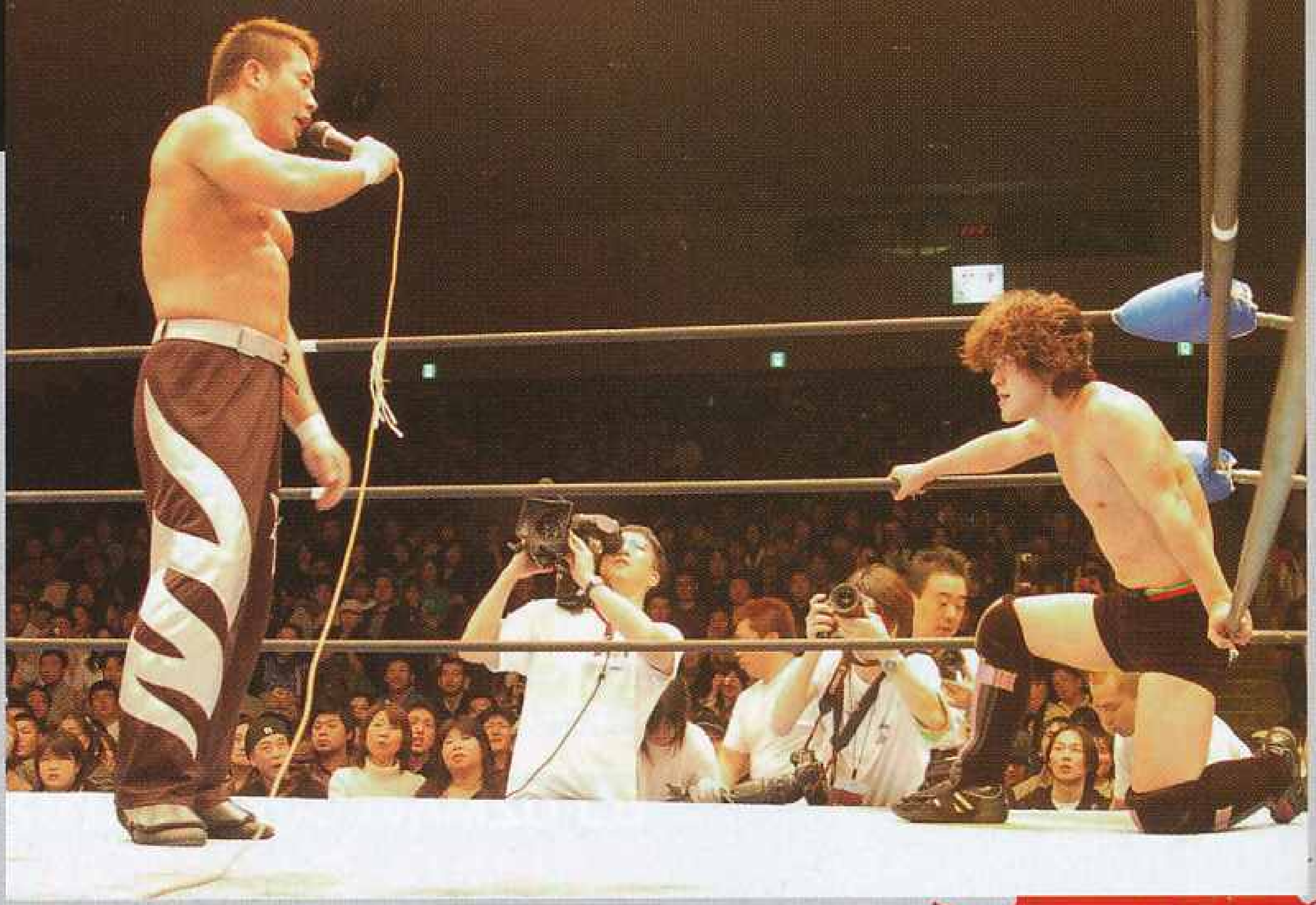
すでに、お気づきの方もいるかとは思いますが、どういうことかというと、行列も「チケット譲ってください!」の女の子もぜ～んぶ、後楽園ホールのお隣の東京ドームで開催されるジャニーズのカウントダウンイベント目当ての人たちだったのです。……そりゃそうだわな。

そんな女の子の行列に目をやりながら『インディー・サミット』が行なわれる後楽園ホールに入りました。「あ、Iジャおばちゃん（※IWAの熱狂的ファンでリングサイドまで近づきゲキやらクレームを飛ばす名物客）だ!」、「〝飯伏女〟（※飯伏に必要以上に黄色い歓声を飛ばす熱狂的ファン）も来てる!」、「ユリオカ（超特Q）さん……は解説か」。さすがにインディーの

『インディー・サミット2006 ～カウントダウン・プロレス～』
12月31日／東京・後楽園ホール



大日本プロレスは大晦日だろうが、おかまいなしに蛍光灯デスマッチを披露。初の蛍光灯マッチへ出陣したみちプロの沼二郎は血まみれにされるも大奮闘。敗れはしたものの最後は白フン一丁で持ち歌の『海の魂』を熱唱！



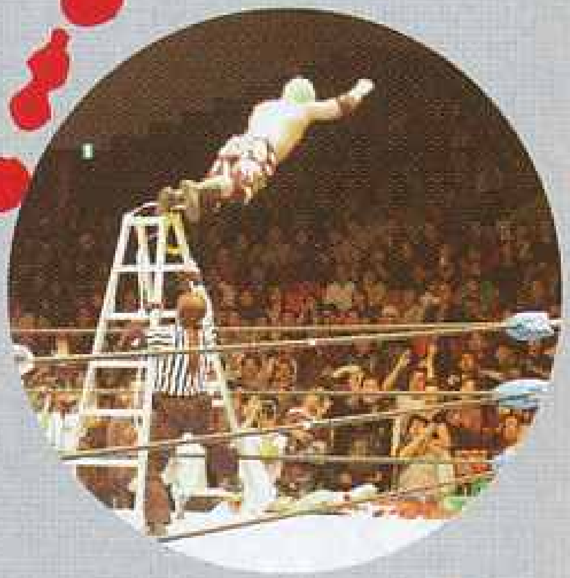
3カウントなしのバトラーツルールで行なわれた第5試合。19歳のハヤト、20代の飯伏と澤と顔面の腫れるプロレスを披露した37歳の望月。試合後はハヤトの健闘をたたえ、みちプロでの再戦を約束した望月。マジで激しすぎ！



8団体の社長レスラーが賞金100万円を賭け闘った社長ランブル。マッスル坂井がスローモーションを駆使して人生に立ち向かうも、優勝は最年長の小鹿社長。さすが元役者だけあって人生のスローバトルは完璧でした！



WWEで大活躍した海援隊☆DXがオリジナルメンバーとしては約10年ぶりに復活。南側客席に姿を見せただけで会場はドカンと爆発。5人はブランクを感じさせない闘いっぷりで若手チームに完勝！　次に見られるのは何年後?



ダイナマイトな爆闘から血まみれ白フントリオの男祭り、さらには人生が『マッスル』名物のスローモーションにチャレンジ!!

12.31『インディー・サミット2006 ～カウント・ダウンプロレス～』
東京・後楽園ホール／試合開始 20:00／観衆2200人（超満員札止め）

1.若手6人タッグマッチ 時間無制限1本勝負
○西山秀鉱（IWAジャパン）&松山勘十郎（闘龍門）&原田大輔（大阪プロレス）[7:33 逆エビ固め] 忍&魔蛇美（DDT）&梶ヤマト（K-DOJO）×

2.エンターテインメント3WAYマッチ 時間無制限1本勝負
○"ザ・ハンサム" JOE（K-DOJO）&ヤス・ウラノ（K-DOJO）[17:25 片エビ固め] 男色ディーノ（DDT）&中澤マイケル（DDT）×
※雪崩式ブレインバスター。もう一組はバラモンケイ&バラモンシュウ

3.空中戦！　6人タッグ時間無制限1本勝負
○ラッセ（みちのくプロレス）&エル・ブレイザー（エルドラド）&宮本裕向（666）[16:54 片エビ固め] タイガースマスク（大阪プロレス）&PSYCHO（K-DOJO）&南野武（みちのくプロレス）×
※ジャガラギ

4.100万円争奪プレジデント・ランブル 時間無制限1本勝負
※90秒ごとに選手入場、オーバー・ザ・トップロープルールを採用
○グレート小鹿（大日本プロレス）[18:12 オーバー・ザ・トップロープ] 新崎人生（みちのくプロレス）×
※小鹿社長が賞金100万円をゲット!
★退場順：決まり手はすべてオーバー・ザ・トップロープ
○TAKAみちのく（K-DOJO）[7:21] カラオケ・マシーン2号（エルドラド?）×
○高木三四郎（DDT）[9:18] 松田慶三（IWAジャパン浅野社長代理）×
○スペル・デルフィン（大阪プロレス）[9:18] TAKAみちのく×
○マッスル坂井（DDTテック）[11:16] 高木三四郎×
○マッスル坂井 [12:14] スペル・デルフィン×
○新崎人生 [17:08] マッスル坂井×

5.バトラーツルール 時間無制限1本勝負
○望月成晃（DRAGON GATE）&飯伏幸太（DDT）[11:24 TKO（レフェリーストップ）] 澤宗紀（バトラーツ）&フジタ "Jr" ハヤト（みちのくプロレス）×
※真・最強ハイキック

6.蛍光灯6人タッグデスマッチ 時間無制限1本勝負
○"黒天使" 沼澤邪鬼（大日本プロレス）&葛西純（アパッチプロレス軍）&シャドウWX（大日本プロレス）[19:39 片エビ固め] 佐々木貴（アパッチプロレス軍）&アブドーラ小林（大日本プロレス）&気仙沼二郎（みちのくプロレス）×
※飛鬼邪行with蛍光灯

7.海援隊☆DX復活!　世代闘争 時間無制限1本勝負
○ディック東郷（フリー）&獅龍（メキシコ）&MEN' Sテイオー（大日本プロレス）&TAKAみちのく（K-DOJO）&船木勝一（WWE）[17:18 片エビ固め] 大石真翔（K-DOJO）&KUDO（DDT）&野橋真実（みちのくプロレス）&ミラニートコレクションa.t.（エルドラド）&岸勝也（IWAジャパン）×
※ダイビングセントーン

8.メインイベント "JUST NOW" 時間無制限1本勝負
○真霜拳號（K-DOJO）&谷嵜なおき（自由）&GAINA（大阪プロレス）[21:28 片エビ固め] HARASHIMA（DDT）&ビリーケン・キッド（大阪プロレス）&関本大介（大日本プロレス）×
※垂直落下式ブレーンバスター



休憩中、後楽園ホールの非常階段でたたずむマッスル坂井のバックには人、人、人（もちろんジャニーズファン）。これには「ボクの人気も凄いッスねぇ。武道館の次はドームでやります」と、つかの間の人気者気どり。



第3試合前、プロレスアワードが発表され、プロレスマスコミの重鎮・菊池孝氏、石川一雄カメラマン、木村盛綱カメラマンが表彰された。I編集長こと井上義啓氏への追悼の辞も述べられました。あらためて合掌!

祭典だけあって、ファンもオールスター状態。芸能人最強プロレスファンの斉藤清六さんの姿を発見できなかったのは残念ですが、きっと清六さんは浅草インディーズアリーナでの『浅草寺初詣プロレス』（※観衆40人だったので、ある意味、60億分の1よりも凄い40分の1！）に行っていたと思われるので、ノー問題！

さすがにドームの5万人と、ホールの2000人では桁は違いますが、第一試合からメイン～カウントダウンの熱狂度は一歩も引けを取らなかった気がする『インディー・サミット』。

カウントダウン後、マッチメイカーを務めたTAKAは『インディー・サミット』の封印を宣言。続けて「今度やるときは『プロレス・サミット』として隣の東京ドームでやるぞ！」と気勢をあげ、観客も大歓声でこれに応えていました。「ドームでやってるジャニーズより俺らのほうがカッコいいだろ!?」というアピールには場内もリアクションに困っていましたが、この日の異様な盛り上がりを見ると「プロレスもやればできる！」と思わされた次第です。

近い将来、『プロレス・サミットin東京ドーム』の開催を期待して、とりあえずは打倒・ジャニーズってことで、賀正ッ！　（チョロ）

格闘技バブルは終わらず!

アブラが乗りまくる!『Dynamite!!』が06年も紅白に肉薄ッ!

06年大晦日“視聴率戦争”結果発表〜ッ!

(07年1月2日時点)

DJ OZMAもビビってたじろいだ? 06年大晦日のテレビ視聴率戦争で『Dynamite!!』が歴代2位の好視聴率を獲得ッ! 一方、紅白は歴代ワースト2位と転落。怒濤の視聴率戦争をプレイバック!

曙、ボビーの試合が短かったのが、悔やまれるなぁ〜!



谷川貞治K-1イベントプロデューサーのコメント

今回の『Dynamite!!』は、歴代2位の19.9パーセントという好結果となり、NHKはまたしても40パーセントを切る結果となりました。これまでの史上最高20.1パーセントにあとコンマ2パーセントおよばず、いまとなっては、曙選手、ボビー選手の試合時間が短かったことが、非常に悔やまれます。しかしながら、今回の結果により、格闘技の底力を見せつけることができ、ホッとしています。今後は、この勢いで今年一年を走って行きたいと思いますので、皆さまの応援をよろしくお願いします。

DJ OZMAの“スケスケ”疑惑と秋山の“ヌルヌル”疑惑で日本中が騒然!!

2006年大晦日テレビ番組視聴率 (関東地方)

▶NHK総合『第57回NHK紅白歌合戦』
第1部(19:20〜21:25) ***30.6%*** 第2部(21:30〜23:45) ***39.8%***

▶TBS系『K-1 PREMIUM 2006 Dynamite!!』
第1部(18:00〜20:30) ***16.3%*** ※過去の試合映像、石澤常光vs金泰泳、セーム・シュルトvsピーター・グラハムなど。
第2部(20:30〜23:05) ***19.9%*** ※金子賢vsアンディ・オロゴン、曙vsジャイアント・シルバ、チェ・ホンマンvsボビー・オロゴン、魔裟斗vs鈴木悟、桜庭和志vs秋山成勲など。
第3部(23:05〜23:34) ***10.1%*** ※曙vsジャイアント・シルバなどをリプレイで再放送。

▶フジテレビ系
『細木数子のニッポンの大みそか』(19:00〜21:00) ***10.3%*** 『メダリスト・オン・アイス2006』(21:00〜23:00) ***9.9%***

▶日本テレビ系
『泉ピン子ウィークエンダー2006』(18:00〜21:00) ***7.1%***
『ダウンタウンのガキの使いやあらへんで!! 大晦日笑ってはいけない警察官SP』(21:00〜翌00:15) ***10.2%***

▶テレビ東京系
『第39回年忘れにっぽんの歌』(17:00〜21:30) ***9.3%*** 『ガイアの夜明け 大晦日特別版』(21:30〜23:30) ***3.4%***

▶テレビ朝日系
『ドラえもん大晦日だよ! 生放送SP』(18:00〜20:00) ***5.7%***
『たけしのTVタックル 紅白なんかぶっ飛ばせ 嵐の大ゲンカ!! 永田町大みそか3時間SP』(20:00〜23:30) ***5.3%***

DJ OZMAのボディスーツの全裸疑惑で抗議が750件! と視聴者の怒りをアゲ♂アゲ♂してしまった『紅白歌合戦』は第1部も歴代ワーストタイと急降下。「しっこく! しっこく!」と『Dynamite!!』の最大のライバルと予想された日テレ『ガキの使い』も10.2パーセントとふるわず。一部で『男祭り』放送も噂されたテレ朝も5.3パーセントと低迷した。

大晦日、紅白歌合戦vs格闘技番組 視聴率ヒストリー (視聴率はすべて関東地方)

2001 NHK『第52回NHK紅白歌合戦』
第1部(19:30〜21:25) ***38.1%*** 第2部(21:30〜23:45) ***48.5%***
TBS系『INOKI BOM-BA-YE 2001』(21:00〜23:24) ***14.9%***
※安田忠夫vsジェロム・レバンナほか

2002 NHK『第53回NHK紅白歌合戦』
第1部(19:30〜21:25) ***37.1%*** 第2部(21:30〜23:45) ***47.3%***
TBS系『INOKI BOM-BA-YE 2002』(21:00〜23:24) ***16.5%***
※ボブ・サップvs高山善廣ほか

2003 NHK『第54回NHK紅白歌合戦』
第1部(19:30〜21:20) ***35.5%*** 第2部(21:30〜23:45) ***45.9%***
TBS系『K-1 PREMIUM 2003 Dynamite!!』(21:00〜23:24) ***19.5%***
※曙vsボブ・サップほか
フジテレビ系『PRIDE SPECIAL 2003 男祭り』
第1部(18:30〜19:20) ***9.3%*** 第2部(19:20〜21:20) ***17.2%***
第3部(21:20〜23:45) ***8.9%*** ※吉田秀彦vsホイス・グレイシーほか
日本テレビ系『INOKI BOM-BA-YE 2003 〜馬鹿になれ夢をもて〜』
(20:00〜23:15) ***5.0%*** ※エメリヤーエンコ・ヒョードルvs永田裕志ほか

2004 NHK『第55回NHK紅白歌合戦』
第1部(19:30〜21:20) ***30.8%*** 第2部(21:30〜23:45) ***39.3%***
TBS系『K-1 PREMIUM 2004 Dynamite!!』(21:00〜23:24) ***20.1%***
※曙vsホイス・グレイシーほか
フジテレビ系『PRIDE 男祭り 2004 -SADAME-』
第1部(18:00〜19:30) ***12.8%*** 第2部(19:30〜21:30) ***18.3%***
第3部(21:30〜23:40) ***10.8%*** ※エメリヤーエンコ・ヒョードルvsアントニオ・ホドリゴ・ノゲイラほか

2005 NHK『第56回NHK紅白歌合戦』
第1部(19:20〜21:25) ***35.4%*** 第2部(21:30〜23:45) ***42.9%***
TBS系『K-1 PREMIUM 2005 Dynamite!!』(21:00〜23:24) ***14.8%***
※曙vsボビー・オロゴンほか
フジテレビ系『PRIDE 男祭り 2005 頂 -ITADAKI-』
第1部(18:00〜20:00) ***16.1%*** 第2部(20:00〜23:00) ***17.0%***
第3部(21:30〜23:40) ***12.7%*** ※小川直也vs吉田秀彦ほか



ウガーッ! と二大視聴率男が激突した曙vsジャイ・シルはなんと1R1分2秒で終了! チェ・ホンマンvsボビーは1R 16秒殺! と目玉カードが次々と短時間決着で、視聴率の“追い風”は吹かず。

んあ〜! これぞ『貞治谷川のすべらない格闘技番組』!? 大晦日視聴率戦争でまたしても『Dynamite!!』が好視聴率を獲得ッ!

1月2日時点で瞬間最高視聴率は不明だが、おなじみのモンスター&芸能人路線を筆頭に、K−1&『HERO'S』オールスターズをズラリ並べたラインナップで、見事に歴代2位の平均19・9パーセント(第2部)をゲット!

05年はダイナマイッなゲストの矢沢永吉が『男祭り』のアレキサンダーvsパウエル・ナツラに惨敗し、おまけに地味ヅヨなヒカルド・アローナにも後塵を拝してしまった『Dynamite!!』だが、なんとか“視聴率キング”の面目を保った。谷川さんいわく、チェ・ホンマンvsボビー、曙vsジャイ・シルの試合時間が短かったのが悔やまれるそうだが、大晦日の“定番”ブランドの強さを発揮した格好だ。

一方、06年はライバルの『PRIDE男祭り』の地上波撤退で例年の狂騒的な盛り上がり&意地の張り合いに欠け、他番組を含めて視聴率戦争自体の熱量が足りなかったのも事実。誰が大晦日に細木数子vs女子アナを見たいんだよ!

DSEの榊原代表も『男祭り』終了後に「これだけの大会を地上波放送できなかったことが本当に悔しい。来年はきっと地上波も認めてくれると思う」とコメント。さらに年明けには「07年はスーパーヘビー級の設立、世界中のモンスターを集めて“モンスターGP”を開催したい」と注目発言! 要するに、K−1のお株を奪うモンスター路線を導入し、すでに07年の大晦日に向けて、格闘技戦争の布陣を固めているのだ! ……と、本誌は勝手に思い込みます。えらく気が早いが、燃え上がれ、大晦日!!

大晦日の余韻を吹き飛ばす元旦決戦!!
もうひとつの『Dynamite!!』はどうなった？
ビートたけしの『お笑いウルトラクイズ』もなぜか速報!!

『kamipro』がやらねばどこがやる!?

文／橋本宗洋　撮影／丸山剛史

2007年元旦、11年ぶりに復活をはたした『ビートたけしのお笑いウルトラクイズ』（日本テレビ系）は、かつてのままの姿で僕を楽しませてくれた。

「第432回〜」という（適当に大きな数字を言ってるだけの）タイトルコール。微妙に大物なゲスト女優陣（とくに牧瀬里穂はツボだった）。常連参加メンバーはそれぞれ11年分の年齢を重ねていたけれど、やってることはあいかわらずバカでくだらなくて、オープニングセレモニーで井手らっきょが全裸になったときには、何かこう″魂″のようなものまで感じさせられた。ダンカンやダチョウ倶楽部のリアクションは、番組中に東野幸治も言っていたけど、貫禄さえ漂っていた。

編集やカメラアングル、BGMもほとんど以前のまま。今回の特徴は初参加の若手芸人が大勢いたことだが、違和感はまったくなかった。おなじみ野沢直子はもちろん、東野のMC投入もズバリ成功。これまでのテイストを踏襲しつつ、11年前の番組を″いま″に橋渡しする役目を完璧に担っていた。

話題の山本モナ出演も、ハレモノに触るような感じではなく、例の事件をなかったことにするわけでもなく″これぞお笑いウルトラ″という扱い。たけしの「優勝者には副賞として山本モナとの京都旅行が贈られます」という一言は、やっぱりさすがだ。たけしは以前にも「優勝者には飯星さんから時価数百万円の壷が贈られます」の一言で、統一教会を脱会、芸能界に復帰したての飯星景子を蘇生させたことがある。

大晦日に放送された事前番組では、本編では流れなかった山本モナへのキツい突っ込みやセクハラもあった。このへんは3月に発売される完全版DVDに期待しよう。ちなみにDVD発売は番組復活の必須事項だったらしい。DVDを出さないと回収しきれないくらいの予算をかけてる、ってことだ。

クイズの企画そのものもよかった。衛星ミサイルに進化した○×爆破クイズは「あんなところに核シェルターがあるぞ！」のお約束つき。続いて人間ロケットがあり、字読みプロレスがあり、人間性クイズ、粘着クイズ、そしてカー・スタントクイズ。″これは外しちゃいかんだろう″という企画が、ほとんど漏れることなく行なわれていた。

″アメリカにも、日本でやってきたものと同じ大会を持っていかなければ意味がない″というテーマで大成功した『PRIDE』ラスベガス大会ではないけれど、″11年ぶりでも、これまでやってきたのと同じ『お笑いウルトラ』でなければ意味がない″ということを、番組スタッフがよく理解していたんだと思う。マーク・コールマンの出番は期待していたほど多くはなかったけど、本気で″プロの仕事″に没頭しているのは充分に伝わってきた。娘たちも収録に呼んであげたかったくらいだ。『お笑いウルトラ』が「子どもに見せたくない。イジメの原因になる」なんて批判はよくあるが、そんなときは当然、フィル・バローニの出番だ。

『kamipro』がなぜ『お笑いウルトラ』にページを割くのか。好きで好きで仕方がないからに決まってるのだが、それだけじゃない。この番組に″闘い″を感じるからだ。それは本誌No.106の特集にも書いたとおりである。そういう視点から見ると、今回のMVPは人間性クイズの仕掛人を務めた江守徹&中尾彬だろう。

いくらバラエティ慣れしているとはいっても、この二人は大御所俳優なのである。なのに、その演技力を駆使してバナナマン日村勇紀を泣かせ、あげくカンニング竹山隆範にホモドッキリを仕掛ける。シェイクスピアまで引用して。俳優として積み上げてきたキャリア、その技巧をお笑いに、よりにもよってホモドッキリに注ぎ込むのである。俳優として、テレビタレントとして、二人は凄まじい″闘い″を演じていたのだ。男の中の男である。

もちろん、すべてが完璧、まったく文句なしというわけではなかった。やっぱりポール師匠がいないのはさびしいなとか、字読みプロレスには春一番&井手のW猪木がほしかったなとか、そういう思いはいろいろある。エンディングの乱闘（？）も、もっと派手にやってほしかったし。あとどんな番組でもそうだけど、セリフのテロップってうざいな。

でも、そういうのはたぶん瑣末なことでしかないのだ。これまでだって、最初から最後まで完璧な『お笑いウルトラ』なんてなかった。回ごとに、コーナーごとに出来不出来があって当然なのだ。

僕は旧『お笑いウルトラ』のかなりの放送分をビデオに録っている。もちろんDVDも買った。この十何年、ムカつくこと、落ち込むことがあるたびに酒を飲みながらそれを見てきた。そうすると、なぜかはわからないが″これで大丈夫だ！″という気分になれるのだ。ただ、繰り返し見たのは『ポール師匠は男がお好き!?』や『バス吊り下げアップダウンクイズ』といった伝説の名企画ばかり。だから番組のおもしろさは、心の中で勝手に純化され、磨かれてきた。

そういう美しい記憶と比べてしまったら、それは不満が出るのも当然だろう。でもやっぱり大事なのは″記憶″じゃなくて″いま″だ。いま、『お笑いウルトラ』が放送され、そしてたしかに大笑いさせられたのである。どんなに純化された記憶よりも、その事実が美しい。



「しょうがねえよ」「やっとかよ」「もう遅いよ」ファンの厳しい声に小川の瞳がうるんだ!?

［12.25&26 東京・後楽園ホール］

KYORAKU PRESENTS ハッスル・ハウス クリスマスSP 大会レポート

“キャプテン・ハッスル”

小川直也が残酷な現実と向き合った日

構成／坂井ノブ　撮影／平工幸雄　写真提供／DSE

それは、クリスマスというハッピーな日にはふさわしくない、重く苦々しい瞬間だった。

〝キャプテン・ハッスル〟小川直也に突きつけられた〝残酷な現実〟。それはファンの声に乗って届けられた。

12月25日に開催された『ハッスル・ハウスクリスマスSP』のエンディングで〝GMW〟坂田亘と総統とのあいだで交わされた会話の話題は、『ハッスル・マニア』のエンディングでマイクを握った小川について。本誌前号の『マニア』座談会でも話題になったが、エスペランサーvsHGの余韻を断ち切るようなマイクだったという声は非常に多い。べつに間違えたりしたわけではないのだが、小川が一人で大会を締めることに違和感を感じた人も少なくなかった、ということだ。

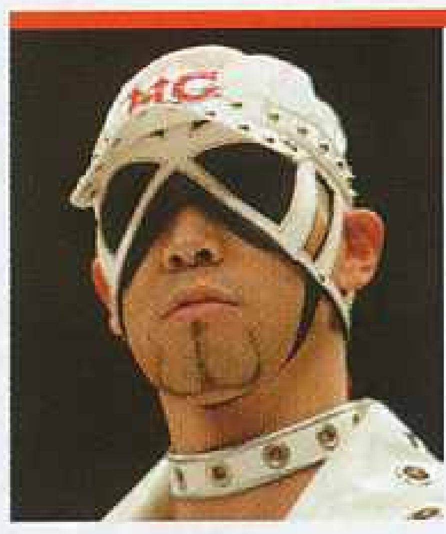
「ぶっちゃけ、あいつどうすんの？　普通に考えれば、あいつはクビだ」と総統。「それは俺様も頭が痛い。来年の構想には入ってねえ」と〝GMW〟も返す。

そんな生々しいやりとりに爆笑する観客。そこへ小川が登場する。普通の感覚の持ち主なら、これ以上出にくい場面はないだろう。事実、小川も登場するなり「なんだかアウェーな空気だな」とつぶやいた。

それでも気を取り直して「さっきから黙って聞いてりゃ、クビだって!?」と噛みつくが、客席からは「しょうがねえよ」という声が上がる。そして追い討ちをかけるように総統の「酷な言い方だが、これは我々が言ってるんじゃないんだ。ファンの声なんだよ！」という言葉にも拍手が起こった。

ファンは自分の気持ち、そして場の空気に対してどこまでも正直に反応する。後楽園ホールはとくにその傾向が強い。コアなファンが集まるだけに他の会場よりも選手

ハッスル軍活動休止!!
メンバーそれぞれの旅立ち



いまだFED進行中
HG
【旅の行き先】ブラジルで“絶倫”ペレに会い、ハリウッドでマイケル・ダグラスに会う

11.23『ハッスル・マニア2006』でエスペランサーに敗れたことで、闘うことへの男性機能障害、いわゆるFEDに陥ったHG。『東スポ』プロレス大賞で新人賞を獲得（ちなみに2005年度は曙が受賞）するといううれしいニュースもあったが、再起へ向けての治療から再出発。



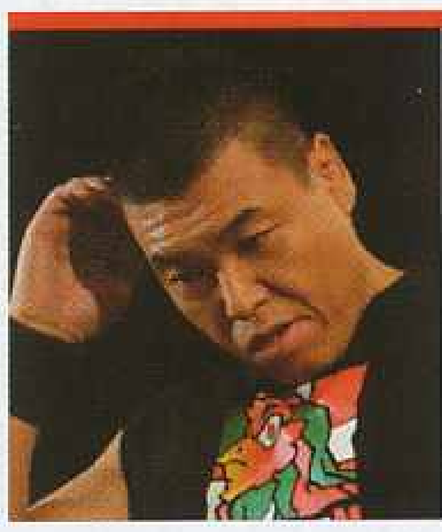
昏睡状態から復活した
ニューリン様
【旅の行き先】あてのない旅

『マニア』のメインハッスルにて、エスペランサーのレーザー・ビターン！　で打ち抜かれたニューリン様。約一ヵ月間の昏睡状態からようやく復活。髙田総統への復讐心はさらに深まった。「すぐにでも闘いたい」とアピールするが、やはりケガの治療が先決だ。



ニューリン様の同伴は却下された
TAJIRI
【旅の行き先】
行き先は言えないがエスペランサー攻略のヒント探し

ニューリン様が復活したことでひと安心のTAJIRI。「ニューリン様の乳輪が吹っ飛んだって『東スポ』で読んだんですけど……」とセクハラ質問で、またしてもニューリン様から睨まれてしまった。エスペランサー攻略のヒントの確証を得るために旅に出るという。

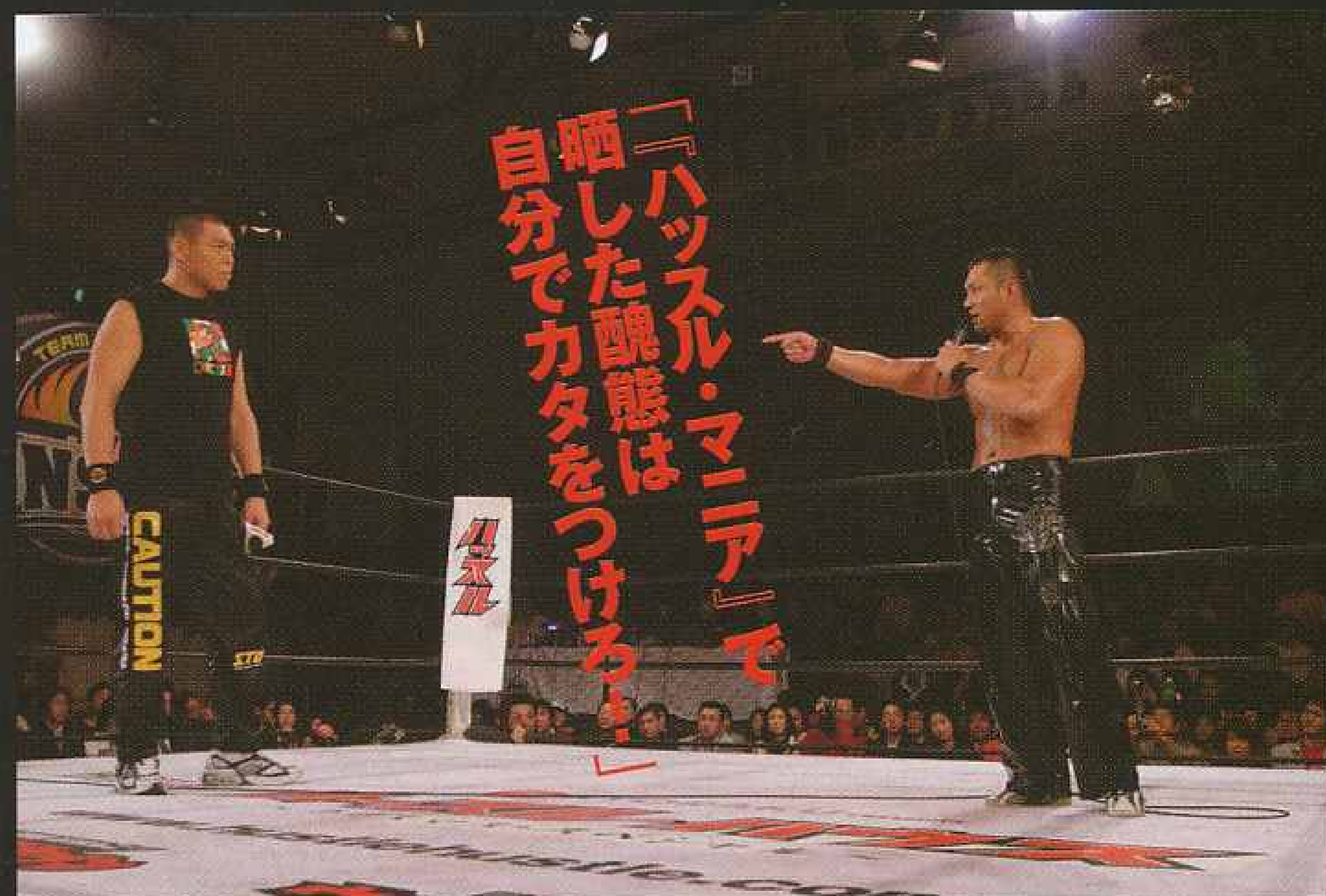


ハッスル軍活動休止を決断
小川直也
【旅の行き先】ハッスル星

ハッスル仮面の生まれ故郷であるハッスル星へ行き、さらなるハッスルのためのトレーニングを積んでくることを決意した小川。地球規模を超える強さを身につけてくるため、そして打倒エスペランサーを実現するための旅に出る。ハッスル軍は3月に活動を再開する。



「要するにファンは君を必要としていないんだよ!」と小川に語りかける総統。これに拍手で応える一部の観客。この“現実”が小川の心をえぐっていく。小川よ、どう答える!?



このクリスマス2連戦は観客も満員（26日は札止め）で観客の反応も上々。坂田、総統、江頭はリング上でファンの歓声に「気持ちいいねぇ」と何度も口にしたほどだ。そんなリングで小川は公開処刑されたのだ。

にとっては厳しい空間となる。

翌26日に小川はハッスル軍の活動休止を発表した。

「いまのままじゃエスペランサーに勝てねえって痛感したんだよ。いまの俺の敵はモンスター軍でもねえ、ファンでもねえ、マスコミでもねえ。自分自身だって気づいたんだよ」

そんな小川の決意表明に対しても「やっとかよ！」「おせえよ！」などといった野次が客席から飛んだ。

『ハッスル』の主人公であり、大黒柱であり、エースである小川を容赦のない冷たい空気が包み込む。期待を通り越して、あきらめまじりの野次が、そんな空気をズタズタに切り裂いていく。こんな残酷な状況は観たことがない。相手の顔面を蹴ったり殴ったりする以上に、いたたまれない気持ちにさせてくれる。かつて「目を覚ましてください！」とプロレスファンをアジって両手をヒラヒラさせていた男が、観客から「ようやく目を覚ましたか！」と言われてしまう現実に時の流れを感じてしまうが、そんな悠長な感傷に浸っているヒマすらない。ひたすら居心地の悪い時間が流れていく。

小川はいままでも髙田総統から「試合がしょっぱい」「マイクがしょっぱい」など、さんざん突っ込まれてきた。ただ、その言葉を聞き流してきた節がある。「ヒールの言うことを真に受けるベビーフェイス」という構図が成立した途端にすべてが崩れてしまうだろうから、それはそれでよしとしよう。ほかにもファンの厳しい評価が下ったことがあった。05年3月『ハッスル8』で行なわれた川田利明との一騎打ちで導入された「観客ジャッジメントシステム」だ。あのときは試合の勝敗とは別に「どちらがハッスルしていたか？」を観客がジャッジするというものだった。試合は小川が勝ったが、観客ジャッジは川田の勝ち。このときの小川の落胆した表情は、いまでも語りぐさになっている。今回、小川が見せた表情はあのとき以上の悲壮感を感じさせた。目にうっすらと涙をため、万感の思いで客席を見つめる小川……。こんな表情は記憶にない。

今回の『ハッスル・ハウス クリスマスSP』で突きつけられた〝残酷な現実〟とは、「『ハッスル』の3年間で小川はファンの望むような存在になりきれなかった」という事実だ。さらに、自分を観ているファンの目線の厳しさ、そして自分の置かれている状況に小川はあらためて気がついたということに尽きる。

だが、これで終わりというわけでもない。先述の「おせえよ！」という野次に対して、小川はこう言い返した。

「いいじゃねえか、遅くたって」

そう、気がつけばいい。目を覚ませばいいのだ。

「その昔、俺はアンタを尊敬してたよ。だけど、いまのアンタは自分のことすら見えてねえんじゃねえのか？『マニア』で晒した醜態は自分でカタをつけろ！」と〝GMW〟も厳しい言葉でエールを贈っている。

小川がハッスル星に行くことで何が変わるのか？　それは誰にもわからないが、変わらなければいけない時期はもうとっくにすぎている。期待が大きいからこそ、誰もが厳しいことを言いたくなる。それを小川がどう受け止めるのか？　3月から活動を再開するハッスル軍、とくに小川の動向には普段『ハッスル』を観ていない人も注目しておいたほうがいい。小川を変えられるのは、もう小川自身しかいない。

（坂井ノブ）

12.25 DIGEST

この日の対戦カードはすべて抽選で決定 鈴木みのる&坂田亘がタッグ結成!?



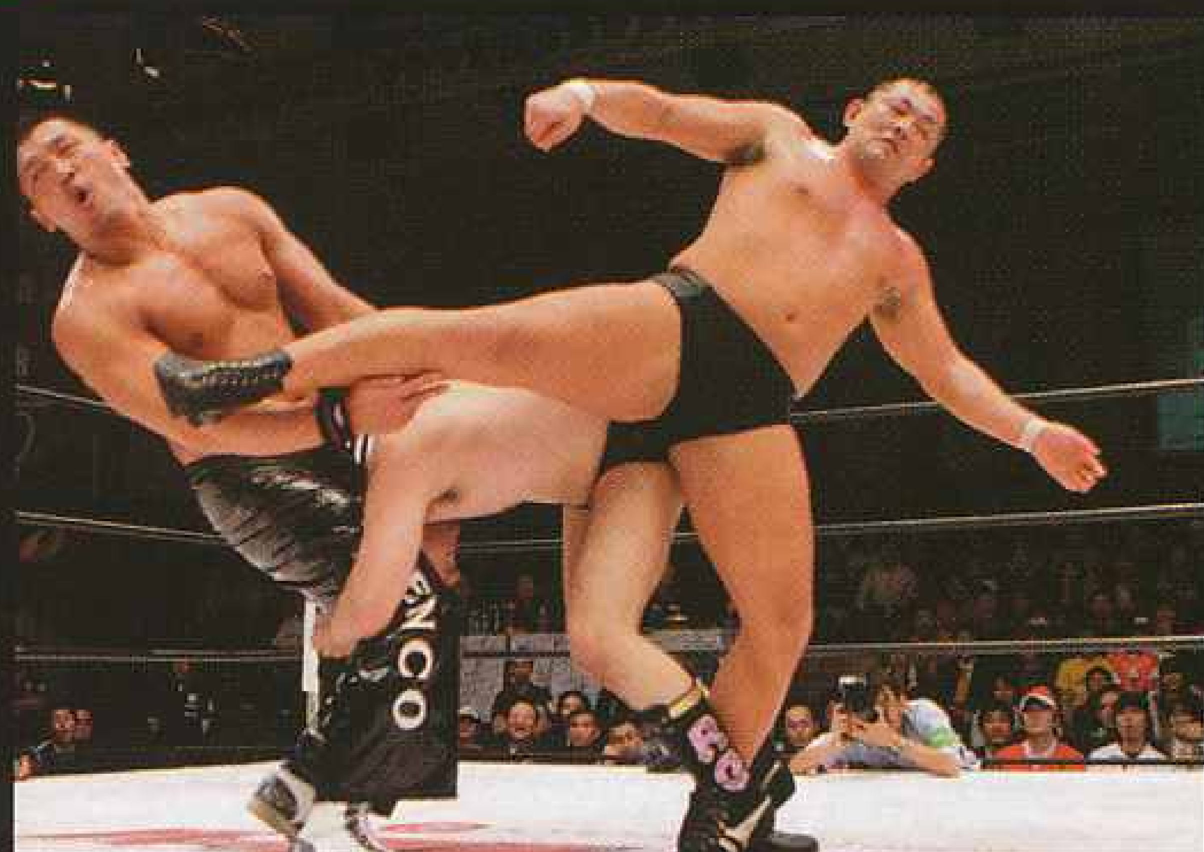
そのままRGは坂田を裏切って鈴木軍団入りを表明。しかし翌日に坂田と対戦することを知らされ、怖気づく。



25日は全試合のカードが抽選によって決定する「年末ドリームジャンボお宝タッグマッチ」。RGは大谷と組んで、鈴木みのる&坂田組と激突することになり愕然!



まったく定着しなかった「GMW」ポーズに代わり、坂田が考えた新オフィシャルポーズ。「3、2、1、ワッタル! ワッタル!」で手を「W」に広げる。



終始ギクシャクしていた鈴木&坂田は最後でも連係ミスが出て、このままRGが坂田を丸め込んで勝利を奪った。奇跡の勝利!



普段は同じ軍団に所属する選手同士が闘う場面も。TAJIRIとアン・ジョー司令長官の連係技など普段では絶対にありえないレアな光景だ!



ジャイアント・バボに鼻骨を折られ、大会数日前にも路上で襲撃されて再負傷した海川ひとみが鉄仮面を着けて登場し、バボに頭突き!

12.26 DIGEST

江頭2:50、デビュー戦で伝説を残す!! 〝帝王〟高山善廣も『ハッスル』初参戦!!



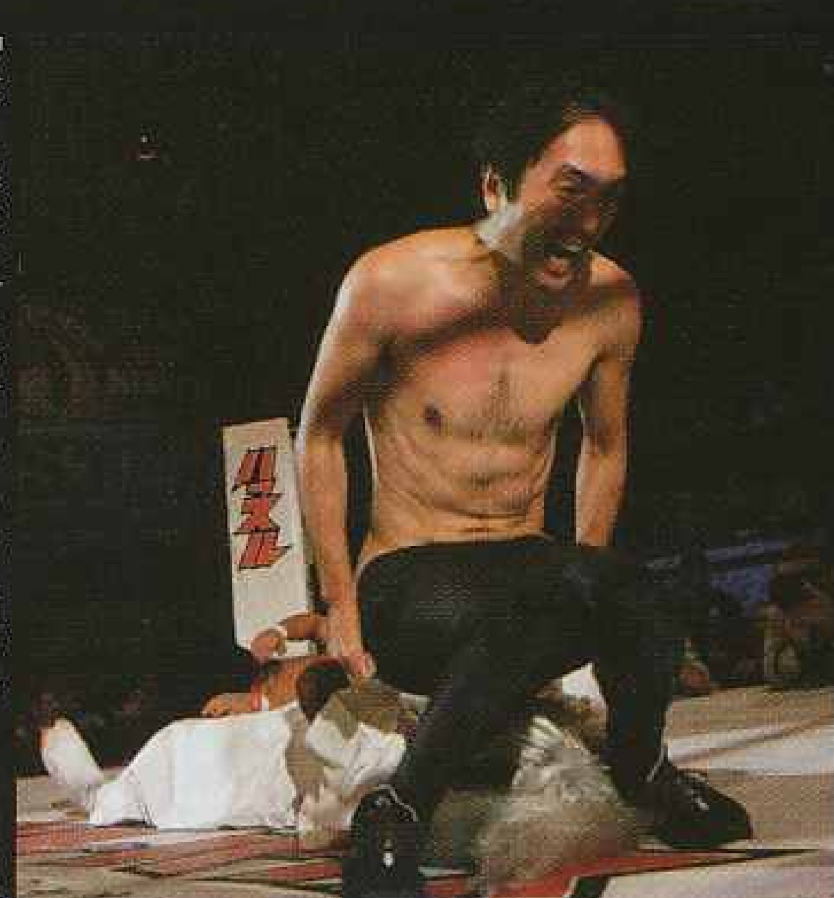
鈴木みのるはパートナーのRGを見殺しにするとサプライズで高山善廣を呼んでもう一試合! 坂田を踏みつけて勝ち名乗りを受けた。



この日も海川ひとみは鉄仮面姿で登場すると、KUSHIDAがセットしたケーキにバボをフェイス・クラッシャー! 「あなたの背後に死神が見えます」(海川)



天龍源一郎と江頭2:50が正面から向かい合う! この緊張感! この後、天龍のワキ毛を抜き、チョップでブッ



「〝核〟を持った」と公言していた江頭。恐・イタコの顔面にウ●コする寸前までいったが、ここでイタコが降霊! 江頭の肛門に指を突き立てた。江頭、悶絶!!



川田に対しても〝テポドン〟で対抗するが、あっさりつかまれてしまう。ただ、この後にコーナーでの「テポドン・ウォッシュ」は成功させた。

ハッスル再開は3月!!

[今後の大会スケジュール]

3.15(木) 東京・後楽園ホール
3.18(日) 愛知・愛知県体育館
※ともに時刻&チケット料金未定

ハッスル軍の活動休止もあり、次のハッスルは3月に開催されることになった。3年間で築いた基礎の上に、どれだけ多くのものを打ち出せるかが4年目の大きな課題となることは間違いなさそうだ。

[オフィシャルHP] www.hustlehustle.com
[お問い合わせ] DSEハッスル事業局 TEL.03-5464-1731

kamipro SHOPPING 言うちゃ悪いけど、I編集長こそ"男の中の男"だよ!(ドンッ!)

世界随一のI編集長公認Tシャツがコレだ!

追悼"I編集長"井上義啓様



"殺し"の魂よ、永遠なれ!

I編集長"殺し"Tシャツ
ブルー ¥3,990(税込) S·M·L·XL



ハリトーノフ パラシュートパーカー
アッシュグレー/ネイビー ¥6,300(税込)
M·L·XL



ハリトーノフ ジャージ
ホワイト&レッド¥7,350(税込)
M·L·XL



ハリトーノフ スポーツタオル
¥3,150(税込)



ハリトーノフSTAR Tシャツ
レッド ¥3,990(税込)
S·M·L·XL



ハリトーノフFACE Tシャツ
カーキ/ホワイト/レッド ¥3,990(税込) S·M·L·XL



ハリトーノフ"死神"Tシャツ
ホワイト ¥4,200(税込) S·M·L·XL



ハリトーノフ パラシュートTシャツ
ホワイト/レッド ¥3,990(税込) S·M·L·XL



コピィロフTシャツ[★]
ホワイト ¥3,990(税込) S·L·XL



ヴォルク・ハンTシャツ[★]
ホワイト ¥3,990(税込) S·XL



ミーシャTシャツ [★]
ホワイト ¥3,990(税込) S·M·L



kamiproマスクTシャツ
ホワイト×レッド ¥3,990(税込) S·M·L·XL



タテ 132cm

ヨコ68cm

100号記念特製
巨大バスタオル[★]
ブルー×オレンジ
特別定価 ¥3,150(税込)





BTT NYLON VEST
¥16,800(税込)
S·M·L·XL COLOR : Green / Black



HUNT NYLON VEST
¥16,800(税込)
S·M·L·XL COLOR : Brown



FEDOR NYLON VEST
¥16,800(税込)
S·M·L·XL COLOR :Red



CHUTE BOXE BEANIE
¥4,095(税込)
COLOR : Black



WANDERLEI BEANIE
¥4,095(税込)
COLOR : Black

PRIDE
2006 AUTUMN / WINTER



BTT PARKA
¥13,440(税込)
S·M·L·XL COLOR : Black / Green



HUNT PARKA
¥13,440(税込)
S·M·L·XL COLOR : Brown



FEDOR PARKA
¥13,440(税込)
S·M·L·XL COLOR : Black / Red



BTT BEANIE
¥4,095(税込)
COLOR : Black

[★]の商品は在庫終了次第、販売終了となります

★kamipro Handでは、このほかにもおトクな商品をたくさん取り揃えております。ぜひアクセスしてください。

非会員でもショッピング可能!!

アクセス方法

DoCoMo iMenu ▶ メニューリスト ▶ スポーツ ▶ 格闘技/大相撲 ▶
※もしくは「kamipro」で一発検索!!
au/TU-KA トップメニュー ▶ カテゴリで探す ▶ スポーツ ▶ 格闘技 ▶
SoftBank メインメニュー ▶ メニューリスト ▶ スポーツ ▶ 格闘技 ▶
WILLCOM 趣味&スポーツ ▶ スポーツ ▶ 総合 ▶
エンターティメント ▶ TV・メディア・本 ▶ 本 ▶

kamipro Hand

[通販の問い合わせ先]
株式会社ダブルクロス
TEL:03-5368-1797
(受付時間/13:00~19:00)
販売元:株式会社ダブルクロス

A HAPPY NEW YEAR!!

SPECIAL PRESENTS

この読プレにハガキをゆだねてごらん？（レオ調）

トップハム・ハット卿も大興奮!?　豪華アイテム発送準備オーライ!

応募要項

ハガキに応募券を貼り、①～⑧の質問の答えをご明記の上、下記の宛先まで郵送してください。応募多数の場合はそれぞれ抽選で決定いたします。ただし、雑誌公正競争規約の定めにより、懸賞に当選された方は、この号の他の懸賞に当選できない場合がありますのでご了承ください。なお、当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます（賞品は2月10日以降発送予定です）。

【質問事項】①郵便番号・住所・電話番号②氏名③年齢・職業④希望商品⑤おもしろかった記事&その理由⑥つまらなかった記事&その理由⑦2006年の大晦日はどう過ごした?⑧今年から大晦日に開催してほしい興行は?

【宛先】〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-16-6パレ・ジュノ2F
（株）ダブルクロス『kamipro』編集部「幹事はつらいぜ」係まで

※締切は2007年2月9日（金）当日消印有効

kamipro SPECIAL 応募券 カキ鍋

ちぎって持ってっちゃダメだぞ!!

PRIDE

PRIDE■http://www.prideofficial.com/



『男祭り2006』ヒョードル×ハント対戦記念Tシャツ

［Lサイズ／ブラック／¥4，200（税込）］

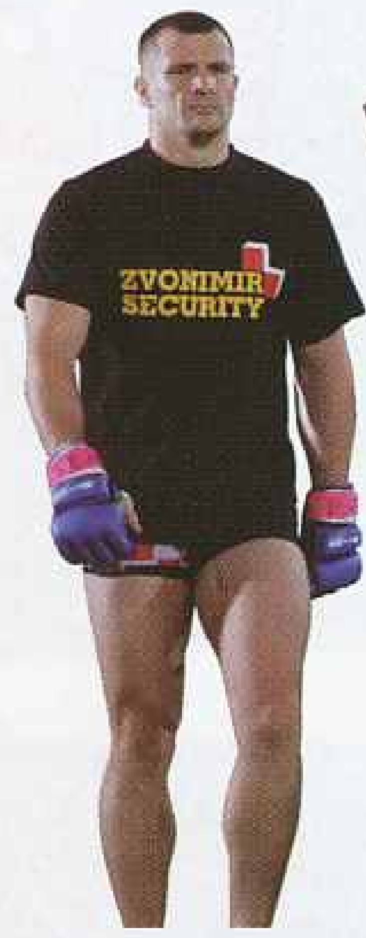
ハントを相手に何度か危ない場面があったものの、「苦戦したとは思ってません（微笑）」とばかりに見事3度目の防衛に成功したヒョードル。タイトルマッチ記念Tシャツを皇帝のサイン入りで1名様に！

1名様

ミルコ・クロコップ『PRIDE無差別級GP2006』優勝記念Tシャツ

［Mサイズ／ブラック×1、ホワイト×1／¥4,725（税込）］

UFC移籍が発表されたミルコだが、昨年地獄の淵から復活し、見事PRIDE無差別級GPを制覇。重量感溢れるベルトがデカデカとプリントされた優勝記念Tシャツ各色を1名様にプレゼント。





各1名様





1名様



ブラジリアン・トップチーム ウインドブレーカー

［Lサイズ／グリーン／¥17,640（税込）］

これを身にまとった瞬間、ノゲイラ兄弟、アローナ、フィリオ、ブスタマンチたちの魂が注入される!　BTTウインドブレーカーを着れば、暖かくなること、ハートが強くなること間違いなし。こいつは激シブだぜ!



エメリヤーエンコ・ヒョードル フィギュア

［¥3,360（税込）］

あまりの人気ですぐに売り切れてしまった皇帝フィギュアが嬉しい再登場。装着可能なPRIDEヘビー級チャンピオンベルトまでついてるぞ!

各3名様



PRIDEカードコレクション GPエディション（1BOX）

［¥4,000（税込）］

PRIDEファイターのトレーディングカードがついに出た!　無差別級GPの名勝負シーン、男祭りホログラム仕様カードから貴重な直筆サインカードまで全162種類。一番喜ぶのはジョシュだったりして。



各1名様

男誇2006 やれんのかTシャツ

［Lサイズ／ブラック×1、ホワイト×1／¥4,200（税込）］

大会当日、会場で買いそびれた人もいるでしょう。そんな人のために『男祭り2006』大会記念Tシャツですよ。金箔仕様で殴り書きされた「男誇」の文字が栄える!　男の誇りを胸に着こなせ!（もちろん女性でも着用化）。



1名様

近藤有己 KONDO×GRIND Tシャツ

［Mサイズ／ブラック&ブルー／¥3,675（税込）］

ギリギリの滑り込みで4年連続の『男祭り』出場を果たした近藤選手とスポーツブランド・GRINDのコラボTシャツ。サーファーの顔を持つ近藤イズム溢れる色とデザインだ。

パンクラス■http://www.pancrase.co.jp





3名様

『男祭り2006』大会パンフレット

2005年大晦日の『男祭り』から2006年11月の『武士道』まで、『PRIDE』2006年の軌跡をまとめた大会記念パンフレット。秀逸な写真が160ページに渡りちりばめられた豪華な一冊。あの名場面がよみがえる!

3名様



『男祭り2006』大会ポスター

ヒョードルもミルコもジョシュもノゲイラも。シウバ、藤田、吉田、五味、さらには中尾さんや北欧の処刑人まで!　PRIDEファイターの笑顔で埋めつくされたポスターを3名の方に。

商品協力／（株）ドリームステージエンターテインメント

K-1/Dynamite!!

FEG http://www.k-1.co.jp/



3 名様

K-1"ONE OR THE OTHER"Tシャツ

［Lサイズ／ブラック／¥4,410（税込）］

K-1のロゴが入ったオーソドックススタイル。このK-1の定番とも言えるTシャツはMDK様によるご提供。これが当たった人は、身体を鍛えてK-1ファイターを目指さなきゃダメですよ〜。んあ〜。



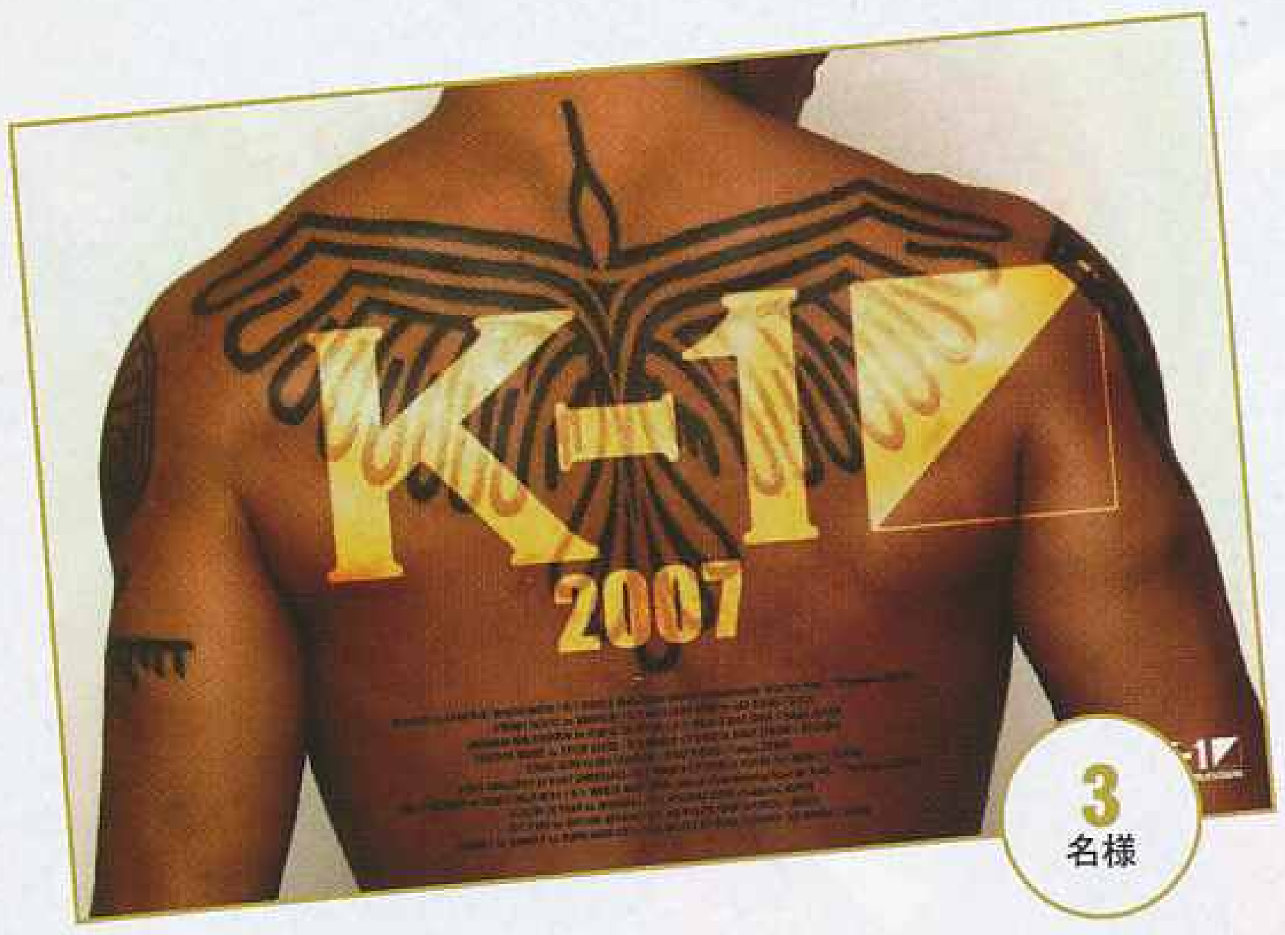


3 名様

桜庭和志 Dynamite!! 大会記念Tシャツ

［Lサイズ／ネイビー／¥3,990（税込）］

残念なかたちで秋山に敗れたサクだが、再起への思いも込めて、ダイナマイッ!!　な大会記念Tシャツを3名様に。フロントの左胸にはエンブレムが描かれ、バックには「K.S.A.K.U. END OF THE YEAR」の文字が。



3 名様

K-1 2007カレンダー（卓上版）

［¥1,575（税込）］

2006年におけるK-1 WORLD GP&MAXの名勝負を卓上で堪能できるコンパクトなカレンダー。表紙のタトゥーの人物は、格闘技のみならず、マルチな才能を発揮するあの人です。



3 名様

桜庭和志 SAKU ペンライトキーホルダー

［ホワイト×1、オレンジ×2／¥900（税込）］

スイッチを押せば、サクのロゴが浮かび上がるイキでオシャレなペンライトキーホルダー。ぜひ暗い夜道のお供に。いざという時は、人の目に当て続ける「反則技」を出します!

ALL JAPAN

全日本プロレス http://www.all-japan.co.jp/



各色 1 名様

サンリオ&全日本プロレス コラボTシャツ

［Lサイズ／ホワイト×1、ネイビー×1／¥3,000（税込）］

昨年、業務提携をはたした全日本プロレスとサンリオのコラボTシャツ。思わず「かわいい〜」って言っちゃうぞ、バカヤロー!　なデザインのキティちゃん。でも、むさ苦しい男が着るのはキツい。





武藤敬司 社長就任 3周年記念「清酒」（升つき）

［¥4,200（税込）］

1.4東京ドームでnWo時代以来、8年ぶりに蝶野とタッグ結成。武藤敬司は今年も驀進します!　LOVEポーズを決める武藤社長のイラストが入った升で、新年はめでたく祝杯だ!

1 名様

INDIE SUMMIT

インディー・サミット2006 http://pleyers.tv/fight/indie-summit2006/



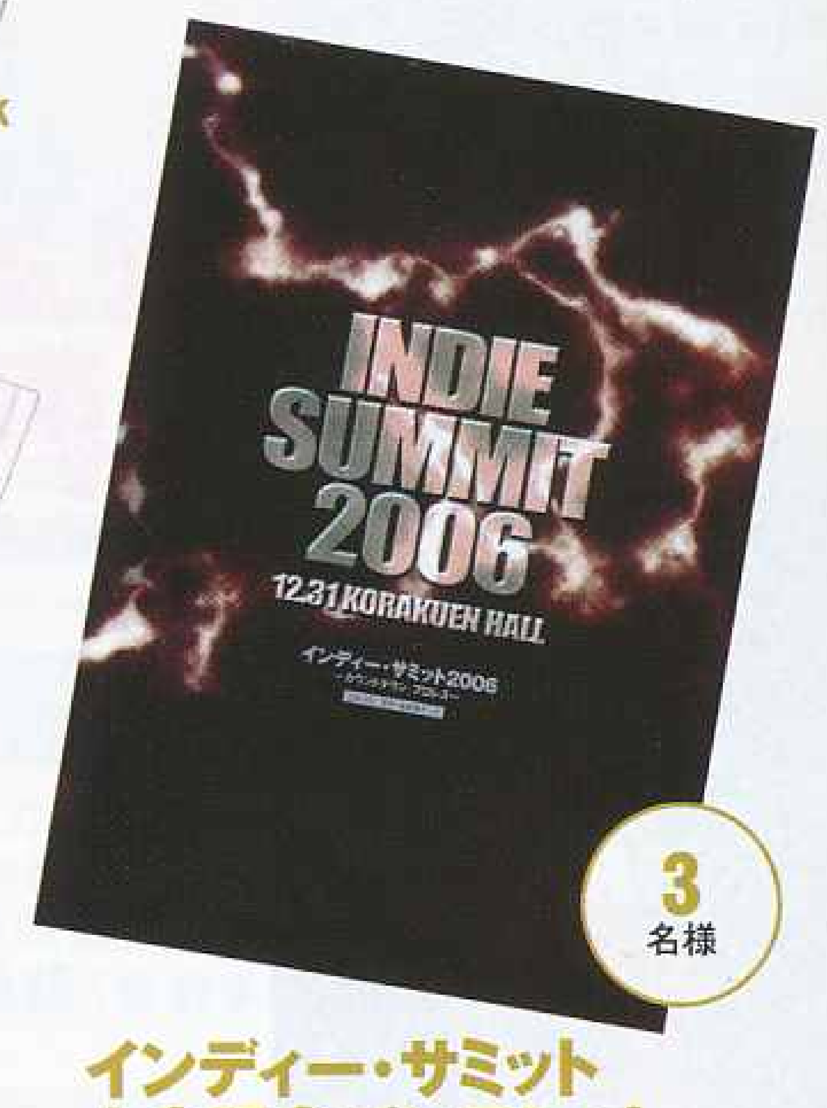
各色 1 名様



インディー・サミット2006 大会記念Tシャツ

［Lサイズ／ブラック×1、ホワイト×1／¥3,000（税込）］

大晦日は『男祭り』や『Dynamite!!』だけじゃない!　とばかりに後楽園ホールでカウントダウン興行を開催した『インディー・サミット2006』大会記念Tシャツ各色を1名様に。



3 名様

インディー・サミット 大会記念パンフレット

海援隊☆DXの再結成やプレジデント・ランブル、蛍光灯デスマッチなどマニアにはたまらない夢の祭典となった同大会の見どころがこの一冊に。



MMA & PRO-WRESTLING MAGAZINE
kamipro Special
2007 WINTER
2007年1月25日 発行

サク敗戦で坊主決定!? どうする? どうなる!? タムラーマン!!



発行人
浜村弘一

編集人
山口日昇
青柳昌行

編集統括本部長
ジャン斉藤

編集スタッフ
堀江ガンツ
真下義之
松下ミワ
八木賢太郎(新春闘牌開始のため非番)

編集見習い
辻ちゃん

電気部
ささきぃ
松澤チョロ
上杉真犯人

企画制作部
坂井ノブ

終身名誉バイザー
吉田 豪

助っ人
＼(^o^)／ジャイ子

編集次長(御意見番)
松林 貴

デザインカントク
出田さん(TwoThree)

デザインキャプテン
金井ヒサくん(TwoThree)

デザイン
松坂マツくん
谷タニやん
廣田ブンちゃん
野口ユカダン
白木しらき
(以上、TwoThree)

カメラマン
乾 晋也
菊地茂夫
丸山剛史
平工幸雄
山口比佐夫
松本 崇
黒田史夫
吉場正和
平 専英

お勘定&衣料部
ニュー林様

塗ってませ〜ん!
入江オイル疑惑(TwoThree)

雑誌営業
堂前秀隆
中村宣忠

助っ人営業
上野宏樹

業務部
割石"06年たまアリ完全制覇"芳司

"バーコード・システム構築中"な編集庶務
高木由美子

編集チアガール
金川奈津子

広告営業
株式会社ビューポイント
(広告掲載のお問い合わせは☎03-5776-0717まで)

発行所
株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1
☎0570-060-555(代表)

印刷
大日本印刷株式会社

協力
BUSHIDO KOVOTOJO KELIAS

本書の内容、不良品交換等についてのお問い合わせは下記の窓口までお願いいたします。なお、内容につきましては記載以上の詳細につきましてはお答えできませんので、あらかじめご了承ください。

[カスタマーサポート]
☎0570-060-555(受付時間/土日祝祭日を除く 12:00〜17:00) メールアドレス support@ml.enterbrain.co.jp

●個人情報の取り扱いについて
本書にお寄せいただいたハガキ、各種のお問い合わせに関連してご提供いただいた個人情報につきましては株式会社ダブルクロス、および株式会社エンターブレイン(URL:http://www.enterbrain.co.jp/)、それぞれのプライバシー・ポリシーの定めるところにより、取り扱わせていただきます。

kamipro Special 2007 WINTER
PRIDE! Dynamite!! UFCの三つ巴!
"アブデ"が乗りきった大晦日格闘大戦!!
2007年1月25日
発行人/浜村弘一　編集人/山口日昇、青柳昌行　発行・発売所/株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 ☎0570-060-555（代表）
印刷・製本/大日本印刷株式会社 ©2007 ENTERBRAIN,INC. ©2007 DOUBLECROSS
enterbrain

あの激闘へ、今すぐアクセス！



高画質ダウンロードで、じっくり観戦！

PRIDE 男祭り 2006
-FUMETSU-

DMM.com で期間限定配信中！

ACCESS NOW!

インターネットでDVD&動画配信！DMM.comへ今すぐアクセス！

http://www.dmm.com/16

携帯でも動画配信決定！
※一部機種非対応
http://dmm.jp/16

DMM.com

定価: 本体724円 +税
雑誌61954-70 Ⓗ2008.2
Printed in Japan 大日本印刷

9784757733008
ISBN978-4-7577-3300-8
C9476 ¥724E
1929476007247